著：伊崎喬助
Kyosuke Izaki
RWBY
THE SESSION
原作：Monty Oum & Rooster Teeth Productions
イラスト：ヤスダスズヒト
Suzuhito Yasuda
GAGAGA

小学館ｅＢｏｏｋｓ

ＲＷＢＹ the Session

伊崎喬助

原作　Monty Oum Rooster Teeth Productions

イラスト　ヤスダスズヒト

著：伊崎喬助
Kyosuke Izaki

イラスト：ヤスダスズヒト
Suzuhito Yasuda

目次

RWBY

THE SESSION

RWBY THE SESSION Characters

ワイス・シュニー

大企業「シュニー・ダスト・カンパニー」の令嬢。プライドの高いお嬢様。
使用武器は多機能のレイピア、「ミルテンアスター」。魔法陣のセンブランスを持つ。

ヤン・シャオロン

ノリが良く、だれに対しても面倒見の良い明るい少女。ルビーの異母姉。
武器は銃火器も内蔵したグローブ、「エンバー・セリカ」。受けたダメージを倍返しするセンブランスを持つ。

ローマン・トーチウィック

ヴェイルを拠点に悪巧みを働く小悪党。

イオナ・ロックショー

ドローンを扱う巨大企業、SICに所属するエンジニアの少女。

オード・フォートリー

SICの最高経営責任者。左目には装着型のスクロールAI「ミア」を付けている。

ウスコー・アンスロープ

SICの警備主任。

ルビー・ローズ

天性の戦闘センスを見いだされ、ビーコン・アカデミーに飛び級で入学した少女。チーム「RWBY」のリーダー。
武器は大型の鎌と銃の二段階に変形する「クレセント・ローズ」。高速移動のセンブランスを持つ。

ブレイク・ベラドンナ

読書が好きな、謎めいた少女。実は獣人・ファウナスであるが、アカデミーではその事実をひた隠しにしている。
使用武器は剣、小剣、鎌に自在に変化する「ガムボール・シュラウド」。分身のセンブランスを持つ。

ジョーン・アーク

チーム「JNPR」のリーダーで司令塔。ワイスのことが気になっている。

ノーラ・ヴァルキリー

お喋りで能天気な女の子。レンとは幼馴染。

ピュラ・ニコス

アカデミーを代表する天才戦士。ジョーンに淡い気持ちを抱いている。

ライ・レン

寡黙で冷静なチーム「JNPR」の良心。ノーラとは幼馴染。

RWBY
THE SESSION
1
The Need for his/their trip

人類は、塵ちりから知恵を持って生まれ出た。
賢明な彼らは、レムナントの名で呼ばれるこの地上が、おそろしく過酷な世界であることを知っていた。恐るべき天敵がレムナントのおよそすべてに蔓延はびこり、奴らの存在を忘れて生きることなど不可能だったから。
グリムの怪物クリーチヤーズ・オブ・グリム。
あるいはグリムとも呼ばれる謎なぞ多き怪物たちは、この世界でただ人間だけを襲い、喰くらう。生きるための糧ではなく、ただ殺すために。
グリムにとっての捕食行為とは単なる殺さつ戮りくの手段に過ぎず、ゆえに彼らは古代より、人類の悪夢であり続けた。
人の肉体は、怪物たちの爪や牙きばの前にはあまりに脆ぜい弱じやくだったが、彼らには生まれ持った知恵がある。だから、自分たちの身を守るために何が必要か、彼らはすぐに気がついた。
武器だ。
か弱い人間が、身を守るための武器が必要だ。
怪物と戦い、奴らを斃たおしうる武器。それだけの力を、エネルギーを有する資源は、決してそう多くはない。
あるとすれば、それは──。

人類は塵から生まれ出た。
そう、塵ダストから。

『──いわば、ダストは自然エネルギーの結晶と言えるでしょう。火、雷、氷といった自然界に存在するエレメントそのものなのです』

スクリーンが切り替わり、様々な色の結晶が映し出される。
『自然が生み出したこの資源を、人類は古来より利用し続けてきました。ただし、問題がひとつ』
　スクリーンに映っていた結晶が弾はじけ飛び、連鎖的な爆発を起こす。
『荒々しい自然の力を従えるには、専門的で繊細な技術が必要だったのです。そこで、賢明な人類は考えました。使いこなせないほど激しい力なら、操りやすいように加工してしまえばいい、と』
　結晶のマークが映し出されると、それが様々な形に切り分けられていく。あるものは車のエンジンに。あるものは映写機に。あるものは銃の弾丸に。
『ダストの安全かつ簡易な運用を可能とした人類は様々な技術を発展させ、今のこの文明と、ダスト産業の未来があるのです。すなわち、人類の未来が』
　映像が切り替わって、高層ビルを背景とする子供たちの笑顔が映り──「ん」と、目の前にホットドッグが割り込んでくる。
　イベント会場前にかかげられた巨大モニターの映像をぼーっと眺めていたジョーン・アークは、ぎょっと身を引いた。金髪の下の青い瞳ひとみを見開いて、相手を見つめる。
　ホットドッグを押しつけてきたのは、額から頭頂部にかけて見事に禿はげ上がった細い目の老人──ホットドッグ屋台の店主である。
　ジョーンは、自分がホットドッグを注文して待っていたことを思い出した。そして、自分の後ろに並んだ行列の人々が投げかける「さっさと済ませて失せろ」という視線にも、このとき気づいた。
　慌てて財布から小銭を出してホットドッグと交換し、列から離れる。屋台から少し離れたところに、友人が待っていた。
「どうかしましたか？」

友人──ライ・レンは、涼やかな切れ長の瞳で問いかける。ジョーンはホットドッグをひとかじりして答えた。
「いや、なんでもない。行こうぜ」
　二人は連れだって、屋台の建ち並ぶエントランスから会場に向かう。歩きながら、レンが尋ねた。
「本当に良かったんですか、ジョーン？　僕の用事に付き合ってもらって」
「だってめずらしいだろ？　レンが『行きたいところがある』ってさ。それもノーラと別行動なんて」
「ノーラには声をかけましたよ。彼女が起きなかっただけです」
　だから今朝は部屋が静かだったのか、とジョーンは納得した。レンの幼なじみのノーラ・ヴァルキリーは、無口なレンとは対照的にお喋しゃべりな性格で、起きている間はだいたいうるさい。
「でも、ノーラが来なかったのは良かったかもしれないな」
　したり顔を浮かべているジョーンに、レンは怪け訝げんな目を向ける。
「どういうことです？」
「レン。今の季節は？」
「夏です」
「学校の授業は？」
「ありません。夏期休暇ですから」
　ジョーンはニヤッと笑った。
「考えてみてくれよ、レン。夏期休暇のおかげで自由に過ごせる時間がたっぷりあって、俺たちはイケてる若い男だろ？　女の子と遊ばなきゃ嘘うそだ」
　白い歯をキラリと輝かせて言う。本気なのか冗談なのか判断が難しいところだが、少なくともレンは笑わなかった。

「……それで？」
「女の子と遊ぶにはまず、彼女たちを喜ばせるデートのプランを立てなきゃならない。そう、必要なのはホットなデートスポットだ。俺たちに必要なのはそれなんだよ！」
　真剣そのもので訴えている。さりげなく「俺たち」と言ったことをとがめず、レンは冷静に、
「つまり、ジョーンは今日のイベントがデートに使えるか気になると」
「そういうこと。で、この会場で何があるんだ？　あちこちにＳＩＣってロゴが出てたよな。有名なバンドか何か？　でもさっきのムービーじゃあ、歴史の授業みたいなことやってた。あれ、関係あるの？」
「直接見たほうが早いと思いますよ」
　言って、レンはジョーンを連れてイベントホールのエントランスを抜けた。
「お、おぉ……？」
　ジョーンの視界に広がったのは、高い天井と広い面積を持つホール。
　そこではパーティションで区切られたブースがいくつも並び、そのほとんどで大型機械の展示が行われ、スタッフが来場者に製品の説明を行っている。
　通路を行き交う機械は犬や馬といった動物を模した自律機械ドローン。
　四つ足からモーターとアクチュエーターによる静かな稼働音を響かせつつ、来場者を先導したり背に乗せたりして案内にいそしんでいた。
　この光景を目にしたジョーンは、しばらく固まっていた。
　レンが、真ま面じ目めくさった顔でジョーンに尋ねる。
「ジョーン、ここはデートに使えそうですか？」

◇

危険と残酷さに満ちあふれたこのレムナントで、人類が手にした安全圏は少ない。
生まれては消えていった、いくつもの国と都市の中で、残ったのは四つの名。
アトラス。
ミストラル。
ヴァキュオ。
ヴェイル。
これら四つの王国には、アカデミーと呼ばれる機関が存在する。
アカデミーの存在理由は、危険に立ち向かう勇敢さと力ある若者たちを集め、彼らの素質を磨き、人類の守護者──ハンターとして育成すること。
高名なアカデミーのひとつ、ヴェイルのビーコン・アカデミーでは学長オズピンの元で、学生たちがハンターとして必要な知識と技術を学んでいた。
ジョーン・アークとライ・レンは、そんなビーコンの学生であり、同じチームの仲間でもある。
ヴェイルの街には二人が訪れているようなイベント会場がいくつか存在する。
そして、アカデミーには夏期休暇がある。

「工業機械の製品展示会ぃ？　そんなのを見に来たのか？　せっかくの夏期休暇なのに？」
驚き、呆あきれたジョーンはホットドッグの残りを口に押し込みながら、会場を見渡してみた。
先ほどジョーンが眺めていたようなモニターが、会場内にもいくつか

展示されていて、そこではＳＩＣとかいう企業のプロモーション映像が流れている。
『ＳＩＣの企業展示会へようこそ。ＳＩＣの理念はヒューマニティ、人類の優れた資質を見守り、はぐくむことにあります。本日はどうぞ心ゆくまで、ＳＩＣの製品をご覧ください』
　機械にしろパーティションにしろ、そして通路にしかれたマットに至るまで、どこを見ても目につくのは、ＳＩＣなる企業の星形のロゴばかり。
　ＳＩＣ――スターヘッド・インダストリアル・カンパニーというのはダスト採掘と工業機械の製造・開発を行う企業らしく、ブースで展示されているのはまず工業製品、それに武器・兵器のたぐいだった。また、ＳＩＣ所有のダスト採掘場で発掘された未加工ダストの結晶なども展示されている。
　うっすら漂う機械油の臭いからして、ロマンチックな雰囲気には程遠い。
「こんなところに女の子を連れてきたら、二度とデートの誘いを受けてくれなくなるだろうな」
「……一応聞いておきますが、ここへ誰を誘うつもりだったのですか？」
「もちろん、ワイス・シュニーさ」
　ワイス・シュニー──同じビーコン・アカデミーに通う学生であり、優等生にして巨大企業の令嬢。白い髪と白い肌の美少女。やや自意識過剰の傾向。
「彼女がジョーンの誘いを受け入れたところを見たことがありませんが」
「わかってるよ、それは」
　ワイスに寄せるジョーンの情熱を、彼と同じチームの仲間であるレン

は知っている。それが、かなり一方通行であることも。
「でもレン、何か無いかな。面白い商品の説明やってるブースとか。ワイスって真ま面じ目めな性格だから、案外こういうイベントも喜ぶかも」
「少し調べてみましょうか」
　レンは白い小型情報端末──スクロールを取り出して開いた。
　通話機能や電子鍵かぎなど、様々な機能を追加できるこの端末に、レンはＳＩＣの企業展示会に関する情報をまとめたパンフレットをインストールしてあった。その内のいくつかを開いてみせる。
「これはどうでしょう。ナマケモノ型ペット・ロボットの新作展示。〝ほとんど動かないので充電もメンテナンスも不要〟」
「ぬいぐるみとかでいいだろう、それ。他ほかには？」
「試作型バイオニックアームの展示会。〝日々の生活に物足りなさを感じるあなたに〟」
「腕は二本で充分だよ」
「次は……動画ファイルがありますね」
　映像データを開いて見せると、ジョーンは目を見開いて感嘆の息をもらした。
　レンのスクロールには、いかにも夏らしいビーチと青い海が映し出されている。
　爽さわやかな南の島の映像に浮かぶ字幕──サパン島。
『ＳＩＣが所有するこのサパン島は、製品開発のための施設がいくつも存在します。また、ここで行われている研究の中にはリゾート開発も含まれており、サパン島それ自体が優れたリゾート島となっています。ここでは定期的に一般のお客様を招待し、サービスと製品の品質向上のきっかけとさせて──』
「今、一般のお客様を招待って言った？」

「ここに詳しい説明が書いてありますね」
　レンは動画の再生を停止し、サパン島についての説明に目を走らせた。
「社員の慰安のために使われていた施設を、最近になって社外の人間にも開放するようになったそうです。スケジュールはＳＩＣが決定する代わりに、交通費から滞在費まで、すべて無料で」
「タダでリゾートに？」
「そう書いてあります」
　ジョーンは期待で胸をぶるっと震わせた。
　南の島。夏期休暇を過ごすのに、これ以上ふさわしい場所はないだろう。真っ赤な太陽と青い空。青い海と白い砂浜。水着の美女。ヤシの木とトロピカルフルーツと海草と魚の死体。最高だ。
「で、どうしたら、このサパン島に招待してもらえる？」
「それは書いてません」
「ハハ、そんなワケないだろ」
　身を乗り出してジョーンは、レンの手元のスクロールに表示されたテキストを確かめた。さらに、動画も最初から見直してみたが、島への招待についての説明は一切なかった。
「……マジで？」
「ひょっとすると、ＳＩＣと取引のある人間や株主の中から選ばれるのかもしれませんね」
「なんで」
「施設のテストと、接待を兼ねられるからです」
　だったら絶望的だ、とジョーンは顔をしかめる。
　顧客どころかジョーンはしがない学生で、工業機械を扱う企業が顔色をうかがうほどの資産も株券も持ち合わせていない。その資格がありそうな知り合いはワイス・シュニーくらいなものだが、気を引きたい女の

子に「君の財産とコネで俺を南の島に連れていってくれないか？」なんて頼むのはどう考えてもみっともない。
「……まあ、いいや」ジョーンは南の島の幻想を振り切って言い、歩き出す。
「適当に見てまわろうぜ。そのうち、いいアイデアが思いつくかも」
「申し訳ありませんが、僕は用事があるので、ここで」
　レンの言葉に、ジョーンは驚いて振り返る。
「機械をながめるのが用事じゃなかったのか？」
「いえ。そういう趣味はありません」
「じゃあ、新製品の武器を確かめに？」
「いいえ」
「なら、ダスト？　新しい効果の銃弾とか」
「いいえ」
「じゃあなんだよ」
「パンケーキです」
「は？」
　思わぬ単語が出てきて呆あつ気けにとられるジョーンに、レンはまたスクロールを開いて説明する。
「パンケーキ専用の調理マシンを見に行くんです。これまでのマシンのスペックを塗り替える画期的な製品が開発されたと、このパンフレットの、ここ、ほら、ジョーン。ここです。ここに書いてある」
「…………うん」
「そういうわけですから、僕はここで」
　レンは颯さつ爽そうと身を翻ひるがえし、心持ち軽やかな足取りで人混みの中を歩き去って行った。
　取り残されたジョーンは、立ち尽くしたまま友人の背中をぼんやりと見つめる。通りかかった犬型ドローンが、そんなジョーンに話しかけ

た。
『道に迷ってお困りでしたら、最新のマッピングアプリはいかがですか』
「いや、いい」言ってから、ジョーンは思い出してドローンに尋ねてみた。
「サパン島に招待してもらうにはどうしたらいいんだ？」
『申し訳ありません。認識できない質問です』
　ぷい、と金属的に尖とがった鼻先を背けて、犬型ドローンは去っていく。
　機械にそっぽを向かれたジョーンは、面白そうなブースでも冷やかそうと歩き出す。
　とはいえ、工業機械に興味のないジョーンが足を止めるほどのものは見当たらなくて、ジョーンはブースの内側よりも、ブースのあちこちに下げられたモニターの映像ばかりを見ている。
　そうして前方不注意のまま歩くジョーンが誰かとぶつかるのは時間の問題だった。腰に軽い衝撃を感じて我に返ったときには、ぶつかった相手は派は手でに転がっている。
「……ったぁ」
　尻しり餅もちをついたのはジョーンよりも少し年下の少女。なぜか、派手なデコレーションが施ほどこされた青緑色のツナギを着て、栗色の髪の上に青みがかったゴーグルを載せている。
　転んだ拍子に持っていた鞄かばんの中身をぶちまけてしまったらしく、通路に書類が散らばって、ジョーンはそのいくつかに足跡をつけてしまったことに気がついた。
「ご、ごめん！　大丈夫？」
　しかし少女は書類よりも先に、鞄から投げ出されたノートＰＣに飛びついた。ジョーンのことも無視し、慌てた様子でキーボードを叩たたい

て動作を確認している。
　ジョーンは散らばった書類を拾い集め、さりげなく足跡もふき取って……気がついた。
　書類の多くにはＳＩＣのロゴがあり、その内の一枚は海とビーチの高彩度画像がプリントされている。そこに書かれた文字を、ジョーンは思わず口に出していた。
「サパン島……？」
　さっき、ぜひ行きたいと言ったばかりの島の情報が、何もかも記されている。
　この巡り合わせに、ジョーンは幼い頃に参加したビンゴ大会のことを思い出した。最初にいきなり一等を当ててしまい、周囲からずいぶん顰ひん蹙しゅくを買ったのだ。
　ジョーンは少女に手を差し出して尋ねる。
「君、もしかしてＳＩＣの関係者？」
　どうやらコンピューターに故障はなかったらしく、少女はコンピューターを納めた鞄を抱えて不機嫌そうにこっちを睨にらんでいる。
「ああ、俺はジョーン・アーク。ビーコンの学生なんだ。実は君に聞きたいことが……」
　答える代わりに少女は、ジョーンが差し出した手を無視して、もう一方の手にある書類を奪い取った。鞄に詰め込むとさっきの犬型ドローンのようにそっぽを向いて、さっさと歩き去ってしまう。
「ま、待ってくれ！　頼むよ待って！」
　少女はブースの間を通り抜け、人通りの多い通路を選んで進んでいく。少女はジョーンよりも明らかに小柄なので、人混みに紛れると当然、追うのは難しくなる。
「すみません、ちょっと通して……痛っ！　踏んでる！　踏んでるって！」

何度も人とぶつかり、脛すねを蹴け飛とばされ、ドローンの鋼鉄の足につま先を踏みつぶされて、ようやくジョーンは、追跡を諦あきらめざるを得なくなった。
　それどころか自分が今、どこにいるのかもわからない。周囲のブースを見るに、どうやらこの辺りは武器類を展示しているスペースらしく、通行人も大柄で腕っ節の強そうな人間が目立つようになる。
　その中には鋭い牙きばの獣人ファウナスもいるし、かと思えば──場違いに可か憐れんで華きや奢しやな少女の四人組もいた。
「見てよ、あのでっかい武器！　素敵！　試し撃ちとかできないのかな！」
「ちょっと、前を見て歩きなさい！　それと、服を引っ張らないでくださる!?」
「あたしは武器よりバイクが見たいんだけど。新しいタイヤとかシートとかさ、ねえ？」
「興味ないわ」
　聞き覚えのある四つの声。
　ゴーグル少女を追うのに夢中になっていたジョーンも、思わず立ち止まって周囲を見回した。
「おい、邪魔だよ」
　眉み間けんに一本角を生やした筋骨隆々のファウナスに突き飛ばされて、ジョーンはバランスを崩くずして転びそうになる。その手を、誰かが掴つかんで彼を支えてくれた。
「……！　ワイス──」
『どういたしまして』
　ジョーンの袖口を犬型ドローンがくわえている。くわえたまま、音声が流れた。
『ところで、最新のマッピングアプリはいかがですか？』

「……遠慮しとくよ。支えてくれてどうも。……はなせってば」
　袖をふりほどいて周囲を捜すが、馴な染じみの四人の姿は、もうどこを捜しても見当たらない。
　それでも未練がましくキョロキョロしていると、あるスペースが目にとまった。
　他ほかのブースとは違い、広場のような場所に、見上げるほど大きな工業機械が並べられている。
「何だ、あれ」
　四つ足と長い牙と鼻（作業用のアームだろうか？）を持つ、象を模した大型機械。その表面を、さっきぶつかった少女がよじ登っていた。鞄かばんを背中に背負い、ピッケルのような器具を機械の表面に引っかけながら。
　彼女がぶちまけた書類を思い出す──そういえばＳＩＣの関係者だっけ。
　ジョーンは再び人とドローンを避けて進み、広場のスペースを確保しているポールとロープを乗り越えた。無心で大型機械をよじ登る少女に声をかける。
「あのー、ちょっといいかなー」
　少女がぴたりと止まり、首だけ傾けて地上を見下ろした。警戒するような目は、ここまで追いかけてきたジョーンの大人げない態度を責めているようだった。
　微妙な罪悪感を覚えつつ、ジョーンは女の子の警戒心を解ほぐそうと最高の笑顔を絞り出す。
「邪魔してごめん。さっき自己紹介したんだけど、覚えてる？」
　少女は苦々しげに口の端を歪ゆがませて、ふたたびドローンをよじ登り始めた。
「……今、舌打ちした？」

少女は象を模した大型機械の首にあたる部分に触れて、何かを動かした。途端、象の頭部が押されるように開き、少女が中へ体を滑り込ませる。
「え？」
どうやらそこがコクピットにあたる部分らしい、とジョーンが気づいたときには、機械仕掛けの象は唸うなりを上げて動き出していた。
建物を支える柱のように太い足が動き出し、地響きを立ててホールの床を踏みしめる。その場にいたほとんどすべての人間の注目を集めたところで、鼻型のアームが隣のクレーンを叩たたきのめした。
どうやらちょっと過激なパフォーマンスとかではないらしいと判断した通行人たちが、わっと散っていく。ＳＩＣの腕章をつけたスタッフまで逃げだして、彼らの代わりにドローンが非常事態を告げるサイレンを鳴らしながら来場者の避難にあたっている。
なのに、誰より先に異変に気づいていたはずのジョーンは、悲鳴の巷ちまたとなったホールから逃げ遅れていた。理由は、この事態の原因が自分より年下の少女であることを知っていたからだ。子供のしでかしたことなら、なんとかできるんじゃないかと思ってしまった。もちろん、錯覚だ。
「おーい！　何やってるんだよー！　危な──うわヤバい」
象が並べられた椅い子すを蹴け倒たおし、踏みつぶして向かってきたときには、ジョーンも見切りをつけるしかなくなった。ビーコン・アカデミーの学生として武器を携帯してはいたが、剣と盾たてで挑むにはこの相手は巨大すぎる。身を翻ひるがえして一目散に逃げ出し──。
「──おっ？」
駈かけ出していた足が空を切った。見下ろせば両足は宙に浮き、みるみるうちに地上が遠くなり、上下に大きく揺さぶられる。首の後ろにある服のフードが、象型機械の牙きばの尖せん端たんに引っかけられてい

ると気づいて、ジョーンは女の子みたいな悲鳴を上げた。
「誰かァーッ！」
　象の後頭部が開いて、さっきのゴーグル少女が顔を出す。つり下げられた格好のジョーンとゴーグル越しに目が合って、今度はハッキリと「チッ」という音を鳴らしたのが聞こえた。
「また舌打……ヒィィーッ！」
　象が走り出した。進路上にある物を蹴散らし、踏みつぶすたびに牙が揺さぶられる、ジョーンの体も振り回される。かと思うと急停止──同時に牙が大きく振り上げられて、ジョーンのフードは無事に牙の尖端からすっぽ抜けた。つまり、空中で真上に向かって放ほうり出された。
「ダメダメダメダメ──うわぶ」
　幸か不幸か、ちょうど象の真上に放り投げられたジョーンは、宙で必死にもがくうちに、象の背中にしがみついている自分に気がついた。
ショックで悲鳴すら出なくなっているジョーンを背中に乗せたまま、再び象が走り出す。
「止まってくれぇ！」
　ジョーンの願いが聞き届けられることはなかった。象は無人となった近くのブースを片っ端から蹴け散らしていく。視界が激しく揺さぶられて、ジョーンの目がまわる。
「うおぉ……吐きそう……」
　吐き気と涙で歪ゆがんだ視界の中に、すばやく動く黒と赤い点が見えた気がした──かと思うと、その点が一気にこちらへ距離を詰めてくる。
　思わず瞳ひとみを閉じたジョーンのすぐそばで聞こえたのは、硬い何かが打ち合う音と、何かが剥はがれる音。そして、少し子供っぽい声。
「ヤッホー、ジョーン」
　目を開けると、象の背中に大鎌が突き刺さっている。
　まるでベンチに腰掛けるかのような気安さで、鎌の柄に体をあずけて

いる少女がいた。
　出ない声を振り絞り、ジョーンはかすれ声で名前を呼んだ。
「……ルビー？」
　少女は、銀色の瞳で微笑ほほえんだ。

◇

　ビーコンの学生であり、チームＲＷＢＹルビーのリーダーでもあるルビー・ローズとその仲間たちは、夏休みの初日から馬ば鹿かなことをした。ルビーの発案により、ヴェイルの街で行われていた機械メーカーの展示会に向かったのだ。
　当初、「若者が集まるダンスクラブでもなく、海辺の別荘でもなく、何な故ぜそんな色気のない場所に行かなければならないのか」という反対はあった（主に彼女の姉から）。
　ゆえに協議の結果、四人は妥協案を出した。この休暇中、チームのメンバー全員に一日ずつ「チームの行動を自由に決定できる権利」を与える、というものだ。
　こうして最初の一日は記念すべき「ルビーの日」となり、仲間たちにわがままを聞かせる権利を得たルビーは仲間たちと思う存分、展示されている武器を鑑賞し、スタッフを質問攻めにし、無茶なことをしでかして、何度かチームメイトのワイス・シュニーを怒らせたりした。
　そうやって休日を満喫していたところに出くわしたのが、暴走する機械の象である。
　ルビーは喜んだ。
　遠くからでも見えるあの大きな機械、あれが動いているところを間近で見ることができたら、どんなにいいだろう、と思っていたからだ。
　他ほかの三人も喜んだ。

武器が鑑賞できれば満足なルビーとは違い、そろそろ退屈しのぎが欲しくなっていたからだ。

「──でね、ジョーンが象の背中にいるってブレイクが言い出して、ウッソーって感じ。でもこの子の望遠レンズで確認したら、本当にジョーンがいたからびっくりして、とりあえず誰か助けにいった方がいいんじゃないかってことになったから、わたしがきたの」
　と、ルビーは象の背中でベラベラ説明してくれた。
「じ、事情はわかったから、助けてくれないかな」
「うーん、でも合図がまだだし……」
　ルビーがちらりと下を見たので、ジョーンは納得がいった。象がさっきから同じ場所で暴れている理由──ルビーの仲間たちが、下で戦っているのだ。おそらく、この巨象が他ほかの人のいる場所へ向かわないよう、足止めするために。
「……ルビー！　後ろ後ろ！」
　大鎌に腰掛けた少女の背後から鼻型アームが伸びてきているのに気づき、ジョーンが叫ぶ。ルビーは、すぐさま鎌の先端を引き抜いて発砲した。
　ルビーが「この子」と呼ぶ大鎌〈クレセント・ローズ〉の正体は、大口径狙撃鎌ハイキヤリバースナイパーサイス──長大な狙そ撃げき銃そのものを柄とした大鎌で、近くの敵の首を刈りながら遠くの敵を撃ち殺すとんでもない代物。
　そんな非常識な武器を、目の前の十五歳の少女は完かん璧ぺきに使いこなしている。
　大鎌のポール部分の狙撃銃がダスト弾を発射し、迫りくる鼻型アームを貫き砕いた。
　発射の際に生じた反動を使ってルビーは後ろに跳ぶ。片手でクレセン

ト・ローズを操作、刃を機構の内側に納める狙撃銃の形態に変形させて脇わきに抱え、空いた手でジョーンのフードをつかむ。
「ちょっと待って嫌な予感が──」
　ニッと笑ったルビーが、すでに半壊状態だった鼻アームに向けて再び引き金を引いた──かと思うと、すさまじい速度でジョーンの体を後ろに連れ去っていく。
　危険と戦うハンターが身につけるべき技術に、オーラの操作がある。生命エネルギーであり、使いこなせば身を守る盾たてともなるオーラは、さらに研ぎ澄ませることで特殊な力を発生させる。
　センブランスと呼ばれるその力は、個人によって特性が大きく異なっていた。たとえば、ルビー・ローズのセンブランスは《加速》。自身の速度を、いきなり最高ギアにまで持っていける能力だ。
　このときルビーは、射撃で発生した反動をセンブランスによって引き延ばした。彼女の能力により狙撃銃の反動は目にもとまらぬ高速移動へ発展──象の背中から地上へと一瞬で移動している。
　ライフルの一撃によって完全に破壊された象の鼻がボロボロと崩くずれ落ち、ルビーに連れてこられたジョーンも乱暴に地上へ投げ出された。
　ジョーンはオーラというものの存在を知って間もないため、センブランスにはまだ目覚めていない。
　ついでに言うと、乗り物に酔いやすい体質である。床に投げ出された体勢のまま、ジョーンは激しい吐き気と戦っていた。
「ルビー！」と、甲高い叫び声がジョーンのすぐそばで聞こえた。
「人質を下ろすのは、合図をしてからという話だったでしょう！」
　見上げれば、真っ白に輝く髪を結い上げた、青い瞳ひとみの少女がルビーに食ってかかっている。髪と同じ純白のドレスを身に纏まとい、手には冷たい輝きのレイピアがあった。

「ンンン、ンン～！」
　ジョーンは真心を込めて少女──ワイス・シュニーの名を呼んだが、彼女の前では決して吐くまいと口を押さえていたせいでワイスには伝わらなかった。
　機械象は暴れるのを止めて、鼻のアームをこちらに向けてたたずんでいる。少女二人を威い嚇かくしているようにも、二人の乱入者に困惑しているようにも見えた。
　突然、象の背中で小規模な爆発が連続して起きる。爆発の衝撃で巨象がぐらりと傾き、こちらに倒れ込んできた。
「ヤバいヤバいヤバい！」
　ジョーンは悲鳴を上げながらルビーに引きずられて難を逃れ、ワイスは軽やかなステップで象の巨体をかわした。そして、すぐに非難の声を上げる。
「ヤン！　敵を倒すときには、その周囲のことも気にかけてくださいます!?」
　応えるように、長身の少女がワイスの隣に降り立つ。ふわふわの金髪をいたわるようにかきあげて、
「ビーコンの生徒なら、これくらい避けるのはワケないでしょ。ワイスも、ルビーも……」
　二人に続けて、地面にうつぶせで大の字にへばっているジョーンを見下ろす。
「あー、ジョーン？　チームＲＷＢＹのヤン・シャオロンだけど。調子はどう？」
「……見ればわかるだろ」
「そうね、絶好調って感じ」
　地響きと共に、壊れかけの巨象が再び動き出す。
　四本の脚をなんとか動かして立ち上がり、最後の力を振り絞るかのよ

うに歩き出した。
「ワイス、ヤン」
　ルビーが短く呼びかけると、二人はうなずいて応じる。
「心得ていますわ」
「まかしといて」
　言うや否や、ヤンが駆け出す。助走を充分につけると、その勢いのまま、巨象の脚に飛びかかった。巨象の脚の関節部を殴りつけると同時に爆発が起き、機械部品が吹き飛ぶ。
　殴るたびに拳こぶしの先で爆発が起きるのは、彼女──ヤン・シャオロンの武器〈エンバー・セリカ〉によるもの。二重射程デユアルレンジショットガングローブと呼ばれる、ダスト弾を内蔵した籠こ手てだ。優れた格闘能力を持つヤンとは抜群の相性で、ひとたびこの武装を展開すれば、両拳の打撃は爆撃と化す。
　豪快なラッシュと爆発で、ついに耐えきれなくなった巨象の脚部が破壊される。支えを失った巨象が、胴を床につけた。それを確認したヤンが、ワイスに向かって手を挙げる。
「ワイス、まかせた！」
　名を呼ばれて、ワイスがレイピアを掲げる。鍔つば元もとには多種多様なダストを仕込んだリボルバー機構とトリガーが備わっており、用途によってダストを使い分けることができる。
　彼女が好んで使うダストの属性は、その冷たい美び貌ぼうにふさわしいもの。
　ダスト搭載多機能マルチアクシヨンダストレイピア──〈ミルテンアスター〉の切っ先が地に触れるや否や、氷結の力を持つダストが解放される。
　切っ先から象まで一直線に、氷の波が走った。氷は巨象を取り囲み、その場に封じ込めていく。相手の動きを完全に封じたワイスは、巨象に

向かって手をかざした。床の上に、光の紋様がいくつも生じる。
　ワイスのセンブランス──何も無い場所に力場を発生させる、魔法陣グリフの能力。
「ルビー」とワイスが短く言った。「仕上げを」
　ルビーは大鎌を脇わきに構えて身を沈めた。その視線の先には、滑走路のような魔法陣グリフの列と、巨象の頭──これから起こることを予期して、ジョーンは叫んだ。
「ルビー！　頭は壊しちゃ駄目だ！　中に人が──」
　《加速》。
　一瞬でルビーは黒と赤の弾丸と化し、薔ば薇らの花弁を残して魔法陣グリフの上を駆け抜ける。
　クレセント・ローズの刃が身動きできない巨象の頸けい部ぶ関節に達する頃には、強固な金属部品すら切断できるほどのスピードが生じていた。
　地上を奔はしるギロチンの一撃は巨象の頭部を一撃のもとに切り落とし、鼻と牙きばの欠けた頭は衝撃でずっと遠くまで吹っ飛ばされる。
「まずい」
　ジョーンは立ち上がって、よろめきながらなんとか走り出した。

　吹っ飛んだ象の頭──大型機械のコクピットは着地点からさらに転がって展示物をいくつもなぎ倒し、会場中央の広場でようやく止まった。ルビーに斬きられた切断面はぞっとするほど滑らかで、ジョーンは頭部に駆け寄って中に呼びかける。
「おい、大丈夫か⁉　まさか、死んでたり──」
「やっぱり、誰か入ってたのね」
　いきなり背後から声をかけられて、ジョーンは飛び上がりそうになる。

声の主は音もなくジョーンの隣をすり抜け、無表情にコクピットを見下ろした。わずかにウェーブのかかった黒髪、黒いリボン、やや吊つり気味の琥こ珀はく色いろの瞳ひとみ。
「えーっと、君は……ブレイク、だよね？」
　ブレイク・ベラドンナ──チームＲＷＢＹのメンバー。四人の中ではもっとも身軽なフットワークの持ち主で、先の戦闘でも素早い動きで巨象を翻ほん弄ろう、ヤンの攻撃をサポートしていた。
　非常に無口な性格で、いつも本を読んでいるということくらいの印象しかジョーンにはない。というか、ちゃんと話をしたこともあまりない。
「知ってたのか？　あれの中に人がいるって」
「ずっと、音がしてたから」
　ブレイクに言われて初めて、ジョーンはコクピットの中から壁を叩たたくような音がしていることに気がついた。耳を澄ませればようやく聞こえるほどの、内に籠こもった音。ブレイクはコクピットに歩み寄ると、武器である黒刀を叩きつけた。
　象の頭部にある、どこかの部品が砕ける音がして蒸気が噴き出す。途端、コクピットが割れるように開いた。開くなり、中からツナギの少女が這はい出してくる。
「ゲホッゲホゴホッ！　ああ、死ぬかと思ったー！」
　栗色の髪は乱れに乱れ、あちこちに打ち身をこしらえている。ゴーグルをずり上げるその手首をブレイクが掴つかみ、一気に引きずり出した。
「あ、これはどうも、ご親切に……」
　少女は目の前のブレイクの真剣な眼まな差ざしにたじろいだ様子で、言いかけた礼の言葉を呑のみ込んだ。固まった少女に、ブレイクが言う。

「何が目的でこんなことを？」
「……えーと」
　少女の目が泳ぐ。ブレイクの表情は、どんな言い訳やごまかしも許さないと雄弁に語っている。それに、彼女はまだ手を離してくれていない。自然と、少女の瞳に涙が浮かんだ。
「ご、ごめんなさい……わたし、パパのお手伝いをしたくて……」
「パパ？」
　ジョーンがつぶやくと、少女は助けを求めるように、涙に濡ぬれた瞳をそちらに向けた。
「パパはＳＩＣの技師なんです。でも、今日はここに来られなくて、わたしが代わりに調整をしようと思ったら暴走しちゃって、止めようとしたんだけど……」
　しゃくり上げながら言って、少女はめそめそと泣き出す。
　少女の涙にジョーンは気の毒そうな表情を見せたが、ブレイクは少しの隙すきも見せなかった。顔を覆う少女の手を見透かすように、きつく睨にらみつけたまま、
「その言い訳も、アダムの指示？」
　少女は、涙をぬぐうのも忘れてブレイクの顔を見つめた。驚いているのではなく、目の前の黒リボンの少女が何を言っているのか本気でわからないといった顔でつぶやいた。

「アダムって……誰？」
　穿うがつような目でブレイクは、じっと少女を見つめ、やがて息をひとつ吐いた。
「……いいえ。なんでもないわ」
　ブレイクは何かを納得したらしいが、横で見ていたジョーンにはさっぱりわからない。
「何？　どういうこと？」
「カマをかけただけよ。わたしの気のせいだったみたい」
　ようやくブレイクは少女の手を離し、二人に背を向ける。倒れた椅い子すや機械部品をまたいで、そのまま歩き去ってしまった。
　ブレイクの行く手では、ＲＷＢＹの他ほかの三人がＳＩＣのスタッフに囲まれて何やら騒いでいる。ジョーンも、あれに混じってワイスに助けてくれたお礼とか賞賛の言葉とかデートの誘いとか伝えたい。
　そうだ。自分がここに来た理由は、魅力的な休暇のスケジュールを立てて、ワイスに振り向いてもらうためだった。なのに、機械の象にまたがったり振り落とされたりしなきゃいけなくなった原因は――
「ホント何なんですか、あの人たち」と、元凶の少女がけろりとした顔で言った。さっきの涙のあとはもうどこにも見えない。
「いくら戦闘用じゃないとはいえ、これだけの大型作業機械を四人で沈めるなんて」
「ビーコン・アカデミーの学生だよ」
「ああ、ハンター志望者ですか。どうりで」
「それに、俺もビーコンの学生だ」
　いささか胸を張って言うと、少女はうさんくさげにジョーンを見た。
「あなたが？」
　じろじろと無遠慮にジョーンを上から下まで眺め回し、「ハ」とうすく笑った。

「嘘うそじゃない！　グリムを倒したこともあるんだからな！」
「なるほど、さっきは悲鳴を上げたり助けを求めたり大活躍でしたものね。……ああ、別に非難するつもりはありませんよ。あなたが邪魔せずにいてくれたのは助かりました」
　そう言って少女は、散々に踏み荒らされた会場を満足げにながめた。
　そこに一切の後ろめたさが見られないので、ジョーンは不安になる。
「君はさっき、ブレイクにお父さんがどうとか言ってたけど……」
「嘘ですが？」
　しれっと言われて、ジョーンの顎あごがかくんと落ちる。
「じ、じゃあ、君は……テ、テロリストなのか？」
「テロ？　違いますよ、そんなワケないでしょう。失礼な」
「大型機械を乗っ取って暴れさせたのに？」
「……どうしても放ほうっておけないものがあったんですよ」
　少女は、バツの悪そうな顔で足下の壊れたモニターを見つめる。
「イオナ・ロックショー！」
　大声で怒鳴りつけられて、ジョーンと少女が飛び上がる。
　声の主は大おお股またに歩み寄ってきた男だった。髪を短く刈り込み、金かな槌づちで叩たたいて成形したような額と鼻の持ち主。着ている制服から、彼がＳＩＣの社員であることがわかる。
「俺が来た理由はわかっているだろうな⁉　わかっているはずだ！」
うっとうしそうに顔をそむけた少女に詰め寄って、男はさらに怒鳴り声を上げた。
「今の騒ぎはいったいどういうことだ！　説明してもらおうか！　この俺に、わかるように、だ！」
　たぶん、彼は会場の秩序を守るセキュリティ担当なのだろう、とジョーンは考えた。肥大しきった筋肉のおかげで、可哀想な制服が今にも破れそうなほど張り詰めている。

人を威圧するような大声といい、着衣に対して不親切な筋肉といい、ジョーンは一目でこの男に苦手意識を持った。一方、詰め寄られた少女は涙をぬぐう素振りを見せている。
「ご、ごめんなさい……わたしもこの事態を収拾しようとしたんですけど、力及ばず……」
　めそめそと白々しいことを言いながら、手の陰でジョーンに視線を送ってくる。その目が「余計なことは言うな」と語っていた。
　大男はさらに声を大きく張り上げて、
「お前は機械整備の責任者だろう！」
「うぅ、わたしにもまだ何がなんだか……ぐすっ」
「わからないことをわかるように説明するのが貴様の役目だろうが、わからん奴め！」
　さらに詰め寄られると少女は泣き真ま似ねをやめて、皮肉を込めた目で大男を見上げた。
「文句があるなら、ＣＥＯに連絡して報告すればいいと思いますが」
　男が少女の髪を掴つかんで持ち上げる。苦痛に顔を歪ゆがませる少女に、一言ずつ、噛かみつくように言う。
「俺はＣＥＯほど甘くない。わかっていないなら、わからせてやる」
「おい、やめろ！　あとは警察にまかせればいいだろ！」
　見かねたジョーンが止めに入ると、男は初めてジョーンに気がついたというように目を丸くした。説明しろと言いたげな目で少女を見下ろす。その手はまだ、髪を掴んだままだ。
「……一般来場者ですよ。顔見知りじゃありません」
　ビーコンの学生だと名乗ったジョーンを少女がながめ回したように、男もジョーンをじろじろと見た。そして値踏みの結果、たいした相手ではないと感じたらしく、嘲あざけるような表情を浮かべた。
「警察だと？　警察は呼ばない。お前も余計なことを言いふらしたりし

ない。今日のことは忘れろ。わかるな？　わからないと言えばどうなるかも、わかるな？」
　男はジョーンに太い指を突きつけ、体全体で威圧するように言い含める。
　そのとき、ジョーンは自分がどうしてこの男に苦手意識を持ったのか、ようやく気がついた。同じビーコンのいじめっ子、カーディン・ウィンチェスターと雰囲気が似ているのだ。
「警察を呼ばないで、その子をどうするんだ」
「お前には関係ない。失せろ」
　どん、とジョーンの胸を軽く押した。すぐに手が出るあたり、やはりカーディンに似ている。
　そして同時に、彼によく仕掛けられたイタズラのこともジョーンは思い出した。
「……わかったよ」
　腰に差した剣を、鞘さやごと引き抜いて差し出す。男は首をかしげた。
「なんだ？」
　ジョーンはスイッチを押して、鞘のギミックを動かした。剣を包んだまま、鞘が変形・展開──純白の盾たてとなる。
　いきなり視界をふさがれた男は驚いて立ちすくみ、少女の髪から手を放した。
　その隙すきにジョーンは少女の手を掴つかむ。
「ほら！　行くぞ！」
　ジョーンは少女と一緒に逃げ出し、夢中で駈かけだした。しばらく走ってから、後ろを振り返る。
　少女はびっくりした様子ながらついてきている。男は追ってきていない。

じっとこちらをにらみつけたまま、仁王立ちで動かないのが不気味だった。

　女の子の手を引いたまま、ジョーンは会場の外までやってきた。最初に、ジョーンがホットドッグを買った屋台の前で、ようやく立ち止まる。
「……もう大丈夫だろ」
　膝ひざに手を置く少女はぜいぜいと荒い息を吐き、うらめしげにジョーンを見上げた。
「余計なお世話です……わざわざ逃げなくたって……」
「君をリンチしようとしたのにか？」
「わたしの立場上、彼らもあまり手ひどいことはできませんから。髪を引っ張って脅しつけるような、子供でもできる幼稚な暴力がせいぜいですよ」
「君の立場って？」
「言う必要はないと思います」
　ぴしゃりと言って乱れた髪と息を整えてから、少女はジョーンが腰に戻した剣を面白そうに眺めた。
「それより、変わった武器ですね」
「これは……えーと、うちの家に伝わる年代物なんだ。鞘さやが盾たてに変形する」
　この地味な剣を、少女がさっきの四人の武器と比べたりしませんように、とジョーンは願った。
「持ち運びに便利ですね」
「そう！　それが言いたかった」
「それ以外に何か機能は？」
「……ない」

「武器も持ち主も頼りないですね」
「俺だって、自分が力不足だってことくらいわかってるよ」
　てっきり嘲あざ笑わらわれると思っていたのだが、少女は微妙な表情を浮かべただけだった。それは同情というか、憐あわれみというか。年下の子供にそんな目で見られるのはなかなか嫌なもので、ジョーンは話を切り替えた。
「えー、さっきの男が言ってたイオナとかいうのは……」
「イオナ・ロックショー。わたしの名前です」
「じゃあ聞くけど、イオナ。君はいったい何者なんだ？」
「ＳＩＣの関係者です。あなたが巻き込まれたのは、ＳＩＣ社内のいざこざなんですよ。怪け我が人も出ていない以上、警察沙ざ汰たにはならずに内々で処理されるでしょう」
「そんな馬ば鹿かな」
「さっき、わたしを叱しかった脳筋さんミートヘツド、追いかけては来なかったでしょう？　あなたみたいな部外者の前で、これ以上の荒事を起こすのを嫌ったんですよ。ここで起きたのは展示品のちょっとした事故、目撃者には口止めをお願いして、それで終わりでしょうね」
　まるであらかじめ用意していたかのように、すらすらと言ってのける。事情としては理解できなくもない話だが、納得できるかは別だ。
「事故だって？　象の鼻を使って俺とルビーを殺そうとしたのに！」
「あれは助けようとしたんです。アームでつまみ上げて、地上に降ろしてあげようとしたんですよ。他ほかの三人が寄ってたかって攻撃してきて、それどころじゃなくなりましたけど」
「そっちが俺をさらったんじゃないか！」
「誰があなたなんかさらうもんですか。あなたが出しゃばったせいで、偶然起きてしまった事故です。おとなしく逃げればよかったのに、わたしをつけまわして、いったい何が目的なんです？」

言われて、ジョーンはようやく思い出す。彼女を追って騒動に巻き込まれたことと、その理由を。

「君を追ってたのは、サパン島への招待について聞くため、だけど……」

「そんないいところじゃありませんよ。あきらめてください。それじゃ」

イオナは踵きびすを返して立ち去ろうとする。

ジョーンはとっさに手を伸ばしたが、彼女を捕まえるのは思いとどまった。

彼女の言うことが正論だとは思わないものの、本当だとしたらジョーンにできることはあまりない。それに、イオナの後を追って散々な目にあったので、これ以上関わるのはよそうと思ったのだった。

会場のどこかにいるはずのレンを捜して、さっさと寮に帰ろうと決めた。

「……ジョーン・アーク、でしたっけ？」

立ち去りかけていたイオナが、立ち止まって名前を呼んだ。ジョーンも驚いて立ち止まる。

なぜか、イオナはそれまでしていなかったゴーグルをしていて、表情はうかがいにくい。

「一つ、聞いてもいいですか」

「な、なんだよ」

「さっき、なんでわたしを助けたんですか？」

ジョーンは戸惑った。予想外の質問だし、そう簡単に答えられるものでもない。

答えられないでいると、イオナはコインを一枚取り出して、ジョーンをじっと見つめながら指で宙に弾はじいた。10、９、８……と数をかぞえながら、何度も。何度も。

「あの、それカウントダウンみたいで落ち着かないんだけど」
「カウントダウンのつもりですけど」
「……終わるとどうなるんだ、それ」
「さあ？　どうなるんでしょう」
　なんて子供だ。コイン一枚で、こんな斬ざん新しんな拷ごう問もんを思いつくなんて。
「別に助けたことに理由なんてないよ！　……いや、ないことはない。ちょっと色々あってムシャクシャしてたとか、あの警備員が嫌いなやつに似てたとか、そういうのはある。あるね、うん」
　精一杯説明したのに、イオナは黙ってコインを弾いていた。数字をかぞえるのはやめたけど、相変わらず妙なプレッシャーをかけてくる。
「これ」と、突然コインを弾くのをやめて、コインの裏表をジョーンに見せた。
「コインの柄が見えますか」
「えーと、白い面と赤い面がある」
「クイーン・アップルとマシュマロ・クラウンです。知らないんですか？　女の子に人気のカートゥーンなのに」
「俺の人生で女の子だった時期は無いんだよ」
　赤い面には澄まし顔をした少女のキャラクターが描かれ、白い面には丸顔の道化師クラウンが描かれている。それをイオナはまた指で宙に弾き、手の甲で受け止め、もう一方の手で蓋ふたをした。
「どっちが上か、当ててください。その結果次第で、サパン島へのチケットを譲ってもいいですよ」
「本当に!?　わ、わかった、ちょっと待って！」
　年下の女の子から提案された思わぬチャンスに、ジョーンは本気で迷い、考え込んだ。
　どっちも興味のないキャラクターで、どちらか選べと言われると難し

い。クイーンが白なら絶対そっちを選ぶのに。
　散々迷った挙句、「赤！　赤のクイーン！」とジョーンは宣言した。
「はいはい」イオナはどうでもよさそうに手を開く。
「マシュマロ・クラウンですね。あなたの負けです」
　ジョーンは膝ひざから崩くずれ落ちた。
　床を叩たたいて千載一遇のチャンスを逃した自分を責める。今のチャンスをモノにできていたら、間違いなくワイスのハートを射止めることができていたのに！　なんてマヌケなんだ！
　そんなジョーンを若干、引き気味に見下ろして、イオナはゴーグルを外して素顔を晒さらす。バッグからゴテゴテしたデコレーションのノート型コンピューターを取り出し、キーボードを叩きながら言う。
「約束どおり、差し上げますよ、チケット」
「……へ？」
　コンピューターに接続されたガジェットから、数枚の長方形の紙片が印刷されて出てくる。それを、イオナはジョーンに差し出した。
「勝てばあげるとは言ってませんよ。結果を見て決めるって話です」
「本当にくれるのか⁉　ありが──」
　さっとチケットが引かれて、ジョーンの伸ばした手は空を切った。
「その前に確認させてください。あなた、獣人フアウナスの友達はいますか？　休暇を一緒に過ごすくらい、仲の良い友達って意味で」
「ファウナスの……？　そりゃあ、知り合いにはいるけど……」
　先天的に獣の特性を持つファウナスは、身体能力に優れる。戦闘力が重視されるアカデミーには、もちろん多くのファウナスがいる。
「でも、チームにはいないな。でもなんでそんなこと──」
「じゃ、どうぞ」
　唐突に渡されたチケットを、ジョーンはまた引っ込められないうちに受け取った。

南の島への切符を空にかざしてみる。ＳＩＣの星形のシンボルと、ヴェイルの港町の地図が描かれている──こんな、あっさり手に入るなんて。
「ありがとう！　助かった！　これで……？」
　ジョーンが感謝の意を伝えようとしたときには、イオナの姿はどこにもなかった。

◇

　ハンターを養成するアカデミーでは、基本的に学生が四人ひと組のチームを編成して課題にのぞむが、その四人は普段から同じ部屋で暮らし、共同生活を行っている。学生たちは仲間と同じ時間を過ごすことで、ハンター同士で連係することを学ぶ。
　ルビー・ローズ。
　ワイス・シュニー。
　ブレイク・ベラドンナ。
　ヤン・シャオロン。
　四人の頭文字を頂くチームＲＷＢＹもまた、他ほかのアカデミーの生徒たちと同様に寮の一室で生活を共にしていた。休暇中でも、一日の終わりには必ずここに帰ってくることになっている。
「……あの騒ぎ、警察や学校に知らせなくてよかったのかしら」
　本棚から本を選んでいたブレイクが手を止めて、誰に言うでなくつぶやいた。
　クローゼットから服を選んでいたヤンは、いつもの快活な笑顔を仲間に向ける。
「まだそんなこと言ってんの。会社のお偉いさんが内々で済ませたいって言ってたんだし、気にすることないって。怪け我が人もいなかったん

だしさ」
「その、とおり、です、わ！」
　いっぱいの荷物を詰め込んだトランクを、上からぐいぐい押しながらワイスが言う。なかなか閉まらないトランクに匙さじを投げて、トランクをのせたベッドの隣に座り込んだ。
「プロモーションの場である企業展示会で事故が起きたことは、ＳＩＣにとってかなりの打撃のはず。それでも余計な悪評が広まらないよう務めるのは、企業がとる措置としては当然のものですわ」
「そうそう。下手に言いふらしたら口封じに殺されたりして！」
　ヤンがクローゼットの水着を吟味しながら物騒なことを言い、ワイスはヤンを━あるいはヤンの、学生にしてはやや過激な水着をにらみつけた。
　しかし、ブレイクの表情は晴れない。
「……今日の騒ぎがわたしに関係ないと判断したのは、早計だったかもしれない」
「ちょーっと待った、ブレイク。その辺にしときなって」
　さすがに、ヤンはクローゼットをあさる手を止めて言った。
　夏休みの前に出くわした事件で、ブレイクが実はファウナスであることを仲間たちは知った。そして、かつては大企業などを標的とする過激な組織の構成員だったことも。
　ファウナスの権利のために戦っていたその組織は、ブレイクが抜けた後に大きく変わってしまったらしい。ブレイクは先日の事件でそれを知り、今も思い悩んでいる様子だった。
　だから、今日の暴走事故で考えてしまったのだろう。
　あの騒ぎも、自分がかつていた組織の仕業なのではないか、と。
「考えすぎですわ。犯人はファウナスではなかったのでしょう？　彼らの仕業だとは思えませんわ」

「ファウナスが素性を偽って人間のフリをするのは難しくないもの」
「それを言われると言い返せないよね、あたしたちは」と、ヤンがブレイクではなくワイスに言う。ブレイクはヤンの軽口が聞こえなかったみたいに続けた。
「組織にとって企業は格好の標的なのよ。ＳＩＣがターゲットになっているとは聞いてなかったけど、新たに狙ねらわれたのかもしれない。可能性は充分ある」
　ブレイクの主張に反論する者はおらず、部屋がしんとなる。
　ヤンはブレイクの懸念も一理あると感じているようだし、ワイスは以前、この問題についてブレイクと激しい口論になったことがある。そのときの過ちを繰り返さないよう、少し慎重になっていた。
　そしてチームＲＷＢＹのリーダーであるルビー・ローズはこのとき不在だったのだが――
「たっだいまー！」
　――最悪のタイミングで部屋にもどってきた。浮き輪とビーチボールを小脇わきに抱え、頭にシュノーケル付きゴーグルを載せた、ひどく浮かれた恰かつ好こうで。
「チームＲＷＢＹの諸君！　不死身のリーダー、ルビー・ローズが困難な任務を見事に果たして帰還したよ！　戦利品は、海のお供には絶対欠かせ、ない……」
　冷え冷えとした部屋の空気にようやく気づいて、ルビーはビーチボールを足下に置いた。
「……何かあった？」
「なんでもないよ。ちょっと陰謀論について盛り上がってただけ」
　言ってから、ヤンは妹ルビーの背後にあるものに向けて首をかしげた。
「で、その後ろのは何？」

「よくぞ聞いてくれました！」
　途端に元気を取り戻したルビーが横に飛び退のいて、フリつきで後ろにいた人物を紹介する。
「我らチームＲＷＢＹの良き友である、ジョーン・アークです！」
「や、やあ」
　決まり悪げに片手をあげたジョーンに、ルビー以外の三人が「知ってる」と声をそろえて言った。
　あまり歓迎されてなさそうな空気に気け圧おされるジョーンの背中を、ルビーが押す。
「たいへんだったね、ジョーン」
「あ、ああ。さっきはありがとう」
「それで、ワイスに話があるんでしょ？」
「わたくしに？」と、ワイスが首をかしげた。
　ジョーンは咳せき払ばらいをひとつして、ズボンで手の汗をぬぐい、ポケットの中でチケットを握って言う。
「ワイス。夏期休暇の予定について、俺から提案がある、んだけど……？」
　ワイスの隣にあるトランクの存在に、ジョーンはそのとき気がついた。
　そして、他ほかの少女たちが旅支度をしていることにも。トランクに着替えや小物を詰めて、ルビーは今からビーチにでも繰り出すような恰好。
「夏期休暇の予定？　もちろん決まってますわよ」
　ふふん、とワイスが、手のひらを胸にそえて答えた。
「えへへ、見て、これ！」
　ルビーが得意げに見せたのは、四枚の長方形の紙片。ＳＩＣのマークとヴェイルの港の地図──ジョーンにも見覚えがあるものだ。

「機械の暴走を止めるの手伝ったお礼に、リゾートの招待券もらったの」
「つまり口止め料だね」ヤンが言い、「ですから、それは……」とワイスがまた言い返す。
「島の名前は何だったかしら」ブレイクが尋ねると、「えーっとね……」ルビーがチケットをまじまじと見つめた。
「……サパン島」
　ルビーより先に、ジョーンが答えた。

　チームＪＮＰＲジュニパーは、ビーコン・アカデミーの一年生チームの一つである。
　ジョーン・アーク。
　ノーラ・ヴァルキリー。
　ピュラ・ニコス。
　ライ・レン。
　ジョーンをリーダーとするこのチームは、入学時から何かとＲＷＢＹの四人と縁があった。寮でも、チームＪＮＰＲの部屋はチームＲＷＢＹの向かいにある。
　このとき彼らの部屋には、リーダーのジョーン以外の三人がそろっていた。
「では、まだジョーンはもどっていないのですか？」
　今しがたＳＩＣの展示会からもどったばかりのライ・レンの言葉に、ピュラ・ニコスはうなずいた。
「スクロールで連絡をとろうとしてもつながらなくて……事故があったというのは本当？」

「そう聞いています。僕は別行動中だったのですが、今日のイベントは中止だと避難させられて」
　ピュラは、明るいグリーンの瞳ひとみを不安げに歪ゆがませた。
　ピュラ・ニコス──碧へき眼がん、長身、深紅の赤毛、それに近寄りがたささえある美び貌ぼう。おまけにその名は入学前から知れ渡っていたほどの優等生だ。
　どういうわけかチームのリーダーとして選ばれたのは彼女ではなく、ボサボサ金髪頭の冴さえないジョーン・アークだったが、ピュラは愚ぐ痴ちひとつこぼさず、リーダーのサポートに心を砕いていた。
「……大丈夫だとは思うけれど念の為、わたしたちで捜しに行きましょう。レン、案内してもらえる？」
　最初からそのつもりのレンがうなずいたときだった。
「レン、おかえりぃーっ！」
　洗面所の扉がばあんと開き、猛烈な勢いで少女が飛び出してレンに抱きついた。より正確に表現するなら、飛びかかったとか体当たりを仕掛けたというべきかもしれない。
「ジョーンと二人でどこ行ってたの？　ねえピュラ、どこって言ってたっけ？　そうだ、思い出したパンケーキのコンペだった！　パンケーキおいしかった？　パンケーキ!?　あたしも一緒に行きたかったな！　なんで声かけてくれなかったの！　ひどい！」
　ノーラ・ヴァルキリー──チームＪＮＰＲのＮ。天真爛らん漫まんが服を着て歩いているような少女で、その性格は極めてマイペース。今もレンの腕に絡みついて延々と恨うらみ言をまくし立てている。
　彼女の幼なじみでもあるレンは、まとわりつくノーラを引きはがすこともせずに淡々と、
「声はかけましたよ。ノーラが起きなかっただけです」
「そうなの？　でもあれ？　ねえねえ、ジョーンは？」

レンは結局、ピュラにしたのと同じ説明をもう一度することになった。会場でジョーンとは別行動になったこと、そこで何か事故があったらしいこと、ジョーンと連絡がとれないこと。
「なんだ、じゃあジョーンを捜しに行かないと！」
「ええ。ですが――」
　ノーラがつむじ風を立ててクローゼットに突っ込む。
「誰かが部屋にいないと――」
　服と武器を抱えて再び洗面所へ。
「ジョーンが帰ってきたときに――」
　黒いベストとピンクのスカート、胸元がハート型にカットされた特徴的な衣装に着替えたノーラがもどってくる。チームの仲間にとって見慣れたこの装束は、ノーラにとっての戦闘服。さらに、彼女愛用の武器である戦せん鎚ついを肩にかついでいた。
「先に行ってるねー！」
　止める間もなく、ドアを突き破りそうな勢いで部屋から出て行った。長い付き合いでもどうしようもないことはあるようで、レンは黙って眉み間けんを指で押さえている。
　一方、ピュラは苦笑を浮かべていた。
「仕方ないわ。レン、わたしが部屋で待ってるから、あなたはノーラと一緒に行ってあげて」
「わかりました。何かわかれば連絡します」
　ドアノブに手をかけたレンだったが、ひとりでにドアが開いたことでぎょっと立ち止まった。
　開いたドアの向こうには、さっき出て行ったばかりのノーラが立っている。ニッコリ笑い、
「ジョーン見つけたよ！」
　まるで捨て猫でも拾ってきたかのように、ジョーン・アークを片手で

差し出した。
「ジョーン！　何があったの？　会場で事故があったって──」
　駆け寄ったピュラの肩を、ジョーンが突然つかんだ。
「ジョーン？」
「ピュラ、南の島に行こう！」
「はあ？」と三人の声が重なった。ジョーンは構わず、手の中の若干くしゃくしゃになっているチケットを彼らに見せる。
「ほら、これ！　人数は四人までだから、チーム全員で行ける！　ビーチやホテルもある南の島に二泊三日、リゾートだよ！」
　三人は、チケットに書かれた文字列をのぞきこんだ。ピュラが怪け訝げんそうに尋ねる。
「ひょっとして、これを手に入れるために遅くなっていたの？」
　ジョーンは少し考えて「まあね」と答えた。
「……そう。うれしいわ、ジョーン。ありがとう」
　ピュラが素直に礼を言い、ジョーンも照れた様子で頭を掻かく。一方、レンは冷静にチケットに書かれた地図や日程まで目を通していた。
「このチケットを使うには、明日の朝に出る船に乗り込まなければならないようです。あまり時間がありませんね」
「急いで準備しましょう」と、ピュラが言う。ジョーンもうなずいて各々の荷物の元に向かった。
　レンは幼なじみの方を振り返り、
「ノーラも──」
　言いかけた言葉を飲み込んだ。ノーラはもう戦闘服ではなかったし、武器も持っていなかった。
　水着の上に半袖のシャツを着て、頭にシュノーケル付きのゴーグルをひっかけ、手にはビーチボール、腰には浮き輪、足には足ヒレフインを装着している。

不自然な早着替えを目の当たりにして硬直するレンの前で、歓喜の声をほとばしらせる。
「イヤッホー！　バカンスだー！」

◇

　ダスト、オーラ、センブランス。
　か弱い人類が獲得したこれらの力は闇やみの脅威から彼らを守り、生きながらえさせてきた。
　そして、人類の苦しい生存闘争の陰には常に、『力』を使いこなして災厄と闘う存在──ハンターの活躍があった。
　ハンターは皆、オーラと武器の扱いに習熟した戦士たちだ。
　センブランスと武器を併用することにより、たった一人で軍隊にも匹敵する戦力となる。その力はたいてい、おそろしい怪物グリムから人々を守る戦いにおいて発揮されるのが常だった。
　過酷なレムナントの大地において、ハンターは人々を護まもる盾たて。
　アカデミーに籍を置く未来のハンターたちは、次世代の希望なのだ。

　──しかし、力と資質は、常に正しい魂の持ち主に宿るとは限らない。

「つまり、俺たちがせっせと段取りをつけてきた商談は今ここで全部ご破算ってことだ」
　そう言ってローマン・トーチウィックは、手にしていた葉巻をもったいぶった仕草でふかした。

黒帽子と白コートを洒しや脱だつに着こなす若い男。さらに美形と言っていい整った顔立ちだが、隠しきれない軽薄さと高慢さが表情に滲にじみ出ている。

　一言で言えば「うさんくさい男」という表現がもっとも自然だが、裏社会では名の知れたアウトローである彼の経歴からすれば、それも当然だった。

「おやおや」と、ローマン・トーチウィックの対面に立つ男が言う。

「まるで、こちらが責められているように聞こえるな」

　おそらく歳は四十がらみ。痩やせて骨と皮だけの体型、撫なでつけた頭髪と髭ひげが薬品でテラテラと光沢を帯び、それを見ているだけでローマンは多大なストレスを感じている。

　着ている制服のセンスもハッキリ言ってどうかと思うが、男の後ろに控えている彼の部下たちもまったく同じ制服なので局地的な流行なのだろう、とローマンは解釈していた。たぶん、世界の果てかどこかの。

　とはいえ、ローマン・トーチウィックはビジネスのためなら相手の美的センスに目をつむることができる男だ。取引が駄目になったのは、決して相手の許しがたい髭のためではない。

「おたくらが提示したものは、俺たちの求めていたものじゃなかった。それだけの話だ」

「しかしローマン・トーチウィック……先に約束を破ったのはそちらだ。あなたも我々の同志に加わるという話だったにもかかわらず、あなたは我々と思想を共にはしなかった」

「思想信条を商談に持ち込むのはやめよう。俺はおたくらの考え方を否定しない。おたくらも俺を否定しない。ビジネスってのはそういうもんだろう？」

「あなたの裏切りには、我々の指導者も大変失望しておられる。もっとも、私の個人的な感想としては、あなたのように品性下劣なチンピラ—

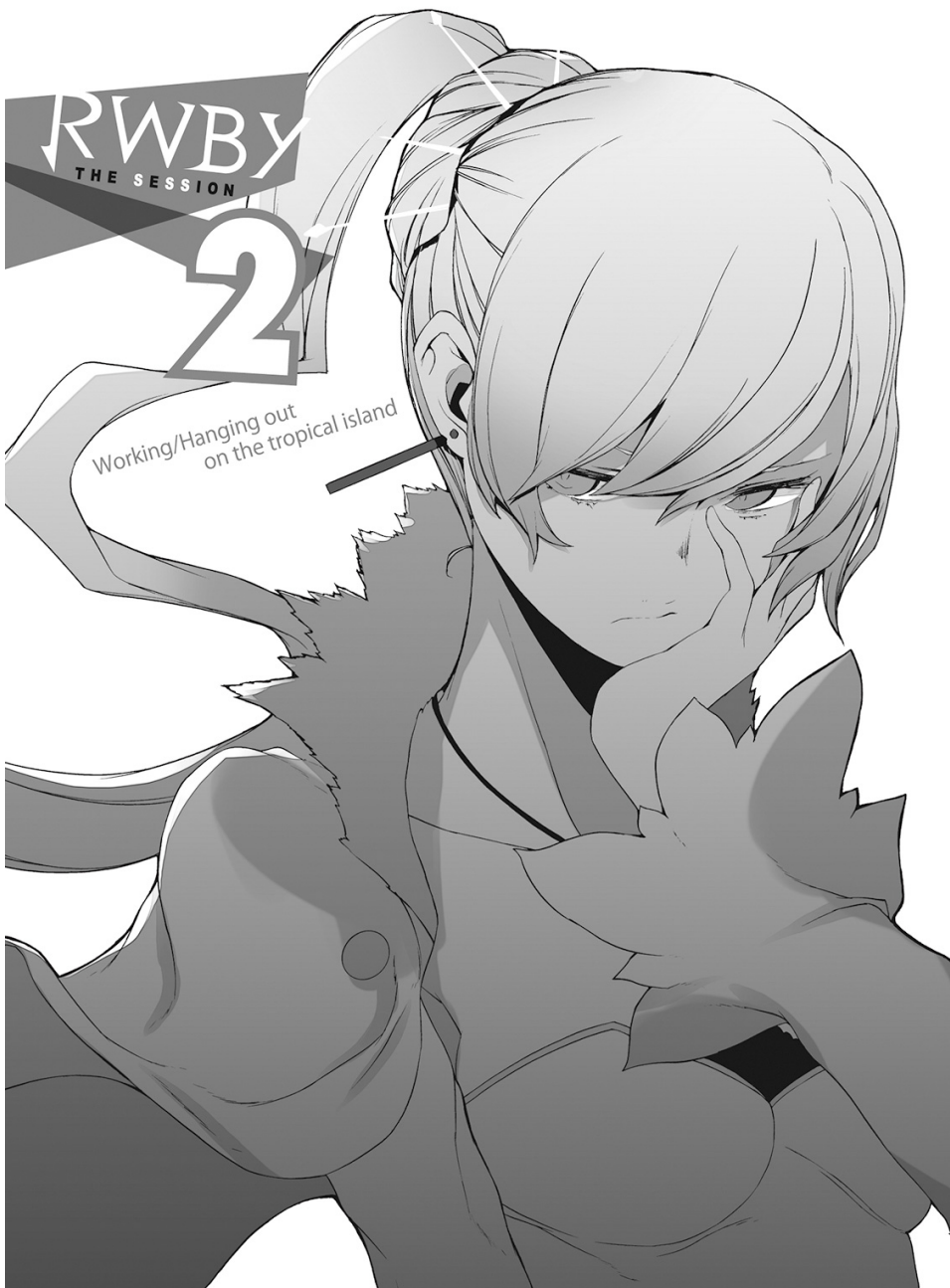
失礼、独特な経歴を持つ人間が加わることによって我らの崇高な思想が汚されずに済んだのは、非常に喜ばしい結果だと考えているが」
　ローマンはため息をついて夜空を見上げた。ヴェイルの倉庫街から見上げる真っ黒な空には、砕けた月がその破片を無数に投げかけている。その内の一つでいいから、この不愉快な男の真上に投げ落としてくれないものか。
「オーケイ、よくわかった」葉巻を落として杖の先ですり潰つぶし、時計を見る──時間だ。
「話し合う余地がないということなら仕方ない。それではご機嫌よう。俺は帰りのバスがある」
「待て」
　髭男の背後から部下たちが靴音そろえて飛び出し、武器を構える。銃口が一斉にローマンに向けられた。
「一緒に来てもらおうか。あなたは知りすぎた」
「言いふらしやしないが？」
「信用できない」
「……ふーむ」
　ローマンは困ったように肩をすくめた。次に、持っていたアタッシュケースを地面に落とし、蹴けって相手の足下によこす。男は片方の眉まゆを上げ、ケースを見下ろした。
「これは？」
「トラブルの万能薬だ。それをやるから見逃してもらいたい」
「金か」男は心底軽けい蔑べつした様子で言った。部下に命令してケースを拾わせる。
「もらっておくとしよう。だが、君の要求は聞けないな。……連れてこい」
　男の命令に従い、彼の部下がローマンに詰め寄っていく。

もしも彼らがローマン・トーチウィックという人物をよく知っていたなら、こんな軽率な真ま似ねはしなかっただろう。今にも取り押さえられそうな状況でも慌てず、冷笑さえ浮かべたその態度に疑問を抱いたはずだった。
　部下が回収したアタッシュケースの蓋ふたが、ひとりでに外れた。その中に収まっていたのは札束などではなく、赤く輝く結晶──ダストだった。それも、未加工の。
　ローマンの杖の先端が、ポン、と音を立てて外れる。杖は、ケースの中のダストを指し示すように向いていた。
「トラブルを解決するのは金じゃない。火力だ」
　銃のように構えられた杖の先から赤い光が飛び出し、ケースのダストに命中──未加工ダストが反応し、赤い光が溢あふれる。
　次の瞬間には、ケースから起きた爆発が男たちを吹き飛ばしていた。
　ローマンが口笛を吹き、あらかじめ外しておいたアタッシュケースの蝶ちよう番つがいを投げ捨てた。
「あばよ馬ば鹿かども！　名残なごり惜しいが、迎えが来た！」
　崩くずれた月を背景に、一機の飛行機械が浮かび上がった。開いたカーゴドアからロープを投げ落とし、それをローマンが掴つかむ。ロープの固定具カラビナに杖の柄を引っかけた。
「逃がすな！　捕まえるんだ！」運良く爆発に巻き込まれずに済んだ髭ひげ男が這はいつくばって唸うなるが、爆発の衝撃から立ち直った部下はまだ少ない。
　それでも健けな気げに群がってくる男どもを蹴り飛ばしながら、ローマンの体が引き上げられる。
　ロープを巻き上げるウィンチを操作しているのは、白仮面の集団──いずれも獣のような耳や角を生やした獣人フアウナスたちだった。彼らは一様に白いジャケットを着用し、その背中には狼おおかみの横顔のよう

な印章がある。ファウナスの過激派集団、ホワイトファングのシンボルだった。

　無事に飛行機械の貨物室へたどり着いたローマンを、ファウナスたちが迎え入れる。
「ご無事で何よりです、ボス」
「奴らとは終わりだ。もう付き合いきれんね」
「最初からわかっていたことです。あんな連中と関わり合いになること自体、間違ってる」
　飛行機械が傾き、倉庫街の上空を飛び去っていく。元・取引相手たちがあっという間に小さくなっていくのを、ローマンは嘲ちよう笑しようそのものの笑みを浮かべて見下ろしていた。
「□□…………？」
　ローマンが眉まゆをひそめたのは、人ひと気けのない深夜の倉庫街の陰からゆらりと出た人影を認めたからだ。一人──しかし、見覚えがある。
「……あいつは」
　ローマン・トーチウィックがこれまでに経験してきた修羅場は一つや二つではない。銃口を突きつけられたことは数限りなく、もっと物騒なものを向けられたことだってある。
　それらを生き延びてきた、彼の勘が急を告げた。
「今すぐ高度を上げろ！」
　地上の人影が、何か長大な物を構える。間に合わないと察したローマンは、衝撃に備えた。
　轟ごう音おんと共に、地上から光の柱が立ち昇る。光は飛行機の翼をかすめて、その先端を灼やいた。
　直撃ではなかったにもかかわらず、飛行機械が激しく揺れる。吹き上

げてきたのは炎か雷か、あるいは両方か。奴なら、どれもあり得る。
　機内はファウナスたちの悲鳴で溢あふれていた。今の攻撃でどうやら機体が損傷したらしく、飛行機械は斜めに傾いて、翼から黒煙をたなびかせて高度を下げていっている。
「…………」
　ローマンは傾いた機内で新しい葉巻をくわえると、愛用のライターで火をつけた。横目で地上の人影を見下ろして、つぶやく。
「こいつはツケとこう、フォートリー」

RWBY
THE SESSION
2
Working/Hanging out
on the tropical island

ビーコン・アカデミー宿舎、早朝。
「わたくしたちのチームは、まだまだチームワークが拙つたないように思えますわ」
　バカンスのため、早起きして洗面所で歯みがき中のルビーに、ワイスが話しかけてきた。
「昨日の戦闘を振り返って反省点を洗い出してみたのですけれど、連係に無む駄だが多いという結論に至りましたの。ルビー、この件についてあなたのリーダーシップに重大な責任があることは忘れないでいただきたいのですけれど、おわかりかしら。とはいえ、わたくしたちが入学して最初の試練で大型グリムを倒したことは忘れてはいませんわ。あの連係を、いついかなるときでも引き出せるようなトレーニングの必要があると言えますわね。これから向かうサパン島にはトレーニング施設があるようですし、わたくしは今回の休暇をチームＲＷＢＹルビーの強化合宿とすることを提案しますわ。もちろん、チームのリーダーなら賛成していただけますわよね？　それとルビー。あなたが使っている歯みがき粉はわたくしのですわよ」
　一応、ルビーはワイスに対して何やら色々と言い返していたのだが、口の中が泡でいっぱいの状態ではむーむー唸うなっているようにしか聞こえず、ワイスはまるで気づかなかった。

　ヴェイル港沖合、昼前。
「この四人で遠出するのって初めてじゃない？」
　港から出港した船の甲板デツキで、手すりから身を乗り出して海をながめるルビーに、ヤンが言った。
「チームで初めての旅行なんだし、思い出に残るものにしなきゃねルビー！　そんで、さっきそこにパンフあったから確認したんだけど、見て、この写真！　ビーチがすっごいきれい！　青すぎて怖いくらい！

ここはぜったい最初に行くでしょ。行くでしょ？　せっかく水着持ってきたんだもんね、それに、マリンレジャーも充実してるって書いてあるし。えーと……シュノーケリングにダイビングにグラスボート、それにスーパージェットバナナボート……ジェットバナナボート？　何コレやばい超気になる。それにホテルもほら。あらゆるサービスが機械で自動化されてるんだって。ルームサービスは機械が運んでくるってこと？　うん、これは別にどうでもいい」
　ヤンの話を聞いていないわけではなかったのだが、ルビーは船の甲かん板ぱんから見る海の景色に心を奪われていた。
「見てお姉ちゃん、あそこ！　イルカがいる！」
「うっそ！　どこ⁉　やだ、超かわいい！」

「……あれ？」
　ルビーがその問題に気づいたのは、甲かん板ぱんでひとしきり姉と騒いだ後。船内にもどり、トイレで手を拭ふいていたときのことだった。
　島についたらまず何をしよう、と考えて、ヤンが言っていたマリンレジャーのことを思い出し、そういえば今朝ワイスが何か言ってたような、と続けて思い出した。
　整理してみよう。これから向かうサパン島で、
①　ワイスは、みんなでトレーニング合宿を行うつもりでいる。
②　ヤンは、みんなでレジャーを遊び倒すつもりでいる。
③　たぶん、お互いにそのことを知らない。
　うん、すれ違ってる。
　そういえば、島でどう過ごすかという話をしていなかったことに、ルビーは今さら気がついた。昨日、ＳＩＣの展示会責任者を名乗る人物か

ら、お礼の言葉と共にチケットを手渡されて、その興奮のままにここまで来てしまった。
　─どうしよう。今回の旅行はトレーニング合宿に変更、と言えばヤンは納得するだろうか。逆に、トレーニング案は却下だと伝えればワイスは引き下がる？　どっちも難しそう。ヤンは自分が楽しむことに妥協しない人だし、ワイスは真ま面じ目めでお堅い氷の女王アイスクイーンだし。
　うんうん唸うなりながら廊下を歩くルビーは、船内ラウンジで足を止めた。
　サパン島に招待されたのは自分たちだけと思いきや、船内には招待客らしき乗客が何人かいる。ラウンジにも、潮風と日光が過剰な甲板を避けた人たちが、到着までの時間をつぶしていた。
　ルビーが立ち止まったのは、ラウンジのテーブルにブレイクの姿があったからだ。窓から流れ込む潮風に黒髪を揺らし、静かな表情で海を眺めている。
「ブレイク」
　声をかけて隣にやってきたルビーに、ブレイクは海に向けていたのと同じ視線を向けた。
　綺き麗れいな琥こ珀はく色いろの瞳ひとみからは、これからリゾートに向かう期待や喜びなどは少しも感じられない。それらを少しでも引き出そうと、ルビーは明るく話しかけた。
「海を見てるんなら、甲板に出ない？　ときどきだけど、イルカとかクジラとか見られるの。ヤンなんて、ずっと手すりにかじりついてるんだよ」
「遠慮しておくわ」
　そっけないが、なんとなく予想していた答えだった。たぶん、ブレイクが見ていたのは海ではなく、自分の内側にあるものなのだろう。

ルビーは、休暇に入ってからずっと気になっていたことを、ついに尋ねた。
「違ってたら謝るけど……ひょっとしてホワイトファングのこと考えてる？」
　ブレイクは、すぐには答えなかった。
　ルビーの仲間──ブレイク・ベラドンナが秘密を仲間に明かしたのは、つい先日のことだ。彼女の素性が、リボンの中に猫の耳を隠したファウナスであること。そして、ファウナスの権利と地位向上を訴える過激な武装集団《ホワイトファング》の元・構成員だったこと。
　入学以来、ブレイクが守り続けていたこれらの秘密を仲間が知ることになったのは、ある事件が原因だった。ホワイトファングが背後に存在したその事件は、一応は解決したとルビーは思っていたのだが。
　やがてブレイクは、それまでの長い沈黙などなかったように、平然と言った。
「大丈夫よ、リーダー」
「本当に？」
「ええ、平気」
「じゃあ、思い切り楽しまなきゃね！」
　島でどう過ごすかという問題について、ルビーは答えを決めた。ヤンの言うとおり、この旅行はレジャーで遊びまくるのだ。仲間の憂ゆう鬱うつが晴れるくらいに。
「ヤンが言ってたんだけど、ビーチがすごい綺き麗れいなんだって！　それにダイビングとか、バナナボートとか、すごいバナナボートとか……あとなんだっけ」
「水に濡ぬれるのは嫌いだわ」
　ブレイクの言葉には突き放すような、冷たい響きがあった。
　言ってからブレイクは、自分が口にした言葉に驚いたような表情にな

る。
　逃げるようにルビーから目線を外すと、またさっきと同じ姿勢で海を見つめた。
「……ワイスがあなたを捜してたわ。島についてからの予定について話したいって」
「うん……わかった」
　ルビーはそれ以上なにを言っていいのかわからず、ブレイクのそばから離れてラウンジを出る。一度、期待を込めてブレイクの方を振り返ったが、ブレイクはずっと海を見つめ続けていた。

　サパン島へ向かうフェリーは、ワイスが想像していたよりもずっと大きな船だった。船に乗り合わせた招待客も多く、廊下を歩くだけで何人もの人やファウナスとすれ違う。
　ルビーを捜すついでにワイスは、船の中をあちこち見物してまわっている。ＳＩＣという異色の企業に、シュニー家の娘として興味を抱いていたからだ。
　工業、特にドローンのような先端技術に関しては、レムナントの四王国の中でもワイスの故郷であるアトラスが、もっとも抜きんでている。少なくとも、ワイスはそう信じている。
　しかし、昨日の展示会で見た動物型ドローンの多彩さにはワイスも目を奪われた。動物を模したドローンはアトラスにもあるものの、あれほどの種類はない。
　──技術面におけるアトラスの優位はしばらく覆ることはないでしょうけれど、アイデアではヴェイルの企業も負けてはいないようですわね。これはぜひとも、お姉様に報告しなくては。

あまり学生らしくない視点でＳＩＣという企業を評価していると、後ろから肩を叩たたかれた。
　振り返るなり、あっと声を上げる。相手は真っ赤な髪を結い上げた、背の高い少女。
「ピュラ⁉　どうしてあなたがここに？」ワイスは驚くと同時に感激した様子で、赤髪の少女の手を握った。
「まさか、あなたもサパン島に？」
「ええ。わたしたちＪＮＰＲジユニパーもね」
「まあ！　なんて偶然なんでしょう！」
　感極まったように顔の前で両手を合わせたワイスに、ピュラはやや困惑した様子で尋ねる。
「あー、ワイス……あなた、昨日はもしかしてＳＩＣのイベントに？」
「ええ、チームの四人で……ああ、そういえばジョーンもあの場にいましたわね。それで、わたくしたちと同じチケットを？　そういうことでしたのね！」
『偶然』の理由に気づいたワイスは納得してうなずき、ピュラは何な故ぜか寂しげな苦笑になる。
「ピュラ？　どうかいたしまして？」
「いえ、別に……」
　ピュラの様子に首をかしげているワイスの背中に、「あ――っ」とやかましい声が投げつけられた。こんな非常識な声を出すのは、ワイスの知り合いでは一人しかいない。
　ルビーはどたどたと廊下を走ってきて、
「ピュラ⁉　なんでここにいるの？　ジョーンは？　ノーラとレンは？」
「来てるわよ」
「わあ！　すごい偶然！」

「……もう行くわね。ジョーンが船に酔っちゃってて」
　立ち去るピュラに、「わたしも……」とついていこうとしたルビーの腕を、ワイスが捕まえた。
「ちょうどよかったですわ。島での特訓について、わたくしなりに計画を立ててみましたの」
　言って、一体どこに持っていたのかと言いたくなる量の紙の束をルビーに押しつけてくる。
「こちらがチームの連係における課題のリストですわ。こちらがわたくし考案のトレーニング・メニュー、それに新しいフォーメーションの形も考えてみましたの。それと、これは……」
「ストップ！　ワイス、ストップ！　こんなにたくさん⁉」
　思わず悲鳴を上げたルビーに、ワイスはぐいと顔を近づけて、
「お忘れですの？　年末にはヴァイタル・フェスティバルが控えているんですのよ？　世界中の強豪と競い合う過酷なトーナメント。それに備えるのは当然のことですわ。ルビー、リーダーであるあなたにも、チームワークに関して何らかのアイデアを出してもらいますわよ。この休暇が終わるまでに。いいですわね？」
　ワイスの剣幕に押されて、ルビーが一歩ひく。まさか、チームメイトから夏休みの宿題を出されるなんて思ってもみなかった。あわてて話題を変える。
「と、とりあえずワイス、訓練のことはヤンとブレイクの意見も聞いてみないと……」
「ブレイクには話してありますわ」ワイスは得意げに言った。
「喜んでわたくしの案に賛同してくれましたから、ヤンもきっと理解してくれるはずですわ」
　一点の疑いもない笑顔で言うワイスに、ルビーはそれ以上なにも言えず。

──まあ、ヤンもワイスが話せば案外、簡単に意見を変えてくれるかもしれないし。
楽観的なことを考えつつ、ワイスと共にヤンのいる甲かん板ぱんに向かった。

◇

波を蹴け立てていた船が、ゆるやかに速度を落としつつあった。
海鳥たちが姿を見せるようになり、独特の鳴き声で船のまわりを飛び回る。水平線上に滲にじんだ一点でしかなかった島影が、今でははっきりと視認できる。船に向かって手招きするように砂浜を投げ出す南国のリゾート島──サパン島。
砂浜の向こうには、見慣れない南国植物が植わった道路があり、建物はどれも新しく小ぎれいに見える。
甲板では潮の香りのする風が穏やかに流れ、乗客たちが笑顔で島を指さしている。ルビーも甲板の手すりから身を乗り出して、歓声を上げた。
「見て、ブレイク！　あれ！　島！　島！」
「見えてるわ」
隣のブレイクは端的に答えつつ、ルビーが落っこちないように服の裾すそをつまんでいる。
「砂浜が真っ白ですごく綺き麗れい！　ほら、ワイス、ヤンも──」
言って、ルビーは二人の方を振り向いた。
「だーかーらー、なんでわざわざ南の島にきてトレーニングなわけ⁉」
ヤンが大声を出して、ワイスも負けじと言い返す。
「わたくしたちの連係には、まだ課題があると言っているでしょう⁉」
「昨日はうまくいったのに、これ以上、何を目指すっての！」

「お互いの射線を把握して無む駄だな行動を省けば、もっと合理的な戦術がとれますわ！　そのための訓練をするべきと言っているのです！」
「いいや！　連係に必要なのはお互いのことをよく知ることだね！　そのために、思いっきり遊んで心をひとつにしなきゃ！」
「あなたが遊びたいだけでしょう⁉」
「もちろん！」
「開き直らないでくださいます⁉」
　仲間の言い争いを目の当たりにしたルビーの笑顔は固まって、ゆっくりと視線を島にもどす。
「見て、ブレイク。島だよ」
「見えてるわ」

　港から突きだした桟橋に船は停まり、タラップを通って乗客たちが続々と降り始める。
　ＲＷＢＹの四人もそろって桟橋に降り立つと、思っていたものと違う景色に歓声を上げた。港には、大小様々な形のドローンが走り回っていたからだ。
　港には他ほかにも船がいくつか停まっていて、そちらでは小型コンテナが次々に降ろされている。その作業を行っているのは、会場で暴れていた象に似た大型機械。降ろされたコンテナを曳ひいていくのは、水牛のようなデザインの四足歩行機械。
　海上では、ＳＩＣの制服を着た作業員が、携帯端末を片手に水面みなもに立って作業を監督している。その足下に目をこらせば、クラゲのような見た目の機械が浮かび、足場の役目を果たしていた。
「みんな、動物の形なのね」
　アルマジロか何かの型のドローンが足下を転がってくるのを避けながら、ブレイクが言う。確かに、自律行動ができる機械はどれも何らかの

動物の形態をとっている。
「生物構造を模倣するバイオミメティクスは、機械工学において比較的オーソドックスなアプローチですけれど、ここにある機械たちは機能よりもデザインの点で動物らしく設計されているようですわね。これはおそらくユーザーの親しみやすさを重視した結果で、実際にアトラスでは──」
　ベラベラ話し続けるワイスを見て、ヤンはルビーに耳打ちする。
「武器について語ってるときのルビーって、だいたいあんな感じだから」
「そんな！　わたし、もっとわかりやすく説明してるよ！」
「ちょっと」と、ブレイクが三人に呼びかけた。目の前の機械を指さす。
「この子、わたしたちに用みたい」
　背中を丸め、一輪車のようなホイールを持つドローン。まばたきのように、チカチカとランプが点滅している。クチバシのように尖とがった頭部からして、鳥類がモデルだろうか。
『ルビー・ローズ様と、そのご友人ですね。船旅お疲れ様でした。ホテルへの送迎バスが待機しておりますので、ぜひご利用ください』
　体を傾けてお辞じ儀ぎをして、ドローンは通り過ぎる。ヤンとルビーは目を輝かせて見送った。
「何アレかわいい！　何の動物なんだろ！」
「きっとフラミンゴだよ、お姉ちゃん！　だって一本足だし！」
　暢のん気きな姉妹とは異なり、ブレイクとワイスは別の興味を持っていた。
「どうやってわたしたちのことを認識したのかしら」
「顔認証という可能性もありますけれど、他ほかに考えられるのは……」

ワイスは、ルビーのカバンのポケットからはみ出ているチケットに目をやる。
　そのとき、港に停泊した船のそばから、ざあっとしぶきが上がった。大きく水面がうねり、黒い影が港湾を泳いでいる。
「何かいる！」
　ルビーが叫んだとおり、巨大な何かが海中で身をくねらせていた。ワイスが険しい顔で、腰の武器に手をやる。
「お気をつけなさい。グリムかもしれませんわ」
「海かい棲せいグリム？　見るのは初めてだけど……」
　長大な影が、湾の底を這はいまわっている。影は次第に、海面へと近づいてきていた。
「来ますわよ！」
　ワイスが仲間に注意を促し、剣を抜いた。ついに、水中の大きな影が水面を割って飛び出してくる。海水が大雨のように降り注いだ。
　海水を帯びた金属のボディと、そこに刻み込まれたＳＩＣのエンブレムが、南国の太陽の光を弾はじいてきらめいていた。
「……え？」
　機械の胴体とそれを連結する関節が、まるで列車のように連なっている。機械仕掛けの大海蛇は、その巨体を誇るようにくねらせて、島を訪れた観光客を喜ばせた。
「あれもドローンみたいね」
「……そのようですわね」
　ブレイクの指摘に、ワイスは少しだけ顔を赤らめつつ武器をもどす。
　ルビーはそんなワイスの肩を軽く叩たたき、優しい目で、
「わかるよ、ワイス。南の島って、テンション上がっちゃうよね」
「その顔、すごく腹立たしいのですけれど！」
　巨大機械の派は手でな歓迎を横目にしながら、四人は桟橋を歩いて

行った。

◇

船着き場から見えるのは、天国としか思えない素晴らしい光景だった。

ノーラは空を仰いで叫んだ。

「まぶしい太陽！」

海に両手を差し伸べて叫んだ。

「青い海！」

真っ青な顔のジョーンを指さして叫んだ。

「ジョーンのゲロ！」

「頼むから静かにしてくれ……」

欄らん干かんにもたれかかり、ジョーンは呻うめいた。

ジョーンの乗り物酔いは、はたから見ているレンが気の毒に思うほどだが、してやれることはない。せいぜい背中をさすってやるくらいだ。そしてそれは、ピュラがとっくにやっている。

ピュラが差し出すボトルの水で口をすすぎ、ジョーンはレンに弱々しい声で尋ねる。

「……ルビーたちは？」

「もう上陸してますよ」

「お、俺たちも……うぅっ」

まだ駄目そうなジョーンとは裏腹に、ノーラは楽しそうに桟橋を行ったり来たりしている。レジャーに浮かれているのではなく、ノーラは大体いつもあんな感じである。

レンはジョーンとピュラの荷物も手に取り、ピュラに声をかける。

「ピュラ、荷物は私たちが運びます。ジョーンはあなたにお願いします」

「そうした方がいいみたいね」

二人を残し、レンはノーラと共に桟橋から島へと降り立った。船着き場とその周辺はかなり整備されていて、真新しい道路に沿って商店が軒を連ねている。ノーラはそのひとつひとつを覗のぞいてまわり、「ワオ！」とか「すごい！」とか「磯臭い！」とか感想を述べていく。

　よく見れば、目につく範囲の建物はほとんどすべてにＳＩＣの星形のシンボルが掲げられていた。それを除けば、ほとんどヴェイルの街並みと変わらないほどに整備されている。

　ふと、ノーラが足を止めて後ろを振り返った。まだ桟橋にいる二人に向かって大きく手を振る。

　桟橋には、ピュラに肩を貸してもらってよろよろ歩いてくるジョーンの姿があった。

　赤髪長身の少女、ピュラ・ニコスはレンたちの世代でも一番に数えられる優等生だ。

　名門アカデミーの首席卒業生であり、ミストラルのトーナメントでは四連覇を果たした有名人。

　それに対してジョーン・アークは、ひいき目にも優秀な生徒とは言えない人物だった。

　ハンター志望者にとって戦闘技術は必須技能といえるが、彼の腕前は素人に毛が生えた程度。授業中の居眠りや失敗は数え切れず、反省文付きの課題を常に抱えている。

　そんな正反対の評価を受ける二人だが、仲は決して悪くない。

　ジョーンは格上のピュラに嫉しつ妬として腐るような性格ではなかったし、ピュラも才能に驕おごることなくリーダーのジョーンを立ててやっていた。今も、ふらついて桟橋から落っこちそうになったゲロまみれのジョーンを、嫌な顔ひとつせず支えている。

「落としちゃった方が綺き麗れいになるのに」と、ノーラが言う。まあ、真理ではある。

船着き場の地図でホテルの位置を確かめるレンの背後から、ノーラも地図をのぞきこむ。
「あ、見て見てレン！　この森と湖のところ立ち入り禁止だって！　行ってみよう！」
「ノーラ。『立ち入り禁止』の意味わかってますか？」
　地図を見れば、サパン島は瓢ひよう箪たんのような形をしていることがわかる。島の北部にはＳＩＣの研究施設が集中し、南部にはホテルやレストランのようなリゾート施設がそろっている。北と南を隔てるのは島の真ん中に穴を開けたような湖で、その湖の中には小さな島があった。
　湖中島━島の中の島には、しっかりと【立ち入り禁止キープアウト】と書かれている。
「でも、ヤンも行ってみたいって言ってたよ」
「ヤン？　チームＲＷＢＹのですか？」
「うん。さっき船の中で会ったの」
　レンも、ようやく合点がいった。そもそも、ジョーンが突然この旅行を言い出したのは、ワイスと休暇を過ごすためだったのだろう。
　桟橋を歩いてくるジョーンとピュラの姿を眺める。
　なんとなくレンは、この旅行が荒れそうな気がした。

　ホテルへのチェックインを済ませて、ワイスとヤンの二人の対決は最終局面を迎えていた。
　案内されたホテルの部屋は豪勢なスイートだったというのに、これからの予定に関して早くも火花を散らし始めたのだ。明るい夏の陽が差し込み海を一望できるバルコニーも、寮の部屋と同じくらい広いベッド

ルームも、喜ぶ間もなく口論が始まった。
　それは互いに自分の主張の正当性をぶつけ合うところから始まって、
「せっかくレジャースポットに囲まれてんのに、遊ばない手はないでしょ！」
「せっかく最新のトレーニング施設がある環境、ぜひとも利用すべきですわ！」
　次第に相手の言うことの揚げ足をとる悪口合戦になり、
「ですわですわって、あんたいっつもそれじゃん！」
「あなたの能天気さは、まったくもって度しがたいですわね！」
　最終的には枕投げピローファイトで決着をつけようと言い出すところまで堕落した。
「こうなったら決着をつけるしかないみたいね……」
「望むところですわ……」
「二人ともストーップ！」
　見るに見かねたルビーがリーダー権限で仲裁したことで、ヤンはスイートのふかふか枕を振り上げるのをやめ、ヤンの口車に乗せられていたワイスも正気にもどった。
　椅い子すの上に立ったルビーは二人を交互に見下ろして、咳せき払ばらいをひとつ。
「みんなの尊敬すべきリーダー、ルビー・ローズから皆さんに提案があります。ご静聴ください」
　さらに、ソファで猫のように丸まっていたブレイクを指さし、
「ブレイクも。ちゃんと聞くように」
　ここでルビーはまた咳払い。
「わたしは先日、皆さんに約束をしました。この夏期休暇ではチームのみんなが自分の日を決めて、その一日だけは他ほかのみんなにワガママを聞いてもらえる、と」

「先日っていうか昨日ね」
　ヤンが訂正すると、ルビーは人差し指を口に当て「お静かに！」と唸うなる。そして続ける。
「わたしの日はもう終わっちゃったけど、みんなの日はまだだよね？　だから、この島で過ごす三日間を、みんなで分けようと思うの。ワイスの日と、ヤンの日と、ブレイクの日。その日、わたしたち四人がどう過ごすかはその日の人が決めることができる。どう？」
「わたくしの日はみんなでトレーニングの一日に。ヤンの日はレジャーの一日……そういうことですわね？　結構ではありませんこと」
「いいね。あたしは賛成」
　ワイスとヤンが賛同したことでルビーはホッとし、残る一人に目を向ける。
「ブレイクは……？」
「わたしの日はいらないわ」
　そう言った途端、ルビーは目に見えてしょんぼりとなる。
　そんな姿を見たブレイクは、慌てて言い足した。
「わたしはみんなにして欲しいことが、今はまだ思いつかないから……それに、今日はもう半日過ぎてしまっているし、三日目は帰りの船がある。それなら、二日目の正午を境界にして、二人で分けた方が公平だと思う。わたしの日は、また今度でいいわ」
　ルビーを気づかってめずらしく多弁になったブレイクに、ヤンが耳打ち。
「大丈夫。うちの妹は落ち込んでもすぐ元にもどるから」
　ヤンの言葉どおり、ルビーはすぐに笑顔を取り戻してブレイクに念を押した。
「じゃあ、約束ね。ブレイクが頼みたいことができたら、わたしたち全員が従うってことで」

「異議なし」「わたくしも、それでかまいませんわ」
　ワイスとヤンが同意を重ね、続けてどちらが先に自分の日を得るか協議に入っていった。
　どうやら、ワイスが先に権利を行使し、明日の正午までトレーニングという形になりそうだ。
　二人の衝突と、ブレイクの孤立。
　チームのリーダーとして、当面の問題を片付けることができたルビーは満足を覚えた。
　そして、次に考えたのは、船で見かけたピュラ・ニコスのこと。ＪＮＰＲの四人もこの島に来ているそうだけど、彼女たちは今どうしてるんだろう。
　どうせ同じ島にいるなら、一緒にレジャーや訓練をやってもいいかもしれない。

◇

「そうだったの。ワイスと一緒にバカンスに行くために、チケットをね」
　ニコニコとピュラが言う。凛りんとした美人であるピュラの明るい笑顔なのにジョーンは、何な故ぜか妙なプレッシャーを感じた。
　健康的な陽光が降り注ぐ、ホテル前のロータリー。ＪＮＰＲの四人も、これからチェックインというところである。明るく陽気な南の島に似合わない緊張感が漂い、ジョーンは何故か冷や汗をかいていた。
「……ピュラ？　もしかして、勝手に休暇の予定を決めようとしていたこと、怒ってる？」
「あら、どうして？」ピュラはわずかに首をかしげて言った。
「彼女たちとは何かと一緒になるし、面白い人たちだもの。どうせ同じ

島にいるんだから、この休暇を一緒に過ごすのも面白そう」
「そ、そう。ならよかった」
　温和な台詞せりふにホッとする。とりあえず、一応は。
　回転ドアを抜けてロビーに入ると、明るく豪華な内装ながら無人のホールが広がっている。タイル床を踏んで近づいてきたのは受付係コンシエルジユではなく、四足歩行の動物型ドローンだった。
「ライオン？」とノーラがつぶやいたのは、そのドローンの首回りに鬣たてがみのようなアンテナが無数に生えていたからだ。
『ようこそいらっしゃいました。ジョーン・アーク様と、そのお連れの方々ですね。チケットを拝見いたします』
　差し出されたチケットを瞳ひとみのカメラで読み取り、ライオン・ドローンはわずかに頭こうべを垂たれた。
『ありがとうございます。そのチケットは、島内のあらゆるサービスを無償で受けることができるパスにもなっておりますので、捨てたり無くしたりすることのないよう、お願いいたします。すぐに荷物係ポーターが参りますので』
　首回りのアンテナが回転し、廊下からのっしのっしと別のドローンが現れる。陸亀を模しているらしいそのドローンの背中に荷物を載せて案内されるまま、四人は廊下を歩いていく。
「ここも、従業員が一人もいないんだな」
「そういえば、そうね」
　ジョーンのつぶやきにピュラが応じた。ＳＩＣはホテルの業務に徹底した機械化を行っているらしく、見かけるのはドローンばかりだ。
　広々としたスイートルームに到着し、陸亀から荷物をおろしたジョーンの元に子供くらいの背丈の、背中を丸めた一本足のドローンがやってくる。クチバシのように尖とがった頭部がジョーンを見上げた。
『ジョーン・アーク様。おくつろぎのところ、大変おそれいります』

ドローンの脚部が一輪車のようなタイヤになっており、それで移動している。フラミンゴだろうか、とジョーンは思った。
『わたくし、この部屋付きの執事バトラードローンでございます。何かご用命の際は、わたくしめにお申し付けください』
「執事？　なんでも頼んでいいの？」
『はい。ルームサービスも、わたくしめにお申し付けくだされば、即座に厨房へ注文が送信されます。ただし、未成年のお客様のみのご宿泊ですので、アルコール類のご注文はご遠慮ください。本来ですと当ホテル地下蔵から選び抜いた自慢のワインとブランデーのコレクションをプライベートバーで楽しむことができるのですが、今回は代わりに栄養満点の健康ドリンクをご用意──』
　執事ドローンが未成年向けのサービスを説明していると、ピュラがバルコニーから戻ってきて機械に話しかけた。
「ねえ。この島の施設で、トレーニング施設があるって聞いたんだけど」
『ございます』
「トレーニングだって？」
　戸惑うジョーンに、ピュラは笑顔を浮かべつつ答えた。
「忘れたの？　日課の特訓。休暇だからってトレーニングまで怠なまけたら、身につけた技術もなまっちゃうわ。いつもどおり……いいえ、いつもより厳しくいこうかしら。せっかく、訓練のための施設があるんだし」
　──……本当は、やっぱり怒ってるんじゃないだろうか。
　ジョーンがピュラの笑顔の真意をはかりかねていると、ベッドルームからノーラがリビングへと走り込んでくる。
「特訓!?　わたしも行く！」
「じゃあ、みんなで行きましょうか」

「いいね！　レン！　特訓だって！　レーン！」
「聞こえてますよ」と、レンが姿を見せる。
「トレーニングなら、僕も賛成です」
「決定！　四人で猛特訓しよう！」
　ピュラは執事ドローンの頭に手を置いて、
「じゃあ、そのトレーニング施設のことを教えてくれる？」
『承知いたしました』
　ドローンの頭部から空中に、ドーム状の施設の映像が投影される。
『こちらは、サパン島で現在ＳＩＣが開発中である、次世代型戦闘シミュレーション・トレーニング場《ユマネス》です』
　映像はドームの内部へ。障害物が多くあるフィールドを、動物型ドローンが走り回っている。しかし、その姿は桟橋で目にしたものよりも、いくらか攻撃的なデザインになっていた。
『ここでは、限りなく実戦に近い形でのシミュレーションを目標に、グリムとの戦闘を想定した訓練を行うことができます。将来、アカデミーでの使用も検討されている本格的な戦闘訓練は、武闘派なお客様もきっとご満足いただけることでしょう』
　映像が切り替わり、若い男女がドローンに銃を向けるシーンが映る。
『ユマネスではプレイヤーの経験や年齢に合わせて、ドローンの行動パターンを変更し、難易度の調整も可能となっております。訓練だけでなく、愉快でエキサイティングな狩猟ゲームとしてもお楽しみいただけるでしょう。厳しいテストをクリアした模擬戦闘プログラムは百パーセント安全！　決してあなたに怪け我がを負わせることはありません！』
　それを聞いてジョーンは安心した様子をみせ、ノーラはつまらなさそうに口をとがらせた。
『使用される武器も、実弾ではなくペイント弾となっております。ＳＩＣが開発した最先端の武器の数々を用意しておりますので、その中から

ご自由にあなたの相棒をお選びください。また、警察、ハンター、アカデミー関係者の方に限り、武器の持ち込みが認められております。持ち込みをご希望のお客様は、窓口にてお伝えください。あらゆる武器種、口径に合わせたペイント弾を提供させていただいております』
「──だそうだけど。今日の予定はこれでどうかしら、リーダー？」
「……いいと思います」
　ジョーンはあきらめた様子で受けいれた。自分がチームＪＮＰＲの中でもっとも実力に乏しい自覚はあったし、ここ最近は特訓のおかげで力をつけてきているのも事実だったからだ。そして一番の理由は、今日のピュラがなんか怖いからだった。
　ジョーンは荷物を開き、武器と防具の準備を始めた。ここが南の島で、ワイス・シュニーもいるはずだという情報を頭から振り払いながら。

　装備をととのえ客室を後にして、ホテルの玄関にやってきたジョーンたちは、そこで足を止めていた。見覚えのある顔が、ホテルの玄関前で騒いでいる。
「あーもう信じられない！　普通あそこで誤爆する⁉」
「元はと言えばヤン、あなたが合図を無視して射線に割り込んできたからでしょう⁉」
「ワイスが勝手に決めた合図は長ったらしくて覚えられないんだってば！」
　二人は頭からペンキでもかぶったかのように、全身が色とりどりのペイントまみれになっている。そんな様子を見て、ピュラがつぶやいた。
「確か、ペイント弾を使うって言ってたわよね。ユマネス、だったかしら」
「彼女たちも行ったみたいですね。トレーニング施設」と、レンが言っ

た。
　ヤンとワイスの言い争っている内容からして、どうやら同士討ちの事故によって二人はあんなに色とりどりな有あり様さまになってしまったらしい。
　四人の存在に気づかないまま、ヤンとワイスは口論を重ねている。
「よりによって髪に当てることないじゃん⁉　あたしの髪に！　ほんとアッタマきた！」
「だからって、わたくしまでペイントで汚そうとしなくてもよろしいんじゃなくて⁉」
「でもワイスは避けたじゃん！　そのせいで後ろにいたルビーに当てちゃったんだけど！」
「避けるに決まってますわ！　そもそも、あなたがわたくしにペイント弾を撃ってこなければ、ルビーもこんな目に遭わずに済んだのではありませんこと⁉」
「そういえば、ルビーも悪い！」
「ええ、ルビーにも責任はありますわね！」
「えぇっ⁉」
　思わぬ流れ弾に驚いてルビーが顔を上げた。
「わたくしたちのチームの指揮系統の頂点はルビー、あなたですのよ？　すぐれたチームワークは、すぐれたリーダーシップあってこそですわ」
「そうそう。しっかりしてもらわないと」
　ヤンも、ペイントのべったり顔でうなずく。自分を責める二人に、ルビーは言い返す。
「なんでわたしのせい⁉　わたしを撃ったのはお姉ちゃんでしょ！」
「いいや、落ち着いて考えてルビー。あたしはワイスを撃とうとしたわけで、可愛い妹を撃とうとしたわけじゃない。ワイスがあなたを生いけ

贄にえに差し出したのよ」
「そう言えばそうだった！　ワイスの人殺し！」
「姉妹そろって戯ざれ言ごとはおよしになってくださるかしら！」
　場所は、宮殿みたいなホテルの玄関前である。高級感漂う場所で、そうとう次元の低い言い争いを続ける彼女たちの姿は、なかなか目立つ見世物だ。
「あ、ブレイク」
　ノーラが言って初めて、ジョーンは思いのほか近くにいたブレイクの存在に気がついた。そういえば一人足りないと思っていたのだ。
　ホテルの壁にもたれかかり、腕を組んで仲間たちの言い争いを眺めていた黒髪とリボンの少女は、ちらりとＪＮＰＲの四人に一いち瞥べつをくれた。
「……こんにちは」
「揉めてるみたいだけど、何かあったのか？」
「訓練でワイスが連係プランを提案したけど、ヤンが感覚で動いて失敗、ルビーが二人を和解させようとして、これも失敗」
「ブレイクは？」ノーラが無邪気に聞く。
「この訓練は上う手まくいかなそうだと思って、誤射されないように離れて立ち回ってた」
「あの汚れ、拭ふいたらとれるのかな」
「ガチガチに固まってるから無理よ。水に濡ぬらせば簡単に落ちるそうだけど」
「へー。じゃあ、みんな海に突き落としちゃえばいいんじゃない？」
　ノーラが、ひどいがまあまあ現実的な提案をした。
「そんなのダメだよ！」
　突然のルビーの大声に、ＪＮＰＲとブレイクの注目がそちらに集まる。

そのときジョーンは、ブレイクのリボンがぴくりと動いたような気がしてぎょっとしたが、ブレイクは構わず、すたすたとルビーの元に向かっていった。
「どうしたの？」
「ヤンとワイスが……──」
　言いかけたルビーを制して、ワイスが言う。
「これからは、わたくしとヤンは別々に行動すると言ったんですわ」
「そういうこと。お互いにやりたいことが違うんだから、一緒にいる必要ないもんね。そんなにトレーニングがしたいなら、どうぞお好きに。あたしは海で遊ぶ」
「明日の昼まではワイスの日だって決めたのに！」二人に言ってからルビーは、すがるようにブレイクの手を握った。
「ほら、ブレイクも言って！」
　ルビーはブレイクが自分の意見に同意し、力になってくれることを期待したらしい。
　しかし、それは他ほかの二人も同じだった。
「ねえ、ブレイク？　せっかくの南の島の休暇なんだから、パーッと遊びたいよね？」
　いつの間にか、ヤンがブレイクの肩に手をまわして口説いていた。
「いいえ、ブレイク。あなたはビーコンの模範的な生徒ですもの。いつ、いかなるときでも成長と向上の志を抱いているに違いありませんわ」
　ルビーが握っていたはずの手が、横からワイスにさらわれた。
「あっ、ちょっ、ブレイク⁉　ブレーイク⁉」
　最後の味方を奪われたルビーの助けを求めて伸ばされた手は、ヤンとワイスによって物理的に遠ざけられていた。ヤンとワイスの間では、早くも火花が散っている。

「ちょっとワイス？　ブレイクは入学のときのテストで、あたしの相棒パートナーって決まってるんだけど。つまり、あたしと一緒に行動するってことなの。あんたじゃない」
「偶然選ばれただけでしょう。大切なのは個人の資質と行動ですわ。ブレイクは、わたくしと共に高みを目指すはずですもの。あなたとは違いますわ」
　ヤンとワイスは互いに威い嚇かくしながらブレイクに甘言をささやいて連れ回し、ルビーが子犬のように追いすがる。
「……ちょっと、いいかしら」
　ブレイクがつぶやいた途端、三人はぴたりと立ち止まり静かになった。
　ヤンとブレイクは血走った目でブレイクの決断を待ち、ルビーは固かた唾ずを呑のんで見守る。
「どうせチームを分けるなら、あそこにいる四人も誘うのはどう？」
　ブレイクが示したのはＪＮＰＲの四人。ジョーンは「へぇっ？」と妙な声が出た。チームＲＷＢＹの内輪もめを横目に、その場を立ち去ろうとしていたところだったのだ。
「いいね、面白そうじゃん！」ヤンが、すかさず乗った。
「チームＲＷＢＹとＪＮＰＲ。８人を混ぜて、新しい２チームに分けなおすってわけ。どう？」
　ヤンは、簡単なことのように言う。食ってかかりかけたワイスに、ヤンはすばやく耳打ち。
「入学したばかりのときはピュラと組むつもりだったとか言ってたでしょ？　一回くらい、チーム組んでみたくない？」
「……なるほど」ワイスは思案顔でつぶやいた。
「いつもと異なるメンバーでの連係は、学ぶところが多いかもしれませんわね。もちろん、あちらのチームの了解がとれればの話ですけれ

ど……どうかしら、ＪＮＰＲの皆さん？」
　ワイスはＪＮＰＲの面々に向かって──とりわけピュラに対して熱い視線を送りつつ言った。
　当のピュラは言いにくそうに、
「ごめんなさい。せっかくの申し出だけど、わたしたちはこれからトレーニングに……」
「その話乗った！」というジョーンに、
「あたしも！」というノーラが続いた。
「ジョーン⁉」「ノーラ、それは……」
　混乱するピュラとレンをよそに、ジョーンはワイスに渾こん身しんのキメ顔を送る。
「偶然だね。俺も今日はトレーニングで自分を鍛えなおそうと決めてたんだ。考え方が同じ者同士なら、きっと充実した休暇を過ごせるんじゃないかな。忘れられない夏にしよう」
　歯並びの良いジョーンの白い歯が、とってつけたようにキラリと光る。
　ワイスは煮ても焼いても食えない魚を釣り上げてしまった漁師の気持ちを味わい、ピュラは小魚一匹さえ得られなかった釣り人のようなため息をついた。
　一方、ノーラは元気よく手を挙げて、
「あたしはトレーニングより海がいい！」
「じゃあ、ノーラはあたしのチームね」ヤンがさっそくノーラを引き入れる。
「で、どうせレンもこっちに来るでしょ」
「どうせ？」少し心外そうにレンがつぶやいたが、ヤンは気にせず、
「あと、ブレイクも──」
「わたしは、ワイスと行くわ」

ヤンが伸ばした手をかわして、ブレイクはワイスの側に立った。意外そうに目をしばたたかせるヤンに、少しばかり申し訳なさそうな口調で告げる。
「今はレジャーよりも、何かのためになることがしたい気分だから」
「だ、そうですわよ」
　腰に手を当てたワイスが、勝ち誇った顔で言う。
「ピュラも、わたくしと行動を共にしてくれるそうですわ。……あと、ついでにジョーンも」
「もちろんさ」ジョーンの歯がキラリ。
「ちょうど４対４で分かれましたわね。わたくし、ピュラ、ブレイク、ジョーン。そちらは──」
「あたしとルビー。それに、ノーラとレン」ヤンは胸の前で手を打った。
「夏期休暇中の特別チームアップってわけだ。面白そうじゃん」
「うんうん、面白そう！」と、ノーラが手放しで同意する。
　ワイスは腰から離した手を胸の前で組んだ。自分より背が高いヤンを見下すように背中をいっぱいに反らす姿勢。
「撤回するなら今のうちですわよ。成長の機会を逃すなんて愚か者のすることですわ」
「そっちこそ、後から仲間に入れてくださいませ～なんて泣きついてきたりしないでよね」
　にらみ合ってから、二人は弾はじけるように離れた。ジョーンがワイスの後をせかせかと追う。
「しばらく別行動ですね、ピュラ。ジョーンをよろしく頼みます」レンが丁寧に告げると、ノーラも「よろしく！」と挨あい拶さつを送る。
「ええ。二人とも、夕食のときに会いましょう」
　再会を約束してピュラは爽さわやかにジョーンたちの後を追い、レン

とノーラはヤンと共に去る。
　ただ一人、ルビーだけがその場でおろおろと右往左往していた。
「そんな、ワイスもヤンもちょっと、ちょっと待ってってば……」
「何やってんの、ルビー。さっさと行くよ」
　ヤンがやってきて妹の襟えり首くびをひっつかみ、引きずっていく。
「はなしてよ！　ケンカしたからって、チームが別行動なんておかしいよ！」
「なに？　やけに突っかかるじゃない」
「だって、わたしにはリーダーとして責任が……わわっ」
　抵抗するルビーを、ヤンは少し重ための荷物のように肩へ担ぎ上げた。
「遊びにリーダーもチームも関係ないなーい。さ、水着に着替えてビーチに行くよ」
　ルビーは姉の肩の上で暴れるが、チームＲＷＢＹ随一のパワーファイター相手では、まるで子供扱いだった。手も足も出ないかわりに、精一杯の反抗を宣言してやる。
「ヤンのバカ！　四人そろってないのに海で遊ぶなんて、わたしはぜったい反対なんだから！」

「あはははははははは！　あぶない！　あぶないってばノーラ！　ほらー！　あははは！」
　数時間後。夏の陽光照りつけるサパン島の海水浴場では、おだやかな波間でノーラと共にスーパージェットバナナボートで戯たわむれるルビーの姿があった。
　南国のビーチである。澄み切った海水は日光を水底に届かせて、打ち

寄せる波は誘うように静かだ。陽光と潮風が心地よいビーチでは、人とファウナスがそれぞれ家族や恋人友人たちと共に、天国のようなこの光景を楽しんでいる。
　じんわりと熱い砂浜に置かれたデッキチェアには水着姿のヤンが寝そべり、サングラス越しに二人の様子を眺めていた。
　そこへ、四人分のトロピカルレモネードを買ってきたレンがもどってくる。
「ありがと、レン」
「いえ。それにしても、レジャーを嫌がっていた割りにはあっさり流されましたね。あなたの妹の話ですが」
「意地を張ったところでまだ十五歳の女の子……ちょろいちょろい」
　意地の悪い笑顔を浮かべつつ、ヤンはストローをくわえる。
「でもあの子、ちゃんとした水着を用意してなかったのよね。だから、あんな色気のないシャツなんか着たりして。あたしがちゃんと選んであげればよかったんだけど」
「彼女はまだ十五歳でしょう。あなたの趣味で選ぶのはちょっと……」
　レンがそう言う理由は、今のヤンの格好を見ればすぐにわかる。ヤン・シャオロンは抜群のスタイルの持ち主であり、彼女の水着のチョイスは、その肉体の誇示に躊ちゆう躇ちよのない選択だった。つまりは彼女の体を下品ではない程度に、しかし確実にアピールできるような水着である。
　そのため、デッキチェアに寝そべるヤンは、さっきからビーチを行き交う男たちの興味を充分に集めており、レンの方は彼女の隣に立っているだけで、人もファウナスも問わず男たちから羨せん望ぼうと敵意の目を向けられている。
　しかし、友人が多くて人慣れもしているヤンは、そんな周囲の環境をあまり気にしてはいなかった。というか、どちらかというと楽しんでい

た。
「あの子はほっといたら自分と武器の世界に閉じこもっちゃうから、姉としては不安なのよね。そりゃ悪い虫がつくのは困るけど、何もなさすぎるのもね」
「それはわかります」レンは、無邪気にルビーと水を掛け合っているノーラを見守るように見つめていた。
「ノーラが水着だと言って潜水服を持っていこうとしたときは僕も同じ気持ちになりましたから」
「……まあ、それは問題外だけど。でも、ノーラが着てる水着もけっこう派は手でじゃない？　幼なじみとしては心配にならないわけ？」
「ええ、心配です。もしもノーラが妙な男に絡まれでもしたら……」
「ほほーう？」サングラスをずらし、ヤンは興味津々といった様子でレンを見上げる。
「絡まれでもしたら何なのか、お姉さんに詳しく話してごらん？」
「ノーラが相手に怪け我がをさせるのではないかと」
「……そっちか」
　肩すかしを食らって、ヤンはサングラスをかけ直した。他人の色恋沙ざ汰たほど面白い暇つぶしはないが、幼なじみだというレンとノーラの関係は、外からだとちょっとわかりにくい。
「そういえば、あの二人はどうなの？」
「ピュラとジョーンのことですか」
「そうそう。ジョーンはワイスのことが気になって仕方ないみたいだけど、ピュラは授業でもよくジョーンをフォローしてるじゃない？」
「よく知りません。僕が口を出すことでもないですし」
　クールな態度だ。こういうところはちょっとブレイクに似ているな、とヤンは思った。無口で淡泊な者同士、二人は気が合うかもしれない。二人きりにしたら、どっちも口を利かなくなりそうではあるけど。

「お姉ちゃん！　これ面白いよ！　バナナボートに水圧ポンプがついてるの！」
　バナナボートを引きずり二人が砂浜にもどってくる。ノーラがレンからレモネードを受け取り、
「ありがとー！　ヒトデあげるね！」
「……どうも」
　ルビーの方も小さなタコを抱えていて、ヤンはいつそれが自分に押しつけられるかと身構えていた。しかし、ルビーは小タコを抱えたまま、あらぬ方向をじっと見つめている。
「何？　どしたのルビー」
　ヤンはルビーの視線をたどり、砂浜沿いの道を懸命な様子で走っている少女の姿を見つけた。
「あの子がどうかした？」
「ううん、たいしたことじゃないんだけど……何かあったのかなって」
　ヤンはしばらくその少女の姿を目で追った。ルビーよりも年下だろうが、すでにこちらに背を向けてしまっているので、もう表情はうかがえない。
「ふーん、よくわかんないけどトイレでも探してたとか──ひゃあっ⁉」
　うかつにも注意をそらした隙すきに、ルビーがヤンのうなじにタコを載せていた。
「こんのっ……！　やったわね、ルビー！」
　首にへばりつく触手を引きはがし、妹に投げ返す。そのまま砂浜での追いかけっこになだれ込んだヤンは、一瞬だけ頭に浮かんだ疑問を早くも手放していた。
「どうしてあの女の子は南の島のビーチで、ツナギなんか着ているのだろう」という疑問を。

◇

　デコレーションの施ほどこされたツナギを着た少女、イオナ・ロックショーは、ビーチを一望できる階段で立ち止まった。一度足を止めるとそれきり進めなくなってしまう。
　もう今さら後戻りができないのはわかっている。それでも、自分がどれだけ無謀なことをしようとしているのか考えると、足が震えてくる。怖い。でも、もう迷っている時間はないのに。
「じゃあ、コイン投げで決めようぜ」
　そんな声が聞こえて、イオナはハッとした。言ったのは、水着姿のファウナスの若者たち。
「負けた奴が、最初に声をかけるってことで」
「可愛い子を引っかけようってお前が言い出したんだろ。ビビってんのかよ」
　どうやら彼らの目的はナンパで、誰が最初に声をかけるか決めようとしているらしい。そういえば、ここは南国のビーチなんだっけ、とイオナは今さら考えた。
　ポケットからコインを取り出す。赤い女王と白い道化師。二つの面を持つこの硬貨を、イオナはあの日から一度も手放したことがなかった。
　コインを見つめるうちに、イオナの胸の内に過去の記憶が苦い罪悪感と共にわき上がってきた。こんなところにのんびり座ってる場合じゃないだろうと、急せかす声がする。
　時計で時間を確認して、イオナはようやく腰を上げた。
　誰にも頼れない。わたしがやるしかない。わたしがやらなきゃいけない。
　あの男がこの島に戻ってくる前に、すべてを終わらせなくてはならない。

◇

　廃はい墟きよの中を、いくつもの影が駆けまわっていた。そのシルエットは、あきらかに人ではない。
　赤い眼光が陰の中で蠢うごめき、こちらの様子をうかがっているのがわかる。わずかなきっかけで、それらは廃墟の陰から飛び出し、襲いかかってくるだろう。
「わたくしが想定したとおり……非常に理想的な展開ですわね」
　そう、この状況はすべてワイスの計算どおりだ。
　敵の行動を予測して一か所におびき出した。敵がひそんでいる建物の両サイドにある別の廃墟には、それぞれブレイクとピュラが隠れて合図を待っている。
　これから始まるのは計画の最終フェイズ。まずは、派は手でな攻撃と足止め手段の両方を持つワイスが打って出ることで敵の注目を集め、引きつける。そこへ、機動力と打撃力に優れるブレイク・ピュラの二人が、左右から両翼を閉じるように挟きよう撃げきし、殲せん滅めつ。
　わかりやすく単純な《鉄槌と鉄床戦術ハンマー・アンド・アンヴィル》だ。
「それで、俺は何をすればいいのかな？」
　物陰に身をひそめるワイスの隣で、ジョーンがまた白い歯を輝かせて尋ねてくる。
　ワイスは、ウンザリした声にならないよう精一杯の努力で答えた。
「あなたはわたくしと同じ、陽動が担当ですわ。敵をその場に釘付けにするのはわたくしがやりますから、あなたはとりあえず目立って敵の注意を引きつけてくださるかしら、リーダー」
「目立てばいいんだね？　得意だぜ」

ワイスが止める間もなく、ジョーンが物陰から飛び出していった。左手に真っ白な盾たてと、右手に剣をかざして。
「さあ、かかってきなグリムども！　俺がリーダーだ！　チーム……ええ、チームＪ、W、あとＰとＢだから……」
　指を折りながらジョーンはワイスの隠れている方角を振り返り、「俺たちチーム名って決めてた？」と尋ねてきた。これはワイスの計算にはない。
「ああっ、もう……！」毒づきながらワイスもジョーンの後を追う。前に出すぎだ。あれでは逆にジョーンが囲まれてしまう。
　廃墟からはすでに、何体もの敵が姿を現していた。二足歩行の狼おおかみ男を思わせる、鋭い爪と顎あごを持つ異形の影。その数に、ジョーンは今さら青ざめ、たじろいでいる。
「ジョーン！」
　ピュラまで釣られて出てきた。破は綻たんその２。
　ジョーンはといえば斬きりかかった相手にあっさり剣を弾はじかれ、盾たても押さえ込まれていた。
「あっ、ちょ、ちょっと待って！」
　凶暴な影が群がり、無数の爪がジョーンに振り下ろされる━そこで、ブザーが鳴り響いた。
『訓練者ナンバー①のライフがゼロになりました。設定に従い、訓練を終了します』
　敵の動きがぴたりと止まり、潮が引くようにジョーンのそばから離れていった。後には、呆ぼう然ぜんとした顔で固まるジョーンだけが残されている。
「残念だったわね、ジョーン」
　ピュラに助け起こされたジョーンの体には、傷ひとつない。ピュラはいろんな感情の混ざったため息をつき、剣をおさめた。

「作戦は悪くなかったと思うわ」
　音も立てず、いつの間にかブレイクがワイスのそばに立っていた。珍しく慰めるような口調で、
「最後のアクシデントはともかく、相手の行動を完全に予測しきっていたのは、さすがね」
「機械ですもの。あれの行動パターンを読むのは難しくありませんわ」
　ワイスが「あれ」と呼んだのは、さっきまでジョーンを取り囲んでいた金属質の獣たち──ベオウルフという種のグリムを模したドローンだった。
　自律行動する標的であるグリム・ドローンは、この訓練施設ユマネスの目玉の一つらしい。ペイント弾を撃ち込めば部位によってダメージが計算され、致命的な数値に達すると自動的にダウンする。逆に、訓練者プレイヤーも腰に巻いたモニターによってダメージ計算が行われ、ダウンさせられると訓練プログラムは中止となる。先ほど、ジョーンが襲われたときのように。
「グリムとの基本的な戦闘を学ぶ教材としては、なかなか優れていると言えるでしょうね」
「見た目はあまり似てないみたいだけど」
　ブレイクの指摘どおり、グリム・ドローンの見た目は他ほかのドローンと同じようにメタリックで、肉付きもほとんど再現されておらず、一見すると金属のガイコツのようだった。本来のグリムは、闇やみ色の肉体に白い仮面のような外骨格を持つ。
　見た目まで本物そっくりだと、一般人は恐怖で訓練どころではなくなるのかもしれない、とワイスは考えた。この世界に生きる者にとってグリムの脅威は、単なる射的の的にするにはあまりに身近すぎる。
「ワイス、さっきはその……ごめん」
　ピュラに付き添われたジョーンが、おずおずと謝罪を口にした。

「訓練でよかったですわ。さもなければ、チームから死者が出ていましたもの」
「はぁ……やっぱり俺、足手まといだったよね」
「まあ、過ぎたことを言っても仕方ありませんわね。リーダー、少し休憩にしませんこと？」
「あ、うん。それじゃ、今からしばらく休憩ってことで……顔洗ってくる」
　肩を落とし、気落ちした様子でジョーンがとぼとぼと訓練エリアから出ていく。
　ピュラはジョーンが充分に遠くへ行くのを待って、口を開いた。
「ワイス、聞いてもいい？　どうして、あなたがこの四人のリーダーをやらないの？」
「わたくしはチームＲＷＢＹのリーダーではありませんでしたから。四人の中でリーダーの経験があるのはジョーンだった。それだけですわ」
「意外ね」ピュラはワイスの返答を面白がっているようだった。
「訓練を始める前、ワイスがリーダーを決めようと言い出したとき、わたしはあなたがリーダーに立候補するのかと思ってたわ」
「わたくしにリーダーシップがないとは思っていませんわ。けれど最近は、リーダーでなくともできることがあるのではないかと考えてますの。とはいえ、」
　涼やかだったワイスの表情に邪よこしまな陰が差す。陰謀家そのものの黒い笑顔で、ピュラに囁ささやいた。
「あなたがリーダーに立候補するというのなら、わたくしは支持を惜しみませんわよ？　現リーダーのジョーンに圧力をかけて辞任に追い込み、ピュラ・ワイス政権の誕生ですわ。ビーコンでもっとも優秀な二人がチームをまとめ上げる……約束された輝かしき前途に向かって歩むわたくしたちを、もはや何者も止めることはできない。ああ！　なんて素

晴らしいのかしら！」
　権勢欲にまみれたワイスの言葉に、ピュラは持て余した苦笑を浮かべ、ブレイクは黙って眉まゆをひそめることで、良識的な批判の意を示した。
　ぎらついた目で返答をせまるワイスに、ピュラは戸惑いつつも、
「そ、そうね。素敵なアイデアだと思うけど」
「でしょう!?」
「でも、わたしは遠慮するわ。わたしのリーダーは、ジョーンがいい」
　心底不思議そうなワイスに、ピュラは言い聞かせるように言った。
「彼のリーダーとしての能力に、わたしは期待しているの。ワイス、あなたがリーダー以外の役割を模索しているのと、同じようにね」
「……まったく理解できませんわね」
　そこで、ワイスはフッと笑う。
「でも、あなたほどの女性にそこまで言わせるのなら、わたくしはジョーン・アークという人物をいささか──」
「どうしようピュラ！　さっきのでチケットを落としたみたいなんだ！　あれがないとロッカーも開けられないしトイレもいけないって言われたんだけど！　トイレは困るよ！」
「…………」
　本当にあれでいいのか、という目でワイスはピュラを見た。
　ピュラは、そっと顔をそむけた。

◇

　廃はい墟きよを模したトレーニング施設とは対照的な、陽気で賑にぎやかなビーチ。
　その海では、波を割って海上を走る二つの黄色い閃せん光こうが、し

ぶきを上げて熾し烈れつなレースを繰り広げていた。
　先頭を走る黄色い影はバナナボート──それも、後部にジェットを搭載したスーパージェットバナナボートである。
　黄色い海のバナナを乗りこなしている騎手はノーラ・ヴァルキリー。少し走らせただけで乗り手を吹っ飛ばす荒馬を、怪力で押さえ込むことで操っている。バナナボートの後尾にはレンが必死にしがみついている。その後方からは、ヤンとルビーのペアが猛追していた。
　サパン島のリゾートクラブでヤンが借りてきたそれは、軽金属の機械部品と特殊合成繊維のバルーンでできている。非常に軽く持ち運びに便利で、海に浮かべればしっかりとした足場となる。港の船着き場で見かけた、巨大クラゲ型ドローンだ。
　実際のところ、これはどうやら港湾作業用の足場の役割を果たすだけの真ま面じ目めな代物だったらしい。機能は海面に浮いて人を乗せ、ゆっくり動く。それだけ。
　そんな、非常に退屈極まりないドローンが、海上をすさまじい速度で突っ走っていた。エンジンのないドローンがこれだけ高速で動く理由はただ一つ。
　ヤンが、エンジンの代わりにエンバー・セリカを後ろに向かって撃ちまくっているからだ。
「ィィイイヤッホォォオオウウ！」
　ヤンの足は固定具でドローンに縛り付けられて、クラゲ・ドローンは想定していない高速移動に悲鳴を上げていた。水上を跳ねまくるそれは、もはや足場と言うより巨大な水切り石。
　そしてルビーは、姉の足元でドローンにしがみついていた。
「ヤン！　もう少しで追いつくよ！」
　バナナボートの後尾とそこにしがみついているレンの姿が間近に迫り、いよいよヤンはエンバー・セリカの連射速度を上げて、加速する。

そこで、クラゲ・ドローンが限界を迎えた。
「うわっ！」
　ドローンが、何かにつまずいたように盛大に跳ね上がる。波しぶきをあげて、姉妹も海に投げ出された。
　海上に顔を出して海水を吐き出すルビーの隣に、ヤンも並んで顔を出した。
「あははは！　もう少しで追いつけたのに！　惜しかったね、ルビー」
　姉と一緒に笑っていたルビーだったが、やがて笑うのをやめて口をとがらせた。レジャーの楽しさで、チームの問題を煙けむに巻かれたことを思い出したのだ。
「何、どしたの？　どこかぶつけた？」
「違う。ワイスと、チームアップのこと」ルビーはまぶたに張り付く前髪をかき上げた。
「今日はもう仕方ないけど……ホテルにもどったら、ちゃんとワイスと仲直りしてよね。明日の昼まではワイスの日だって言ったんだから」
　顔だけ水面に出して話をしている二人の元に、小型のドローンが水面をすべってやってくる。さっきから何度か見かけている、アメンボのような機械だ。
『何か問題はありませんか？』
「ないない、ノープロブレム。ルビー、他ほかの玩具を借りに行こう。ノーラに勝てそうなやつ」
　どうやらビーチの監視員の役割を果たしているらしいそのドローンは、すうっと離れていった。バナナボートからレンがついに脱落したのを感知して、そちらに向かうようだ。
　ヤンとルビーは砂浜に上陸し、そのままクラゲ・ドローンを引きずってゆく。
「ワイスとケンカなんて、ヤンらしくないよ」

「あたしってそんなお淑しとやかなイメージある？　やっぱり？」
「……ヤンは、わたしやワイスには見えてないことを見ることができると思うから。ちゃんとみんなを見て、他の仲間が気づかないところに気づいててほしい。うまく説明できないけど……チームにとって、それが正しくて、一番いい気がする」
　ヤンは驚いた顔で隣の妹を見つめる。
　そして、ルビーの頭に手を伸ばして彼女の赤毛混じりの黒髪をくしゃくしゃと乱暴に撫なでた。
「もーう、本っ当にカワイイなぁ！　あたしの妹は！」
「うわっ⁉　もう、やめてよ！　せっかく真ま面じ目めな話してるのに！」
　ふざけたヤンと嫌がるルビーが、もつれながら砂浜を歩く。
　そんな二人の後ろを、三人の水着姿の男がついてきていた。彼らは互いに目配せと小声で会話しつつ距離を詰めてきて、いきなりルビーとヤンを自分たちの間に挟むように並んだ。
「やあ、君たちが引きずってるそれ、重そうだね。代わりに持ってあげよっか」
「見た目ほど重くないから平気。ありがと」
　ヤンが即座に断ったのを見て、ルビーは姉に対して尊敬の念を抱いた。男たちがついてきていたのには気づいていたが、いざ声をかけられると驚いて固まってしまったのだ。
　男たちは全員がファウナスで、頭にそれぞれ違う形の角を生やしている。鹿のような節分かれした角を持つ男が、二人の行く手を塞ふさぐように立つ。
「ちょっと話さない？　君たち二人で来てるの？」
「友達たくさんと来てるの。それに、友達を増やしたくてここに来たわけじゃない」

「うーん。どうしたら君たちと仲良くなれるのかな？」
「今すぐそこをどいてくれたら、大嫌いにはならないであげる」
「ねえ、どこから来たの？」と、水牛か何からしい角の持ち主が話しかけてきて、困ったルビーは姉に体を押しつけるように後ずさった。
　──どう対応していいのかわからない。ナンパとはなんて迷惑な行為なんだろう。ぶっ飛ばせばいいだけの強盗とかの方が親切だ。
　鹿角のファウナスはなおもヤンに食い下がっている。
「第一印象が悪かったのは認めるよ。謝るからもう一度だけチャンスくれない？」
「あたしがあげられるチャンスは、しつこいサイテー男って印象を与える前にどっかに行くチャンスだけだよ」
「ガード固いなぁ。せっかくの南の島なんだよ？　楽しまないと」
「いいじゃん。君も恥ずかしがってないでさ」
　無遠慮な手がルビーの二の腕を掴つかんだ。うわわ、となったルビーをヤンがかばう。
「ちょっと。妹はまだ十五歳なんだけど」
「なら、俺が遊び方教えてやるよ」と鹿角が言い、「俺も十五歳のときは女の子と遊びまくってたんだから、平気平気」と水牛のファウナスがなれなれしく顔を近づけてくる。
　ルビーは焦った。無遠慮な男たちに迫られているから、ではない。
　姉の声にわずかな怒りが混じっていると、肉親であるルビーだけが気づいていたからだ。
　ヤンの性格は陽気で人なつっこく、一言で言えば大らか。相手がよく知らない他人でも、すぐに打ち解けて友人になれる天性の明るさと社交性がある。
　その一方で、自分と自分の仲間への不作法に対する怒りの導火線は、かなり短い。

しつこい男たちの振る舞いに、ヤンがイラついているのは明らかだ。もし爆発すれば（相手にとって）悲しい結末を招くだろう。
今はまだ持ち前の陽気さと寛容さが勝っているが、悲劇的爆発はすぐ近くまで迫っている。
ルビーが見るところ、残り３ターンくらいだ。
「あたしたちじゃなくて、他ほかの女の子に声かけてきなよ」
「残念。俺らはビーチで一番かわいい女の子にしか声かけないから」
あ、またイラっとした。
「さっきも言ったけど、あたしたち友達と来てるのよね」
「ちょこっと抜け出して、すぐもどってくればいいでしょ。余裕だってば」
２ターン経過。残り１。
「そろそろ、いい加減にしてくれない？　さもないと……」
「さもないと、何？　くわしく聞かせてほしいな……」
ニコニコと男たちは二人を囲むように迫る。
時間切れ。この後の展開を予想して、ルビーは眼をそらした。
予想に違たがわず、ビーチに悲鳴が響く。
──ああ、こんな美しい南国の島で、姉が人を叩たたきのめしてしまうなんて。
しかし、どうも様子がおかしい。
悲鳴はあちこちから響いてくるし、それらは苦痛の呻うめきではない。
恐怖の叫びだった。

最初に現れたのは、水上に突きだした三角形の黒い背びれ。

それに気づいた人々の間から、サメの出現を知らせる警告の声と悲鳴が次々に上がる。
反応したのは人間だけではない。急いで陸に上がろうとする人間とファウナスたちの間を縫うように泳ぐアメンボ・ドローンが背びれの元に向かい、脚の一つを伸ばした。
脚の先端はスタンガンになっているらしい。バチバチと青白い火花を散らすそれを、ドローンは容赦なくサメの背びれに押しつける。
背びれはたまらず海中に沈み込む。ドローンのサメ退治を、固かた唾ずを呑のんで見守っていた観客の間から歓声が上がる。
次の瞬間、海中から飛び出してきた黒い胴体と白い頭部を持つそれが、波間を破って空中に飛び出した。跳ね上げられたドローンに牙きばが食い込み、噛かみ砕かれて破片が海にばらまかれる。
一瞬の出来事とはいえ、その場にいた全員がその姿をはっきりと見た。
大人を丸呑みできそうなほどの黒い巨体。不気味な白い外骨格に覆われた頭部。そして、殺意に赤く輝く瞳ひとみ。
レムナントに生きる誰もが知る人類の天敵の姿──グリム。
今度こそ、ビーチは完全なパニックに陥った。
海上に突きだした背びれが、さらに増えていく。続いて砂浜に黒い波のように押し寄せたのは、カニやヤドカリのような、甲殻類に似た形状のグリム。陸上でも活動可能な種のグリムが現れたことで、ビーチに安全な場所は一つもなくなった。
恐慌は加速し、悲鳴が連鎖する。人もファウナスも逃げ惑い、騒動は制御不可能になった。
グリムの習性の中でも最悪なのがこれだ。グリムは人間の負の感情に引き寄せられる。最初のグリムが一匹でも、大勢の人々のグリムに対する恐慌が、さらなるグリムを呼び寄せてしまう。

「……だとしても、これは少し多すぎますね」
　砂浜に戻っていたライ・レンは刃ブレード付きの拳銃を、進軍してくるグリムの群れに向けて撃ちまくっている。押し寄せるグリムは狙ねらいをつけなくても当たるほどの数で、状況はかんばしくない。もっと、破壊力と制圧力に優れた武器の使い手がいれば。
「レン！」
　ヤンが戻ってきた。レンはグリムに向けて撃ち続けながら、彼女に尋ねる。
「ルビーはどこへ？」
「ロッカーに武器を取りに行ってる。あの子の武器、ビーチに持ち込むには大きすぎたから」
「ノーラも同じです。できれば、二人には急いでもらいたいですね」
　弾丸切れ──レンがそれまで張っていた弾幕が途切れた。その隙すきに、エビを禍まが々まがしく変形させたようなグリムが節足を蠢うごめかし、距離を詰めて襲いかかってくる。
　レンは先んじてグリムを迎え打ち、敵の脚の一つを銃の刃ブレードで切断。そのまま流れるような動作で、白い甲殻に覆われていない隙間に、もう一挺ちようの銃刃を刺し込む。
　柔らかい頸けい部ぶを掻かき切りつつ刃を引き抜くと、黒い体が煙となって消えていく。ヤンもまた、別の方向から襲ってきたヤドカリ型のグリムを数体、拳こぶしで殴り飛ばしていた。
「レン、砂浜は任せた」
「え？」
　返事を待たずに、ヤンは平べったいクラゲ・ドローンを抱えて海に駆けだした。

　このときヤンは、まだ海に逃げ遅れた人々がいることに気づいてい

た。
　青ざめた顔で波間にぷかぷか浮いている浮き輪の男。周囲を黒い背びれが取り囲んでおり、身動きがとれなくなっている。
　砂浜からヤンは、海に向かってクラゲ・ドローンを投げつけた。円盤投げのように飛んだクラゲ・ドローンは、取り残された男のすぐそばに着水し、水しぶきを上げる。そして、砂浜から助走をつけて跳躍したヤンが、その上に落ちてくる。空中でエンバー・セリカの反動を使って滑空し、飛距離を稼いだのだ。
「ポカンとしてないでさっさと逃げる！　急いだ急いだ！」
　ヤンに急せかされて、我に返った男はあわててバタ足で砂浜に向かって泳ぎだした。ヤンは男の後ろに向けてペイント弾を何発も撃ち込み、海水を染めてグリムたちが男を追うのを防ぐ。
　トレーニング施設でもらっていたすべてのペイント弾を使い切って、ヤンは水着の隙間に仕込んであったダスト弾を排はい莢きようと同時に入れ替える。
　ヤンによって散々な目にあわされてきたクラゲ・ドローンはもう動かなくなったが、足場となれば充分だ。ヤンは籠こ手てで覆われた拳を胸の前でぶつけた。
「さあて、ここに活きのいい生き餌がいるよ。遠慮しないでかかってきな。そしたら──」
　飛び出してきたサメ型グリムを、強烈なアッパーカットがとらえた。噴火のような勢いで突き上げた拳が、グリムの顎あごを砕いて彼方かなたへと吹き飛ばす。
「──みんな仲良く、スシにしてやるからさ！」

◇

武器を抱えたルビーが到着したとき、ビーチの様相は一変していた。
海からは次から次にグリムがわき出て、レンは二に挺ちよう拳銃と体術で敵を引きつけ応戦。
海上ではヤンが、ひどく限られた足場を使い、海中から飛び出す敵との戦いを繰り広げている。ビーチのあちこちにはグリムに破壊されたドローンの部品が散らばり、二人は孤立無援だった。
ノーラの姿がないのは、武器を取りに行っているのだろう。ルビーがノーラに先んじて戻ってこれたのは、センブランスのおかげだ。
「すごい数……！」
大群に圧倒されつつもルビーはクレセント・ローズを構え、《加速》したまま砂浜に突入した。
そのスピードが砂を舞い上げ、薔ば薇らの花弁と共に降る。白い砂と赤い花弁のカーテンがグリムの視界を奪い、動きを止める。白と赤の幕を裂いて飛び出した大鎌の刃が、ひと薙なぎで三体のカニ型グリムを仕し留とめていた。
砂を浴びせられた他ほかのグリムたちは、この無礼な乱入者を引き裂くべく押し寄せてくる。
突き出されたハサミを鎌の柄で受け止め、発砲の反動を使って本体を一気に掻かき斬きる。銃弾と刃で敵の数は二体減り、煙化する仲間の死し骸がいを押しのけてさらに新手が現れる。
グリムが自分に群がってくるのは、ルビーにとって望むところ。逃げる人々を追わせないよう、できる限りグリムの注意を引くつもりだった。
しかし、ルビーの大鎌を振るう手が止まる。海から、想像もしなかったものがやってきていた。
「……なに、あれ」
波を押しのけて、真っ黒な小山が砂浜に打ち上げられる。その大きさ

にルビーは息を呑のみ、彼女を取り囲むカニ型のグリムたちは、その到来を歓迎するかのようにハサミを打ち鳴らした。
「あれもグリム!?」
　丸々とした黒い頭部から伸びる八本の触手が、うねって水面と砂地を叩たたく。全身は軟体、しかし赤い瞳ひとみの周囲は白い骨格で覆われている。
　島育ちのルビーも初めて見る、巨大なタコのようなグリム。
　嫌悪感を催す動きで触手と軟らかな全身をくねらせて、巨体が上陸を開始した。
　ルビーはクレセント・ローズを脇わきに構えて、《加速》の姿勢をとる。これまで何体ものグリムを狩ってきた経験が告げている──あのグリムはぜったい、ここで止めないといけない。
　一見したところではどこが急所かわかったものではないが、頭部を真っ二つにしてやれば、さすがに死ぬだろう。狙ねらいは、あの白い甲殻の上のあたり。
　ルビーが斬きり裂くと決めた場所、ちょうどその位置に、前触れもなく紅の槍やりが突き立った。
「……え？」
　急所だと見たのは正解だったらしく、槍の突き刺さった場所からグリムの体が黒煙と化して消えていく。消えずに残った槍だけが刃を下にして落下し、砂浜に突き立った。
　ルビーは、その場で振り返ってつぶやく。
「ピュラ？」

「命中」

目標に槍が突き立ったのを遠目に確かめたブレイクが、静かに告げる。ワイスは絶句した。
「この距離から、そんな不安定な足場で……？」
槍を投とう擲てきしたピュラが立っているのは、疾しつ駆くする馬型ドローンの背中である。
グリム発生のサイレンを聞きつけた四人は、すぐにビーチに移動できる手段を探した。しかし、島内を巡るバスやタクシーなどは『非常事態につき運行を停止』して動かない。
代わりの足になりそうなもので、いちばん手近にあった手段が、トレーニング施設の乗馬シミュレーション・コースに用意された、この馬を模した機械だったのだ。
ちなみに、動かせる馬は三機だけだったので、ピュラとジョーンが相乗りになっている。
「いい運転よ、ジョーン」
馬の背に立って投げ槍を放つという曲芸まがいのことをやってみせたピュラが、立ったままジョーンの肩に手を置いた。ジョーンは運転しているというより、必死にしがみついている状態で、言葉を返す余裕すらない。
「着くわ」
ブレイクが静かに言う。砂浜はもう間近で、無数の黒い影が誰の目にもはっきりと見えた。逃げてくる人々を機械馬が自動で避けて進み、四人は砂浜に乗り込んでいく。
ワイスは馬から飛び降りながら、空中に魔法陣グリフをいくつも展開──それらを足場にして跳ね回り、砂浜を汚すグリムを数体、駆け抜けざまに切って捨てた。
ピュラも馬の背からジョーンを飛び越え、馬の頭を踏んでさらに前へと跳んだ。

砂浜に着地すると前転の勢いを利用して立ち上がり、ワイスが切り開いた道を走り、先に投げた槍を目指す。ブレイクはいつの間に馬を降りたのか、すでに砂浜で黒刀を振りかざしていた。
　つまり、まだ馬にしがみついているのはジョーンだけ。
「ピ、ピュラ！　これ、どど、どうやって降りればいいのか、お、おしっ、教えてっ……!?」
　深い砂地に前足が沈み込み、馬型ドローンがバランスを崩くずした。金属の関節が悲鳴を上げ、スタビライザーの限界を振り切ってドローンが横転。ジョーンは砂浜に投げ出される。
「……痛てて……待ってろ、みんな。いま行くぞ……おぇ、きもちわるい」
　剣を抜き、盾たてを展開して構え、戦闘態勢を形だけでも整える。
　すでにここは戦場なのだから、いつ敵が襲ってきても不思議ではない。ビーコンでの教えを思い出しながら、ジョーンは盾を構えて周囲の状況把握につとめた。すでに、ピュラたちがあちこちで戦いを始めている。海から押し寄せる黒い大群を見て、ジョーンの背筋が粟あわ立だった。
「あ、あれ、全部がグリム……？」
　腰が引ける。ジョーンもグリムと戦って勝利したことがあるとはいえ、これだけの数のグリムを前にした経験はない。勢いでやってはきたが、この光景はその気勢を削そぐのに充分だった。
　砂浜に打ち上げられた、奇妙な機械を見るまでは。
「あれは……」
　大きなカプセルのようなものが、波に洗われている。何かの乗り物らしく、ハッチがあって今は開いている。そして、そのハッチから半身を出している少女がいた。
　見覚えのある、デコレーションのツナギを着ている。

「……イオナ？」
　ハッチから身を乗り出したまま呆ぼう然ぜんとしているのは、ＳＩＣの展示会場で出会ったあのイオナ・ロックショーだった。あのときと同じ趣味の悪いツナギを着て、真っ青な顔をしている。
　動かない機械には興味を示さなかったグリムたちだが、その中のイオナの存在に気づいた個体が近づきつつある。
　無防備な少女の姿が、ジョーンを動かした。

　海かい棲せいグリムという、普段は相対することのない敵。しかしブレイクは、様子を見るとか出方をうかがうといった消極的な行動はとらず、最初から突っ込んでいった。
　機動力に富んだ速攻と、身体能力を活かした変則的な攻撃こそブレイクの戦闘スタイル。足場が不安定な砂浜でも、それは変わらない。
　砂浜にうごめく小型の、魚だかウミウシだかわからない見た目のグリムを、背中から抜き放った黒剣で次々に両断していく。十を超える数の小型グリムを片付けたブレイクは、海からゆっくりと上陸してきた大物と対たい峙じした。
　カニのようなハサミと尖とがった脚、白い頭部から飛び出した赤い瞳ひとみ。そして何より、見上げるほどの巨体。さっき斬きり捨てた中にカニ型は何体かいたが、そいつらとは比べものにならない脅威だ。大型のグリムは力や重さに優れているだけでなく、老練でもある。
　ブレイクは一足で間合いを詰めると、カニ型グリムの足に打ち込んだ。鉈なたのような刃はその重さでグリムの足の表面を割り、黒い肉に食い込んだものの、切断には至らない。
「堅い……！」

切りつけた刃はグリムの足の中央で止まっていた。抜くことも、そのまま押し切ることも難しい位置。グリムはこうなることを知っていたかのように、身動きがとれなくなったブレイクをハサミで静かに挟み込んだ。
　なんのためらいもなく、ハサミがブレイクの体を両断した。
「□□…………？」
　切断されたブレイクの体はその場に崩くずれ落ちることもなく、ぼんやりした像となってかき消える。グリムの足には、鉈のような刃が突き刺さったまま。
　グリムに動揺の気配が生まれた。飛び出した紅眼が、ブレイクの姿を求めて左右をさまよう。
「ここよ」
　そう言うブレイクが立っていたのは、グリムの頭上。
　ブレイクのセンブランスは、実体の無い虚像を生み出す力。彼女そっくりの幻影は、優れた身体能力と組み合わせることで、敵を致命的なまでに翻ほん弄ろうする。
　グリムの紅眼が上を向くと同時に、ブレイクは身を沈めて足下に細い黒刀をずしりと刺し込んだ。人類の天敵とはいえ、頭を貫かれても無事なグリムはそういるものではない。
　頭部を串刺しにされたグリムが、一度びくりと震えてそれきり動かなくなる。
　ブレイクは黒刀を引き抜いて砂浜に飛び降り、グリムの脚に刺さったままになっていた剣も回収。武器を抜いた箇所から、グリムの死の証あかしである黒煙が立った。
　ブレイクの武器、ガムボール・シュラウドは普段は一本の大きな剣だが、その内側に細い黒刀が収納されており、それを抜き放てば剣と刀の二刀に。さらに黒刀の鍔つば元もとは拳銃になっていて、斬ざん撃げき

と銃撃の両方が可能な設計となっている。
　一刀にして二刀、さらに銃でもある──しかし、この武器の特性はそれだけではない。
　ブレイクの頭のリボンがぴくりと動き、そちらを見た。逃げ遅れたファウナスの親子が、ウミヘビのような姿のグリムの群れに取り囲まれ、追い詰められている。
　ブレイクの手の中で黒刀が変形、鍔元から刃が直角に畳たたまれて、鎌のような形状になった。ブレイクはさらに、手に巻いたリボンを武器のグリップに絡ませる。
　可変弾道鎖鎌ヴアリアント・バリステイツク・チエイン・サイスと呼ばれるガムボール・シュラウドの、もっとも特徴的な形態──リボンを使った鎖鎌チエインサイス。
　刃と銃が一体になったそれを、ブレイクは親子を襲うグリムの群れに向かって投げつけた。
　グリムの頭部に、鎌の刃が突き刺さる。同時に、ブレイクがリボンを操作。拳銃のトリガーを連続して引いた。
　──問：空中にある拳銃が、ひとりでに銃弾を連続発射すればどうなるか？
　──答：反動でめちゃくちゃに跳ね回る。
　拳銃から発射された銃弾が異なる的を穿うがち、反動で踊る鎌が次々に敵を斬きり裂いていく。
　デタラメな乱射のようだが、刃と銃弾は正確に敵だけを狙ねらい、おびえてすくみ上がっている親子を傷つけることも、ブレイクの手と鎌を繫つなぐリボンを自切することもなかった。
　弾倉マガジンの弾丸を使い果たす頃には、グリムの群れは徹底的に切り崩くずされている。すさまじい技巧を見せつけながら、ブレイクは涼しい顔でリボンをたぐり寄せた。

淡々と殲せん滅めつを終えて、ブレイクは次に自分の力が必要な場面を捜す。
　少し離れた場所で、ジョーンがツナギの少女をかばいながらグリムに追われ、逃げ回っている。

◇

「走れ走れ走れ走れ早ぁくっ！」
　ジョーンはイオナの手を引いて、懸命に駆けた。
　後ろからはガサガサと無数の甲殻類の脚が砂を刺す音がずっと響いてきていて、何体ものグリムが一斉に追ってきていることは明らかだ。
　少しずつ距離を詰められているのを感じるジョーンの隣に、いきなりブレイクが現れる。
「そのまま走り続けて」
　言うなり、ブレイクの姿がかき消える──センブランスだ。
　背後で銃声が聞こえる。ブレイクが助けてくれているらしい。でも振り返るつもりはない。だって、走り続けろって言われたし。
「あっ」
　イオナが砂に足を取られてつまずき、ジョーンは振り返らざるを得なくなった。ブレイクが追手の数を減らしてくれていたとはいえ、思いの外グリムは近くまで来ていた。ジョーンが、盾たてでイオナをかばわなければならない程度には。
　グリムのハサミが振り下ろされて、ジョーンの盾がぐわんと揺らされる。ジョーンは剣を振り回すが、ヤケクソな反撃は敵の硬い甲殻に弾はじかれてしまう。
　レンがうまく甲殻の隙すき間まを突く戦い方をしている姿を先ほどから見かけていたが、ジョーンにはどうすればあんな冷静な判断ができる

のか、想像すらつかない。
　ブレイクの黒刀がグリムを背後から貫き、ようやくジョーンは爪のプレッシャーから解放された。礼を言う間もなく姿が消えて、ブレイクは別のグリムに襲いかかっていた。
　ホッと息をついたジョーンのそばで、イオナがうなだれている。
「イオナ？」
「失敗した……わたしが何とかしなきゃいけなかったのに……わたしが……」
　展示会で見たような嘘うそ泣きではない。本物の涙を浮かべているイオナに、ジョーンは色々と尋ねたいことが浮かんだが、すぐにそれどころではなくなった。波と共に、サメによく似たグリムが海から飛び出し、砂浜へ這はい寄ってきたのだ。
「ジョーン！」
　ピュラの声がしたかと思うと、サメ型グリムの横っ腹に、紅と金色の丸盾たてが突き刺さった。思わず、盾が飛んできた方向に目をやる。思ったとおり、赤髪の少女がいた。
「ピュラ！　後ろ後ろ！」
　盾を投げてジョーンを救ったピュラの背後から、セイウチのような牙きばを持つ海獣型グリムが迫っている。しかし、ピュラは淡々と手元の槍やり──ミロを変形させてライフルに変え、ほとんど狙ねらいもつけずに背後のグリムを撃ち抜いた。そのまま、射程内にいるグリムを機械のような正確さで次々に仕し留とめていく。
　あれがピュラだ。戦闘の達人。ビーコンきっての優等生。
　ジョーンはすぐに自分の目の前の仕事に取りかかった。ピュラの盾──アクオが腹部に食い込んで半死半生になっているグリムに、剣でトドメを刺す。
　グリムの死を示す黒煙を見てホッとしたジョーンの元に、周囲の雑魚

を片付け終えたブレイクが、鎖くさり鎌がまを下げてやってきた。
「平気？」
「なんとか……でも、まだグリムは大勢いるんだろ。まだ休んでられない」
「……そうでもないみたい」
　ブレイクが何の話をしているのか、ジョーンはすぐに気がついた。
　砂浜の向こうで、連続的な爆発が始まっている。爆発のたびに砂と海水が巻き上げられ、一緒にグリムも宙を舞う。
　ジョーンがビーチに目をこらすと案の定、ノーラの姿があった。ノーラの武器の形態の一つはグレネードランチャー。単純な火力なら、ＪＮＰＲの中では飛び抜けて高い。
　それだけでなく、ノーラの周囲には武装した人間たちの姿もあった。どうやらＳＩＣ職員らしく、ダストを使った兵器を使ってグリムを制圧していく。
　ピュラに目を転じれば、ライフル一丁で周囲の敵の掃討をほとんど終えてしまっていた。盾を欠いてもピュラ自身のポテンシャルでなんとかなっているあたり、とてもピュラらしい。
　徐々に状況は収まりつつあって、ジョーンは今度こそ肩の力を抜いた。
　ブレイクも鎖鎌を剣の状態に戻す。そして、そのとき初めて、ジョーンが守っていた少女に目を留めた。
「その子は、展示会のときの？」
「え、ああ。さっき偶然……」
「本当に偶然なの？」
　ブレイクは片手に剣を下げたまま、イオナを冷たい目で見下ろしている。ジョーンは、南国の陽気が遠くなったような寒気に襲われた。
「ブ、ブレイク？」

「何を企んでいるの？　答えて」
「何なんだよ、一体」
「尋問よ。その子は容疑者だわ」
　ブレイクの様子がおかしいと知って、ジョーンはイオナを隠すようにブレイクに向き合った。
「落ち着けよ。どうしたんだ、急に」
「あなたには関係ない」
　立ちはだかっていたつもりが、するりと脇わきを抜けられてしまう。
　そのままイオナに迫ろうとするブレイクをジョーンは止めようとして、違和感を覚えた。
　ジョーンがトドメを刺したサメ型グリムは、体の半分以上が煙になって消失している。なのに、残った半分の体が、もぞもぞと動いている。
「ブレイク、ちょっと待て！」
　ブレイクが鬱うつ陶とうしげに振り返る。その瞬間、サメ型グリムの死体の下から、さらに小型のグリムが這はいだして跳ね上がった。
　大型肉食魚に寄生するコバンザメ──そんな生態を思わせる小型のグリムが、牙きばを剥むいてブレイクの顔面を襲った。
「くっ……!?」
　あやういところでブレイクは身をかがめて牙をかわし、小型グリムは砂浜にぼとりと落ちる。
「こいつ、待て！」
　見た目は魚なのに、砂浜でも這はいずって動き回り、ジョーンが剣を突き立てようとしても狙ねらいをつけさせない。ジョーンを嘲あざけるように彼の足の間をくぐり抜けて、体勢を崩くずしたブレイク目がけて再び跳躍の気配を見せる。
「もーらいっ！」
　横から突然あらわれた大鎌の先端が、小型グリムを貫き地面に縫い付

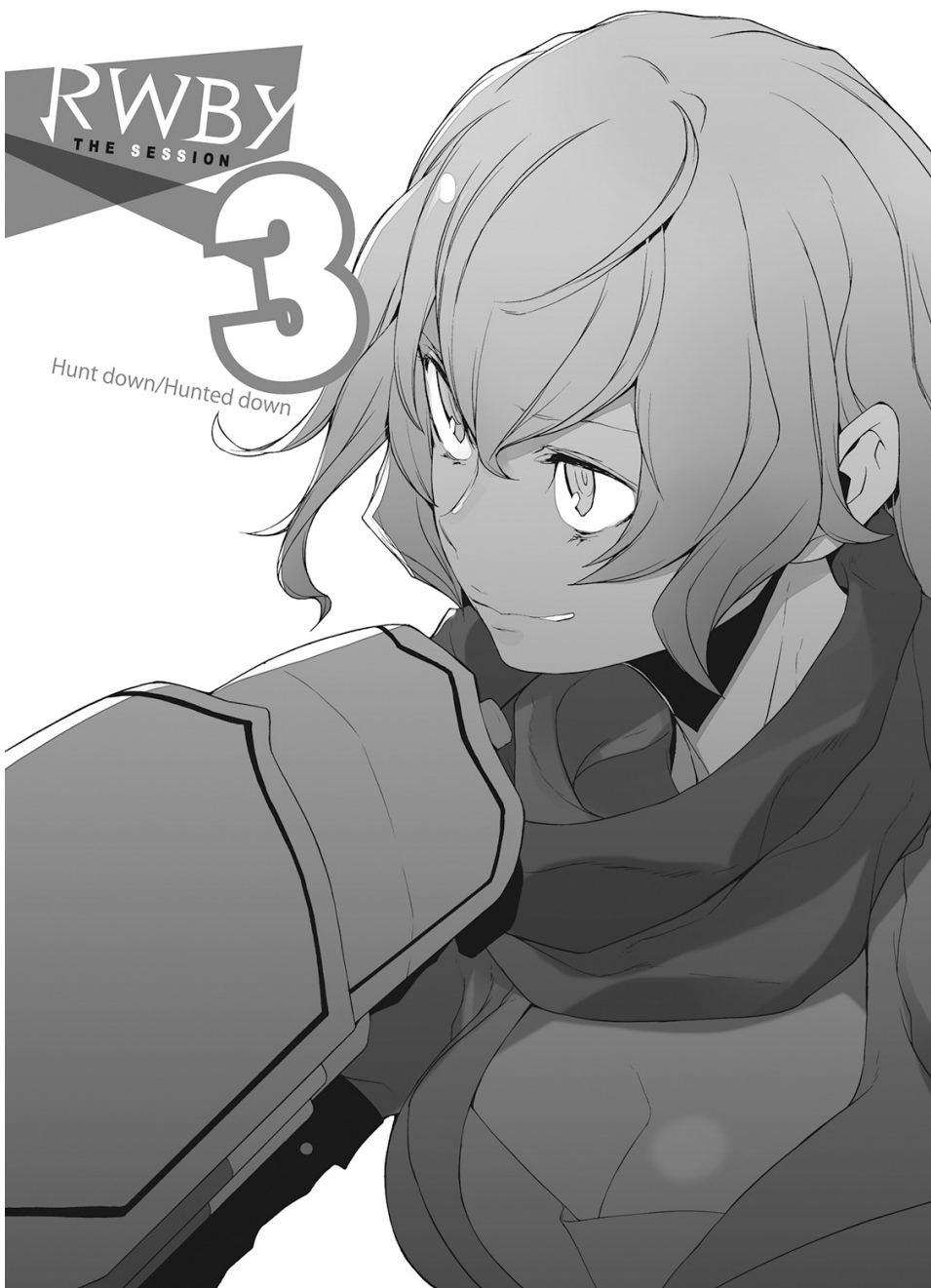
けた。致命傷には充分で、小さいグリムの体はすぐに煙になって消える。
「ルビー……」
「や、ジョーン。それにブレイクも、助けにきてくれたんだね。ありがと」
「礼を言われるほどのことじゃないわ」
　つっけんどんなブレイクに、大鎌を肩に乗せたルビーは笑いかけて──その笑顔が凍りつく。
「ブ、ブレイク……あの、それ……」
　ジョーンも、それに気づいて目を見開いた。
　ブレイクの頭に乗っていたリボン、それが破けている。おそらく、さっきのグリムの牙を避けたときに。
　そして、破けたリボンの下には、猫の耳があった。
「……あっ」
　ようやく気づいたブレイクが手で猫耳を隠すが、何もかも遅すぎた。
「ファウナス、だったのか？」
「…………」
　ブレイクの高い身体能力と感覚の鋭さを思い返して、ジョーンは合点がいった。わからないのは、リボンで耳を隠さなければならなかった理由だ。
「でも、なんでそのことを隠して……」
「なんで⁉　どうして⁉」
　イオナが、ほとんど悲鳴に近い声を上げた。
「ファウナスの知り合いはいないって言ってたのに！　もう時間がない！　急いで島から──」
「──これはこれは。展示会に引き続き、ここでもお世話になるとは」
　声をかけてきた人物を見て、ジョーンは「げっ」という顔をした。

展示会で出会ったＳＩＣの警備員。たくましい体と、いかめしい顔と、いじめっ子の雰囲気の持ち主。
「警備主任のウスコー・アンスロープです」
　大きな体を折りたたみ、窮きゆう屈くつなお辞じ儀ぎをする。
「皆さんには、大層な借りができてしまった。おそらく、うちのＣＥＯがお礼にうかがうことになるでしょう。今はこの島を留守にしていますので、いつになるかはわかりませんが……」
　そこまで言って、セキュリティの男は真っ青な顔のイオナに意味ありげな目を向けた。
「戻るぞ、イオナ・ロックショー。我々は事態を収拾させなければならない。わかるな？」
　アンスロープと名乗った男にイオナは小さくうなずいて、二人は共にその場を立ち去る。ジョーンが彼女に何か言うべきかと考えていると、思わぬ方から大声が飛んできた。
「あっれー！　ブレイクの頭に耳が生えてる！　見せて見せて！」
「ノーラ、あまりそういうことを言わない方が……」
　ノーラが騒ぎ立てて、レンがいつものように制止している。ブレイクは迷惑そうに耳を手で隠していた。
「あ、ヤンもお帰り」
「や、ルビー。退屈な機械も遊び方次第で楽しめるね」
　海から上がってきたヤンは、スクラップとしか言いようのない塊を引きずっている。足場に使っていたドローンの残ざん骸がいらしく、もはや見る影もなくなっていた。
　そしてピュラは、何よりも先にジョーンの元へ駆け寄った。
「ジョーン、怪け我がはない？　大丈夫？」
「みんなのお陰で、なんとか……あっ、ワイス！　俺の活躍見てくれた？　無数の敵を──」

「この目でとくと見させていただきましたわ！　ピュラ！」ジョーンをするりとかわして、ワイスはピュラの手を握った。
「いよいよ確信いたしましたわ。わたくしたちが手を携たずさえれば、確実に歴史に名を残すチームとなることを！」
　熱っぽく語るワイスの気を引こうと、ジョーンは自分の手柄をあることないことふかしてみるが、ワイスは振り向きもしない。ルビーはルビーで、全員の無事を確かめられたことにホッとして、ヤンの髪に張り付いた海草をとってやったりしている。
　展示会の事故。島でのグリムの襲撃。イオナの奇妙な言動。
　ＳＩＣの周囲で連続する騒動に違和感を覚えているのは、この場ではブレイクだけだった。

　グリム騒動があったその日の夜。
　いまだに警戒が続くビーチとは異なり、ひっそりと静まり返るサパン島奥地の森は、木々が月明かりを遮さえぎって、自然が作り出す暗くら闇やみに覆われていた。
　そんな暗闇の下で、一機の輸送機が身を隠すように翼を折りたたんで停止している。
　周囲には着陸の際にへし折られた枝が散らばっていたが、輸送機から次々に降り立った乗組員達が手早く枝葉をかき集めて機体にかぶせ、森には似つかわしくない機体を隠いん蔽ぺいしていく。
　それが終わると今度は、船の荷を降ろし始めた。この暗闇だというのに灯も点つけず、なのに作業は支障なく進められる。
　輸送機のタラップからまた一人、地上へと降り立った。その人物は他ほかの人影ほど機敏ではなく、早速何かにつまずいて「クソ」から始ま

る悪態をつく。
　立ち上がって杖で尻しりについた砂を払い、近くの人影に向かって指示を出した。
「さっさと終わらせろ。モタモタしてると見回りが来る」
「了解です、ボス」
　指示を受けた相手が行ってしまうのを待ってから、その人影はライターを取り出した。火打ち石の擦こすれる音と共に、森を覆う暗闇に初めて灯が生じる。
　チロチロと燃える小さな炎は、葉巻をくわえるローマン・トーチウィックの横顔を照らし出していた。

RWBY
THE SESSION
3
Hunt down/Hunted down

サパン島の南部には、飲食店が過剰なほど多くあった。
　いかにも南国といった風ふ情ぜいの開放的な店や、ファミリー向け、大人向けのバーなど、様々な種類の店舗が軒を連ねる不自然な景色が、ビーチ沿いに展開されている。ＳＩＣのレジャー開発のテストなのだろうが、その不自然さには確かに実験的な雰囲気があった。
　ビーチでのグリムの襲撃という騒動があった、その日の夜。
　レストラン群の中でも、もっとも高級感を漂わせている店の前に、ビーコンから来た８人の姿があった。
　ルビーはその建物をひと目見て、てっきり音楽ホールか何かかと思ったほどに大きかった。暗い色の窓ガラスから見える店の中には他ほかに客の姿はなく、それどころかウェイターの姿もない。
　８人を案内するために出てきたのは、ホテルの執事ドローンに似た一本足のドローンだった。
『サパン・シーサイドレストラン７号店へ、ようこそ』
「ハッローゥ」ヤンが手を挙げて言った。
「あたしたち、ホテルのドローンに招待されて来たんだけど」
「ＣＥＯからわたくしたちにお話があると聞いたのですわ」
　ヤンを体で押してワイスが言う。ムッとしたヤンが押し返し、二人がにらみ合う。
　ドローンはそんな二人のつばぜり合いにはお構いなしに答えた。
『はい。本日は皆様の貸し切りでございます。どうぞ、おくつろぎくださいませ』
　ドローンの案内で店内に足を踏み入れたルビーは、その豪華さに歓声を上げた。高い天井から吊つり下げられたシャンデリアの輝きと、調度品の重厚な高級感が、これでもかとばかりに目を突き刺してくる。
　暴力的にリッチな椅い子すやテーブルの並びの向こうには幕の引かれた舞台があって、音楽ホールだと思ったのはあながち間違いではなかっ

たなとルビーは思った。
　ヤンは囃はやすように口笛を吹き、ブレイクは興味なさげに腕を組んだ。
　ジョーンは唖あ然ぜんとした様子で固まっていて、ここに並ぶ調度品ぜんぶ集めれば一体どれだけの値段になるのだろう、と考えていた。
　ワイスはそれらの値段を正確に計算することができていて、まあこんなものか、と涼しい顔で考えていた。
　ホールの舞台にもっとも近い長方形の大テーブルに案内されて、ジョーンはちゃっかりワイスの左隣の席を確保し、ルビーもワイスの右隣につく。ウェイターらしきドローンが次々に現れて、一行に告げる。
『ＣＥＯは現在こちらに急ぎ向かっておりますので、どうぞ夕食をお召し上がりになってお待ちください、とＣＥＯよりことづかっております』
　到着まで食事を待たなくてよさそうで、ルビーはホッとした。正直、かなり空腹だったのだ。
テーブルの一人一人にウェイター・ドローンがつき、８人の夕食会が始まった。

　注文からほとんど時間を置かずに、テーブルの上は料理を載せた皿でいっぱいになった。
　ワイスは、ルビーには何語なのかさえわからない名前の料理を頼み、ヤンはバーガーとコーラ。ブレイクの前には様々な魚料理が山積みで、レンとノーラの前にはパンケーキが塔のごとく積み上げられる。
　空腹の彼らは、あっという間に平らげた。
「本当にいろんな料理がでてくるね。それもすぐにさ」

感心した様子でヤンが言う。ノーラもパンケーキタワーの残ざん骸がいを口に押し込みながら、
「コックさんがいっぱいいるんだね！　お客さんいないのにね！」
　しかしワイスはナプキンで丁寧に口元をぬぐい、
「いいえ。これは料理人の仕事ではありませんわ。機械が作ったものでしょうね」
「そうなの？」
「それくらいわかりますわ。なかなかの出来ですけれど、真の食通を唸うならせるほどの域にはまだまだ達しておりませんもの。よくできたまがい物、といったところですわね」
　ふうん、とルビーは皿を見下ろした。ルビーの感想としては、すごくおいしい、という以外に特にない。
　そんなことを考えていると、ジョーンがおもむろに口を開いた。
「そういえば、ブレイクの耳のことだけど……」
　とたん、向かいにすわるブレイクから鋭い視線が飛んでくる。その迫力は、ジョーンを黙らせるのに充分だった。
「ゴメンね、ジョーン」と、ヤンが怯おびえたジョーンに言う。
「ブレイクの素性のことは秘密にしてたから。いろいろ事情があってさ」
「とはいえ、もうここにいる全員には見られてしまっているようですけれど」
　ワイスが言うとおり、昼間のグリム騒ぎのおかげで、ブレイクがファウナスであるという秘密はチームＲＷＢＹルビーだけのものではなくなっていた。
「ブレイクが、どうしてそのことを秘密にしているのかは知らないけど……」ピュラが、ブレイクに話しかけた。
「ここに来る前にＪＮＰＲジユニパーの四人で話し合って、ブレイクが

隠しておきたい秘密なら、わたしたちも秘密のままにしておこうと決めたの。だから、わたしたちは今日見たことを言いふらしたりはしないわ。ジョーンが言おうとしたのは、そのこと」
　ピュラの台詞せりふに、ノーラが大きくうなずく。
「大丈夫！　レンは口が堅い方だから！」
「あなたもそうあるべきですね、ノーラ」
　安心していいのかどうかわからない彼らの台詞せりふを聞いて、ブレイクはため息をついた。
「……いいえ。今日はわたしがうかつだった。気を使わせてしまってごめんなさい」
「あなたのせいじゃないわよ、ブレイク。あなたは人々を守ろうとしていたんだもの。少しついていなかっただけで……」
　ピュラがブレイクを慰める。その間、ジョーンはひとり浮かない顔をしていた。ルビーがそれに気づき、
「どうしたの、ジョーン？」
「実は……俺たちの他ほかにも一人いるんだ。ブレイクの耳を見たやつ」
　誰のことか、最初ルビーはわからなかったが、やがて思い出した。ビーチで、ジョーンとブレイクが助けたあのツナギ姿の子だ。それに、ウスコー・アンスロープとかいうＳＩＣのセキュリティ・スタッフも見たかもしれない。
　その場にいなかった他のみんなに、そのことを説明しようとした瞬間──レストランの明かりがすべて落ち、暗くら闇やみが襲った。
　ルビーは困惑とともに腰を浮かせる。停電？　事故？　もっと悪いこと？
　明かりが消えた瞬間の絹を裂くような悲鳴はどうやらジョーンらしいが、周囲の状況がまるでわからない。ノーラのいる方から、武器を構え

る気配とレンの慌て声が聞こえた。
「落ち着いて」冷静なブレイクの声。
「たぶん、演出だから」
　最初から彼女の意見を聞くべきだったとルビーは気づいた。ファウナスの瞳ひとみには、人間にはない暗視能力があるからだ。
　でも、演出って？　と疑問に思ったそのとき、天井のライトが灯ともって舞台を照らした。
　いつの間にか、幕が上がっている。舞台には虎や熊を模した十体ほどのドローンが、ずらりと並んでいた。
「え、何？　何これ？」
　ジョーンのつぶやきに答えるように、舞台に陽気な音楽がかかった。ドローンたちが一斉に顔を上げて、音楽に合わせて踊り出す。中に人間が入っているかのように、ときには二足歩行で、あるときは情熱的なステップで。
　どうやら、ドローンによるミュージカルらしい。舞台の上を、縦横無尽にドローンたちが踊り回る。ルビー、ヤン、ノーラ、ジョーンは突然始まったこの演目を楽しみ、ブレイクとレンは無表情で、ピュラは控えめの笑顔。ワイスはこれに一体どういう意味があるのかと困惑していた。
「あれ？」
　ルビーはふと気がつく。動物型のドローンたちのダンスに、いつの間にか人影が加わっている。機械ではなく、すらりとした生身の人間。
　照明が男の姿をはっきりと照らし出す。オールバックのブロンドと、顎あごを縁取るような髭ひげが印象的。歳はおそらく三十前後で、その背丈と広い背中で変形スーツを洒しゃ脱だつに着こなしている。左目はどういうわけか、仮面のような機械で覆われていた。
　巧みな足さばきをドローンと完全にシンクロさせ、激しく動き回って

いても体の軸はブレず、撫でつけられた髪はちっとも乱れない。よほど体幹の優れたダンサーらしい。
　キレのいいダンスを踊りながら、男はドローンたちを背後に従えて、荒々しくも軽快なステップで舞台の中央に躍り出た。脚を交差させ、両手を広げて叫ぶ。
「ようこそサパン島へ！」
「イェー！」ヤンとノーラがノリノリで拳こぶしを突き上げた。
　まばらな拍手の中で男は、ルビーたちに一礼し、豪快だが品のある笑顔を浮かべた。
「呼び立てておきながら遅れてしまい申し訳ない。私がＳＩＣのＣＥＯ、オード・フォートリーだ。どうぞ、よろしく」

◇

　オード・フォートリーは、最高経営責任者ＣＥＯという言葉からルビーが想像していたよりもずっと若かった。そしてノリも軽かった。上級管理職エグゼクテイブらしい余裕ある気品と、上級管理職にしてはたくましい体たい躯くを持つフォートリーは、気さくに舞台上から話しかけてきた。
「君たちがビーコンの学生だということは聞いている。その肩書きにふさわしい活躍で、人々を救ってくれたことも報告を受けている。君たちは我々にとっての英雄だ！」
「ビーコンの学生として、当然のことをしたまでですわ」
　手放しの賞賛を贈るフォートリーに、ワイスが答えた。なんでもない風を装っているが、声音と表情に隠しきれない誇りが滲にじんでいる。
「ああ、そこにおわすは、ワイス・シュニー。世界に冠するシュニーの名を持つ者が、この島を訪れておられるとはまこと汗顔の至り。我が社のもてなしに不届きがなければいいが……」
「不自由なく過ごさせていただいておりますわ、ミスター・フォートリー」
「それは何より」
　大げさな口ぶりの二人を見たノーラが「昔の映画みたい」とつぶやいた。
　時代がかったやり取りのあとでフォートリーは、蝿はえを追うような仕草と共につぶやく。
「獣ドローンはもういい、邪魔だ。さげろ、ミア」
『はい、ＣＥＯ』
　ルビーの耳が確かなら、その声はフォートリーの左目に装着された機械から聞こえたようだった。フォートリーの左眉まゆから頬ほお骨にか

けてを覆っていて、その表面は遠くからでも目立つような金色。本来、瞳ひとみがあるべきところには球形のカメラがおさまっていて、その縁取りが点滅すると舞台上のドローンたちが示し合わせたように舞台袖へと引き上げていく。
「ねえ、ワイス」ルビーが隣に話しかける。
「あの仮面、しゃべらなかった？」
「ええ。そのようですわね」
　どことなく期待するような眼まな差ざしで、ワイスはフォートリーの仮面と、おとなしく退場するドローンたちを見守っている。アトラスの企業経営者の一族として、異なる国の企業が持つ技術に興味があるらしい。
　舞台には一体だけ、虎型ドローンが居残っていた。フォートリーは後ろから振り返りもせずに声を張り上げて、指を鳴らす。
「イオナ！」
　レストランの玄関から、青緑色のツナギを着た少女が現れて、ジョーンはあっと小さく声を漏らした。虎型ドローンはイオナと呼ばれた少女の元に、のそのそと歩いていく。
　フォートリーは、やはりそちらを見もせずに指示を下した。
「命令に対する感度が鈍い。修正しろ」
「わかりました」
　ドローンを従えたイオナが立ち去るのを、ジョーンは首を伸ばして見送っている。
　そして、ワイスも同じことをしているとルビーは気づいた。
　声をかけようか迷っているらしいジョーンと違い、のどに何か引っかかっているような顔。
「どうしたの、ワイス？」
「わたくしの気のせいかもしれないのですけれど……あの子、どこかで

見たような気がして」
　結局、イオナは一度もこちらを見なかった。

「さて」と、フォートリーは改めて話しはじめる。
「君たちを呼んだ理由はいくつかあるが、まずは島の安全を守ってくれた礼を言いたい」
『社を代表して御礼を申し上げます』
　電子音声が言う。ノーラが手を挙げて「質問！」と叫んだ。
「なんだね、お嬢さん」
「その左目どうなってるの？」
「よくぞ聞いてくれた！」
　むき出しの右目を見開いて大声で言うので、驚いたジョーンが椅い子すの上でわずかに飛び上がった。フォートリーは左目を覆う機械を指さして、
「我が社が開発中の新型ウェアラブル・スクロールだ！　試作型であるため、まだ仮の名称だが私はミアと呼んでいる。直接身につけるこの新型スクロールは、もはや持ち運ぶ必要がない次世代型端末！　そして、専用のアプリを使うことで今までのスクロールには無かった機能を発揮する！　たとえば、暗くら闇やみでも見える暗視機能、視界に地図を重ねて表示するＡＲナビゲート機能、着用者のオーラ残量を表示することでハンターの任務をサポートする機能もあるぞ！　あなたの世界を広げるこの製品を、ぜひ体験していただきたい！　完成を乞こうっ、ご期っ待！」
　製品発表会さながらの、激しい身振り手振り……というよりダンスを交えて熱のこもった説明を繰り広げた後、ノーラに向かって腰をかがめ、完かん璧ぺきな営業スマイルを向ける。
「この説明でご満足いただけたかな、お嬢さん？」

「うん、だいたいわかった」
「カタログ、あげようか？」
「ううん、いらない」
「そうか」切り替えるように腰を伸ばし、高い位置からルビーたちを見下ろす。
「私は左目の視力が弱くてね。ミアには視力矯正の機能もある。これがないと色々不便なので、顔を隠す失礼は容赦してもらいたい。ところで先ほども言ったとおり、君たちを呼んだ理由の一つは礼を言うこと。そして、もう一つは――我々から君たちに頼みたいことがある」
　舞台上を軽やかに歩きながら話す仕草はとても自然で、壇上から話をすることにずいぶん慣れているのだろうとルビーは思った。それこそ、新製品の発表会とかで。
「まず、この島が置かれた状況から説明させてほしい。昨日のビーチでのグリム襲撃以降、島の近海におけるグリムの活動が活発化した。そこで、島内ほぼすべての施設を閉鎖してグリムの襲撃にそなえている。一言で言うなら、厳戒態勢だ。そうだな、ミア？」
『はい。あなたの命令は完かん璧ぺきに実行されています、ＣＥＯ』
「地図を出してくれ」
『了解しました』
　ミアのカメラ周りが淡く光ると、舞台の天井からスクリーンが下ろされて、島の地図が投影される。拡大されたのは港。
「ＳＩＣは何よりも優先して招待客の安全を確保している。そこで、船の安全が確保され次第、招待客を島から脱出させるよう手配を整えた。しかし、大型船はグリムの標的になる可能性が高く、これを使うわけにはいかない」
『乗員がパニックを起こした場合、さらにグリムを呼び寄せる危険があります』

「そこで使うのは小型船。公平を期すため、ランダムに選ばれた招待客から順次、島から出てもらう。港までは、ＳＩＣが責任を持って送り届ける。そして──」
　フォートリーは、改めてルビーたちの顔を見回した。
「──君たちが島から出るのは、一番あとになる」
「ええっ、なんで!?」と、ジョーンが思わず立ち上がった。立ち上がったが、そうしたのが自分だけだと知って気まずげに座り直した。
「どうしてか、落ちついて考えればわかることですわ」ワイスが言い聞かせるように告げる。
「この島にはグリムの危機があり、身を守る術を持たない民間人がいる。そして、わたくしたちはビーコンの学生で未来のハンター」
「つまり……グリムと戦う手伝いをしろって？」
　ジョーンがおそるおそる尋ねると、フォートリーはうなずいた。
「私たちの保有する兵器と動かせる人員すべてを使えば、招待客の乗る船を守り、全員を島から逃がすことはできる。だが、対処すべきグリムがいるのは海だけじゃない」
『島の内部には、グリムが生息している地区が存在します』
　スクリーンの地図映像が切り替わる。島の中央の湖に視点は移り、湖の中に浮かぶ島が拡大された。島の中の湖と、そこに浮かぶ湖中島。立ち入り禁止区域を示す赤色に染まっている。
「湖に浮かぶ、この島だ。私の前任者はここに生息するグリムを観察し、グリムをコントロールする研究をしていたらしい」
「荒唐無む稽けいな研究ですわね。それができたら、ハンターは必要ありませんもの」
　ワイスの言葉に、フォートリーはうなずいた。
「私も同感だ、ミス・シュニー。前任者がどこまで本気だったのか今となってはわからないが、この無謀なプロジェクトのためにＳＩＣはずい

ぶん良くない噂うわさを立てられた。結局、グリム・コントロールの研究は廃棄されることになったが、グリムそのものは野放しになっている。君たちに頼みたいのは、ここのグリムへの対応だ」
　映像が変わり、森の中を蠢うごめく黒い影が映し出される。
「昼間の騒ぎで、グリムの活動が急激に活性化した。部下の試算によれば、このまま放置した場合、三日もしない内には湖を渡り、人を襲うだろうとのことだ」
　フォートリーは後ろに手を組み、舞台の中央、最前に進み出る。
「明日から私たちは、招待客を船に乗せて大陸へと帰還させる。海からの襲撃には万全の態勢で備えるが、この島内のグリム生息地域にも目を配っておきたい」
「わかった！　あたしたちが、そこに行ってグリムを全滅させよう！」
「ノーラ。気が早すぎます」
「え、違うの？」
「いいや」フォートリーはニッと笑う。
「あながち間違いでもない、お嬢さん。私の望みは、君たちがこの場所にいるグリムに打撃を与えてくれること。全滅させる必要はないがグリムの数を減らし、この湖から外に出ようという気を起こさせないようにしてもらいたい」
　舞台の縁に立ち、真剣な表情でルビーたちを見下ろす。
「これは、ＳＩＣから君たちへの依頼だ。報酬も用意してある。ただし、それ以上に私は、未来のハンターである君たちの勇気に期待している。どうか、協力してもらいたい」
　依頼、と聞いてルビーは腹の底から熱がわき上がってくるのを感じた。自分たちの力を借りたいと、依頼をしたいという人がいる。まるで、本当のハンターみたいだ。
　ルビーは立ち上がり、チームを代表して答えた。

「わかりました。わたしたちも協力します。力を合わせて──」
「いいこと考えた！」と、ヤンがいきなり大声を出す。姉の横槍やりに、ルビーの目が点になる。
「ワイス。決着はここでつけようじゃないの。どっちのチームのスコアが上か勝負しようじゃん！」
「……スコア？　勝負？　あらあら、面白いことをおっしゃいますわね、ヤン」
　二人が立ち上がり、テーブル越しににらみ合う。ヤンがワイスを見下ろす形だが、眼力ではワイスもまったく負けていない。
「そこまで敗北をお望みでしたら、そのとおりにしてさしあげますわ。徹っ底的に」
「ぜひお願いしたいね。やれるもんならね」
　また始まった。ルビーは二人の間に割り込もうと、テーブルに身を乗り出す。
「二人とも、今はケンカしてる場合じゃないでしょ。島がたいへんなのに……」
「おや、競争か？　グリム狩りの？　面白い！」フォートリーまで、そんなことを言い出した。楽しいショーの開催を聞いた観客の喜び方だ。
「湖の島をコロシアムにして、若き戦士たちが凶悪なグリムをどれだけ多く殺せるかを競い合う……いいじゃないか！　非常にグッとくるアイデアだ！」
「よし決定！」とヤンが拳こぶしを叩たたき、「よろしいですわ」とワイスが腕を組む。「えぇー……」と、ルビーだけが困惑している。
「いいだろう！」フォートリーは強く手を叩いた。
「実行は明日。湖を渡る船で君たちを送り届けることになる。私も同行しよう。どうせ、招待客の最後の一人を安全に帰すまで私はこの島から離れられないしな。で、何か質問はあるかな」

ジョーンがおずおずと手を挙げた。
「えー、この島にいるっていうグリムについてなんだけど……それって凶暴？」
「凶暴じゃないグリムなんているのか？　どう思う、ミア」
『どこかに存在する可能性はありますが、それはこの島ではありません、ＣＥＯ』
　やっぱりね、とジョーンが消沈する。代わって、今度はワイスが尋ねた。
「もしも脱出が遅れた場合、この島の食料や物資はどれくらい持ちますの？」
「その点に関しては、君たちはまったく心配しなくていいと保証しよう。ミア、説明を」
『島内には生産プラントを初めとする食料製造施設が存在し、生活必需品も数年先までの在庫を確認しております』
「そのとおり。この島のすばらしさが君たちに伝わったなら、これほど嬉しいことはない」
　そのとき、レストランの玄関から数人の男たちが入ってきた。全員が制服で、先頭を歩く男にルビーは見覚えがある。ビーチで出会った警備主任──ウスコー・アンスロープだ。足早に舞台へと近づき、舞台上のＣＥＯに呼びかける。
「ＣＥＯ。そろそろお戻りください。明日の用意もありますので」
「ああ、そんな時間だったか」
　フォートリーは舞台から飛び降りた。レストランの玄関に後ろ歩きで向かいながら、顔はこちらに向けてベラベラ喋しやべり続ける。
「レストランとホテルのサービスは自由に利用してもらって構わない。ケチなことは言わない、好きなだけ食べて飲め。ただし、徹夜で騒いで明日の依頼に響くというのでは困るからほどほどに。とにかく、今晩は

明日に備えて英気を養ってくれ。それじゃあ明日、迎えをよこす」
　適当な辞去の挨あい拶さつを済ませると、フォートリーはくるりとこちらに背を向けてレストランを後にした。あんな落ち着きのない大人が普通にいるとはルビーには驚きだった。ビーコンのウーブレック先生……もとい博士くらいなものかと思っていた。
「よっし！　ルビー、ノーラ、レン！　作戦会議するよ！」ヤンの腕に乱暴に抱き寄せられた。ヤンは妹の頭を小脇わきに抱えて、
「ねえ、リーダー。どういう作戦がいい？」
「みんな元のチームにもどればいいと思う」
「却下。ノーラはどう？」
「あたしがグリムの群れにつっこんで、みんながあたしのサポート！」
「採用。それでいこう」
　姉に首を抱えられながらルビーは、リーダーって何だっけと考えていた。

　サパン島で招待客に開放されているエリアは、瓢ひよう箪たん形をした島の南半分だけだった。
　瓢箪のくびれに位置する湖は立ち入り禁止区域であり、その北側にある研究施設へは湖か海を船で渡るしかない。グリムを閉じ込めるだけでなく、企業秘密を守るために、あえて橋をかけていないのだという。
　ルビーたちにグリム退治を依頼したその次の日。湖を渡って湖中島を目指すフェリーのスカイデッキでフォートリーは、昨日と変わらない大げさな身振りと共にそう説明した。
「あの島のことを、私たちは檻ケイジと呼んでいる。危険な猛獣が外に出ないよう、閉じ込めるための檻おりだ。そうだな、ミア」

『はい。的を射た名前です、ＣＥＯ』
「檻……猛獣の檻……」
　血の気を失ったジョーンが、ノイローゼじみた口調で繰り返した。
　ヤンは暢のん気きな口調でつぶやく。
「猛獣に餌えさをやるハメにならなきゃいいけど」
「餌……猛獣の餌……」
　船の屋上といっていいスカイデッキでは、湖の景色を３６０度見渡せる。曇くもりがちな空の下、湖にはうっすら霧が出ていて見通しは悪い。
　そんな霧がかった景色の中で、森の塊をそっと浮かべたような島が見えてくると、手すりを握るジョーンは落ち着きを失いつつあった。そんなジョーンの肩に、ピュラが手を置く。
「学校の授業でもグリムとは戦ったでしょう？　昨日も活躍したじゃない。自信を持って」
「わ、わかってるけど、これっていつもの状況じゃないだろ？　昨日見た奴らは学校の近くのグリムとは種類も違ったし、それに凶暴だって話で……うぅ、吐き気がしてきた」
「それは、ただの乗り物酔いではありませんこと？」
　ワイスが言う。ジョーンの様子を見て、チームのフォローをすべきだと感じたらしい。
「心配する必要はありませんわ。わたくしの指示に従っていれば安全ですもの。フォーメーションは昨日と同じ。わたくしとジョーンが本陣、ピュラとブレイクは遊撃をお願いできますかしら」
「わたしはいいけど……ジョーンは大丈夫？」
　ピュラが尋ねるとジョーンは明らかに青い顔で、しぶとく白い歯を輝かせてみせる。
「あ、ああ。ワイスが俺にそばにいてほしいって言ってるんだから、そ

れに応えなくっちゃな」
「……まあ、解釈は自由ですけれど」
「まかせてくれ」
　精一杯の力で親指を立てるジョーンの背中を、ピュラがさすってやっている。やれやれ、といった表情で立ち去るワイスに寄り添ったブレイクが、小さな声で言う。
「めずらしくジョーンに寛大ね」
「どういう意味ですの？」
「一番戦力に不安のある人間を前に出すわけにはいかないからだ、ってはっきり言わなかった」
「ええ。だってわたくし、彼には興味がありますもの」
　ブレイクは意外そうというより、気の毒な人間を見る目をした。あわててワイスは補足。
「ピュラが言っていたでしょう？　ジョーンには、リーダーとして見るところがあるそうですわ。わたくしの知らないリーダーの素質……そういうものがあるというならわたくしは、それを近くでじかに見て、学びたい」
「……つまり、自分の成長のためね」
　容赦ないブレイクの指摘に、ワイスは少しふくれる。
「自分勝手だと言いたいのでしょう。わかってますわよ」
「いいえ、別に。初対面のときと比べて、すこし変わったとは思ったけど」
　ブレイクが久しぶりに微笑ほほえんだ。笑顔の理由がわからないワイスは首をかしげている。
「何の話してんの？　あたしも混ーぜてっ」
「わたしも！」
　ルビーとヤンが乱暴に割って入ってきて、ブレイクの肩に腕を回す。

一度に二人からまとわりつかれて、貴重なブレイクの笑顔が消えた。
「どう、ブレイク？　楽しんでる？　ワイスが仕切ってるチームって退屈じゃない？　今ならあたしたちのチームに入れてあげてもいいけど」
「ヤン。ブレイクはわたくしのチームですわよ」
「みんな同じチームだよ」と、ヤンの反対側からルビーが言った。
「よそのチームメンバーを勧誘しちゃいけないわけじゃないでしょ」
「ハンターのチームは四人で一つ。常識ですわよ」
「わたしたちはもともと四人ひと組のチームだよー」とルビーが粘り強く言う。ブレイクは、人から構われすぎて機嫌が悪くなった猫みたいな顔になっていた。
　ふと、ルビーが顔を上げる。船がゆるやかに速度を落とし始めたことに気づいたのだ。
　それまで、デッキの端から船の運行を見守っていたフォートリーが華麗なターンで振り返る。
「もうじき到着だ。グリムどもにダンスを踊らせる準備をしてもらっても構わないかな？」
「もちろん。すぐに上陸の用意をいたしますわ」
「よっし、ノーラ！　レン！　ルビーも、行くよ！」
　ワイスは仲間たちと連れだって階段を下りていく。
　舳へ先さきから湖を眺めたり騒いだりしていたレンとノーラも、ヤンと合流してスカイデッキから去った。結局、変則チームアップのままだ。
　みんなから少し遅れて階段を下りようとしたルビーだったが、ふと足を止めた。階段を上がってくる数人のスタッフの存在に気づいたからだ。
　彼らは一つの大きなケースを担いでおり、デッキに上がってくるとそれを置いて、中のモノを取り出し組み立て始めた。ルビーの、マニアの

勘が告げる──あれは、きっと武器だ。
　ルビーはスタッフの背後にそおっと忍び寄り、組み立て中の機械を盗み見る。
　次第に組み上がっていくそれは、ひと抱えもある大砲だった。砲口からは三本の爪が伸びていて、見た目からして攻撃的。
　その細部をよく観察しようと背伸びをしていると、背後からいきなり話しかけられた。
「武器に興味が？」
「うわあ！　ゴメンナサイ！」
　振り返れば、金色に輝く機械に半分覆われた顔が、ルビーを見下ろしていた。フォートリーは穏やかに微笑ほほえんで、
「構わない。好きなだけ見ていくといい。これはグリムの群れに対抗するために用意させたもので……ミア、彼女にあの武装の説明を」
『まだ公開されていない情報ですが』
「構わない」
『はい、ＣＥＯ。この試作兵器は現代の大型火砲としてはめずらしい、撃鉄ハンマーの直接打撃から始まる機構でダストを圧あつ搾さくし、生じたエネルギーを放出します。アタッチメントにより高い対応力を持つ個人兵装としてデザインされましたが、発射には専用弾が必要となるため、生産コストの課題がまだ解決されていません』
「それは余計な情報だ」
『申し訳ありません。ＣＥＯ』
　ルビーはミアの説明を聞きながら、食い入るように武器の組み立てを見つめている。スタッフも少しばかりやりにくそうだった。
「ところで私からも君に尋ねたいことがあるのだが、ルビー・ローズ」
　フォートリーが名を呼んだ。名乗ったっけ、とルビーは思ったが、島に来るときの書類に署名した記憶はあるし、招待客名簿もあるはずだ。

「ひょっとして君はチームのリーダーなのかな？」
「なんでわかったの⁉」
　驚いたルビーに、フォートリーはニッコリ笑いかけ、
「君からリーダーの風格が感じられたからだ」
「ホントに⁉」
「すまない、今のはお世辞だ」
　ルビーはがっくりと肩を落としたが、フォートリーは気にした様子もない。
「正直に言えば、誰がリーダーかは集団を観察していれば自然とわかるものだ。君は個性的な仲間たちをコントロールしようと試みていて、あまり上う手まくいっていない」
「……はあ」
　初対面の人間にも、そういう風に見えていたのかと知って少し落ち込む。
「企業のトップである私からアドバイスをするなら、君はもっと自分自身の力を信じるべきだ。人間には生まれ持った本分、資質というものがある。それを活かすも殺すも君次第」
　ルビーは手すりに体をあずけて考え込む。自分の資質って、どうすればわかるものなんだろう。
「私はそれを環境から学ぶことができた」フォートリーはルビーの隣で手すりにもたれかかる。
「母は私を愛してくれたが、彼女の三人目の夫がろくでなしでね。よく私と母に暴力を振るったものだ。あの男の振る舞いに黙って耐えることをやめて戦いを挑んだとき、私は自分の資質と、困難に立ち向かうことの価値を知った。あのとき、ようやく私の人生が始まったんだ」
「やっつけたの？」
「いいや。その結果がこれだ」自分の、機械で隠した左目を指さす。そ

ういえば昨日、左目だけ視力が弱いと言ってたっけ。
「しかし後悔はしていない。この傷のおかげでそれまで受けてきた暴力が表沙ざ汰たになり、私と母はそいつから自由になることができたんだからな。自分の力を信じ、脅威に勇気をもって立ち向かうこと。これが人生を切り開く鍵かぎであり、自分にはそうする力が──資質があると学んだ」
　感慨深げに言って、フォートリーはルビーに右目と左のカメラを向ける。
「君の場合は教師から学ぶことができるだろう。オズピン教授からは教わらなかったのか？」
　ビーコン・アカデミー校長の名前が出てきて、思わず大声が出る。
「オズピン教授を知ってるの？」
「私のような立場の人間には、思わぬ人脈があるんだ。オズピン教授は一流のハンターであり、最高の教育者だ。理想的なリーダーとも言えるだろう」
　うんうん、とルビーは同意を込めてうなずいた。彼女にとってオズピンは恩師である前に憧あこがれのハンターでもある。
「チームのリーダーを決めたのはオズピン教授なのだろう？　なら、君にはその資質がある。人をまとめ、率いる資質だ。君に足りないものがあるとすれば、自分を信じる力だけだ」
　フォートリーの言うとおり、ルビーをリーダーに任命したのは、ほかならぬ学長のオズピンだ。ルビーが、自分が本当にリーダーにふさわしいのか悩んだときに、その役割とどう向き合うかを教えてくれたのも学長だった。
『上陸ボートの準備が完了したようです、ＣＥＯ』
　フォートリーの左目を覆うミアが、電子音声で知らせてきた。フォートリーのそれまでの真しん摯しな態度が消えて、元の落ち着きのない陽

気さがもどる。手すりから跳ねるように離れた。
「ショーの始まりだな！　君たちの働きに期待させてもらおう、リーダー！」
　慇いん懃ぎんに言ってお辞じ儀ぎをする。ニッと笑いかけて、ルビーは階段を下りていく。
　タメになる話を聞かせてもらった気がする。でも、変な人だ。
　会社の偉い人とかその一族ってみんなそうなるのかな、などとルビーは、口うるさいチームメイトの姿を思い浮かべた。

「おい、イオナ、おい！」
　工具箱を抱えて船内の廊下を歩いていたイオナは、何度も呼ばれてようやく立ち止まった。
　見れば、ジョーン・アークが廊下の角から頭だけ出して、手招きしている。
「何してるんですか、こんなところで」
「ちょっと、ちょっとこっち！」
　イオナはおとなしく従った。
「実は口止めしておきたいことがあるんだよ。昨日のビーチのことで」
「ジョーンさんがグリムに追いかけられて涙目になってたことですか？　それでオシッコ漏らしかけてたこと？　あるいはすでに漏らしてました？」
「漏らしてない！　ブレイクのことだ。あの、リボンの下にある耳を見ただろ？　あれ、絶対に人に漏らさないでくれ。いいな？　大丈夫？　ＯＫ？」
「わたしは口が堅い方ですよ。わたしは、ね」

イオナは意味を含めて言ったつもりだが、ジョーンは気づかなかったらしい。
「俺も、ブレイクがファウナスだなんて知らなかったから、本当にびっくりしたよ。最初はアクセサリーか何かだと思ったんだ」
「……わたしも驚きました」
「イオナ？」
　ジョーンが首をかしげる。イオナはさりげなくジョーンから目線を外し、廊下の様子を横目にうかがった。そこに小さく丸い影があることを確認したイオナは、工具箱を床に置いてポケットからコインを取り出した。
「また、勝負でもしましょうか。赤か白か。女王クイーンか道化師クラウンか」
「勝負って……何の？」
「そうですね」イオナは床に置いた工具箱を見下ろした。
「荷物が重くて困ってたんです。わたしが勝ったら、これを運んでください。あなたが勝ったら、いいことを教えてあげます」
「……？　そんなことしなくても手伝うけど」
　ジョーンの言葉を待たずイオナがコインを弾はじき、手の甲で受け止めた。
「どっちです？」
「じゃあ、今度は白い道化師クラウン」
「はい」手を開いてみせる。
「残念。クイーン・アップルでした。わたしの勝ちです。さっさと運んでください」
「……なんなんだ、まったく」
　ジョーンが工具箱に手を伸ばしたとき、イオナが手からコインをこぼした。それを拾おうとしたジョーンとイオナの顔が近づき、イオナはす

かさずジョーンにささやいた。
「あのファウナスの人から絶対に目を離さないでください」
「へ？　それってどういう……」
「それと、これからは迂う闊かつに話しかけないでください。わたし、監視されてます」
　コインを拾ってイオナは立ち上がる、何食わぬ顔で、
「わたしがコインを落としちゃったんで、今の勝負はノーゲームでいいですよ。それじゃ」
「イオナ？　おい、今の、どういう……」
　答えずに、工具箱を胸に抱いてイオナはその場を後にした。
　小型ドローンが数体、トコトコと四つ足を交互に動かして前方からやってくる。
　アライグマ型──作業用ではなく愛あい玩がん用を目指して試作されたタイプ。曲線が多く、大きな鼻とつぶらな瞳ひとみが愛らしいデザインだ。
　イオナがジョーンと話をし、勝負している間、彼らが廊下の隅でじっと待機していたことをイオナは知っている。
　ドローンの群れはイオナとすれ違うと、数体がＵターンしてイオナを追ってくる。他ほかのドローンも、廊下を巡回してまたイオナの目の前に現れるだろう。この船内ではイオナがどう動こうと、いずれかのドローンがイオナの姿をカメラに捉とらえ続けている。
　ジョーンが助けになってくれるだろうか、と一瞬抱いた期待を、イオナはすぐにかき消した。
　頼れるのは自分だけ。味方はいない。敵はこちらを怪しんでいる。
「…………」
　赤と白のコインを握りしめて、イオナは焦りを噛かみ殺していた。

◇

　島の中にある島、フォートリーが言うところの檻ケイジ島は、上陸してみると外から見たときよりも広く思えた。島のほとんどすべてが森で覆われて、見通しがきかないせいだ。
「ついてませんわね。こまめに方角をチェックした方がよさそうですわ。……ちょっと、聞いてますの、ルビー？」
　言ってから気づいて、ワイスは口を押さえた。今はチームが異なることを忘れていたのだ。
「慣れないわね、みんな」と、ブレイクが静かに言った。
　ジョーンとピュラは、二人の後方を歩いている。ジョーンの歩みが遅れて、ピュラがそれに付き合ってやっているためだ。
「い、今なんか音がしなかった？　わぁっ、ぬかるみにハマった！　ひぃっ、服に変な虫がついてる！　助けてピュラ！」
　森の中を歩くワイスたちは、ジョーンの悲鳴をＢＧＭにしている。静まり返った森に、それはそれはよく響いた。
「この調子だと、グリムの方からわたしたちを見つけて襲ってくるでしょうね」
　ブレイクがつぶやいて、ワイスは同意のため息をもらす。
「でも、道があって助かりましたわ。専用の装備もなしに、森を切り開きながら進むことになるかと思っていましたから」
　四人の行く手には、舗装や整備こそされていないものの、草木のないむき出しの地面が森の奥へと続いている。ピュラは霧の向こうに目をこらしつつ、
「前のＣＥＯがこの島でグリムの研究をしていたと言っていたけど、そのときのものかしら」
「それにしては最近も使われていた形跡があるわ」

一行を先導するブレイクが言った。その後ろにワイスが続く。最後尾をピュラが守り、彼女の前をジョーンがおっかなびっくり歩いている。
　時折、ブレイクは立ち止まってリボンを傾ける仕草をしていた。ファウナスであることが知られた今も、リボンをほどくつもりはないらしい。
　そんなブレイクが、ある地点でまた立ち止まった。それまでと違うのは、背後の三人に「しっ」と沈黙を命じたことだ。
「……何かいる」
　ピュラとワイスは静かに武器を構えた。ジョーンは最初から盾たてを抱くように構えている。
「こちらに気づいていますの？」
「わからない。でも、近づいてきてる。一体や二体じゃない……群れかも」
　ブレイクも、背中から剣を抜いた。ワイスは即座に脳内で作戦を組み立てる。
「こちらが先手をとりますわよ。ブレイク、斥せつ候こうを」
「待って」
　ブレイクが少しだけ歩いて立ち止まり、地面を指さした。霧に隠されていたものを見つけて、ジョーンが首をかしげる。
「……線路？」
　そうとしか言いようのないものが、道を横切っていた。平行に並ぶ二本の鉄のレールが、森の中から飛び出して、森の中へと消えている。
「こんなところに駅でもあるのか？」
「これも、ＳＩＣが昔に設けたものなのかもしれませんわね」
「列車にしては線路の幅が小さいわ」
　ピュラが指摘したとおり、線路の幅は普通の列車の半分ほどだった。
「これくらいの軌間となると、使われるのは……」

「来るわ」黒いリボンがぴくりと動いて、ブレイクが左手の方角を見る。
「何か、たくさん……みんな、下がった方がいいみたい」
　木々と霧の中から、黒い獣がひとかたまりになって飛び出してきた。人狼型のグリム──ベオウルフ。決してめずらしい種類ではなく、ビーコンの周囲でも見られるグリムだ。
　人間に対して無限の殺意と敵意を持つはずのグリムの群れは、なぜか目の前の四人にはまるで興味を払わなかった。ベオウルフの群れは線路上を走る何かを取り囲んで併走していて、牙きばを剥むいて威い嚇かくし、吼ほえ立てている。
　線路から伝わる地響きで、四人はベオウルフたちに襲われているものの正体に気がついた。
「トロッコ!?」
　四人が飛び退のいた線路上を、グリムに取り囲まれたトロッコが通過していく。ちょうどジョーンたちの目の前で、一体のベオウルフが爪を振りかざしてトロッコに飛びかかった。
　その黒い影を迎え撃つのは、トロッコの縁に足をかけたオレンジ色の髪の少女。
「高めの甘い球～♪」
　肩に担いだ武器はマンヒルド──グレネードランチャーから変形させた戦鎚ウオーハンマー。内部にはランチャーの機構がそのまま内蔵されており、鋼の塊がベオウルフの体を叩たたいた瞬間、グレネードが炸さく裂れつ──ベオウルフの上半身を粉こな微み塵じんにした。
「ホォームラァァー……ン……！」
　楽しげな声が後を引いて、トロッコは森の中へ消えていく。ノーラだけでなく、大鎌と拳銃の閃ひらめき、豊かな金髪が揺らめくのが見えた。

◇

　幸いなことに、工業用トロッコには四人が武器を振り回せるだけの広さがあった。
　ダストを燃料とする推進装置があり、ブレーキもある。背の高い手すりは、グリムの侵入を阻む盾たてにもなる。そういう理由から、「トロッコでグリムを轢ひきまくろう」というヤンのアイデアは今のところ上う手まくいっていた。どちらかというとトロッコというより、移動要よう塞さいだったが。
　まずはノーラが派は手でな武器と騒がしさで敵を引きつけ、片っ端から殴り飛ばす。その威力はまさに一撃必殺で、グリムたちは抵抗する暇いとまますら与えられずに黒煙となっていった。
　彼女の死角からトロッコへの侵入を試みるこざかしい敵には、小回りのきくヤンとレンが対応する。拳銃の密着射撃と刃ブレードがグリムを引き裂き、籠こ手てをまとった拳こぶしがたたき出す。
　この布陣をベオウルフたちが攻めあぐね、トロッコを取り囲んで併走するだけになると、遊撃兵──ルビーの出番だ。
「よっと」
　トロッコの手すりを蹴けって宙に舞う。地を走るベオウルフは、空から振り下ろされる大鎌への対応が遅れる。大鎌が閃ひらめいた瞬間、ベオウルフの首が二つ飛んだ。
　ルビーはグリムの首を刈り取りながら鎌の柄に足をからめ、引き金を引く。発射された銃弾は別のベオウルフを頭から胴体まで貫き、同時に発生した反動はルビーのセンブランスによって加速され、彼女の体をトロッコの元へと運んだ。センブランスでこぼれたバラの花びらが、首を刎はねられ黒煙と化すグリムの死体の上に降る。

グリムの群れの統率が乱れた。逆上した数体のベオウルフが襲撃の気配を見せたが、今度はヤンとレンが身を乗り出して銃撃し、グリムの群れを牽けん制せいする。
　二人がグリムの相手をしている間、ルビーとノーラは次の攻撃の準備中。
　弾を込めるルビーに、ノーラは戦果を自慢していた。
「六打席六本塁打！　打率十割！」
　ルビーはトロッコから顔を出して、通り過ぎた景色に目をこらしている。
「ねえ、さっき森の中にワイス達いなかった？」
　銃声がやんだ。しかし、レンとヤンはトロッコの後方に目を光らせている。ルビーは姉の服の裾すそを引いてたずねる。
「ヤン、どうしたの？」
「群れが射程の外まで引いた。木を盾にしながら走ってる」
　それを聞いて、ノーラがマンヒルドをグレネードランチャーに変形させた。
「じゃあ、あたしが森ごと焼き払う！」
「火事になって燃え広がりでもしたら手がつけられませんよ」
　レンの指摘に、ヤンもうなずいた。
「島を焼け野原にしたら、さすがにあのＣＥＯも怒るかもね」
「トロッコを勝手に使用したことでまず怒るかもしれませんが」
「待って」ルビーが銀色の目をこらし、木々の奥を見つめる。
「何か、別のものがきてる」
　森と霧の中を走る影が、次第に濃さを増した。ベオウルフよりも大きな体格のグリムが数体、霧煙る森からあふれ出てくる。
　その姿は、熊によく似ていた。背中には白い棘とげと岩のような甲殻が生え、四つ足でトロッコを追いかけてくる。フッ、フッ、と荒い息が

トロッコの中まで聞こえてきていた。
「アーサー！」
　ヤンが、グリムの名を仲間に警告した。
　太った熊そっくりのグリム、アーサーはベオウルフと同じく、めずらしい種類のグリムではない。ルビーたちも今までに何度も戦い、仕し留とめてきた相手だ。
　しかし、アーサーはベオウルフにはない巨体と、それに見合ったパワーを持つ。車ぐらいなら前足で簡単にひっくり返すし、体当たりでスクラップにすることもできる。
　不安定な乗り物に乗っているときに会いたい相手ではなかった。
「近づけさせちゃダメ！　撃って！」
　ルビーの指示の下、アーサーの群れに向けて一斉射撃が始まった。
　数体のアーサーと、追走のベオウルフが弾幕を受けて即死。しかし、特に大きな体のアーサーが砲火を耐え、トロッコに近づいてきている。
　一発の威力はないが連射が得意なレンの武器と、一撃で大勢を巻き込むノーラの武器。この二つはルビーの計算を狂わせた。彼らの射撃の癖も知らないし、リロードのタイミングもよくわからない。射撃のリズムが合わず、効果的な弾幕を張れない。
　即席のチームアップの難しさを、ルビーは今ごろ噛かみしめていた。ルビーがセンブランスを使ってなんとかこなした空中戦、あれだって本来ならブレイクの役目だ。ブレイクなら、俊敏な身のこなしでトロッコと敵の間を行き来して、群れを難なくズタズタにしていただろう。
「いけませんね」
　レンが言い、ルビーも地形の変化に気がついた。線路が渓谷にさしかかっている。線路の両脇わきは崖がけのような急斜面で、立ち上のぼる霧のおかげで底がしれない。
「このままでは、トロッコごと滑落する危険があります」

急いで片付けないといけないのに、揺れるトロッコからではうまく急所を撃ち抜けない。あの大物を確実に仕留めるなら、やはり近接攻撃だ。
「ヤン、レン、二人は邪魔なベオウルフをどかして！　ノーラはわたしと飛んで！」
　指示を受けたヤンとレンがうなずき、ノーラも「いーよ！」と武器をハンマーに変形。
　ヤンは腰を低く落とし、拳こぶしを腰だめに構える。
「レン、高いところは平気？」
「問題ありません」
　無表情に答え、レンはヤンの腕に飛び乗った。靴底が触れるや否や、ヤンはその豪腕をもってレンの体をトロッコの上空へと押し上げる。
　トロッコを眼下に見下ろす高見から、レンは地上に向けて二丁拳銃を掃射──銃弾の雨がベオウルフたちを打ちのめし、アーサーの動きも鈍らせた。
　ルビーとノーラはうなずき合うと同時に手すりを乗り越え、飛び出した。二人の狙ねらいは同じ、トロッコのすぐそばまで迫っていたアーサーの一体。
　アーサーの左から、クレセント・ローズが白い甲殻の間にすべり込んだ。大鎌の刃が太い胴を完全に断ち切る。
　アーサーの右から、マンヒルドが横っ面にハンマーを打ちつける。頭部を覆うヘルメットのような甲殻がへしゃげ、木こっ端ぱ微み塵じんに砕いた。
「やった！」
　左右から打ち込まれた武器に挟まれたアーサーは、ひとたまりもなく黒煙へと変わり──二つの武器が空中でぶつかった。
「え？」

「ありゃ？」
　大鎌の刃とハンマーの錘おもり、二つが絡み合う。たまらず、二人は空中でバランスを崩くずした。
「ルビー！」
「ノーラ！」
　ヤンとレンが仲間の名を呼びながら手を伸ばす。しかし、どちらも到底とどかない。
　鎌とハンマーは地面に落ちる前にほどけて、ルビーとノーラも分かれて地面に落ちる。二人はそれぞれ、別の斜面をまったく違う方向へ転げ落ちていった。

「駄目ですわね。ネットワークへのアクセスができないようですわ」
　森の中の道を歩きながら、ワイスはスクロールを閉じた。ピュラも自分のスクロールが通信できなくなっていることを確かめている。
「本当。でもワイス。ヤンに連絡をしてどうするつもりなの？」
「もちろん、トロッコの使用に抗議するつもりですわ！　レギュレーション違反！」
　ヤンに出し抜かれたことを、ワイスはまだ悔しがっている。
　あれから森をさまよってみたものの、数体のグリムと遭遇して倒しただけで、ワイスの満足いくスコアは稼げていない。
　そもそも、倒したグリムの数をどうやって比べるつもりなのだろう、とブレイクは不思議に思っていたのだが、グリムを倒すたびにスクロールに触れるワイスを見て謎なぞが解けた。仕し留とめたグリムの数と種類、大きさまでをいちいち記録しているらしい。
　ずいぶんマメなことだとブレイクは思う。あのヤンが几き帳ちよう面

めんにスコアを記録しているとは、到底思えないのだが。
「待って」先導していたブレイクが、手を挙げて仲間を立ち止まらせた。霧はどんどん濃くなってきている。その向こうから聞こえる音に合わせ、リボンが細かく動いた。
「いるわ。近づいてきてる」
「ブレイク、敵の数は？」
「１。足音の軽さからして、小型ね」
　ワイスは露骨にがっかりした様子を見せたが、ピュラは黙々と盾たてと槍やりを構え、ジョーンはややへっぴり腰で盾を突きだした。周囲に目を凝らしながら、
「なあ、どこから来るかだけ、先に教えてくれない？」
「静かに」
　ジョーンを黙らせて、ブレイクは聴覚に集中する。音の主はまず人間ではなさそうだが、今までのグリムとは何かが違う。
　その違和感の正体がわからないまま、４人は霧の中から襲撃を受けた。
　霧を裂いて飛び出した影に向けて、ブレイクが発砲。しかし、敵はブレイクの予測とは異なる変則的な動きで銃弾を避け、迫る。
「下がって！」
　ピュラがジョーンをかばい、盾でグリムの突進を防ぐ。同時に突きだした槍は空を切っていた。グリムは、ピュラの盾を蹴けって再び霧の中に戻っている。
「……速い」
　ブレイクが思わずそうつぶやくほどのスピードで、スコアが稼げないことに落胆していたワイスも表情を引き締める。
「今の……ベオウルフよりも一回り小さい、狼おおかみのような姿でしたわね」

「グリム？　グリムだった？　本当に？　見間違いじゃない？　見間違いかもしれない」
　そうだと言ってくれとでも言いたげな口調でジョーンが言うが、一瞬でも間違えようもない。白と黒の肉体、紅い瞳ひとみ。
　霧の中から再び影が飛び出した。
　今度は、地を這はうほど低い位置を走り抜けてくる。ブレイクは飛び上がってかわしざま、剣で斬きりつけたが、またしても奇妙な動きでかわされる。
　ワイスがミルテンアスターを振り上げた。剣先から冷気が迸ほとばしり、周囲を一瞬で凍結させた。
　しかし、そのときにはグリムはすでに地上にはいない。木の幹をするする登って枝にたどり着くと、枝から枝へと飛び移って霧の中に姿を消した。
「ブレイク！」
「まかせて」と、応じたブレイクは樹上に飛び上がって枝を掴つかみ、グリムを追った。地上では、ワイスたちがブレイクの姿を目印についてきている。
　しかし、地上と樹上の同時追跡はあまり上う手まくいかなかった。地上では藪やぶが生い茂って、切り開かなければまともに進むこともできないのだ。そして、案の定ジョーンが服やら盾たてやらを枝に引っかけたり足をとられて転んだりして騒いでいる。
　あのグリムを狩るのは、かなり難しそうだ。
　そう思ったブレイクが前方に視線を戻し──目を疑った。グリムが枝の上で立ち止まっている。ブレイクが追ってくるのを待っているかのように、紅色の瞳ひとみをこちらに向けていた。
　強烈な違和感を覚える。あんなグリムは、今まで見たことがない。
「ワイス」ジョーンを助け起こしている地上の仲間に、ブレイクは呼び

かけた。
「あいつを追ってみる。余裕があれば、ついてきて」
「え？　ちょっと、ブレイク！」
　ワイスの制止も聞かずに、ブレイクは木の幹を蹴けってグリムに迫る。途端、グリムは身をひるがえして逃げ出した。そして、充分に距離をとってから、またブレイクの方を向く。
　やはり、妙だ。人類に対する殺意の塊のようなグリムやつらが、こんな回りくどい真ま似ねをするなんて。
　枝を蹴ってさらに別の枝へと飛び移り、ジャガーのように移動してグリムを追う。ブレイクの追跡に気づいていながら、立ち向かって来る様子がない。しかし、後ろから撃たれにくい場所を選んで逃げ回っている。
　そんな狡こう猾かつさを持つ個体は、たいていは年経た大きな体格のグリムだ。ああいう小型のグリムは、獰どう猛もうなだけで知恵に乏しい──普通なら。
　ブレイクはグリムの進路を予測しつつ、一定の距離を維持している。敵の動きを観察し、動きを読み切ったと見るやブレイクは木から飛び降り、空中で鎖くさり鎌がまを投げつけた。
　障害物の多い場所でも、軌道に変化をくわえた鎖鎌なら目標に届く。
　攻撃に気づいたグリムはその場で跳ね上がり、辛うじて首を刈られずに済んだが、後ろ足にリボンが巻きつくことは防げなかった。
「捕まえた」
　グリムはバランスを崩くずして落下──茂みに落ちる。姿の見えなくなったグリムを逃がさぬよう、ブレイクはリボンを手元に引きつける。
　リボン越しに抵抗を感じるが、あの程度の大きさのグリムが相手なら不利な綱引きではない。釣り人が、かかった魚を暴れさせて弱るのを待つように、ブレイクはリボンを慎重にたぐる。

突然、リボンの緊張がほどけて手応えが消えた。リボンを引くと武器だけが茂みから現れて、グリムの姿はない。ブレイクが眉まゆをひそめた。一度絡みついたガムボール・シュラウドが、ブレイクの意思に反して自然にほどけることは絶対にない。
　なら、どうやってグリムは拘束を抜け出した？
　グリムが自分で足を切ったとか？　ありえない話ではないが、そこまでして戦いを避ける姿勢は、いよいよグリムらしくなかった。
「……!?」
　首筋に嫌な視線を感じ、ブレイクはその場で振り返った。
　視界は霧で覆われ、音も聞こえない。しかし、霧の中にいる何かの気配を濃厚に感じ取れる。
　霧の向こうに全神経を向けたまま、ブレイクはそっとその場を離れる。足音だけでなく、足跡も残さないよう、完かん璧ぺきかつ神経質なつま先歩きで。
　ブレイクの努力にもかかわらず、気配は彼女から離れない。正体不明の相手は、だんだんブレイクに近づいてきていた。霧の中に、ぼんやりとした人影が映る。
「……誰？　ワイス？　ピュラ？」
　尋ねたが、返事はない。そして、その人影は自分の仲間の誰とも似ておらず、こちらに向ける視線はもはや殺気と言っていいほど研ぎ澄まされている。
　味方ではないと判断してブレイクは、ガムボール・シュラウドを構えた。ブレイクの戦意を察したのか、影が立ち止まる。その手には、何か武器らしきもののシルエットがある。
　場の緊張感が噴き上がるように高まり、ブレイクはガムボール・シュラウドのグリップを握りしめた。相手が何者かは知らないが、こいつに先手を渡すことは絶対に避けたい。

目の前の影に向かって、ガムボール・シュラウドを──
「──きゃあ!?」
目の前の敵に集中し、まったく警戒していなかった背後からいきなり抱きつかれて、ブレイクはめずらしく悲鳴を上げた。相手はグリグリとブレイクの背中に頭を押しつけてきて、
「やっぱりブレイクだ！　よかったー！　もうずっと一人で森を歩いててどうしようかって思ってて、なんかここスクロールもつながりにくくて連絡もとれないし、ホント困ってたの！」
「ル、ルビー!?」
驚きで破裂しかけた心臓を押さえつつ、ブレイクは肩越しに背中を見て、相手がルビー・ローズであることを確かめた。
「あれ、なんでブレイクひとりなの？　他ほかのみんなは？　ワイスー！　どこー？」
「ルビー、ちょっと黙って、静かにして」
背中から正面に目をもどす。さっきまでブレイクにつきまとっていた影は、いつの間にか消えていた。耳を澄ませて気配を探るが、近くには他に気配はない。
ブレイクは再び、まだ背中にしがみついているルビーに目をやった。
「……ルビー、さっきのはあなたじゃないわよね？」
「さっき？　何かあったの？」
「……なんでもないわ。ルビー、あなたこそ、なんで一人なの？　ヤンたちは？」
「実ははぐれちゃって」
「迷子ってこと」
「違うよ！　作戦中に不幸な事故があって、トロッコから落ちちゃっただけだってば」
「ノーラとぶつかりでもした？」

「なんでわかったの!?」
　……ブレイクも前に一度、橋から突き落とされたことがあったのだが、またやったらしい。
「たぶん、近くにまだワイスたちがいるわ。そっちに合流しましょう」
　ルビーと共に、仲間を捜して歩き出した。心なしか、霧も少し晴れてきた気がする。
「ねえ、ブレイク。そっちのチームでワイスはどうしてた？」
「いつもどおりよ。とても張り切ってる」
　足元の藪やぶを剣で切り払いつつ答えると、ルビーは肩を落とした。
「そりゃそうか。念願のリーダーだもんね……」
「リーダーはジョーンよ」
「えっ」
「ジョーンはワイスをリーダーに推したんだけど、ワイスが辞退したの。それで、ジョーンがリーダーになった」
　ルビーは心底意外そうな顔をしている。ブレイクも、最初は意外だった。
「ワイスはリーダーじゃなくて、リーダーをサポートする役割になろうとしてるみたいだった。参謀というか、ナンバー２というか」
「……なんでだろう。だって、あんなにリーダーをやりたがってたのに」
「ＲＷＢＹルビーのためでしょう。きっと」
　共に行動することで、ブレイクにはワイスの考えがなんとなく理解できた。トレーニングを言い出したのも今のチーム分けも、チームＲＷＢＹでその力を活かすためだ。
「チームのリーダーはあなただから、リーダーとしての経験ではなく、リーダーを助ける方法を学ぼうとしてるんじゃないかしら」
「じゃあ……ワイスはちゃんと戻ってきてくれるの？」

思わず、ブレイクは口を押さえた。心細さがにじんだ顔でそんなことを言うから、思わず吹き出しそうになったのだ。まさに迷子の子供だ。
「だってだってワイスだよ？　頑固だし、変に責任感あるし、てっきりビーコンにもどったら、オズピン教授のところにチーム替えを申し込みに行くんじゃないかって」
「やりそうではあるわね」
「でしょ？　でも、よかった。ワイスが戻ったら、これでチームは元どおり──」
　ルビーはうれしそうに手を振って歩き出し、すぐにブレイクの方を振り返る。
「ブレイクも戻ってくるよね？」
「そのつもりだけど」
「よかったぁ……」
　ルビーが大げさに胸をなで下ろして、ブレイクはいささか気まずさを味わった。
「そんなに心配をかけてるとは思わなかったわ」
「だってブレイク、チームを入れ替えるときワイスに賛成してたもん」
「あまり遊ぶ気になれなかっただけよ。船の中でも話したと思うけど、こんなことしてる場合じゃないんじゃないかって気がするから」
「やっぱりホワイトファングのこと、気になるんだ」
　ルビーがついに言った。船の中では曖あい昧まいにしていたが、そろそろ認めるべきかもしれない。
「……彼らはわたしの仲間で、家族だった。そんな人たちが、いつの間にか歪いびつなものに変わってしまっていたのよ。気にならないはずがない」
　ある事件でホワイトファングと遭遇したブレイクは、彼らがローマン・トーチウィックなるアウトローと手を組み、これまでとは違った活

動に手を染めていることを知った。
　ブレイクが、過激派組織の戦士からビーコンの学生へと生き方を変えたように、ホワイトファングもまた変へん貌ぼうを遂げていたのだ。ブレイクの知らない姿へと。
　組織を離れるべきではなかったかもしれない。彼の傍そばにいるべきだったのかもしれない。組織が変わっていくことは止められなかったかもしれないけれど、理由を知ることはできたはずだ。
　きっと、その理由と戦うことも。
　沈黙を気まずく思ったのか、ルビーが口を開いた。
「……えーと、こうは考えられない？　落ち込んだ気分を南の島でリフレッシュ！　……とか」
「難しいわね」
「じゃあ、楽しいこと考えようよ。ほら、ブレイクのあの本の話とか。ニンジャなんとかって」
「それはやめて」
「じゃあ──」
　おしゃべりに夢中になっていたルビーのフードを掴つかんで引き戻す。ルビーの足元は急斜面になっていて、ブレイクがフードを掴まなければ危うく滑落するところだった。
「あ、ありがと」
　斜面はすぐに平へい坦たんな地面に変わっていて、霧越しにでも下を見通せる程度の高さ。それまで歩いていた草むらから一転し、斜面の先はむき出しの硬い地面になっていた。
「この下、道があるんじゃない？　ブレイク、降りてみよう！」
　ブレイクが返事をする前に、ルビーはすでに下にすべり降りていた。強く引き留めなかったのは、ブレイクもこの場所のことが気になったからだ。

そこは草木が切り開かれた広場になっており、あきらかに人の手が入った跡があった。
「ここ、何かあるのかしら」
　言って、ブレイクは振り返り、目を見開いた。
　草木の生えないむき出しの斜面にトンネルが開いている。石と木で天井を支えるトンネルは、どう見ても自然のものではない。
「あったね、何か」
　そう言うルビーと並んで、ブレイクは中をのぞき込んだ。トンネル内に明かりはなく、地面はゆるやかに下っていた。暗くら闇やみに強いファウナスの眼をもってもトンネルの先は見通せず、ブレイクは空気の動きから、トンネルがそうとう深くまで掘られていることを察した。
「採石場かな？」
「かもしれないわね」
　だとすれば、さっきのグリムはここに逃げ込んだのかもしれない。使われなくなった施設がグリムの巣になっているなら、あまり深入りするべきではなさそうだ。
　トンネルから離れるようルビーに言おうとしてブレイクは、妙なにおいに気がついた。前にも、これと同じものを感じたことがある。不快な悪臭ではないが、嫌な記憶が伴う。
「どうしたの、ブレイク？」
　首をかしげるルビーの目の前で、ブレイクはしゃがみ込む。においの元をたどって地面を探るとトンネルの入り口の隅に、それを見つけた。
　ほんの指先程度の大きさの、灰の塊。まだ新しく、触ってみると温かい。
　ブレイクの中で、疑念が急激にふくらむ。まさか──
　そのときルビーがずり落ちかけた斜面を、まったく同じ格好で誰かがすべり降りてきた。二人が身構える間もなく、その人物はルビーに飛び

かかる。ルビーが下敷きになり、ブレイクは驚いて相手の名を呼んだ。
「ノーラ！」
「ルビー！　良かった！　さっきはごめんねルビー！　怪け我がはない？　骨折は？　どうしよう、苦しそうにしてる！　すぐに助けが来るから死なないで！」
　苦しそうに見えるのは、ノーラがその腕力でもってルビーを抱きしめているせいだ。人懐っこさが過ぎる大型犬みたいだとブレイクは思った。
「なーんだ。ブレイクもいるじゃん」
　声が聞こえて見上げれば、斜面の上に金髪の少女がいた。
「ヤン？　どうしてここに？」
　ブレイクが言うと、ヤンは下のルビーとノーラを指さす。
「トロッコから落ちたおっちょこちょい二人を捜しにきたの。みんなでね」
「全員無事のようで何よりだ」ヤンの隣にＳＩＣの制服を着た巨漢が姿を見せた。ウスコー・アンスロープはヤンと共に斜面を下りてきて、ルビーとブレイクに言う。
「遭難者が出たと聞いたので、地理のわかる私が捜索に協力することになった。狩りは一旦打ち切って、船にもどるようにと指示を受けている。安全のためなのでわかってもらいたい」
　ブレイクは斜面に空いたトンネルを指さした。
「あのトンネルは調べなくてもいいの？」
「必要ない」
「必要ない？」
「あれは過去の実験場の廃はい墟きよだと、こちらにはわかっている。崩落の危険があることも、同様にわかっている。みだりに立ち入らないように、との指示も受けている。事情をわかっていただけたなら、つい

てきてもらおう。船まで案内する」
「……そう」
　ブレイクはじっとトンネルの闇やみに視線を送ってから、アンスロープに従ってその場を離れた。
　仲間と共に歩きながら、ブレイクはルビーに近づき、話しかける。
「ルビー。昨日行った、ＳＩＣの訓練施設だけど」
「うん？」
「あそこでもらったペイント弾。今も持ってない？」

　湖中島を離れた一行は、船で湖を渡る帰路についていた。
　霧を抜けると南国の陽気が戻ってきて、甲かん板ぱんは気持ちのいい暖かさに包まれる。
　そんな過ごしやすい場所で久々に集合したチームＲＷＢＹの四人は、甲板の隅でひとかたまりになってコソコソと話をしていた。
「トンネル？」
　ワイスは怪け訝げんな顔でブレイクに尋ねる。
「トンネルというより、坑道かしら」
　確認するようにブレイクが見つめてきたので、ルビーは目をそらしつつ適当にうなずいた。
　実を言えば、そんなにちゃんと見ていないし覚えてもいない。だって、ただの穴じゃん。
「地面はむき出しの更地だったから、足跡が残っていたわ。最近、かなりの人数があのトンネルに入ってる。車輪の跡も、それを隠そうとした跡もあった」
「よくわかるね、そんなの」

そう言うヤンに、ブレイクは「そういう訓練も受けてきたから」と答える。一瞬、ワイスに気まずげな目を向けたのは、ワイスの実家と因縁のあるホワイトファングでの経験だからだろう。
「ＳＩＣのセキュリティはそのことを説明しなかったし、トンネルを調べようとしたわたしたちを止めたわ。わたしたちが近づくのも避けたがってるみたいだった」
　ヤンは首をかしげて尋ねる。
「つまり、ＳＩＣはあの場所に何かを隠してる、ってこと？」
「ええ」
「なるほど。で、あたしたちを集めてそんな話をするってことは──」
「わたしがあのトンネルを調べるわ」
「わーお。やっぱ、そうなるんだ」
「ブレイク、今から泳いで戻るんじゃないよね？」
　まさか、という思いでルビーが尋ねると、ブレイクは首を横に振ってくれた。
「さっき、スタッフたちが話しているのを聞いたわ。この船は、グリム対策のために武器と人を乗せて、またあの島にもどるみたい。そこに忍び込めば一緒に運んでもらえる」
　淡々と密航の計画を告げるブレイクに、ワイスは険しい顔で言う。
「ＳＩＣがあの島に何か秘密を隠しているとして、それは単なる企業秘密かもしれませんわ。あるいは、あのＣＥＯのプライベートなことかも。あなたが調べなくてはならないこととは思えないのですけれど……何か確証があるんですの？」
　ブレイクは少し言いにくそうにためらってから「灰よ」と言った。
「灰？」
「ええ。たぶん、葉巻のね」
「葉巻？　それが、気になること？」

「その残り香を、つい最近かいだ覚えがあったの。この間、ローマン・トーチウィックと戦ったときよ」
「トーチウィック⁉」
　ルビーが思わず大声を出し、自分で口を押さえた。ヤンがブレイクに尋ねる。
「確かなの？」
「間違いないわ。あいつが葉巻を吸うのかどうかは知らないけど、同じにおいだった」
「でも、トーチウィック本人を見たわけではないのでしょう？」ワイスが言う。
「ＳＩＣの人間が、偶然おなじ葉巻を吸っていただけかもしれませんわ」
「そうかもしれない。でも、あの展示会のときからＳＩＣには奇妙なことが起こり続けてるのよ。もしも、この島にトーチウィックがいるなら、それにはきっとホワイトファングも関わってる」
　ホワイトファング──ブレイクがかつて所属していた、ファウナスの過激集団。ローマン・トーチウィックと共に得体の知れない活動をしている彼らが、この島で暗躍しているとしたら。
「それに、奇妙なのは灰だけじゃない。わたしが追いかけたあのグリムも変だった。普通のグリムとは全然ちがう。まるで」ブレイクは言葉を切り、慎重に言葉を選んでようやく続けた。
「……誰かが指示を出しているように見えた」
「そんな、ありえませんわ！」ワイスが大声を出して、口を押さえた。近くにＳＩＣスタッフがいないことを確認して、声を落とす。
「つまり、ＳＩＣがグリムを調教して、操っているとおっしゃるの？」
「ＳＩＣは武器も作ってる。グリムの軍事利用を思いついても不思議じゃない。あの島では昔、グリムの研究が行われていたとＣＥＯが言っ

ていた。それが今も続いていたとしたら？」
「だとしてもありえませんわ。グリムのコントロールなんて、絶対に不可能。もしそんなことが可能なら、世界中からグリムの被害をなくすことができる……いえ、世界を支配できてもおかしくありませんのよ？」
「だからこそ、ホワイトファングやトーチウィックが興味を持ちそうだと思わない？」
　ワイスは反論を諦あきらめて肩を落とす。対照的に、ヤンはニヤリと笑って拳こぶしを握り込んだ。
「よーし。あたしも付き合うよ」
「いいえ。調べるのはわたし一人でやる。その方がやりやすいわ」
「危険すぎますわ。グリムがうろつく島に一人で行かせられると思って？」
「もしもグリムと遭遇しても、わたしの能力なら逃げられる。わたし一人なら」
「道に迷ったら？　あの霧と森の中でちゃんと目的地まで行けますの？」
　ブレイクは懐から弾丸を一つ取り出して見せた。
「ルビーが持ってたこのペイント弾の中身を使って、いくつか目印をつけてきたわ」
「船が戻るころには夜になっているんですのよ」
「わたしはファウナスよ。闇やみ夜は問題にならない」
「戻るときはどうするつもりですの？」
「この船に小型ボートがいくつか積まれているのを見つけたから、それを使わせてもらうわ。わたしの考えが単なる思い込みだとわかったなら、あのＣＥＯに謝罪したっていい」
　ヤン、ワイス、ルビーの三人が顔を見合わせる。
「……そこまで準備万端なら、止めても無む駄だですわね」

ワイスが観念してつぶやいたとき、ブレイクは船の行く手に目をやっていた。
「あなたたちと一緒に、わたしも船から降りたことにしておいて。これから船内に隠れるわ」
　ブレイクが甲かん板ぱんから船内に向かう。それを、ルビーが追った。数人の職員とすれ違って、人のいない場所を選んで呼びかける。
「ブレイク、待って！」立ち止まったブレイクを前に、ルビーは慎重に言葉を選んだ。
「あの、わたし思ったんだけど、わたしだけでもついていった方がいいんじゃないかな。だって、あのトンネルを見つけたのはわたしとブレイクでしょ？　それにスピードには自信があるから、逃げるときは足手まといにならないよ」
「ルビー。あなたはリーダーでしょう。仲間と一緒にいて」
「ブレイクだって仲間だよ！」
　ブレイクは一瞬、虚を衝つかれた様子で琥こ珀はく色いろの目を見開いた。やがて、薄い微笑を浮かべる。
「もしもわたしが戻ってこなかったときのために、あなたは他ほかの人たちと一緒にいてほしい。わたしが助けを求めたら、駆けつけてもらえるように。その方が、合理的だわ」
「それは……そうかもしれないけど」
「頼んだわよ、リーダー」
　頼む、なんてめずらしい言葉を使って、ブレイクは廊下の角を曲がって去っていく。きっと、船のどこかに身を潜めるのだろう。
　リーダーと呼ばれて、その言葉が持つ意味を改めて考えさせられる。それに、フォートリーが言っていたリーダーの資質についても。
　今の自分にそれがあるだろうか。

◇

　湖に浮かぶ島からホテルにもどってきて、２時間ほど後。
　ホテルには夕日が海に沈んでいくのを眺められるバルコニーがあり、ジョーンはそこにいた。
「……ン。ジョーン！」
「うわっ、ピ、ピュラ？　何？　何か言った？」
　やってきたピュラは、心配そうにジョーンの顔をのぞき込む。
「大丈夫？　なにか考え込んでたみたいだけど」
「いや、バカンスのつもりだったのに、とんでもないことに巻き込まれたなと思ってさ」
　ジョーンはテラスから階下を見下ろす。ビーチも、そこへ至る道路も、すっかり閑散としていた。ピュラも手すりから、同じ景色を見下ろしている。
「ほとんどの人が島を出たみたいね」
「グリムが出たんだ。のんびり海水浴なんてしてられないよ」
　言ってからジョーンは、隣のピュラを怪け訝げんな顔で見つめた。
「なんか、ピュラは嬉しそうに見えるんだけど」
「そう？」と、ピュラは自分の顔を撫なでた。笑顔になっている自覚がなかったらしい。
「……そうね。わたし、嬉しいのかもしれない」
「グリムに休暇を台だい無なしにされたのに？」
「ええ、大勢の人の楽しみが台無しにされたわ。一歩間違えれば死人が出ていたかもしれない。不謹慎と言われれば、そのとおりね」
　ピュラは、バルコニーの手すりから身を乗り出し、翠みどり色の瞳ひとみをまっすぐ遠くの海に向ける。
「でもジョーン。わたしたちは、そんな脅威と戦う力と使命を持ってる

のよ。ビーコンを卒業してハンターになれば、大勢の人の笑顔を守れる。昨日、そのことをはっきりと確かめることができたわ。それが、わたしにはとても誇らしいし、嬉しい」
　潮風が赤毛を揺らし、海に沈んでいく夕日がピュラの整った横顔を照らしていた。
　このために用意された舞台装置みたいな景色の中で、志の高いこともすらすら言える。出来すぎだろ、とジョーンは隣のチームメイトをまぶしく思った。さっきまで同じ海を見ていた自分は、気になる女の子と仲良くなれなくて残念だ、とか思ってたのに。
「でも、ジョーンはあんまり嬉しそうじゃないわね」
「俺たちがこの島に来てしたことといえば、戦闘訓練とグリムとの戦いだろ？　いつも授業でやってるのとたいして変わらない。せっかく水着も持ってきたのに」
「じゃあ、みんなで帰ったらプールにでも行きましょうか。ヴェイルの街にもウォーターパークはあるそうよ」
　それも悪くないな、と思う。さすがに、街のプールにまでグリムは出てこないだろうし。
　そのときジョーンは、路上にいる親子連れに気がついた。こめかみに巻き角を生やしたファウナスの親子、その幼い子供が、バルコニーのジョーンたちに向かって手を振っている。
　あどけない笑顔と仕草に頬ほおを緩めて、ジョーンとピュラは手を振り返す。
「まだ、残ってる人もいるんだな」
「船に乗れるかは抽選だったみたいだから。ほら、あそこにも」
　ピュラが指さした先には、ジョーンよりもいくらか年下の少女がいた。年齢に似合わないツナギを着て、頭にはゴーグル。
「……ちょっと行ってくる」

「え、ジョーン？」
　戸惑うピュラをバルコニーに残し、ジョーンは階段に向かった。

「イオナ！」
　ベンチでキーボードを叩たたいていたイオナは、迷惑そうに顔を上げた。
「……まだいたんですか」イオナは周囲を見回し、
「あのファウナスは？」
「ファウナス？　ああ、ブレイクのことか。今は仲間と一緒にいると思うけど」
　イオナは首をかしげる。
「あなたは仲間じゃないんですか？」
「仲間は仲間なんだけど……そこを話すと長いんだよな。ブレイクが気になるのか？」
「別に」
　言って、再び膝ひざの上のＰＣに目を落とす。それきり一言も喋しゃべらない。
　彼女の前に立つジョーンは、無言のイオナに尋ねた。
「なあ、船の中で、監視されてるとか言ってたけど、あれって……」
「見張られてますよ。今も」
　目線を上げずに言った。ジョーンは周囲を見回す。
「誰もいないじゃないか」
「ドローンがいます」
　言われてみれば、道路の溝や木の根元など、丸々とした愛らしいデザインのドローンが数体、寝そべったり歩いたりしている。大きさは子猫くらいで、瞳ひとみがカメラになっている。
　あれが監視……と、ジョーンは疑問に思う。あんなかわいい……何だ

ろう、アライグマ？　みたいなドローンが監視だって？
「何かの間違いじゃない？」
　イオナは答えず、膝ひざの上のＰＣから目を離さない。どうやら相手にするつもりはないようで、ジョーンは頭を振ってそこから立ち去りかけた。
「ありがとうございました」
　思わぬ言葉が飛んできて、ジョーンは驚き振り返る。イオナはキーボードを叩たたきながら、
「昨日、ビーチで助けてくれて」
「え？　ああ、それは別に……というか、イオナはビーチで何をしてたんだ？　まさか、あのグリム騒ぎも君のせいじゃないだろうな」
「そうですよ。わたしが見張られてるのだって、あれのせいですし」
「えぇ……」
　ジョーンは何を言っていいのかわからず、変な声が漏れた。──冗談のつもりだったのに。
「この島の海底には、ＳＩＣが管理している洞どう窟くつがあるんです。そこに潜り込むつもりだったんですが、失敗しました。侵入者対策の機雷が仕掛けられてたんですよ」
「き、機雷……？」
「ええ。見事に引っかかりました。どかーん！　大爆発」
　一瞬、子供っぽい仕草で手を広げてみせて、再び手はキーボードの上へ。
「どうやら、そのときの衝撃が近くの海溝に潜むグリムたちを刺激してしまったみたいです。たぶん、あれは機雷を仕掛けたＳＩＣにとっても想定外だったんじゃないですかね」
　ジョーンは、彼女がどうして監視されているかようやく理解した。とんだ危険人物じゃないか。

「イオナ、君がしたことは……」
「そうですね。わたしのせいで、危うく怪け我が人が出るところでした」
　イオナが、ようやくＰＣから目を離してジョーンを見上げた。
「そうなっていたら、ずっと後悔していたでしょう。本当にありがとうございます」
　この少女のことがよくわからなくなって、ジョーンは口元まで出かかっていた説教を引っ込めた。監視されてるってことは、説教くらいＳＩＣの大人からとっくにされているだろう。あの警備主任の大男とか。
「それなら、俺よりも俺の仲間にお礼を言うべきじゃないかな。昨日は俺、弱ったグリムにトドメ刺すくらいしかしてないし……ハァ」
　自分で言ってて悲しくなってきて、ジョーンは肩を落とした。
「確かにそうですね」とイオナも同意するので、ジョーンの肩の位置は下がる一方だ。
「なのに、なんであなたが戦わないといけないんですか？」
「え？」
「なんで、あなたは逃げなかったんですか？　ぜんぶ、あなたの強い友達にまかせたらいいと思います。適材適所ですよ。弱い人が戦う必要ないじゃないですか」
　子供は遠慮がないから、本人に平気で弱いとか言ってくる。
　そういえば展示会で初めて会ったときも似たようなことを聞かれたな、と思い出した。
「それは違うよ、イオナ。すごい仲間がいるから、俺もがんばらなきゃって思うんだ。すごい仲間にふさわしい人間に、あいつらにふさわしいリーダーになろうって」
「えっ…………リーダーだったんですか？　ぜんぜん見えない……」
「悪かったな！」自分でも薄々わかっているから、余計腹が立つ。

「君はアカデミーの生徒じゃないしわからないだろうけど、リーダーに必要な能力は腕っぷしだけじゃないんだ！」
「どういう能力が必要なんですか？」
「えーと……リ、リーダーシップとか、統率力とか……勝負強さとか」
「勝負強さって、わたしと二回コインの勝負して負けてますよね」
　イオナが例の、赤と白のコインを見せてくる。
「よーし、わかった！　もう一回勝負しよう！　今度こそ俺が勝つからな！　勝って、リーダーとしての真の素質を見せてやる」
「いいですよ。あなたが勝ったらリーダーだって認めます。わたしが勝ったら……」
　イオナはコインの白い面を見つめていた。丸顔の道化師クラウンに彼女が何を思うのかジョーンにはわからないが、彼女はずっと遠くにあるものを見つめるような表情をしている。
「……わたしが勝ったら、もう二度とわたしを助けないでください」
「何だそれ。ぜんぜん賭かけになってない」
「いいですから。わたしがこの先どれだけ困ってても、ぜったいに助けないでください」
　指で弾はじいたコインを、迎えるように手の甲で受け止める。賭の対象が意味不明でもイオナは真剣そのもので、そのコイントスは何かの儀式のようにも見えた。
「……赤い女王」
　ジョーンが宣言し、イオナは手を開く──白い道化師クラウン。ジョーンの負け。
「本当に、弱いんですね」
　イオナは笑った。勝ったことを喜んでいるのでも、負けたジョーンを嘲あざ笑わらうのでもない。ここにはない何かに対して笑いかけているように、ジョーンには思えた。

手首を返してコインを手のひらに落とし、イオナはベンチから立ち上がる。
「長く居すぎました。セキュリティに何か言われたらすっとぼけてください。それじゃ」
　ＰＣを脇わきに抱えて、すれ違うときにイオナはつぶやいた。
「ホテルに戻ったら、ファウナスのお友達から目を離さないでください」
「……？」
　展示会で、チケットをくれたときからそうだった。イオナはまるで、ファウナスがこの島に来ることを望んでいないようなことを口走ることがある。
「イオナ、あの……」
　ぎろりとにらまれる。
　イオナは目線で、ジョーンの足元を示した。いつの間にか彼の足元に、アライグマ型のドローンがいる。こちらを見上げて首をかしげる仕草は愛らしいのに、ジョーンは少しひるんだ。
　声をかけてしまったのを取り繕うため、ジョーンは関係ない話題を切り出す。
「えーっと、イオナ。俺が聞きたいのは……そう、君、家族は？」
「……兄が、一人」
「お兄さんも君と同じエンジニア？」
「いいえ。兄は、もっと……」
　言いかけて、イオナはうつむく。表情は沈痛で、雰囲気が重い。──おかしい。家族の話題なんて一番無難な話じゃないのか。
「……イオナ？　あの」
「なんでもありません。それじゃ」
　ジョーンが何かを言う前に、イオナはさっさと曲がり角の先に消えて

しまっていた。
「……何なんだよ」
　立ち尽くしてジョーンは、イオナの後ろ姿を見送る。アライグマ型ドローンが丸い足を懸命に動かし、イオナの後をついていった。

◇

　湖中島を覆いつつある夕暮れは、ブレイクの味方だった。
　ファウナスは夜目が利く。船に忍び込んで島にもどったブレイクは、武器を持って砂浜を巡回するＳＩＣスタッフに気づかれることなく上陸を果たしていた。
　あれだけ視界をさえぎっていた霧はもはやどこにもなく、ブレイクはファウナスの視力で目印のインクを見分けて暗い森を走り抜ける。
　そうして呆あつ気けないほど簡単に、ブレイクはあのトンネルの前に立っていた。ここまで、一度もグリムとは遭遇していないし、武装したスタッフに見つかったりもしていない。そして、ローマン・トーチウィックやホワイトファングの痕こん跡せきも見当たらなかった。
「……拍子抜けね」
　なんだか急に、自分が馬ば鹿かげたことに首を突っ込んでいる気がしてきたが、ブレイクは頭を振って、迷いを追い払う。
　過剰な反応だとわかっていても、放ほうっておけないからここへ来た。見過ごしてはならない何かを見過ごしたせいで後悔するのは、もう嫌だから。
　慎重に足を踏み入れたトンネルの中は、緩やかな下り坂になっていて、明かりはない。暗くら闇やみを見通せるファウナスでなければ、何度かつまずいていたかもしれない。
　転ばないよう足元に注意を払っていたブレイクは途中から、地面に線

路が敷かれていることに気がついた。おそらく、昼間にルビーたちが使っていたものと同じトロッコ線路だ。
　トンネルは、いつの間にか坂道から平へい坦たんな地下通路になっている。線路をたどっていくうちに一本道はとつぜん終わり、ブレイクは十字路に出くわした。
　三方向に向かって線路が分岐し、森の中で見たのと同じトロッコが線路上に一台置かれている。天井には電灯が埋め込まれており、明かりが線路とトロッコを照らしていた。
　ブレイクのリボンがピクリと動き、ゆるやかなカーブを描く地下通路の向こうに目をやる。
　足音がする。グリムではなく人間。人数は一人。通路の一つから、こちらに走ってきている。
　ブレイクはトロッコを盾たてにした位置で武器を抜いた。相手は武装しているだろうか？　暗闇で相手が気づかないようなら、このまま身を隠しておくべきかもしれない。
　しかし、やがて現れた人物を見て、ブレイクは考えを変えた。トロッコの陰から飛び出し、ガムボール・シュラウドを突きつける。
　その相手は、洒落しやれた帽子をかぶり、ステッキを小脇わきに抱えた、端正な顔の若い男だった。
「やはり、ここにいたのね……ローマン！」
　ローマン・トーチウィック──ホワイトファングと組み、何かを企んでいるゴロツキだった。
　ブレイクはある事件でこの男と遭遇し、自分がかつていた組織が、彼のようなアウトローと同盟を組むまでに変質してしまったことを知った。
「……おやおや、こいつは──」
　汗さえ浮かべて駆け込んできたローマンは、そこでブレイクの顔を見

ると心底おどろいた様子を見せた。しかし、すぐに相手を小馬鹿にしたような笑顔を浮かべる。

「──いつかの子猫ちゃんじゃないか。こんなところで会うとは思わなかった」

　ブレイクは、その腹立たしい笑顔に武器を近づけた。ローマンは素直に両手を挙げる。

「乱暴はやめてくれよ。俺は繊細なんだ」

「答えなさい。ここで何をしているのか、それに……ホワイトファングも、ここに？」

「ふぅん……」ローマンが笑みの奥で、冷徹な計算を働かせているのをブレイクは感じた。

「それを知らずにここに来たということは……ははあ。森の中で見かけたあのインクの目印は子猫ちゃんの仕業か。あれのお陰で仕事が楽に進んだよ」

「質問に答えないつもりなら……」

「おい、待てよ。説明してもいいが、きっと自分の目で確かめた方が早いだろう。この先だ」

　ローマンは自分が走ってきた通路を杖で示す。目を細め、小声で囁きさやいた。

「一見の価値はあるぞ」

「なら、一緒に来てもらうわ」

「一緒に？」ハハ、とローマンは軽く笑う。

「やなこった」

　素早く身をひるがえしてブレイクの銃口から逃れ、ローマンは杖を横殴りに振るう。ブレイクは難なくそれを鎖くさり鎌がまで受け止めたが、杖先に空いた銃口に気づくのが遅れた。

　ローマンの仕込み杖がダスト弾を次々に発射──ブレイクは辛うじて飛

び下がって距離をとる。拘束せずに尋問しようとしたのは間違いだった。ああ見えて、相手はかなりの体術を使う。
　ローマンは次々にダスト弾を撃ち込んできて、ブレイクに近寄らせない。ブレイクが何か手を考えつく前に、ローマンは停めてあったトロッコに飛び乗った。ガタガタ音を立てて、トロッコが動き出す。
　舌打ちと共にブレイクは、進み出したトロッコに向けて鎖鎌を投げつける。だが、ローマンの杖のひと振りではじき返された。
「じゃあな、子猫ちゃん！」
　高笑いの残響を残して、ローマンの乗り込んだトロッコは闇やみへ吸い込まれていく。
　これからローマンを追ったところで間に合いそうにない。それよりもブレイクは、あの男が言った言葉の方が気になっていた。
　ローマンが杖で示した通路の先にあるというもの──ブレイクの気をそらすためのハッタリかもしれないが、それではローマンが汗までかいて走ってきた理由がわからない。
「……一見の価値、ね」
　鎖鎌を黒剣に戻し、ブレイクはローマンが示したトンネルの先を見に行くことに決めた。ハッタリであろうとなかろうと、あの男がいた場所は調べる価値がある。
　やがて、ブレイクは足を止めた。行く先に誰かが倒れている。罠わなである可能性を警戒しながら、ブレイクはその誰かに近づいていく。
　やがて、その人物が少年と言っていいほど若いファウナスだと気づくと、ブレイクは慌てて駆け寄った。
「何があったの⁉　どうして……」
　ブレイクは息をのんだ。そのファウナスが泥と埃ほこりにまみれ、傷だらけだったから。そして彼の足に、冷たい鉄てつ枷かせが嵌はめられていることに気づいたから。

「助け……て……」
　かすれて乾いた声でつぶやき、ファウナスは土で汚れた手をブレイクに伸ばす。
　青ざめたブレイクの耳に、いくつもの靴音が聞こえてきた。
　靴音の群れ、その先頭を歩く大柄な人物が、ブレイクの姿を認めて言う。
「──わからないな。何な故ぜ、ここに招待客がいる？」

　陽が落ちたビーチからは、武装スタッフの姿も消えている。代わりに、ビーチに入ろうとする招待客を追い払っているのはドローンだった。
『非常事態につき現在、ビーチは封鎖中です。立ち入りはご遠慮ください』
「非常事態って、どうなってるんだよ。さっきからスクロールもつながらないんだけど」
　ファウナスの男たちが抗議しても、返ってくる答えは変わらない。
『非常事態につき、島全域で通信にエラーが発生しております。ご理解のほどお願いいたします』
　番犬のようにビーチ手前に座り込むドローンに繰り返し警告され、男たちは文句を口にしつつ、ホテルにもどっていった。
　彼らと入れ違いに、ルビーが番犬型ドローンの前に立つ。
『非常事態につき現在……』
「友達がホテルに戻ってるか知りたいんだけど、わかる？」
『お客様コードを照会中……ルビー・ローズ様ですね。ワイス・シュニー様、ヤン・シャオロン様はシーサイド・ホテルに滞在が確認されて

ります』
「ブレイクは？　ブレイク・ベラドンナ」
『申し訳ございません。確認できません』
「そう……」
　とぼとぼと、その場を後にする。さっきの男たちが言っていたように、スクロールで通話ができなくなっている。ブレイクとの連絡は閉ざされたままだ。
　ルビーが歩く道沿いの草むらから、小さなドローンが飛び出した。ルビーの足元をちょろちょろ走り回り、「わわっ」とルビーを慌てさせてから反対側のヤシの木立の陰に消えた。
「くそっ、待てって……あれ、ルビー？」
　草むらがガサガサ揺れて、今度はジョーンが現れる。金髪のあちこちに葉っぱをつけて、腕白小僧みたいな有あり様さまだ。
「ジョーン？　何やってるの？」
「いや、本当にドローンが監視なんてしてるのか、捕まえて調べてみようかと……」
　意味がわからず眉まゆをひそめたルビーに、「そ、それより」とジョーンはフードを押さえて言う。
「ルビーは何してたんだ？」
「ブレイクがまだ戻ってこなくて……」
　ジョーンは何な故ぜかハッとした顔になる。
「ブレイクがどうかしたのか？」
　ルビーはブレイクが湖中島に向かい、数時間たっても戻ってきていないことを打ち明けた。彼女が、何を調べようとしていたかも。
「トンネルを調べるために……？」
「ブレイクにとっては気になることがあったみたい」
　ブレイクの行動を説明しながらルビーは、ジョーンがちゃんと話を聞

いてくれるか不安になった。変な人影を見たからって、企業の捨てられた施設に潜入しようだなんて、ぜったい変だ。
　しかし、ジョーンは真ま面じ目めな顔で、
「ルビー。ブレイクを捜すの、俺も手伝うよ。ピュラたちにも相談しよう」
「え、それはうれしいけど……いいの？」
「俺もよくわからないけど、ブレイクから目を離しちゃいけないらしいんだ」
「は？」
　ルビーは話についていけなかったが、ジョーンは続けた。
「とりあえず、みんなで話し合って状況を整理しよう。あとで、ＪＮＰＲのみんなを連れてそっちの部屋に行くよ。それまでに、ブレイクが帰ってくればいいんだけど」
「うん……ありがとう、ジョーン」
　うなずき合って二人はそれぞれのチームの部屋に戻る。道すがら、ルビーは覚悟を決めた。
　ヤンとワイスの、くだらないケンカをすぐにでもやめさせる。
　ブレイクのためにも、協力を申し出てくれたジョーンのためにも。
　あの二人にリーダーの威厳を示し、従わせなくては。

　ジョーンが仲間を連れてＲＷＢＹの部屋を訪れたとき、ブレイクはまだ帰っていなかった。
　一番広いリビングルームに椅い子すとソファを並べて、ブレイクを除く七人のビーコン生徒がそろう。彼らを前にして、ヤンが言った。
「ブレイクが向かったのは、例の湖の島。あそこで気になる場所を見つ

けて、それを調べてくるって言ってた。だから、たぶんまだその近くにいると思う」
　ヤンの隣で、ワイスがうなずく。
「わたくしは彼女を助けに行くべきだと判断しますわ。その方法を、これから話し合いたいと思っていますの。……本来なら、わたくしがブレイクを止めるべきだったのですけれど」
　ワイスが小さく付け加えると、ヤンがワイスの肩に手を置いた。
「誰が悪かったかなんて話じゃないし、それを言うならあたしにも責任があるよ。ワイス一人が背負い込むことじゃない」
「……そうですわね。みんなで、できることをしなければ」
　そんな二人の様子を見ていたジョーンが、隣のルビーを肘ひじでつつく。
「やったな、ルビー。どうやって二人を仲直りさせたんだ？」
「わたしは何もしてないよ」
「謙遜するなって」
「ホントに何もしてないの」安あん堵どと落胆の入り交じった顔でルビーがつぶやく。
「わたしが部屋にもどったときには、もう二人ともあんな感じ。ブレイクが心配で、ケンカどころじゃなくなったみたい。結果的にはよかったけど……わたし、この島に来てからリーダーらしいこと何もできてないよ」
　ふうん、とジョーンは隣のルビーを興味深げに見下ろした。
「でも、それってルビーらしいかもな」
「何それ」
　慰めになってない、とルビーがむくれたところで、ヤンとワイスの説明を聞いていたピュラが二人に向けて発言した。
「話はわかったわ。わたしたちがブレイクを捜していることは、ＳＩＣ

には秘密にしないとね」
　ノーラが、首をかしげる。
「なんで秘密なの？」
「ブレイクはＳＩＣが隠している何かを暴こうとしているのよ。それが勘違いだったらいいけれど、もしも彼女の考えが当たっているとしたら」
　ピュラの説明に、ワイスは腕を組んで意見を述べる。
「ですけれどピュラ。わたくしは正直、ＳＩＣが疑わしいとは思えませんの。ブレイクが示した疑惑は、どれも彼女の主観でしかありませんでしたもの。ＳＩＣに事情を説明して、彼らに協力してもらうべきではありませんこと？」
「でも、ＳＩＣがあの湖の中の島で、何かを隠しているのは事実で……何、ジョーン？」
　ピュラが言って初めて、他ほかの仲間もジョーンが手を挙げていることに気がついた。
「ジョーン、何か意見がありますの？」
　あまり期待していない様子でワイスが、ジョーンに尋ねる。
「あの湖と島のことで、ずっと頭に引っかかってたことがあるんだけど……」
「前置きは結構ですわ。簡潔にお願いできますかしら」
「霧だよ」
　そう言っても誰もピンとこなかったようなので、ジョーンは説明を続けた。
「ここは暑い南の島で季節は夏、しかも俺たちが湖を渡った時間は昼間だっただろ？　なのに、島は霧に包まれてた。霧が出る条件じゃない。海流とか気候とかのせいなのかもしれないけど、あんなに濃い霧が島の一カ所だけに発生するなんて変だと思わないか？」

「……確かに、言われてみればそうですわね」
　ワイスがつぶやいた。ピュラは妙に感心した様子で、
「よく気づいたわね」
「授業で何度も気象についてのレポート書かされたからな。反省文つきのやつ」
「でも、あの霧が自然なものじゃないなら、ＳＩＣが機械か何かで霧を作って、わたしたちの邪魔をしてたってこと？　わたしたちをあの島に連れていったのはＳＩＣなのに」
「早計ですわよ、ルビー。異常な霧であることは認めますけれどＳＩＣの仕業とは限りませんわ。特殊な気象現象という可能性も……」
「実は、まだ気になることがあるんだ」とジョーンが言う。
「というか、湖の霧のことが気になり始めたのはそのせいなんだけど……俺はＳＩＣのエンジニアから、ブレイクに注意しろって警告されてたんだ。さっきまた、その子に会った」
　ジョーンは、湖を渡る船の中でイオナに出会ったときのことから、先ほどベンチで再会したことを打ち明けた。彼女が、アライグマ型のドローンに監視されていると言っていたことも。
「ジョーン、あなたが持ってるそれって、もしかして……」
　ピュラが若干、顔を引きつらせて言う。ジョーンはここへ来てからずっと、膝ひざの上に例のアライグマ型ドローンを乗せていたのだ。
　ジョーンは能天気に、アライグマを抱き上げて見せる。
「ああ。イオナが言ってたドローンさ。さっき、部屋を出てすぐの廊下で見つけて、捕まえたんだ。ホテルの外じゃ逃げられたけど、こうやって捕まえてからはおとなしくて……」
　そのときジョーンは、ようやく仲間たちの自分を見る目に気がついた。部屋は微妙な空気で静まり返っている。
　ヤンがおずおずと言った。

「あのさ、ジョーン？　監視に使われてたドローンが、ジョーンの部屋の前にいたってことは、普通に考えるなら……ジョーンが次の監視対象になったってことじゃないかと思うんだけど？」
「監視？　俺を？　ハハハ」
　愛らしいデザインのドローン。下顎あごに空いている穴は、どうやら集音マイクらしい。
　瞳ひとみにあたる部分の二つのカメラが、ジョーンを見つめていた。
　さっきから、ずっと。
「……どうしよう」
「ブッ壊そう！」ノーラが言って、早くもハンマーを抜いた。
「いけませんわ！　監視がバレたと知ったら、ＳＩＣが何をしかけてくるかわかりませんもの！　気づかないフリをしてごまかせば何とか……」
「これだけ騒いだらもう手遅れなのでは」
　レンが無表情で言う。実際のところ、そのとおりだったらしい。
　このときすでに、部屋の扉のオートロックが、ひそかに解除されていた。
　ドアが外から乱暴に開かれて、プロテクターと小銃で武装した男たちが三人、なだれ込んでくる。彼らはルビーたちに向かって銃口を向けた。
「動くな！　ゆっくりと武装を──」
　男たちの手にある小銃がブルッと震え、彼らの手から離れて浮かび上がる。
「──解除して……」
　言いながら男たちは、ぽかんとした顔で宙に浮かぶ武器を見上げている。浮かび上がった小銃は見えない手で振り下ろされたかのように、男たちの顔面を叩たたきのめした。

「これで、ＳＩＣがクロだと決まりね」
　ピュラの言葉で、ようやくルビーは何が起こったのか気がついた。ピュラがセンブランスを使い、男たちの武器を操ったのだ。
「こいつら、ＳＩＣのセキュリティだね」鼻血を流して失神した男をひっくり返し、ヤンが言う。
「湖の船で見た覚えがある」
「じゃあ、ブレイクが言ってたことは本当だったんだ」
　ルビーがつぶやく。最悪だ。島を管理しているのは危険な組織で、ブレイクは行方不明のまま。
「ねえ。これ、何のマークだろ。この肩の白いやつ」
　ヤンが、倒れた男のプロテクターを眺めて言った。そこに描かれているのは、流線型の白いエンブレムと小さな文字。
「ＳＩＣのマークなのではなくて？」
「ＳＩＣのシンボルは星形でしょ。【無む垢くなる兄弟たちの銀の銃弾】って書いてあるけど……」
「なんですって⁉」
　ワイスが驚きよう愕がくの声を上げた。
「知ってるの？」ルビーが尋ねてもワイスは答えなかった。何かに耐えるように、唇に手の甲を当てて黙り込んでいる。こんなワイスを見るのは初めてで、ルビーは嫌な予感を抱いた。
「わあっ⁉」
　ジョーンが悲鳴を上げた。ジョーンが見つけてきたアライグマ型のドローンが、丸い前足から鋭い刃を展開し、ジョーンに突き立てようと暴れている。ジョーンは腕を伸ばして、ドローンを押しやるので精一杯だ。
「動いちゃダメだよ、ジョーン」
　すでに武器を手にしていたノーラが、ジョーンに向かってマンヒルド

を振り抜いた。迷いのない一撃は、ジョーンには傷ひとつ付けず、ドローンだけを無数の小さな部品に変えた。
「ド、ドローンが襲ってきた！　ドローンが！」
「見ればわかるよ」ヤンが、エンバー・セリカの手甲を展開した。
「でも、まずいね。ドローンは、この島のあちこちにいる。このホテルにも……」
　ヤンの言葉を肯定するかのように、廊下からドローンが突っ込んできた。尖とがった頭部を持つ、フラミンゴ型の執事ドローン。
　全身を一個のハンマーのようにしならせて、一番近くにいたピュラに向かって襲いかかる。
　この奇襲に対する動揺を一切見せることなく、ピュラは手をかざした。それだけで、執事ドローンは地面に倒れ込む。
「ドローンが相手なら、わたしのセンブランスと相性がいいわ。まかせて」
　ピュラのセンブランスは磁力。金属に干渉し、操ることができる力。
　なので当然、機械が相手なら抜群の効果を発揮する。不可視の磁力に押さえつけられた執事ドローンは、やがて煙を上げて完全に動きを止めた。
「おいおいおい、嘘うそだろ！」
　ジョーンの悲鳴で、全員が扉の方を見る。そこにいたのは、首回りにいくつものアンテナを鬣たてがみのようにそびやかすドローン──受付にいた、ライオン型だ。
　受付で宿泊客を案内していたときとはまるで違う様子で金属質の牙きばを剥むき、ざわざわとアンテナを波打たせている。機械とは思えない野生味を見せるドローンを前に、ジョーンは尻しり込みし、笑顔のノーラは意気揚々と武器を抜き、レンもそれにならう。
　しかし、ピュラはノーラたちを押しとどめた。

「廊下に他ほかのドローンがまだいるわ。ここを突破するのは骨が折れるかも」
「バルコニーから逃げよう！」
　ジョーンが言う。ワイスも「そうですわね」と同意した。
「ＳＩＣが敵となったのなら、ここはもう安全ではありませんわ」
「外も安全じゃあないみたいよ」
　ヤンがバルコニーの外に目をやって言う。ルビーも、外の異常を悟った。
「……霧？　なんでここにも⁉」
　夜空も、海も、砂浜も、バルコニーから一望できる景色のすべてが綿のような霧に覆われている。三階の高さのはずが、地上が見えないために実際よりもずっと高く感じられた。
「こ、ここから飛び降りるのか……」
　ジョーンがためらう間に、ライオン・ドローンがドアから部屋に入り込もうとしていた。
　ピュラが執事ドローンの残ざん骸がいを磁力で投げ飛ばすが、ライオン・ドローンはそれを口で受け止めて、易やすやすと噛かみ砕く。その顎あごの力は、あきらかに受付業務の枠を越えた戦闘用の仕様だ。
　紅槍やりミロと盾たてアクオを構え、ピュラがライオン・ドローンに立ち合った。
「わたしが時間を稼ぐわ。逃げるなら急いで」
「わかった。無理しちゃダメだよ！」
　ピュラに声をかけてから、ルビーたちはバルコニーに向かって駆け出し、霧の中へ身を投げた。
　しかし、ジョーンはまだためらっている。
「え、うそ、マジで？　マジでここから飛ぶの？　ロープとか梯はし子ごとかあった方が──」

「さっさと行くよー、ジョーン！」
　場違いに陽気な声でバルコニーに駆け込んできたノーラが、ハンマーの柄でジョーンの首を引っかけて手すりを蹴けった。悲鳴をあげるジョーンを抱えた状態でノーラは着地し、衝撃を殺してからジョーンを放ほうり出す。立ち上がり、一面が霧に覆われている周囲を見回した。
「何にも見えないね！」
「ここからどうします？」
　レンの問いかけに、ワイスが率先して答える。
「島のどこか、ＳＩＣの手が及ばない場所を捜して潜伏すべきですわ。この霧は、わたくしたちの逃亡に味方してくれるはずですもの」
「でも、まだダメだ」ジョーンが、着地のときに打ちつけた腰をさすりつつ言った。
「ピュラが来るまではここを離れられない。この霧じゃ、一度はぐれたら合流できないよ」
「ねえ、あれ何？」
　ルビーが、霧の中でうごめく何かを指さした。それは地面に放り出されたマットレスのように見えたが、確かに動いている。その上、声まで聞こえた。
「……誰か……ここから出して……！」
　人間──そう気づいたルビーは、すぐに駆けだした。近づくにつれて、霧で見えなかったその姿がはっきり見えてくる。
　それは大きな網だった。魚や獣を捕えるような網の中に、ファウナスの母親と子供が閉じ込められている。
「待ってて！　今、出してあげる！」
　二人を助け出そうと向かうルビーのすぐ鼻先で、霧の中から飛び出してきた犬型ドローンの鋼鉄の牙きばが閉じた。ルビーがひるんで立ち止まった隙すきに、犬型ドローンは網をくわえてそのまま引きずってい

く。母子の助けを求める声を残し、霧の中へ消えていった。
「待てっ！」
　加速のセンブランスを使って霧の中に突っ込んだルビーは、危うく街路樹にぶつかりそうになった。機械の犬たちは霧の中をジグザグに走って逃げたらしい。霧が視界を塞ふさいでいるせいで、追いかけることもできない。
「ルビー！　一人で動くのは危険ですわ！」
「でも、人がさらわれたんだよ⁉」
「わたくしたちも捕まったら、彼女たちを助けられる人間は誰もいなくなりますのよ！」
　言われてルビーは気づく。ここは海に囲まれた孤島で、ＳＩＣの本性を知る人間は自分たちの他ほかにいないこと。そして、霧の中から聞こえる悲鳴は、さっきの母子だけのものではないことも。
「……何で、こんなこと」
　ノーラが、めずらしく神妙な声で言った。レンも、いつものクールな表情に余裕がない。
　霧の中から聞こえる悲鳴と助けを求める声は、ひとつやふたつではなかった。あらゆる方角から響く声は、さっき目の前で起きた光景が、あちこちで起きていることを告げていた。
「一体……この島で何が起きてるんだ……」
　思わず呟いたジョーンの眼前に、盾たてと槍やりを手にしたピュラが降ってくる。霧で視界が悪いにもかかわらず、あぶなげない着地。
「ピュラ！」
　仲間の無事を喜ぶジョーンの背後から飛んできた大きな網が、空中でぴたりと制止した。紙くずでも投げ捨てるようにピュラが手を振ると、網が地面にべしゃりと落ちる。ピュラが叫ぶ。
「ノーラ！」

「まっかせて！」
　ハンマーを振りかざし、網が飛んできた方角に向かってノーラが走り出す。
　霧の中にひそんでいたドローンは、逃げ出す間もなくノーラの一撃でスクラップと化した。敵の破壊を確認して、ピュラが仲間に呼びかける。
「みんな気をつけて。口から網を吐き出すドローンが混じってるわ」
　別の方角から分銅付きの鎖が飛んできて、それもまたピュラが磁力で止める。
「あと、鎖も。わたしたちを生け捕りにしたいみたい」
　ピュラが手を下ろすのに合わせて、空中の網と鎖が地面に落ちる。
　鎖が飛んできた方角に向けてルビーとヤンがダスト弾を撃ち込み、また一体のドローンがバラバラに吹き飛んだ。ワイスが眉まゆをひそめる。
「招待客を捕まえようとしているんですの？　一体なんのために……？」
「それより早く逃げよう！　ここを離れないと！」
　ジョーンの言葉がきっかけで、一行はその場を後にした。と言っても、この霧の中では全力疾走もできず、道なりに進んでいくしかない。
「ちょっと待ってくれ！」と、突然ジョーンが立ち止まった。
　そのまま、霧の奥をじっと見つめている。ピュラも、つられてそちらを見る。
「ジョーン？　どうかしたの？」
「今、誰かが俺の名前を呼んだ」
「あたしたちの中の誰かでないなら、それって敵だと思うけど」ヤンが言う。
「いや。一人、味方になってくれそうな心当たりがある」

ジョーンは道を外れて霧の中に足を踏み入れた。確信を持った足取りに、他ほかの仲間たちも半信半疑といった顔でついていく。
　やがてジョーンが立ち止まったのは、地面に伏せられたボートの前だった。
「本当に来てくれるとは思いませんでしたよ。呼んでみるもんですね」
　伏せられたボートの下から、ずるりと少女が這はい出てくる。少女はゴテゴテのデコレーションがほどこされた、青緑色のツナギを着ていた。
「イオナ、やっぱり君か」
「ん？　ちょっと待って」ヤンが言った。
「この子がジョーンが言ってた女の子？　ＳＩＣのエンジニアで、監視されてたっていう」
「もう監視はされてませんよ。どこかの誰かが、わたしを監視していたドローンたちを追いかけ回してくれたおかげです。それじゃ、さっさとチケット出してください」
「チケット？」
「この島でサービスを受けるのに必要だから捨てずに持ち歩けって言われてたでしょう？　あのチケットには位置情報を知らせるチップが埋め込まれてるんです。持ってる限り、どこに隠れても無む駄だです。ビーコンの学生でも、この島のドローンすべてを相手にするのは無理でしょう」
　ためらいつつも、全員がチケットを取り出して渡した。イオナはそれをまとめて受け取り、ボートの下に隠してあったごく小さな蜘く蛛も型ドローンにダクトテープで貼り付けて、道に放す。
　ヨタヨタと、酔っ払いのように八つ足を不器用に動かしてドローンは霧の中へ消えていった。
「これで、しばらくは時間が稼げます。今のうちに逃げますよ」

「教えてくれ、イオナ。この島で何が起こってるんだ。さらわれた人たちは一体どうなる」
「今ここで話すのは無理です。ついてきてください」
　返事も待たず、イオナは小走りでその場を後にする。霧で見失うまいと、ジョーン以下、チームＲＷＢＹとＪＮＰＲの面々が続いた。
　霧の向こうからは時折、ファウナスたちの悲鳴が響いてきていた。

　イオナが案内した隠れ家というのは、立ち入り禁止区域の中、湖の近くにあった。
　どうやら、使われなくなった倉庫を改造したものらしい。作業台や工具、分解された機械部品などが乱雑に散らばっていた。
　そんな中で、イオナは置きっぱなしにされていた大型エンジンを椅い子すに選んで座り込む。
「わたしの秘密の工房です。会社に知られたくないことをするときは、ここを使ってるんです」
「それにしても、ずいぶん古びてるな」
　ジョーンが機械油の染みを見下ろして言う。座ろうにも椅子がないし、どこも汚れている。
「わたしのお爺ちゃんの頃から使われてますからね。この島だって、もともとはわたしの家の資産だったんですけど」
「またそんな嘘うそを……」とジョーンが言いかけたときだった。
「ああああああっ！」
　ワイスに耳元で叫ばれて、ジョーンは思わず耳を押さえる。
「な、なに!?　ワイスなに？」
「ようやく思い出しましたわ！　あなた、イオナ・ロックショーではな

くて⁉」
「ええ、そうですが」
　指をさされたイオナは、あっさり認める。ルビーはイオナの顔を確かめるように見て、
「ワイス。この子、知ってるの？」
「昔、とあるパーティーでお見かけしたんですの。各国の企業を代表する人間と、その一族が集まるパーティーでしたわ」
　ワイスはイオナの顔をのぞき込んだ。
「わたくしの記憶が確かなら、あなたはＳＩＣの経営者一族だったと思いますけれど」
「え、そうなの？」ルビーが言う。
「社長令嬢⁉　イオナが⁉　ワイスと同じ⁉」ジョーンが喚わめく。
「案外いるもんなんだね社長令嬢」ノーラがのほほんとつぶやいた。
「なんだ、ワイスもたいしたことないんじゃん」ヤンがそんな感想を述べた。
「ちょっと静かにしてくださいますかしら！」後ろの野次馬どもを叱しかりつけて、ワイスは改めてイオナに向き合う。
「あのパーティーの後、ご家族に不幸があってお父上も体調を崩くずされ、地位を退かれたと聞いておりますわ。ロックショーはＳＩＣを手放した、と。なのに、どうしてあなたが一人でＳＩＣに残っているんですの？」
「話せば長くなる話です」
「どれだけ長くなろうと、まず聞いておかなければならないことがありますわ」
　ルビーがワイスの背中越しに身を乗り出す。
「そう！　なんで、ＳＩＣが人をさらうのか──」
「シルバーバレットのこと、ご存じですわよね？」

知らない名前で肩すかしを食わされて、ルビーは目を白黒させた。
「何それ？」
「部屋に押し入ってきた男たちが身につけていたエンブレムですわ。あなたも見たでしょう？」
　そういえば、男たちのプロテクターに確かにそういうエンブレムがあってヤンが読み上げていたっけ。【無垢なる兄弟たちの銀の銃弾シルバーバレット】と。
「今、わたくしたちが遭遇しているこの事態の原因は、すべてそこにあるはずですわ」
「ワイス、何か知ってるのか？」ジョーンが尋ねる。
　渋い顔で、ワイスは答えた。
「シルバーバレットは、ファウナスの排斥運動を行っていた先鋭的な結社……有り体に言えば、ファウナス差別主義者の集団ですわ。彼らは、昔のようにファウナスと人間を社会的に分離するべきだと主張していたんですの。ひどいときには、彼らを奴ど隷れいとすべきだとも」
　ワイスの説明を聞いて、作業台にもたれかかっていたヤンが発言した。
「【無垢なる兄弟たちの銀の銃弾】……だっけ？　そんな組織の名前は聞いたことないけど」
「彼らの活動の全盛期は、ずっと昔ですもの。母体となっていた団体から分裂して生まれた過激派ですけれど、ニュースになるほど派は手でな事件を起こすこともなく消えていったんですの」
「じゃあ、なんでワイスがそんなこと知ってんの？」
「以前、彼らがシュニー・ダスト・カンパニーに接触してきたからですわ。目的は、活動の支援依頼。我が社は、ファウナスの武装集団であるホワイトファングから多大な被害を受けてきましたから、ファウナス排斥の思想に賛同してくれると考えたようですわね」

「それって……」
　ルビーは思い出していた。以前のワイスはファウナスに強い警戒心を抱いていて、そのためにファウナスでありホワイトファングの元構成員でもあるブレイクと衝突したのだ。
「もちろん、お父様はその申し出を一蹴しましたわ。わたくしも、それは当然の判断だったと考えていますけれど」
　いつも以上に冷ややかな声で言って、ワイスはさらに冷ややかな目でイオナを見た。
「そうではなかった企業もあったようですわね」
　話を向けられて、イオナはエンジンの上で足を組み直す。ふてぶてしい態度だが、ルビーはそれより彼女が、お守りのように何かを握りしめているのが気になった。
「ええ。【無垢なる兄弟たちの銀の銃弾】は昔、ＳＩＣに接触してきました。ＳＩＣの社長だったわたしの父は、彼らの言うことをすべて受け入れて、最後は会社を乗っ取られたんです。あのオード・フォートリーに」
　ワイスは冷徹な態度のまま、尋問のような口調で言う。
「ＳＩＣはヴェイルではそれなりに知られた企業でしょう？　そんな会社が、えたいの知れない連中に、そこまで簡単にいいようにされるなんて、とても信じられませんわ」
「普通ならそうでしょうね。でもタイミングが最悪だった。彼らが接触してくる前、兄が殺されたんです。ファウナスにね」
　イオナの言葉に、さすがのワイスも質問を重ねることができなかった。
「犯人のファウナスは、ＳＩＣがファウナスを人体実験に利用しているって噂うわさを信じ込んでいたみたいです。そんなの、根も葉もないデマだったのに」

最悪の想像をしてしまったルビーが、おそるおそる尋ねる。
「もしかして、それって……ホワイトファング？」
「いいえ。犯人が何かの団体に所属していた形跡は無かったと聞いてます。影響くらいは受けていたかもしれませんけど」
ルビーだけでなく、ワイスとヤンもホッと肩の力を抜いた。イオナは続ける。
「兄が死んでから父は年齢以上に老け込んで、会社の舵取りなんてできなくなりました。そして、警察よりも先に犯人を見つけ出したフォートリーを父は全面的に信用するようになっていた」
「……周りの人間は、それを黙って見ていたんですの？」
「フォートリーが最初に名乗った肩書きは『ハンター』だったんです。無む垢くなる兄弟の何とかじゃなくてね。いつの間にかフォートリーはＳＩＣの中に入り込んでいて、彼が外から引き入れた人間もどんどん増えていった。警備主任のアンスロープもそのクチです。フォートリーの派閥が出来上がるにつれて、彼に逆らう人間は次々に会社を追われていきました。最終的に父は、自分自身を会社から追い出してしまった。
フォートリーの言うとおりに」
「お待ちなさい。フォートリーに逆らう人間が追い出されたというのなら、今も会社にいるあなたは……」
「ええ、フォートリー派でしたよ。最初から」
「よくもまあ……！」
憤いきどおったワイスは眦まなじりを上げたが、ルビーは冷静だった。今は、誰かを糾弾すべきときじゃない。
「待って、ワイス。それより、ブレイクのことを聞かないと」
「ですけれど、ルビー！」
「ワイス、ルビーの言うとおりだよ」ヤンが妹の肩を持つ。
「あたしたちの次の行動は、ブレイク次第なんだから。まずはそれを確

かめないと」
　ワイスは渋々引き下がると、イオナは素直にヤンの問いに答えた。
「残念ですが、あなた方のお友達のファウナスが今どこにいるかは知りません。ＳＩＣの施設に侵入しているところを発見されたとは聞きましたけど、捕まったのかどうかも……」
「それだよ！」とジョーンが大声を出した。
「どうしてＳＩＣはファウナスを捕まえようとするんだ？　捕まった人はどこへ？」
「……【無む垢くなる兄弟たちの銀の銃弾】の主張は、ファウナスの排斥。もしくは……彼らを奴ど隷れいの地位に落とすこと」
　ルビーは耳を疑った。しかし、イオナはそのまま続ける。
「今日の昼間、最初の船が出航して招待客を脱出させたでしょう？　あの船には、ファウナスは一人も乗ってません。ファウナスでない人たちだけを船で逃がしたんです。島には、意図的にファウナスが残されました。そして、ついさっきＳＩＣは彼ら全員を捕まえたってところです」
「捕まった人たちはどうなるの？　奴隷って、そんな……」
「湖の地下にあるダスト採掘場で、むりやり働かされることになってます」
「おかしいよ、ＳＩＣには機械がいっぱいそろってるのに、奴隷なんて必要ないじゃない」
「精製前の、未加工のダストが危険なのは知ってるでしょう？　作業員の安全性を完全に無視して、労働力を徹底的に消耗品として扱えば、効率よくダストを採掘できます。高価な機械を消耗するよりも、使い捨てのファウナスの方が安価ってことです」
　イオナはとんでもないことを淡々と語る。
「そして、彼らから生じる負の感情は、地上の森に棲すむグリムを活性化させる。ＳＩＣは労働力とグリム研究のデータを同時に得ることがで

きるんです。グリムの活性化が危険な水準に達したら、施設に被害が出る前に、セキュリティが出動して鎮圧することになってます。フォートリーがあなたたちにグリム退治を依頼したのは、緊急事態で人手が必要だったからでしょうね」
「恥を知りなさい、イオナ・ロックショー」ワイスがたまりかねたようにイオナに詰め寄る。
「あなたのお兄様は、ＳＩＣがファウナスを虐ぎやく待たいしていると信じたファウナスに殺されたのでしょう。あなたのしていることは、そのファウナスの行為を正当化しているも同然ですわ」
　ジョーンが、ワイスとイオナの間に体をねじ込んだ。
「ちょ、ちょっと待ってくれよ。イオナは、フォートリーの邪魔をして監視までされてたんだ。奴らに力を貸してるわけじゃない」
　しかし、ジョーンにかばわれてなお、イオナは態度を崩くずさない。
「いいえ。わたしは彼らに力を貸していました。けれどファウナスに殺された兄は、そのことでわたしを怒ったりしないでしょう」
「イオナ！」
「事実ですよ。兄は、気が弱い人でしたから。運動神経も悪くてスポーツもケンカもぜんぜん駄目で、かといって頭がいいわけでもない。昔から、兄がわたしに勝てることなんて一つもなかった。こんな運試しすら、わたしがずっと勝ち越してました」
　握っていたコインを指の上にのせて、真上に弾はじく。手の甲で受け止め、逆の手でふたをした。
「わたしと兄は、何かを決めるときはいつもコインで決めてたんです。イタズラがバレたときどっちが謝りに行くか、最後に残ったデザートをどっちが食べるか、食後に映画は何を観るか。あの日も、そうやって決めたんです。どっちが列車の窓側の席に座るかって」
　イオナがコインを押さえていた手を開く。コインの柄は、白い道化師

クラウン。
「窓側に座ったのはわたしでした。だから助かったんです。犯人のファウナスの目的は、ロックショーの名を持つ人間を誰でもいいから殺すことで、通路側の席にいた兄が襲われた」
　手首を返してコインを握る。手が白むほど強く。
「フォートリーに賛同したのは、兄を殺したファウナスが憎かったからです。わたしの目の前で兄を殺したファウナスを許せなかったから」
　イオナの言葉を聞いたワイスは、何と言うべきか迷っているようだった。ワイスの実家、シュニー家には、ファウナスの過激派ホワイトファングとの間に同様の因縁がある。そして、イオナと同様の怒りを抱いていたこともあった。
「でも、彼がサパン島をこんな島に変えてからはついていけなくなりました。フォートリーがここまでするなんて思ってなかった……」
「でも、それなら、どうして外部に助けを求めなかったんですの？」
「湖の採掘場には、以前からファウナスが閉じ込められています。そのことが外に漏れそうになったら採掘場を爆破して、何もかも湖の底に沈める計画になっていました。閉じ込められてるファウナスごと、ぜんぶ」
「つまり、今も人質がいて、それがさらに今夜増えてしまったということですわね」
　ワイスが眉み間けんに皺しわを寄せる。
「もしかして」ジョーンは急に思い出したように言った。
「昨日のビーチでの騒ぎ、あれは君が潜せん水すい艇ていを使ったせいだって言ってたけど、それって捕まってるファウナスを助け出すためだったのか？」
「ええ。人質になっているファウナスを連れて逃げ出せば、堂々とＳＩＣを告発できると思ったんです。わたしが手に入れた地下採掘場の地図

には、海と採掘場をつなぐ海底トンネルのことが書かれていましたから」
「展示会で機械を暴走させたのは？」
「サパン島に閉じこもっていたフォートリーを、島の外に誘い出すためです。あいつは独裁者ですから、自分の想定外のことが起きれば自分の目で確かめようとします。彼がいないときにファウナスを逃がせば対応も遅れるし、その間に逃げられる……そういう計画だったんですけどね」
「つまり、今の島の状況はこういうことね」それまで黙って話を聞いていたピュラが口を挟んだ。その場の全員に、確かめるように言う。
「湖の地下にはダストの採掘場があって、そこでは過激な思想にとりつかれた集団によるファウナスの強制労働が行われている。イオナはファウナスを逃がそうとしたけど失敗して、ＳＩＣから監視を受けていた。そして、ブレイクはそこへ向かったまま行方不明……」
「イオナ、聞きたいのですけれど。通信が使えないのもＳＩＣの仕業ですの？」
　ワイスの質問に、イオナは深呼吸して調子を整えてから答える。
「……ええ、ＳＩＣの開発した技術です。スクロールの通信波を減衰させてしまう特殊な霧を作り出す装置があって、外の霧はそこから発生したものです。まだ試作段階だったはずですけど、すでに効果を発揮しているようですね」
「だから、湖の島でもスクロールが使えなかったんだ」
　ルビーが言う。迷子になったとき、誰とも連絡が出来なかったために一人でずいぶんとさまようハメになったのだ。
「ですから、外に助けを求めることはできません。しばらくここに隠れて、隙すきを見て港に行けば、船を奪うチャンスがあるかもしれない。この島から脱出するには、それしかありません」

「この島を、このまま放ほうっておくの？」
　ルビーが言うと、イオナも言い返す。
「あなたたちがファウナスじゃないからって、ＳＩＣは容赦しませんよ。秘密を知られた以上、絶対にこの島から逃がそうとはしないはずです」
「だからって、あんなものを見た以上、見過ごせっこないよ！　ブレイクだって見つけないと！」
「それどころじゃないって言ってるんですよ！」エンジンの上から飛び降りて、イオナはルビーに詰め寄る。
「最初、フォートリーが観光を餌えさにこの島に連れてきていたのは、いなくなっても誰も捜さないような、身寄りのないファウナスたちだったんです。でも今は違う」
　イオナの話の途中で、ピュラが額を軽く押されたように顔を上げた。仲間たちに何かを告げようとしたが、やめる。その場を静かに離れて壁に近づき、採光窓から外をうかがう。
　その間も、イオナは熱のこもった言葉で訴えていた。
「今夜なんてファウナスの家族連れや、若者たちまで捕まえたんですよ。いずれ外の世界も異常に気づくはず。でもフォートリーはもう、外の世界がこの島に疑いを向けることを恐れてないんです。あいつは計画をすでに──」
　イオナの説明を遮さえぎるように、ピュラが何かを叫んだ。
　その意味を確かめる間もなく、全身を横殴りの衝撃に襲われてルビーの体が宙に浮く。視界がめちゃくちゃにかき混ぜられて、ルビーは意識を失った。

　ルビーが意識を失っていたのは実際のところは一分もなく、すぐに目を覚ました。

すさまじい衝撃と音で、耳の奥がわんわんと鳴り響いている。暗くら闇やみの中でもうもうと埃ほこりが立ち、視界はひどく悪い。
　この暗さは天井の明かりが天井ごと消失したためで、崩くずれた月の光とワイスの魔法陣グリフだけが、うすぼんやりとした光を放っていた。
「ワイス……」けほけほと軽く咳せき込みながら、ルビーが仲間を呼ぶ。
　ワイスは、思いのほか近くにいた。地面に剣を突き立てて、魔法陣グリフを使って衝撃からみんなを守っていたらしい。しかし力を使い果たしたのか、その場にへたり込んでいる。
　ノーラとレンも無事らしい。
「痛てて……」とヤンも作業台の下から這はい出てくる。脇わきには、埃にまみれたイオナの姿がある。
　ただ、全員が無事ではなかった。
「ピュラ！　おい、しっかりしろ！」
　ジョーンが悲痛な声を上げた。ピュラは赤毛を床に振り乱したまま、うつぶせに倒れて動かない。額からは、一条の血が流れていた。
「レン、ピュラが俺とイオナを庇かばって……！」
「落ち着いて下さい、ジョーン」レンがピュラの状態を確かめて言う。
「失神しているだけです。出血も、たいしたことはありません」
　そこへ、強い光が埃にまみれたルビーたちを照らし出した。
　さっきまでの暗闇が一転、昼間のように明るくなる。そしていつの間にか、崩れた工房は多くの影に取り囲まれていた。
　影の中でひときわ目立つのはキリンのように長い首を持つドローンで、その頭部が白い光を放っている。歩く街路灯、といった姿だ。
　キリン型ドローンの足下にいるのは、虎や犬といった様々な形態を持つドローンたち。

そして、それぞれが武器を手にした人影の連なりだった。
　人影のひとつが、よく通る声を発する。
「ＢＧＭスタート」
　腹の底に響く重低音のビートが空気を震わせた。夜の林には場違いなサウンドがわき上がり、アップテンポのダンスミュージックが響く。ドローンの中にはコオロギ型……というより「足のついたステレオ」としか表現しようのない姿のドローンが数体いて、音源はそれだった。
　音楽に負けない大きさの声が、ルビーの耳に届く。
「聞こえているだろう、少年少女ボーイズ＆ガールズ！　サパン島ビーチ・パーティへようこそ！」
「フォートリー……！」
　瓦が礫れきの陰から顔を出して、イオナがつぶやく。
　ルビーはまぶたをぬぐい、男のシルエットに目をこらす。左腕の、肘ひじから先が巨大な機械で覆われ、筒状の砲身が大きく飛び出している。砲の先端からは三本の爪。
　その形状、ルビーには見覚えがあった。湖の船で運ばれていた大砲だ。それをルビーに見せたのはフォートリーだった。
「いつまで寝ているつもりだ？　観客が盛り上がりに欠けると、ＭＣは困るんだが」
「ホテルもビーチもレストランも良かったけど、このサービスはサイテーだね」
　音楽が鳴り響く中、最初に立ち上がったのはヤンだった。髪についた土埃ぼこりを丁寧に払いながら、仲間を庇かばうように前に出る。
　ルビーたちが立ち直る時間を稼いでいるのだと気づいて、ルビーはクレセント・ローズの調子を確認した。いつでも戦えるように備えつつ、消耗したワイスに手を貸す。
「……大丈夫ですわ。少し休めば戦えるはず。それより、ピュラを」

「駄目だ。目を覚ましそうにない」ジョーンがおろおろと言った。
「こっちは、いつでもやり返せるよ」ノーラが頼もしい台詞せりふを吐き、レンもうなずく。
　その間、ヤンはたった一人で光に照らされながら、フォートリーに向き合っている。
「お客が仲良くやってるところに大砲ぶち込むのが、ＳＩＣのやり方ってわけ？」
「招待客には心から満足して帰っていただくのが、この島の理念であり方針だ。ただし、我が社に損害を与えるテロリストに対しては、趣向を変えて対応することになる」
「あたしたちがテロリスト？　自分たちはファウナスを捕まえてるくせに」
「それもまた我々の方針、そして信念だ」
　フォートリーの左目のミアが光り、複数のドローンが集まり彼の足元にひざまずく。一番近くにいた犬型の背中を、フォートリーは踏みつけた。
「獣は人の足下へ、あるべきものをあるべき地位へ！」
　フォートリーの前には小さいドローンから大きいものへと順に列を為していて、フォートリーは順番に高くなっていくドローンの背中を歩き、のぼっていく。足場となってフォートリーを支えているのは、忠実で意思を持たない機械たちの階段だった。
「重要なのは『あるべき地位と場所』だ！　【無む垢くなる兄弟たちの銀の銃弾】がもっとも尊重するもの。人間がいるべき場所と動物がいるべき場所。シンプルだろう？」
　やがてフォートリーは最後に、照明の役割を果たしているキリン型の背中に立った。ドローンの首を坂道のように上っていき、その頭部に足をかける。

おそらく計算してやっているのだろう。地上のルビーたちは、光と濃霧と音楽によって最大の演出効果を受けるフォートリーの姿を見上げることになった。
「そして私、オード・フォートリーのあるべき地位、あるべき場所とはここだ。そうだな、ミア？」
『はい。あなたはもっともこの島の頂点にふさわしい人物です、ＣＥＯ』
「呆あきれたね！」ヤンが頭上のフォートリーに聞こえるよう声を張り上げる。
「たいそうなことを言っておいて、結局はお山の大将をやりたいわけ!?」
　フォートリーは意外そうに眉まゆをひそめた。瓦が礫れきに身を隠しているイオナの姿を捜し、
「なんだイオナ。まだそこまで説明していなかったのか？」
「わ、わたしは……」
「ヤン！」ルビーが姉を呼んだ。仲間に介抱されていたワイスが、ヤンにうなずく。
　両手のエンバー・セリカが展開し、ヤンの両拳を覆った。
「パーティに誘ってもらって悪いけど、そろそろチェックアウトさせてもらうよ！」
　エンバー・セリカから赤い光弾が放たれて、頭上のフォートリーに命中──彼の長身が、爆発と煙に包まれる。
「レビュー・サイトには☆一つ評価つけといたげる」
「──不誠実なレビューは困るな」
　左手の大砲を軽々と振って煙を追い払い、無傷のフォートリーが姿を見せる。
　ヤンが拳こぶしを強く握ったのが、ルビーにはわかった。射撃のタイ

ミングは申し分なかったのに、意外な機敏さを見せたフォートリーが、大砲を盾たてにして攻撃を防いだのだ。
「ホテルの利用規則にもあったはずだ。『非常時には係員の指示に従ってください』──アンスロープ！　始めろ！」
　フォートリーの命令に従い、武装した人影がＢＧＭのリズムに足音を重ねて進んでくる。ルビーたちを取り囲む影は小銃のようなものを構え、ロープの輪を絞るように迫ってきていた。
　ワイスとノーラが、包囲に向かって武器を構える。マンヒルドをグレネードランチャーに変形させたノーラに、ワイスが告げた。
「同時にいきますわよ、ノーラ」
「あ、ごめん、もう撃っちゃった」
　何か言いたげな顔をしながらも、ワイスは地面にミルテンアスターを突き立てた。マンヒルドの弧を描く弾頭を追って、氷の波が影の群れに押し寄せる。
　だが、その攻撃が届くより前に、横から飛び込んできたドローンたちが攻撃を受け止めた。爆炎と氷が連続して弾はじけ、ドローンを吹き飛ばし、あるいは氷漬けにする。しかし、包囲の人影は無傷のままだ。
「あいつら、ドローンを盾たてにしてる！」
　ジョーンの言うとおり、こちらの攻撃はすべてドローンが防いでしまっている。包囲が縮まってくると、今度は敵が一斉に発砲。ワイスたちはエンジンや瓦が礫れきの陰に逃げ込み、それら遮しや蔽へい物を銃弾が叩たたく。反撃を封じて、さらに包囲が縮まる。
　その様子をフォートリーは、キリン型ドローンの頭部に立って見下ろしていた。
「おお？」と、フォートリーの足場が傾いた。
　フォートリーが乗っているキリン型ドローン、その長い足の１本をヤンの拳こぶしが砕いたのだ。

バランスを欠いて傾いた細長いドローンの体を、ルビーが薔薇らの花弁を散らしつつ駆け上がり、フォートリーに激突する。
「今すぐやめさせて！」
　ルビーはクレセント・ローズの柄をフォートリーに押しつけて叫ぶ。首に押し当てるつもりだったが、寸前でフォートリーは左腕の大砲で防ぎ、クレセント・ローズを押し返していた。
「私が示した教訓を無む駄だにしたな、ルビー・ローズ。リーダーである君が選ぶべき選択肢は『自分ひとりで逃げる』ことだった」
「そんなこと、できるわけない！」
「いいや、可能だ。君のそのスピードがあれば、我々の不意を突いて逃げ切ることだってできただろう。自分の力を信じられない者は敗北する」
　フォートリーの背後に、ヤンが飛び上がっていた。とっくに拳を振りかぶっている。
　しかしフォートリーは素早くルビーと体勢を入れ替えて蹴け り飛ばし、ヤンにぶつけた。
「ルビー！」ヤンは妹の体を空中で受け止め、落下しながら言った。
「先に足場を壊すよ！」
「うん！」
　クレセント・ローズとエンバー・セリカが火を吹き、キリン型ドローンの体に横殴りの弾丸をぶつけていく。
　切り倒された木のように首をしならせて、ドローンはその場に横倒しになった。足場を失ったフォートリーも地面に落下──その着地点を目がけて、先に着地していたヤンとルビーが同時にダスト弾を打ち込む。
　しかし、フォートリーは大砲を楽々と振り回し、二人の攻撃を払いのけた。ルビーは改めて、この男への認識を改めた。やはり、戦い慣れている。

「そろそろ、この場の支配者が誰かわかったころだろう？　人間である君たちのことは手荒には扱わない。大人しくしていた方が利口というものだ。そうだろう、ミア」
『はい、ＣＥＯ。人間が持つ権利は尊重されてしかるべきです。獣ではなく』
「あなたは、あなたのお父さんと同じ事をしてる」ルビーはいつでも飛び出せるよう、クレセント・ローズを脇わきに構えた。
「勇気を振り絞って暴力に立ち向かったって、あなたはそう言ってたのに」
「ああ、その通りだルビー・ローズ。私は暴力を振るう義父と戦い、左目を代償に困難へと立ち向かうことの価値を知った。その言葉に嘘うそはない。そうだな、ミア」
『はい、ＣＥＯ。あなたのパーソナル・データと合致する情報です』
「ただ、あのとき言っていなかったことがある。私の左目を抉えぐった男はな、ファウナスだったんだよ。あいつは獣の野蛮さと腕力で、私と母をいたぶった」
　飛びだそうとしたヤンを、フォートリーは左腕を向けるだけで牽けん制せいした。右目はルビーを見ているが、左目を覆うミアのカメラは、三本爪の砲口と同じくヤンを狙ねらっている。
「だから私はよく知っている。獣の危険性を。人と奴らとのアンフェアな関係を。獣の『あるべき場所』は檻おりの中。そうしてようやく、人は枕を高くして眠ることができる」
「ファウナスが怖くて寝られないのは、あんただけよ」
　言いながら、ヤンはさりげなく体重の重心を動かしたが、そのわずかな動きにさえミアのカメラは反応した。同時に左手の大砲も。
「一応、聞いておこう。投降するつもりはあるか？」
　冗談じゃない。

ルビーは返事の代わりに斬きりかかろうとして──聞き覚えのある銃声に大鎌を止めた。
　銃声と共にキリン型ドローンの光源が次々に破壊され、あっという間に戦場は暗くら闇やみに包まれていく。砕けた月の頼りない明かりの下で、ルビーたちを取り囲む影の群れが動揺していた。
　悲鳴がいくつも聞こえて、影が次々に倒されていく。ステレオ・ドローンまでもが襲われて、聞くに耐えないノイズが音楽に混じる。
「どうした！　何を騒いでいるのかわからんぞ！　報告しろ！」
　どこかからアンスロープの唸うなり声が聞こえたとき、闇の中から一層黒い影が飛び出した。一直線に、ルビーたちのいる場所へ向かってくる。
　その黒影に対し、フォートリーは左腕の大砲を闇やみに向けた。大砲の内部で巨大ダスト弾が圧あつ搾さくされ、強引に抽出されたエネルギーが三本爪の砲口から解放。エネルギーの奔流が空気を灼やき、触れた地面を焦げた土塊に変えて高く巻き上げた。
　ダストの輝きが周囲を明るく照らす。ルビーの目にも、砲撃をかわした彼女の姿がはっきりと見えた。
「ブレイク⁉」
　ガムボール・シュラウドを二刀に変形させて、ブレイクは一直線にフォートリーへ。同時に、リーダーを守ろうと武装セキュリティやドローンたちも殺到してくる。乱闘が始まった。
　いくらなんでも多勢に無勢で、ルビーは仲間を助けに向かうべく走り出そうとした。
「ブレ……！」
　言いかけたルビーの口をヤンがふさぐ。ヤンの隣には、大勢の敵と戦っているはずのブレイクの姿があった。
「……あ、じゃあ、あっちのブレイクって」

「わたしのセンブランスよ」本物のブレイクが小声で答える。
「急いで。あいつらがトリックに気づく前に」
　ルビーとヤンはうなずき、ブレイクの後に続いた。ブレイクの活躍により、包囲は崩くずれきっている。
　それでも途中、すれ違った数人のセキュリティがこちらに気づきそうになったが、彼らは悲鳴をあげる間もなく倒れ込む。いつの間にか、彼らの背後にレンが忍び寄っていた。
　こちらもいつの間にか近くにいたノーラがささやく──「今の超カッコよかったよね！」──ノーラは失神したピュラを肩に担いでいて、傍そばにはワイスとジョーン、イオナの姿もあった。
「これからどうする？」
　ジョーンの質問に、ヤンが答える。
「身を隠せる場所を探した方がよさそうだね。騙だまされたって気づいたあいつらが、怒り狂って押し寄せてくる前に」
　ブレイクは近くの林を指さした。
「一番近いのはあそこよ。走って」
　背後からは途切れがちな雑音と化した音楽と、男の──おそらく警備主任アンスロープの怒鳴り声が聞こえる。ルビーたちが一人残らず姿を消したことに気づいたらしい。
　ルビーはブレイクの後を走りながら振り返り、追いかけてくる者がいないか確かめた。ブレイクほど夜目が利かないルビーには暗くら闇やみを見通すことはできなかったが、ルビーたちが逃げてきた方向に、極めて小さな赤い点が見えた。目を細めて、その正体に気づく。
　フォートリーの左目──ミアのカメラだ。こっちを見ている。
　確か、フォートリーが言っていた。あのウェアラブル・スクロールには様々な機能を追加することができ、その中には暗視機能もあると。
　まさにフォートリーのいる方角から、強烈な光が迸ほとばしった。ル

ビーが叫ぶ。
「みんな伏せて！」
　押し寄せてきた光に触れた地面がめくり上がり、衝撃がルビーたちを襲う。直撃こそ避けたものの、爆発の影響が想像以上に大きい。
「ジョーン、ピュラが！」
　土をかぶったノーラが叫ぶ。さっきの爆発で担いでいたピュラを離してしまったらしい。
　そのピュラは意識を失ったまま、いつの間に追いついていたのか、犬型のドローンに足をくわえられて連れ去られようとしていた。
「ピュラ！」
「ジョーン、いけません！」
　レンが押さえる。ルビーも、思わず足を止めた。
「先に行ってください」レンが冷静に、しかし力を込めて言う。
「最悪の事態は、僕たち全員が捕まることです。あなたは、あなたのチームを助けてください」
「でも……」
「ルビー、あなたはリーダーでしょう？」
「……わかった。みんな気をつけて」
「お互い、無事にまた会いましょう」
　再会を約束し、ルビーは仲間を追って林へ向かった。

　夜がさらに深まって、闇やみと霧がルビーたちの逃走を助けていた。
　サパン島中央の湖、その南岸に小さな港がある。今朝は、ここから湖中島に渡ったのだ。
　港の外れにはもう使われなくなったらしい物置小屋があり、鍵かぎを

壊してチームＲＷＢＹの四人は身をひそめていた。船の係留ロープや古びたホースの束といった、イオナの工房よりも生活感のある道具が無造作に置かれて埃ほこりをかぶっている。
　半開きの扉の陰から外の様子をうかがっていたブレイクが、あきらめた様子で扉を閉じた。
「ジョーンたちは来そうにないわ。イオナとかいう子の姿も見当たらない。ドローンを連れたＳＩＣの人間が巡回してるだけ」
「無事が間違いないのはあたしたちだけか……」
　むき出しの板壁によりかかってヤンがつぶやく。ワイスはドローンとの連戦に加えて逃避行がこたえたのか、床にしゃがみ込んでいた。
「隠れるならもっと、ＳＩＣの気配がない場所を選んだ方がいいのではなくて？」
「敵は、わたしたちがこの島から逃げ出すに違いないと思ってる。敵の喉のど元もとに近いここは、彼らにとっての盲点よ」
　ブレイクの説明に、ヤンが疑問を返す。
「喉元ってのはもしかして、あの湖の中にある島のこと？」
「あそこの地下に、捕えられたファウナスたちが集められている。おそらく、フォートリーもやってくるわ。わたしなら、奴の不意を突ける」
「わたしたち、じゃないんだね」
　ヤンがすかさず言った。
　ブレイクはヤン、そしてルビーとワイスを順番に見つめる。覚悟の決まった目で。
「わたしがあいつの元に乗り込んで騒ぎを起こせば、警備の目も緩くなるわ。その隙すきに、あなたたちは島から脱出して」
「ブレイク！」ルビーとワイスが同時に非難の声を上げる。
「また無茶なことするつもり⁉」
「一人で行って、無事で帰ってこれるとお思いですの⁉」

ブレイクは静かに応じる。
「全員で行っても、きっと無事では済まないわ。あなたもわかってるでしょう、ワイス」
　言われて、ワイスは言葉に詰まる。
「わたしはあの湖の地下で見てしまった。ファウナスが捕えられて、鉄の枷かせを嵌はめられている姿を。わたしには、あれを放ほうっておくことなんてできない。それが無謀なことだとしても」
　ブレイクは、三人に背を向ける。
「今、一番賢明な選択は、この島から逃げ出すことに全力をそそぐことよ。わたしの個人的な感傷に、あなたたちを巻き込むわけにはいかない」
「だからって──」
「ルビー」おもむろに、ヤンが言った。
「あの約束はどうなってたっけ？」
「……約束？」
「ほら、島に来るときの船で決めたじゃん。休暇を、このチームでどう過ごすか」
　言われて、ルビーは思い出した。一日ずつのルール。
「みんなで、自分の日を決めて、他ほかの人はそれに従う」
「それ」言って、ヤンはブレイクの隣に回り込み、彼女の肩に腕を置く。
「あたしは提案するよ、リーダー。たった今から24時間、ブレイクの日。ブレイクの行くところにあたしたちはついて行って、ブレイクの望みをみんなで叶える」
　ワイスはヤンの意をくみ取って薄く笑った。
「確かに、わたくしとヤンの望みは叶えてもらったわけですから、次はブレイクの番でしたわね」

「……あなたたち、何を言ってるの」
「これから一日、あなたが主役という話ですわ。聞いていたでしょう？」
「そういう問題じゃない。あきらかに危険な場所に、全員で飛び込む必要はないわ」
「とはいえ、そういうルールですもの。ねえ、ルビー？」
　ルビーは力いっぱいうなずいた。
「決めちゃったことだから仕方ないね。今日はブレイクの日だから、わたしたちは従わないと」
「……なら、わたしの言うことに従って島から脱出すべきじゃないのかしら」
「それはダメ」ブレイクの鼻先に指を突きつける。
「なぜなら、このルールはわたしたち四人全員が、一緒に休暇を過ごすためのルールだからです。誰か一人を残してビーコンに戻るのは、ルール違反」
「ヤンとワイスには、そのルールは適応されなかったみたいだけど」
「終わったことを言っても仕方ないよ！」
　ルビーの言葉にワイスとヤンは、それまでの不仲が嘘うそのように息を合わせてうなずいた。
「そうですわね。リーダーが決めたことですし、仕方ないと言わざるを得ませんわね」
「そうそう、仕方ない仕方ない」
　ブレイクは、ついに降参のため息をついた。
「……わかった。じゃあ、手伝って」
「もちろん！」
「やるからには確実に目標を遂行し、全員が無事に帰らなくてはなりませんわ」

「それも、徹底的にやらなきゃね」
　全員の意思がまとまったところで、ルビーはコホン、と咳せき払ばらい。
　手頃な椅い子すの上に跳び上がり、仲間たちを見下ろす。
「それでは、チームＲＷＢＹの【ブレイクの日作戦オペレーシヨン・ブレイクスデイ】を始めます！」

RWBY
THE SESSION
4
Get into/out of the Cage

ピュラは、薄暗い場所で目を覚ました。
　地面は床ではなく、むき出しの岩。冷たく硬い感触が、ピュラの肩を突き刺している。
　体の感覚を確かめながら、ピュラは岩の地面に手をついてゆっくりと体を起こした。関節が固くなっている感触はあったが、たいした怪け我がはなさそうだ。
　なぜこうなったかを思い出すため、ピュラは記憶をたどってみる。
　確かイオナの工房で突然、外からの攻撃にさらされたのだ。とっさに、周囲にあるものを磁力で寄せ集めて盾たてを作ったのだが、その後のことはよく覚えていない。
　状況からして、おそらく自分はＳＩＣ□□大企業を支配するシルバーバレットとやらに捕まったのだろう。仲間はどうなったのか、それが何より気にかかる。確かめないと。
　幸い、手錠じようや足枷かせなどは見当たらない。岩がん窟くつをくり抜いたような牢ろうの正面には鉄格子がはめられていて、おとぎ話に出てくる海賊の牢ろう獄ごくみたいだとピュラはおかしく思った。
　鉄格子の向こうの通路は、壁も天井も床も岩造り。壁に沿って無骨な灯りがぶら下がっている。洞どう窟くつ……いや坑道だ。ということは、ここはあの湖の地下にあるとかいうダスト採掘場だろうか。
「無理ですよ」
　いきなり声がして、ピュラはぎょっと後ろを振り返る。それまで気づかなかったが、青緑色のツナギを着た少女が牢獄のすみで膝ひざを抱えていた。
「鉄格子の鍵かぎは電子錠だから。閉じ込められたら、もう出られっこないです」
「イオナ。あなたも？」
「あなたは失神してたんでしたね。フォートリーに、わたしたちの居場

所がバレたんです」
「他ほかのみんなは？」
「知りません。ここにいないってことは、まだ捕まってないのかも」
「そう……よかった」
　薄暗がりの中で、イオナが首をもたげる。
「よかった？　変な思想でイカれた連中に捕まって、閉じ込められてるのに？」
「何事にも悪い面と良い面があるわ。この場合は、仲間が助けに来てくれる可能性があること。それに、あなたがわたしたちの味方だって証明されたこと」
「それは捕まった甲斐がある話ですね。でも、助けは来ませんよ、きっと」
　再び、膝に顔をうずめる。
「助けに来るわ。少なくとも、ジョーンは間違いなく来てくれる」
「島のすべてが敵なんですよ。逃げるだけで精一杯に決まってます。ましてや、あんな弱い人が」
　イオナは頑かたくなに言ったが、ピュラは気にせず肩と腰を動かして関節をほぐした。
「強いとか弱いとかじゃないわ。彼はチームのリーダー。だから来てくれる」
「力が伴ってないのに責任感はあるなんて、一番タチが悪いですよ」
　鉄格子の前の通路から足音がして、ピュラは振り返った。
　小銃のベルトを肩にかけた男がやってきて、立ち止まる。全身プロテクターで、完全武装だ。
「静かにしろ。お前たちは人間でありながら獣どもに……」
「いいところに来てくれたわ」
　ピュラが手をかかげた途端、男の体が少し浮き上がり、そのまま鉄格

子に叩たたきつけられる。
　金属をたっぷり使った全身プロテクター──ピュラのセンブランスの、格好の餌え食じきだ。
　男は混乱した様子でもがき、小銃をつかもうとするが、磁力はその武器を男の手の届かないところに追いやった。ピュラは、鉄格子越しに空いた腕を男の首に絡める。
「鍵かぎ」
　笑顔のまま底冷えのする声でささやくと、男は震える手でカードキーを差し出す。ピュラは軽く男を絞め落とし、カードキーを使ってあっさり脱獄に成功した。
　小銃を拾い上げて通路を見回し、ピュラは呆あっ気けにとられているイオナに言う。
「もし良ければ、あなたに出口まで道案内をしてほしいんだけど」
「……フォートリーは、自分の思うとおりにならない他人には何の価値も感じない人間です。ここから逃げ出せば状況が悪化するかもしれないんですよ。もし助けがこなかったら……」
　凝り固まった少女の心をほぐすため、ピュラは状況に似つかわしくない笑みを浮かべる。
「あなたはさっき、ここから出られないと言ったけれど、それは間違いだった。そして、あなたはわたしたちのことをよく知らない。そうでしょう？」
　檻おりの中のイオナは、外のピュラを怯おびえたような目で見つめた。そして、ツナギにいくつもあるポケットのひとつからコインを取り出す。表裏をピュラに見せた。
「赤と白です」
「知ってるわ。ジョーンに聞いたから」
　イオナがコインを弾はじいて、手の甲で受け止める。ピュラは聞かれ

る前に答えた。
「赤の女王」
　手を開く──イオナはため息を吐ついた。
「……久しぶりですよ、負けたの」
　イオナは、鉄格子を越えた。

　早朝の日が湖を照らし、なかなか美しい眺めになっている。今はそれを楽しめる気持ちではないことを、ジョーンは心から残念に思った。
「レン！　どうだ⁉」
　林の中、ジョーンは頭上をあおいで言った。枝葉の向こうから、答えが返ってくる。
「誰もいませんね」
「いない？　見張りとかも？」
「はい」
「じゃあ、チャンスだな」
「ええ。船を奪うなら今です」
　昨夜、シルバーバレットの襲撃を受けて、ピュラが連れ去られてから数時間がたっている。
　チームＲＷＢＹルビーと別れたジョーンたちは、なんとか敵の追手を振り切り、林の中で一夜を明かした。しかし、このままピュラを置いて島から逃げだすつもりはない。
「ピュラは他ほかのファウナスと一緒に、湖の地下に連れて行かれたはずだ。船で島に乗り込んで、ピュラを見つけたら、すぐに逃げる」
「了解です」
　樹上から、レンがするりと降りてくる。音も立てない着地だったが、

それまで木にもたれかかって居眠りをしていたノーラが目覚めて、のそりと起き上がった。
「レン、ピュラは見つけた？」
「これから見つけにいくんですよ。船に乗ってね」
「わかった。船を奪うんだね」
　寝起きのノーラとは思えない理解の早さだが、とにかく頼もしい。
　三人は林を出て湖の船着き場へと向かう。慎重に周囲を警戒したが、誰とも出会わなかった。
「……本当に誰もいないな。ドローンも」
「罠わなの可能性もあります。気をつけてください」
　湖に突き出した桟橋で三人が目をつけたのは、一隻だけ残されていた中型ボートだった。船内に姿を隠すことができそうな大きさで、操縦に不安はあるが、ＳＩＣのボートなら自動運転の機能くらいあるかもしれない。
「まず、俺たちで一斉に乗り込む。誰かいたら武器を突きつけて手をあげさせるホールドアップ。できるだけ撃たないようにする。ノーラ、絶対に船を壊すなよ」
「了解！」
「よし、行こう！」
　ジョーンの合図と共に桟橋を走り出しかけたとき、目当てのボートの中から大きな武器がいくつも突きだした。
　大鎌、レイピア、鎖くさり鎌がま、籠こ手て、それぞれの銃口がジョーンたちに向けられる。
「あれ、ジョーン？　レンとノーラも」
　大鎌の持ち主が意外そうに言う。ボートの運転席から顔を出したルビーと、その仲間たち全員がそろっていた。
「えーと……ルビー。ワイス、それにブレイクとヤンも無事でよかっ

た」
　手を挙げた体勢ホールドアップのままジョーンが言う。
「急で悪いんだけど、俺たちも一緒に乗せてもらっていいかな？」

◇

　ボートが、静かな湖に荒々しく波を立てて進んでいく。その船内リビングでジョーンたちは、ルビーたち四人からこれまでの経緯を聞かされた。船着き場の周囲に見張りがいなかったのは、彼女たちがすべて排除してくれたおかげらしい。
　ジョーンも四人に、ピュラを助け出せなかったことを知らせた。
　ワイスはジョーンたちをいたわるように、
「無理せず退ひいたのは正しい判断でしたわ、ジョーン。あなたたちまで捕まっては元も子もありませんもの」
「たぶん、ピュラはファウナスたちと同じ場所に捕まってるんじゃないかと思う。あいつらがピュラをどうするつもりかはわからないけど……」
「あそこにフォートリーかアンスロープがいれば、ピュラの行方を聞き出せるわ」と、ブレイクが言う。続けて、
「ルビーの考えプランは四人じゃ心もとなかったけど、七人いればなんとかなるかもしれない」
「考えプラン？」
　ふふん、とルビーは自慢げに胸に手を当てる。
「そう、わたしに考えがあるの」
　ジョーンとレンが顔を見合わせた。気持ちはわかる、といった様子でワイスが言い添える。
「不安に思うのはわかりますけれど、まあマシなアイデアですわよ。少

なくとも今のところは」
「……ワイスがそう言うなら、わかった。俺たちも加わるよ」
　船外で見張りをしていたノーラが窓から顔をのぞかせた。
「ルビー！　その計画、あたしはレンと一緒がいいな！」
「もちろん。チームＲＷＢＹとＪＮＰＲ、それぞれが別の目標を目指す。簡単でしょ？」
「ルビーとヤンがあたしたちと一緒でもいいよ？」
「ダメ。それはもうやんない。ダメ」
　ルビーがノーラにきっぱり言って釘を刺すと、運転席に通じるドアからヤンが顔を出す。
「あたしはやってもいいけど」
「ダメです」ルビーが即時却下。
　一方、ジョーンの顔はまた不安に染まっていた。
「……この船、ヤンが動かしてるのか？」
「そうだよ」ルビーが言った。
「どうせバイクと似たようなもんでしょって言って、本当に動かしちゃったの。すごいよね」
　イェーイ、と姉妹がハイタッチ。まだ沈んでないところを見ると、なんとかなったのだろう。
　ヤンは運転席から降りてきて、リビングの全員の注意を引く。
「さあ皆さん、そろそろ停めるよ、準備して」
「もう上陸？」
　ジョーンがたずねると、ヤンはニヤリとイタズラっぽい笑みを浮かべる。
「いいや。まだ沖合だけど、こんな大きな船で近づいたらすぐバレるでしょ？　だから、上陸用のボートを持ってきてんの。……ルビー、あれ出して」

ボート、と聞いてジョーンは首をかしげる。大きな船、と言ったって、この船だって小型船、いわゆるボートじゃないのか。
　やがて、ルビーがデッキから引っ張ってきたそれを見て、ジョーンは絶句した。
　辛うじて言えた言葉はひとこと。
「……バナナ？」

　湖の景色をのぞむローマン・トーチウィックは、数時間ぶりの葉巻の煙を楽しんでいた。
　湖面に映った林の木々、青く白み始めた空、早朝の清浄で爽さわやかな空気──手を焼かされた仕事がようやく一段落つくことを思えば、目に映る景色が尚さら美しく目に映る。
　ローマンがこのサパン島に、そして島の中の湖の、そのまた中に浮かぶ湖中島にやってきたのは、ＳＩＣに借りを返すため。借りとはもちろん、ヴェイルでホワイトファングの輸送機を撃墜してくれた件だ。
「ま、これだけ頂けたからには水に流してやろう」
　ローマンの隣には、採掘場から持ち出されたトロッコに満載のダストがあった。
「ボス。これで最後ですか？」
　白い面をつけたホワイトファングの女が言って、トロッコに手をかける。
「そうだ。こぼすなよ、俺が命がけで盗み出してきたんだからな」
「たった一人でここまで大量のダストを盗み出すなんて、さすがですね。できれば、わたしたちもお手伝いがしたかったのですが……」
「おいおいおい、かわいい部下をそんな危険な目にあわせるわけにはい

かないだろう。リスクを負うのは俺だけで充分なんだ。さ、行け」
　部下がトロッコを押して行ってしまうのを待って、ぼそりとつぶやく。
「……お前らに地下アレを見られると面倒だしな」
　ローマンが現在、手足として使っている部下たちはファウナスの武装組織ホワイトファング。構成員がみなファウナスであるため、ＳＩＣをひそかに支配している【無む垢くなる兄弟たちの銀の銃弾】とは相性が最悪。絶対に相あい容いれない関係なのだ。
　ローマンは、自分の部下たちには地下に百人近いファウナスたちが囚人にされていることを伝えていなかった。『ファウナスの解放』を理念とする彼らがそんなことを知れば、間違いなく激怒する。ローマンが止めても無む駄だだろう。ＳＩＣとの戦争に突入だ。戦争はどうだっていいが、それで自分の仕事が遅れるのはとてもイヤだ。
「……そういえば、あの子猫ちゃんはどうなったかな」
　こんなところで会うとは思わなかったし、会いたくもない相手だが、タイミングは最高だった。あのときローマンはセキュリティに見つかり、追跡を受けていたのだが、彼らはとつぜん目の前に現れた黒いリボンのファウナスにターゲットを変えた。おかげで、ローマンは無事に逃げ切ることができ、フォートリーの不在をついて大量のダストを盗み出せたのだ。
　ファウナスを嫌うフォートリーのことだから、あの少女にひどい罰を与えただろうが、知ったことではない。どちらもビジネスの邪魔をする敵だ。せいぜいつぶし合えばいい。
「ボス」草むらを踏み分ける音がして、また別の部下がやってくる。
「実は、輸送機のエンジンが不調で。荷物を減らせば、すぐにでも出せると思うんですが」
「馬ば鹿か言うな。さっさとなおせ。いいか？　さっさと、だぞ」

荷物を減らす？　せっかく命がけで集めてきたダストを捨てるとでも？　冗談じゃない。
　去って行く部下の背中に向かって、さらに言う。
「俺はここで一服してる。修理が済んだら呼べ」
　ゥゥウウウウン……。
　ローマンが顔をそらした隙すきに、湖を何かが横切っていった。
　低いエンジン音に驚いたローマンが振り返ったときには、音の正体はすでに通り過ぎている。気のせいではない証拠に、水面が波立っていた。
　ローマンの怜れい悧りな頭脳が、かつてない混乱を訴える。
　今のは、おそらくＳＩＣの哨しよう戒かい艇ていか何かだ。向こうからこちらの姿を見られただろうか。
　しかし、一瞬だけ目にすることができたあの船の姿は、まるで。
「……バナナ？」

　波打ち際に巨大なバナナを置き捨てて、ルビーたちは檻ケイジと呼ばれる島に上陸していた。
　上陸後はすぐさま周囲を警戒し、近くにグリムやＳＩＣの見張りなどがいないことを確認。バナナボートを破壊して湖に沈め、目撃された可能性を考慮し、すぐに上陸地点から離れる。
「バナナボートで潜入なんて聞いたことないよ」と、ジョーンが小さくつぶやいた。
　ヤンが用意したのは、三本のバナナが平行に並んでいるタイプのボート。七人という数字は、ギリギリ定員だったらしい。ジェットのままに暴れ回るバナナをノーラとヤンの二人がかりで押さえ込んで、なんとか

全員を一度に上陸させることができたのだ。
　ノーラはさっきまでバナナボートのジェットと格闘していたとは思えない軽やかな足取りで、ハンマーを肩に担いでスキップしている。
　ピクニックの行き先を尋ねるような口調で、
「で、これからどうするの？」
「地下に続いているトンネルに向かうわ」ブレイクが答えた。
「道は、わたしが覚えてる」
「わかった！」「なるほど」ノーラとレンがうなずいた。
　そのとき、歩きながら服のあちこちをまさぐっていたルビーが「あ！」というつぶやきと共に折り畳たたまれた紙片を一枚取り出した。
「あったー！　こんなところに！」
「なんですの、それ」尋ねるワイスにルビーは紙片をひろげて見せ、
「サパン島に向かう船の中で、ワイスがわたしに出した宿題。休暇が終わるまでに、チームワークのアイデアを出せって言ってたヤツ」
「確かにそう言いましたけれど……その結果が『コンビネーション名』、ですの？」
「カッコいいでしょ？　アイスフラワー！」
　ビシッと珍妙なポーズをとってルビーは言うが、ワイスの眉み間けんは皺しわを刻んだままだ。
「コンビネーションの合図を決めることの有効性は認めますけれど、もっと他ほかに重要な……」
　ぶつぶつ言うワイスからヤンは紙を受け取ると、楽しげな口笛を吹いた。
「さっすがあたしの妹、いいセンスしてるじゃん。みんなでこれを覚えればいいわけね」
　言って、ヤンはブレイクに紙を回す。ブレイクは困惑気味にそれを受

け取った。
「……わたしも？」
「もちろん」「とーぜん」「そうなりますわね」
　三人から返答をもらい、ブレイクは渋々、紙に書き連ねられたメモに目を通し始めた。

　森の中を進んでいると、おもむろにブレイクが立ち止まった。ルビーはぶつかりそうになり、
「ブレイク、どうしたの？」
「……ここは、わたしに任せてほしい」
「え？　何を？」
「いるんでしょう？　出てきたら？」
　誰に……？　ルビーが不思議そうな顔をしていると、ジョーンがいきなり悲鳴をあげた。
　さっきまで人の気配の無かった木々の陰から、数人の男女が現れる。銃や剣で武装した彼らは、一様に白い仮面とジャケットを身につけていた。
「ホワイトファング⁉」
　ルビーはクレセント・ローズに手をかける。仲間たちも一斉に戦闘態勢をとったが、ブレイクは違った。素手のまま前に進み出る。それに、ヤンも。
「ルビー、落ち着こう。みんなも」ヤンはルビーの肩に手を置き、ブレイクに尋ねる。
「任せていいのよね？」
　ブレイクは肩越しにうなずいてみせた。「だってさ」と、ヤンがルビーに言う。姉の声の響きから、少し緊張しているのがルビーにはわかった。ヤンも、ホワイトファングに囲まれたこの状況で落ち着いては

いない。でもヤンは、ブレイクを信頼している。
　ワイスを見れば、険しい顔でミルテンアスターを構えてはいるが、問答無用で攻撃しようとはしていない。不安げなジョーンに、ルビーはうなずいてみせた。
　チームＲＷＢＹはブレイクを信じる。
「ホワイトファング」かつての古巣の名をブレイクが口にする。応じず無言のままの彼らの前で、ブレイクはリボンを解いた。彼女の耳を見て、白い仮面の間に静かな動揺が広がった。
「あなたたちに話があるわ。どうか聞いてほしい」

　ローマン・トーチウィックは、他人の都合で自分の仕事が遅れることが何より嫌いだった。
　部下だろうが敵だろうが他人だろうが、仕事の邪魔をする奴は地獄に落ちればいいと思っているし、自発的に地獄へ行く様子がないならそうなるよう手を貸してやりたいと思っている。
　このときローマンは、森の中をひとり歩きながら嫌な予感をひしひしと感じていた。
　今、この場所で自分の知らないうちに何やらひどく気に入らないことが進行しつつある。なんとなくだが、アウトローとしての勘がそう告げている。
　きっかけは、あのバナナだ。もしかするとバナナに偽装（？）したＳＩＣの新しいドローンではないかと気になって、あちこち捜し回ってしまった。結局、何も見つからなかったが。
　疲労からくる幻覚だか見間違いだか知らないが、自分が無む駄だに動かされたという事実がローマンをイラつかせていた。タダで自分を働か

せるやつも地獄に落ちればいい。

　木の枝が当たって帽子がズレる。ローマンはさらにイラついた。

　こういうワケのわからないところから降って湧わいた障害が、ビジネスにとって意外な凶兆になることを、ローマンは経験から知っている。

　エンジンの修理を急がせよう、とローマンは心に決めた。この気味の悪い島から、さっさと立ち去るのだ。

「……おいおい」

　ローマンが思わずつぶやいたのは、部下たちが森の中を移動しているのを見かけたからだ。

修理すべきエンジンと守るべきダストから離れて何をやってるんだ、あいつらは。
「おいおいおいおい！　勝手に動き回ってるんじゃない！　仕事はどうした!?」
　部下たちは、感情の読めない仮面をじろりとローマンに向けた。よく見れば、全員が銃と剣で武装している──ほら見ろ。嫌な予感がしたんだ。
「情報提供がありました」
「何？」
「この地下に、ファウナスが囚人になっているそうです。今から救出に向かいます」
「……誰がそれを？」
「かつての仲間、と聞いています。会ったのは初めてですが、確かにファウナスでした。我々の指導者のことも知っている様子だったので、信頼してもよいかと」
　ローマンは頭を抱えたくなった──あの子猫ちゃん、よくもあそこから逃げ出せたもんだ。
「ボスが知らなかったのも無理はありません。我々も驚いています」
　そして、念を押すように付け加える。
「まさか、止めませんよね？」
「ああ！　もちろんさ！」ローマンはヤケクソで叫んだ。
「ファウナスが何十人も捕まってる？　そいつはいけないな！　すぐに助けに行こう！」
「人数までは言ってませんが」
「おおよその想像で言ったんだ！　さっさと行くぞ！」
　訓練された部隊の速度で、ホワイトファングの構成員たちが動き出した。危険な仕事に対する備えとして精鋭を連れてきたのだが、こんなこ

とのために連れてきたわけではない。
　ローマン・トーチウィックは、他人の都合で自分の仕事が遅れることが何より嫌いだった。
　だから彼は、この馬ば鹿かげた事態を収拾してさっさと帰ろうと思っていた。
　そして、できれば腹いせに、誰かが地獄に落ちる手助けをしてあげようとも思っていた。

　地下採掘場、牢ろう獄ごく。
　開け放たれた牢の前で、フォートリーは部下が差し出すスクロールを見つめていた。
　スクロールの映像では、赤毛の少女が不可視の力で次々にセキュリティをなぎ払い、ドローンの群れをスクラップに変えていく様が映し出されている。
　最後に、映像を録画していたカメラも破壊されて、映像は暗転。
「ご覧のとおりです」フォートリーのそばに控えるアンスロープが言った。「これほどの能力センブランスの持ち主だとわからなかった、自分のミスです」
「ふーむ、こいつの能力は磁力かな。どう思う、ミア」
『同意いたします。ＣＥＯ。その可能性が最も高いでしょう』
「周囲の金属を操るセンブランス……文明のフィールドで戦う限り無敵だな。ぜひ、我々の仲間にくわえたい。兵器開発の分野で利用価値がありそうだし、磁力を使った余興も楽しそうだ。パーティーが盛り上がる」
　フォートリーはスクロールを押し返し、部下に言う。

「この件はお前に任せる、アンスロープ。えーと、ピュラ・ニコスだったか？　それと、イオナ・ロックショー。この二人を連れてこい。イオナに関しては、生死は問わない。エンジニアとしてはなかなか優秀だし、先代に対する人質という価値があったが、少し好きにさせすぎた」
「わかりました、この上なく」
　アンスロープは、与えられた残酷な役割を心から楽しむ笑顔になっている。ファウナスを牢獄に放ほうり込み、逃げ出さないよう監視する役割は彼のような人間の天職なのだ。
　部下たちが去った後、フォートリーの左目を覆うミアが着信を告げた。
「どうした？」
『侵入者です、ＣＥＯ！　すでに施設内で戦闘が発生しており、敵の中にはファウナスの姿もあるという報告もあります……ホ、ホワイトファングが』
　報告を受けても、フォートリーは眉まゆ一つ動かさない。
「誰の手引きかは心当たりがある……仕返しに獣をよこすとはな。ああいうユーモアのある男は嫌いじゃないが、場合が場合だ。ファウナス以外の侵入者は？」
『招待客が数人混じっています。例の、ビーコンの学生です。猫のファウナスもいます』
　フォートリーは、なげかわしい、とでも言いたげなため息をついた。
「脱走者はアンスロープが追っている。侵入者には、お前たちが当たれ。生かしてここから出すな。絶対にだ」
　一方的に通信を切り、フォートリーは牢ろうの並んだ区画を後にする。
　地下通路を歩きながら、残念そうに独り言を口にした。
「ルビー・ローズが、危険を冒して仲間を助けに来た。リーダーに必要

なものは何か、私が教えてやったことを何一つ理解していないらしい」
『優れた理念を受け入れることができない愚者は必ずいるものです、ＣＥＯ』
「悲しい事実だ、ミア。ならせめて、彼女たちのショーを盛り上げてやるとしよう」
　フォートリーは命令を告げる。
「ＢＧＭスタート」

　ルビーが想像していた地下坑道は、壁も天井もむき出しの土、というイメージだったのだが、通路は大部分がコンクリートで舗装されており、空調も整っていた。
　さらに、壁にはスピーカーが埋め込まれているらしい。そう気づいたのは、突然そこから大音量のダンスミュージックが流れ出したからだ。
　イオナの工房が襲撃されたときと同じ──しかしあのときとは違う曲。
「敵も、わたくしたちに気づいて動き出したようですわね」
　ワイスが言うと、ヤンは望むところだと言わんばかりの笑顔。
「いーじゃん。あたしも、こういう音楽は嫌いじゃ──」
　銃弾が何発もたたき込まれて、スピーカーは沈黙した。
　仲間たちの視線を浴びて、ブレイクはしれっと言う。
「うるさかったから」
　銃口から紫煙漂う武器をしまい、代わりにスクロール上の地図を頼りに先を歩き出した。
「音楽性の違いみたい」
　ぽかんとしている姉にそう言って、ルビーはブレイクについていく。
　地図によれば、この地下施設に通じる地上の入り口は一つや二つでは

なく複数あるらしい。地上からの通路は曲線を描いて下に向かい、他ほかの通路と合流して地下空間を形成している。
　その中には、広大な採掘場がいくつもあるようだった。
「それにしても、トーチウィックの悪事が助けになるなんて、屈辱を感じますわね……それに、ホワイトファングと目的を同じにするだなんて」
　ワイスが言ったのは、ブレイクがホワイトファングの構成員と交換した情報のことだ。
　最初、ＳＩＣに取引を持ちかけていたローマンは、表向きはフォートリーと笑顔で握手しながら、裏では檻ケイジと呼ばれる島のことを徹底的に調べていたらしい。この湖中島に隠された秘密を利用すればＳＩＣを操れると考えたためだ。
　そのためローマンは、ＳＩＣの目をすり抜けて忍び込む手段を、かなり前から用意していたという。ローマンとその部下たちが、地上の森を見張るドローンを密かに全滅させることに成功したのは、そうした積み重ねのお陰だった。それに、ルビーたちが地下へ侵入できたのも。
「あの男を野放しにするつもりはないわ。囚われている人たちを救い出したら、改めて決着をつける。……ホワイトファングのことも」
　言いかけたブレイクの前にヤンが飛び出し、前方に向けてエンバー・セリカを突き出す。
　ちょうど、物陰から飛びかかろうとしていたドローンが弾丸に貫かれ、動きを止めて落下する。
「お喋しやべりの前に、あたしらの役目を忘れてない？」ヤンは念入りにドローンの頭部を踏み砕いた。
「まず一つは、施設の中で暴れて注意を引きつける陽動。ジョーンたちがピュラを助け出せるようにね。もう一つが──」
「ＣＥＯのオード・フォートリーを見つけ出して、倒すこと」

凄すご味みさえたたえて、ブレイクが言う。ファウナスへの非道を目撃した彼女の怒りに、ルビーは一抹の不安を感じていた。
「……そういうこと。で、問題はどうやってフォートリーの居場所を捜すかってことなんだけど」
「虱しらみ潰つぶしに地下を調べて捜すのは？」
「いいや、ルビー。それじゃ時間がかかりすぎるよ。他ほかに方法があるはず」
ヤンがそう言ったとき、通路の向こうからゴロゴロと車輪の転がる音が響いてきた。音に合わせて線路が小刻みに震え、武装セキュリティを満載にしたトロッコがやってきた。ルビーたちから距離を置いて停まる。
「見つけたぞ、侵入者だな」
ぞろぞろとセキュリティたちが降りてきた。
彼らの身につけているプロテクターには弾丸の紋章が記されており、全員が小銃で武装している。その中でも際立って目立つ太った男が、一歩前に出た。ふくよかな顔を友好的な笑みでほころばせ、よく通る声で呼びかけてくる。
「聞きなさい、子供たち。我々【無む垢くなる兄弟たちの銀の銃弾】は、人間の理性と善良さを尊重する組織だ。未来ある君たちを傷つけるつもりはない」
「よく言うわ」
ブレイクが思わずつぶやいた途端、男は目をつり上げて表情を一変させた。
「貴様には言ってない！　ノミだらけの野獣め！　その汚い口を開いて疫病をまき散らすな！」
散々ツバを飛ばした後で、「オホン」と咳せき払ばらいをすると男は友好の笑顔にもどる。

「……ゆえに子供たち、武器を捨てて投降しなさい。人間の同胞に危害を加えるのは忍びない。獣には、相応の鞭むちをくれてやることにはなるが、君たちが獣を庇かばって怪け我がをすることもあるまいよ。ミスター・フォートリーは、寛大な懐で君たちを迎え入れてくださるだろう」
　自分の優位を疑いもしないこの侮辱を聞いて、ヤンが残忍な笑顔を見せた。その笑顔で、ルビーも思い至る。ヤンが言った「フォートリーを捜す他ほかの方法」。
　ワイスとブレイクが、静かに武器を構える。彼女たちも同じ答えに至ったのだろう。
　ルビーも、クレセント・ローズをシルバーバレットの男に向けて告げた。
「この人に聞こう」

　いきなり通路に音楽が鳴り響いたとき、イオナは心臓が止まるかと思った。
　気絶していたピュラにはわからないようだが、フォートリーが工房に襲撃をかけてきたときもダンスミュージックが鳴り響いたのだ。自分たちの脱走がバレたに違いない。
　その確信が揺らぎ始めたのは、音楽が聞こえるようになってから急に敵と出くわさなくなったからだ。武装したセキュリティも、ドローンもいない。追っ手の姿もない。二人の行く手は、ほぼ無人となっている。ピュラも違和感を覚えたらしい。
「急に人がいなくなったわね」
「ラッキー、とは言えませんね。嫌な予感がします」

「ＳＩＣは何を狙ねらってると思う？」
「あなたのセンブランスを警戒して攻めあぐねてる、というのが希望的観測です。最悪なのは、とっくに能力のタネが割れてて、すでに対策を用意されているケースです」
「確かに最悪ね。せめて、武器を取り戻せればいいんだけど……」
　ピュラは敵から奪った小銃を抱えているが、慣れない武器を扱いかねているようだった。それでも、角を曲がったり長い一本道などで銃を構える姿は非常に様になっていて、ジョーンなんかよりもよっぽど頼りがいがある。
「そういえばイオナ、ＳＩＣの人間はどうやって通信を使ってるの？霧のせいでネットワークには繋つなげないんでしょう？」
「この島内でのみ使えるネットワークを使ってるんです。霧に吸収されない波長を使うので、妨害されずに通信することができます」
「それを使えば、外との通信ができるんじゃないかしら」
「いいえ。ネットワークの中心は、地下施設のセキュリティ・ルームなんです。妙なことをすれば、すぐに感づかれて遮断されます」
「なるほど。やっぱり、ここから逃げ出した方が早そうね」
　長く続いた通路が終わり、広い空間に出る。そこにあるのは、すでに使われなくなった旧採掘場。ダストを掘り尽くし、何も生み出すことのなくなった死んだ鉱脈だ。
「……これは」
　ピュラが息を呑のむ。採掘場の規模が、彼女の想像を超えて大きかったからだ。
　巨大な縦穴、それが寿命を迎えた採掘場の姿だった。縦穴の壁面には取り付けられた足場と線路が螺ら旋せん状に伸び、採掘場全体が巨大なねじ穴のようになっていて、自分たちがいるのはその先端にして地の底。掘り尽くされて穴だらけになった採掘場は、虫に食われた死し骸が

いのようだ。
「行きましょう。これが地上までの最短距離です」
　貨物エレベーターが採掘場の壁に沿って、いくつか設置されていた。
「エレベーターを使うの？」
「まさか。途中で止められたら袋のネズミじゃないですか。隣の非常階段で地上まで……」
「じゃあ、今エレベーターを動かしてるのは誰？」
　言われて、イオナも気づく。イオナはまだエレベーターに触れてもいなかったのに、エレベーターは駆動している。
　音を立ててエレベーターの扉が開く━それを、ピュラがセンブランスで押しとどめた。
「逃げて、イオナ」
　磁力で封印されたエレベーターの扉が、内側からこじ開けられる。
　完全に開かれた扉から、十人ほどの男たちがあふれ出した。全員が同じセキュリティの制服を着て、黒い盾たてと棍こん棒ぼうを持っている。盾の表面には、白い銃弾のマークがペイントされていた。イオナがつぶやく。
「シルバーバレット……！」
　その中に一人だけ、巨大な棍棒そのもののような肉体の持ち主がいて、彼だけは武器を持っていない━ウスコー・アンスロープだ。
「わかっているな？　ピュラ・ニコス」
　アンスロープがじっとピュラを見つめて言う。イオナは最初、意味がわからなかったがピュラにはわかった。こめかみから汗が流れる。
「我ら全員が金属を身につけてはいない。ベルトのバックルさえもだ。武器はすべてカーボンで出来ている。磁力は効かない。今のはイオナ、お前にわかるように言ったんだ」
　ピュラが小銃を発砲した。セキュリティたちが盾たてをかかげてアン

スロープを守る。銃弾が黒い盾の端に当たって跳ねた。誰も狙ねらってはいない、ただの時間稼ぎだ。
「イオナ、来て！」
　もと来た道とは別の通路に逃げ込み、二人は走った。

◇

　牢ろう獄ごくに閉じ込められた捕虜を見張るＳＩＣの武装セキュリティは、いきなり襲ってきたホワイトファングの精鋭たちに抵抗すらできなかった。
　彼らはとるものもとりあえず逃げだし、後には破壊されたドローンの残ざん骸がいが残されている。
　ジョーンたちが手を出すまでもなく、牢獄の制圧と囚人の解放は完了した。
　解放された囚人と空っぽになった牢獄を、ジョーンは見て回ったが、ピュラの姿はどこにもない。手分けして捜したノーラとレンも同様だったらしい。
「ここにいるのはファウナスだけのようです、ジョーン」
「じゃあ、ピュラはどこに……」
　焦りから、ジョーンは無意味と知りつつも周囲を見回した。ファウナスたちが、安あん堵どと警戒の入り交じった表情で歩いて行く。彼らを誘導しているのは白い仮面をかぶったホワイトファングの闘士たちだ。
　その内の一人が、ジョーンの方に歩いてくる。彼は、何かを抱えていた。
「人間。これに見覚えはないか」
「こ、これ！　ピュラのだ！」
　紅色と金色の槍やり──ピュラ愛用の武器だ。それを、ジョーンに差し

出してくる。
「人間の女の子が連れて行かれたのを見たという者がいた。ここよりさらに地下へ連れて行かれたらしい」
「ここじゃないのか……捜さないと」
「悪いが、我々はここで引き返す」ホワイトファングの男が言う。表情は、仮面で読めない。
「ここより地下にあるのは、フォートリーに逆らった人間のための牢獄らしい。我々は同胞を助けるために来た。捕らえられていた彼らを無事に地上へ送るのが最優先事項だ。人間のために、仲間を危険にさらすわけにはいかない」
　ジョーンが何を言おうか迷っている内に、ファウナスはさっさと背を向けて行ってしまう。
「仕方ありませんね」レンが言う。
「彼らは自分たちをこんな目にあわせた人間を憎んでいるはずですから」
「敵対しなかっただけマシ、か」
　言って、ジョーンは受け取った武器を見下ろす。
　心のどこかでは、あのピュラのことだから自分たちが助けに行くまでもなく自力で逃げ出しているのではないか、とも思っていた。
　だが、これがここにあるということは、今のピュラは丸腰ということ。彼女には強力なセンブランスがあっても、危険な状況なのは間違いない。
「急ごう。二人とも」ジョーンは、ノーラとレンに言う。
「地下だって言ってた。一秒でも早く、ピュラを見つけ出さないと」

◇

湖中島、檻ケイジの地下最深部。ダストを掘り尽くされて、ほとんど顧みられることもなくなったはずの採掘場が、強力な照明と大音量のダンスミュージックで溢あふれている。
　さながらダンスホールのようなこの場所に、ＳＩＣのＣＥＯにして【無む垢くなる兄弟たちの銀の銃弾】リーダー、オード・フォートリーはいた。
　ＲＷＢＹの四人が道中出会った男から手に入れた情報を頼りにたどり着いたとき、フォートリーは縦穴のような地下空間を見上げて、何かをつぶやいていた。独り言のようにも見えるが、仮面のようなスクロールのミアと話しているのかもしれない。
「フォートリー！」
　ブレイクが敵の名を叫ぶ。すでにガムボール・シュラウドを手にしていて、採掘場中央の広場にいるフォートリーに向かって駆け出している。
「ブレイク！　ああ、もう！」
　仲間たちも先走ったブレイクの後を追う。フォートリーは、血相を変えて向かってくるブレイクの姿を目に留めると表情を変えた。侮蔑でも嘲ちよう笑しようでもなく、意外そうな──驚いた顔。
　ルビーはそのことに違和感を覚える。だが、フォートリーはブレイクが自分の元にたどり着く前に、ルビーの身の丈ほどもある大砲を拾い上げた。
「そこで止──」
　砲口を向けられているのにも構わず、ブレイクは突っ込んで斬きりつける。フォートリーは舌打ちと共に大砲でそれを受け止め、後ろに跳び下がり距離をとった。
「野蛮だな。私が先に撃っていたら……」
「いいえ。あなたには撃てない」

ガムボール・シュラウドの黒い刀身を向ける。ルビーたちも追いつき、フォートリーを取り囲む。ヤンが言った。
「こんな地下で大砲をぶっ放せば生き埋めになったっておかしくない。捕まえたファウナスと心中するつもりはなさそうだし」
「場所を間違えましたわね。観念なさいな」
　フォートリーは乱れた髪をかき上げて、物憂げにつぶやく。
「こんなに早く来るとわかっていたなら、こちらも準備をしていたのだがな」
『想定外の事態ですが、誤差の範囲内です。あなたの正しさは揺るぎません、ＣＥＯ』
「いいえ。何もかも間違いよ」ブレイクが鋭く言った。
「捕まっていたファウナスたちも今ごろ解放されているわ。あなたの計画はここで終わる」
「解放、とは地下通路を無様に逃げ回ることを言っているのか？　何匹のホワイトファングを引き入れたかは知らないが、私の部下よりも多いということはないだろう」
　フォートリーは、醜く歪ゆがんだ笑顔を突き出す。
「この島は檻ケイジ。獣は絶対に、外へは出られない。私が責任を持って飼ってやろう」
　黒剣の柄が強く握り込まれた。怒りに染め上げられたブレイクが、フォートリーに詰め寄る。
「ブレイク待って！」
　ルビーが叫んだのは、ブレイクの怒りを醒さますためではなかった。フォートリーの言葉が、ブレイクを誘い込む挑発だと気づいたからだ。
　フォートリーが持つ大砲の、長い砲身──それが、音を立てて外れた。彼の手元には大砲の根幹部だけが残っている。大砲からただの鉄の塊のようになったそれを、フォートリーはブレイクに叩たたきつけた。

「……！」
　轟ごう音おんと共に、鉄塊から太い鉄杭が飛び出してブレイクの鳩みぞ尾おちを貫く。ブレイクは驚きよう愕がくの表情のまま、すうっと消えた。
「なるほど、自分の分身を作り出すセンブランスか」納得した様子でフォートリーがつぶやく。
『データの記録に成功しました、ＣＥＯ』
「いいぞ、ミア。同じ手で何度も騙だまされるのはご免だからな」
　ブレイクはすでにフォートリーから距離を置いて、仲間のところまで下がっていた。
「大丈夫ですの？」
　ワイスに体を支えられて、ブレイクは苦痛に顔をしかめていた。かわしきれなかったのか、服の脇わきが破れ、血がにじんでいる。
　ヤンはブレイクを庇かばって拳こぶしを構え、
「ただの大砲じゃなかったみたいね。ルビー、何あれ」
「たぶん、工業用のパイルバンカーだと思う」
　ルビーは、昨日の船の中で聞かされた説明を思い出していた。内部に撃鉄ハンマーを持つ大砲──その撃鉄が鉄杭パイルなのだろう。砲身を取り付けることで大砲にもなる、変形パイルバンカー。
「いいや。工業用じゃない。これは戦闘を目的とした武器だ」
　フォートリーが右手でパイルバンカーの上部を掴つかみ、変形させた。パイルバンカー内部に収納されていた柄が伸び、別の形状をとる。
　形状はハンマー──ただしノーラのマンヒルドと違い、頭部ヘツドが鉄杭になっている。
『パイルバンカーとピックハンマーの二つの形態を持つ武器、〈ギガロリキート〉です。近接戦闘に特化し、アタッチメントによって遠距離攻撃も可能になっております』

フォートリーは武器の感触を楽しむように何度も柄を握り、地下に響く音楽に合わせて体を揺らす。揺らしながら、四人に近づいてくる。
「光栄に思ってほしい。我が社の、未発表の新型製品のテストに立ち会えるのだから」
　負傷したブレイクをかばっていたヤンが、迎え撃つべくステップを踏んだ。フォートリーとヤンは互いに踊るように近づき──いきなり、ピックハンマーが横殴りに振るわれる。
　ヤンは素早い反応で頭をかがめ、それを避ける。返しの一撃も上体をそらして避けた。連続で振るわれ続けるハンマーを、ヤンはすべてかわしている。
　ルビーは驚いていた。ヤンの反射神経に、ではない。あのヤンが反撃に転じることができないほどのスピードで続くフォートリーの連撃にだ。
「ヤン！　援護しますわ！」
　ワイスが魔法陣グリフを展開──地面をすべるように移動して、フォートリーの死角をとる。防ぐことはできないはずの奇襲に、フォートリーは反応した。突き出されたミルテンアスターを、機械的にハンマーで打つ。その素早く重い一撃でワイスの突撃が跳ね返される。
「軽いな。噂うわさに聞くシュニー一族の力もこんなものか」
　その隙すきにヤンが拳こぶしをねじこんだが、これもフォートリーはハンマーで難なく受け止める。
　自他共に認める武器マニアのルビーは、あのハンマーの速度の秘密にすぐ気がついた。
　フォートリーの武器ギガロリキート、その構造はやはりノーラの武器マンヒルドに似ている。ランチャーを内蔵したハンマー、マンヒルドは叩たたきつけた面に向けて爆発を起こすが、ギガロリキートはその逆。ハンマーの頭部から後ろに爆風を起こし、それを推進力に変えている。

超高速で振り回されるハンマーにくわえ、フォートリーは自身の目とミアのカメラ、二つの視界を持っている。攻守ともに隙がない。
　ギガロリキートの一撃を、ヤンは辛うじてガードした。バランスを崩くずしたヤンのフォローのため、ルビーはクレセント・ローズを脇わきに構え、フォートリーの間合いに飛び込んだ。
「……あっぶな！」
　ギガロリキートの届く範囲に入った途端、すぐ目の前をギガロリキートが通り過ぎていった。顔をのけぞらせるのがもう少し遅れていたら、鉄杭をたたき込まれていただろう。
　その隙に体勢を立て直したヤンが拳を振るうが、ギガロリキートの速度とリーチがその全てを防いでしまう。再び連撃の圧力で釘付けにされる前に、ヤンは退ひいた。
　ブレイクがガムボール・シュラウドで銃撃──しかし、高速で動き回るギガロリキートのヘッドが銃弾をすべてたたき落とす。たたき落としながら、ブレイクに向かって近づいていく。
「下がりなさい！」
　ワイスがミルテンアスターを地面に突き刺した。そこから氷が走り、フォートリーを襲う。
「美しい技だ」
　フォートリーは笑顔で氷波を迎え、ギガロリキートをパイルバンカーへと変形させた。地面に叩たたきつけ、爆発的な勢いで打ち込まれた鉄杭が、氷を地面ごと吹き飛ばす。
「だが、こうした方がもっと美しい！」
　舞い上がった氷の粒が輝きながら降るのを、フォートリーは両手を広げて迎える。
「……ハンターを名乗っていたとは聞いていますけれど、それだけのことはありますわね」

ワイスの言うとおりだった。武器の性能もあるだろうが、相当の場数を踏んでいるのは間違いない。その過程で、どれだけのファウナスたちを傷つけてきたのだろう。
　フォートリーはパイルバンカーをぶら下げて、ぞっとするほど毒気のない笑顔を向けてきた。
「今の戦闘、そう失望するほどひどくはなかったぞ。さすがはオズピン教授の教え子だ」
　ハンカチで首元の傷をぬぐう。気づかなかったが、ヤンが少しはダメージを与えたらしい。
「ここにいない私の部下よりも、君たちはよほど魅力的な人材だな。ぜひ、欲しい」
「ヘッドハンティングのつもり？　一緒にファウナスをいじめるの手伝えって？」
　ヤンの言葉に、フォートリーは首を横に振る。
「そうじゃない。手伝ってもらいたいのは、我々の事業だ。ＳＩＣによる、サパン島の独立だ。我々はこの島に、我々の手で運営される新国家を創るつもりでいる。そうだな、ミア？」
『はい。我々の目的は、このサパン島を、アトラス、ミストラル、ヴァキュオ、ヴェイルに続く五番目の国家とすることにあります。ＣＥＯの、崇高な理想の体現です』
「正気じゃありませんわね」
　ワイスがつぶやいた。フォートリーはそちらにカメラではない目を向ける。
「国家に必要なものが、ここにはある。ドローンとファウナスによる労働力と、潤沢なダストという資源だ。そして切り札もある━━私の支配下で動く、グリムの軍勢だ」
「嘘うそよ」ブレイクが言った。

「ホワイトファングから聞いてるわ。彼らが……いいえ。彼らのボスがあなたに接触したのは、ＳＩＣが開発したというグリムのコントロール技術に興味を持ったから。でも、ボスは失望した。あなたが言う技術は、グリムに見せかけただけの、ただのドローンだったからよ」
「……おしゃべりな獣だな」フォートリーは疎うとましさを込めて吐き捨てる。
「だとしても同じ事だ。霧にまぎれて襲いかかるグリムを、冷静に観察できる人間がどれだけいる？　実際、君は騙だまされたな？　ブレイク・ベラドンナ」
　ブレイクは沈黙した。昨日、森の中で奇妙な動きをするグリムに誘い出されたのは事実だ。
「ファウナスである君は、他ほかの仲間よりも追いかけっこが得意だろう？　障害物の多い森の中で、君だけを引き離すのは難しいことじゃない。ファウナスの少女が単独行動中、グリムのうろつく森で消息を絶ち、行方不明──そういう筋書きだったのだが、邪魔が入ってしまった」
　フォートリーはルビーに目をやる。もしもあのとき、仲間からはぐれたルビーがブレイクを見つけていなければ──。
「ブレイクを捕まえるつもりだったの？　グリムの仕業に見せかけて……」
「グリムは人類共通の敵だ。我々にとって邪魔な誰かがグリムに襲われて姿を消しても、不幸な事故だと見なされる。ドローンをグリムに見せかける偽装技術も、じきにブレイクスルーを迎えるだろう。できれば、事を起こすのはその技術が完全になってからが理想だったのだが」
　ギガロリキートが変形──パイルバンカーからピックハンマーへ。
「君たちが引っかきまわしてくれたおかげで、国家樹立は計画より前倒しになってしまった。とはいえ、君たちのように優秀な人材が仲間に加われば、我々の理想はさらに強固となる」

ピックハンマーをブレイクに向ける。
「その獣と手を切り、私たちと組め。その選択が、君たちのあるべき場所を示すだろう」
「ぜったいやだ」
　べーっとルビーが舌を出す。ヤン、ワイスは舌こそ出さなかったが、
「同じく」「ですわね」
　フォートリーは愉快そうに笑い、ギガロリキートを肩にかついだ。
「そうか。なら、君たちはずっと檻ケイジの中だ」
「ブレイク！　ヤン！」ルビーは、近づいてくるフォートリーではなく、仲間たちに言う。
「わたしが考えた合図でいくよ！　ちゃんと覚えてるよね？」
　フォートリーが立ち止まる。妙なことを言い出したルビーを警戒してのことだ。
　だが、彼女が次に出した指示は、フォートリーにはちっとも理解のできないものだった。
「バンブルビーミツバチ！」

　追われる側になって気づいたことだが、ダンスミュージックのようにノリのいい音楽というものは追う側の、強者の味方らしい。
　軍隊が行進曲をかけるように、威勢のいい音楽は人間を攻撃へ駆り立てる。追われる者の心細さを打ち消して勇気づけるのは、もっと別の種類の音楽なのだろう。
　その音楽に逆らうように小銃が火を噴く。ピュラの威い嚇かく射撃に、追っ手は足を止めて黒い盾たてに身を隠した。
「今のうちに！」

ピュラはイオナの手を引いて駆け出す。敵は様子をうかがうように立ち止まったままだ。
　部下を引き連れたアンスロープは、急いで二人を捕まえようとはしなかった。
　ただ、確実に退路を断ち、どこまでも追ってくる。敵はいずれも非金属で武装しており、ドローンに至ってはまったく姿を見かけない。しかし、分かれ道などでは必ずどちらかに敵の小部隊が待ち受けていて、敵のいない道を選ばされていた。
「イオナ？」
　何度目かの分岐の後、イオナが立ち止まった。あきらめきった様子で言う。
「もう止めましょう。どこへ逃げたって無む駄だです。あなたも、わかってるんでしょう？　わたしたちは誘導されてるんですよ。どんどん、地下深くに」
「あきらめちゃだめ。きっとジョーンが助けに……」
「来るわけないじゃないですか！　こんな危険なところに、あんな弱い人が！」
「弱い人に助けられるのが、そんなに嫌？」
「……わたしが嫌なのは、弱いくせに身の程知らずな人が無茶をすることです」
　イオナは、またいつの間にかコインを指で弄もてあそんでいた。彼女の癖なのかもしれない、とピュラは思った。工房でも、彼女が同じ仕草をしていたのを覚えている。
「気にせず置いてってください。あなたと違って、わたしは弱い人の助けなんて信じられませんから」
「ジョーンは弱くないわ」イオナは何か言い返そうとしたが、その言葉を飲み込んだ。ピュラの剣幕に怯ひるんだように。

「あなたはジョーンのことを知らない。彼は頼りないように見えるかもしれないけれど、他ほかの人にはない強さがある」
「……だから、助けに来てくれるって言うんですか」
「ええ、そうよ」迷わず、はっきりとピュラは言って、イオナに手を差し出した。
「行きましょう」
　ピュラが差し出した手を、イオナはためらいがちに握る。
「……結果は一緒ですよ、どうせ」
　二人は通路を走り出す。背後からは、音楽に混じってかすかに足音が聞こえてきている。
　追い立てられる緊張感をほぐそうと、ピュラはイオナに話しかけた。できるだけ明るく、
「でも、そんなに弱く見えたかしら？　ジョーンのことだけど」
「ええ。コインの勝負とか抜きにしても、ぜんぜん強そうには見えないです。ちっともです」
「まあ、そうかもしれないわね」ピュラは苦笑をもらす。
「わたしは今でも、あの人が助けにくるとは思ってませんから」
「あなたが弱い人を信じられないのって……お兄さんのことが関係しているの？」
　イオナは、すぐには答えなかった。少女の手を引きながら、イオナは彼女の中に色んな感情が渦巻いているのを感じ取っていた。
「……列車でファウナスに襲われたとき、兄は自分から相手に飛びかかっていったんですよ。弱いくせに。ケンカもスポーツもてんでダメなくせに」
　吐きだすように言う。
「弱いくせに、余計なことをするからですよ」
「それは違うわ。あなたのお兄さんは、きっとあなたを守ろうとして

—」
「兄がさっさと逃げていたら、ＳＩＣもこの島も、こんなことになってませんでした」
　イオナは、ピュラの握る手とは逆の手で、またコインをいじり始めている。
「あのとき兄は、コインの勝負で負けて通路側の席に座ったせいで、最初に襲われました。弱いんだから、さっさと逃げたらよかったのに。兄が逃げなかったせいで、わたしが何とかしないといけなくなったんです。ＳＩＣのことも、島のことも、わたし一人が」
　半分は強がりだと、ピュラにはわかる。イオナの言葉は滞とどこおりがちで、兄の死に対して感じる悲しみと怒りを、うまく処理できていないようだ。
　でも、そんな彼女になんと言ってやるべきなのか—ピュラにはわからない。
　やがて、二人は同時に立ち止まった。通路は下り坂になっていて、その先に広い空間がある。エレベーターがあったところと同じ、死んだ採掘場だ。
「終わりですね。行き止まりです」
　イオナが言う。ピュラは構わず進んでいった。
　さっきの場所と違うのは、地底が完全に水没しているところだった。水は濁って底が見えず、代わりに広い橋が渡されている。
　橋は反対側の地下通路に続いていたが、その中央で崩くずれ落ちていた。
「ダストの搬出中に起きた事故で崩れて以来、そのまま放置されてるんです」イオナがピュラの後についてやってくる。二人は橋の崩落地点に立った。
「放棄された採掘場のひとつ……溜まってる水はトンネル掘削中に流れ

込んだ地下水です」
「……向こう側に飛び移るのは難しそうね。下に降りても水が──」
「自分たちの運命がわかったようだな」と、嘲あざけるような声が二人の背中に投げつけられた。
　アンスロープが、黒い盾たての集団を従えて橋の始まりに立っている。
「獲物の選択肢を一つずつ潰つぶし、狩人が用意した結果へと導く。自分の行動がすべてコントロールされていたことを獲物が悟ったときの絶望は、何物にも代えがたい喜びだ」
　ピュラは自分の背中でイオナを隠した。こちらの武器は使い慣れていない上に弾丸の切れかけている小銃だけ。
「ジョーン……」
　ここにはいないリーダーの名をつぶやいた。

「バンブルビーミツバチ！」
　その合図で、ブレイクは武器を鎖くさり鎌がまから二刀に変える。それに対し、フォートリーはハンマーに変形させたギガロリキートをブンブンと振り回す。
「まずは獣からか？　大歓迎だ！」
　だが、ブレイクとヤンが同時に突っ込んでくるのを見て、フォートリーの顔から笑みが消える。
　二人は左右からフォートリーを挟み、同時に踏み込んだ。ギガロリキートが両の攻撃を防ぎ、打ち返す。だが拳こぶしと二刀の連続攻撃は休む間を与えずフォートリーを襲い続けた。
　フォートリーは舌打ちを残して二人を大振りで打ち払い、後退。ブレ

イクがフォートリーを追いかけて、ヤンが援護射撃をくわえる。エンバー・セリカから赤い光弾をいくつも飛ばし、フォートリーはギガロリキートを高速で振り回してそれを打ち払う。
　その間に、ブレイクはフォートリーのすぐ目の前に迫っていた。
「いいや、偽物だな！」
『本体はこちらです』
　ミアのカメラが動くのと同時にフォートリーは背後を向き、そこにいたブレイクめがけてギガロリキートを横薙なぎに振り抜いた。ガムボール・シュラウドの二刀がそれを受け止めるが、脇わき腹の傷に衝撃が響き、ブレイクが顔をしかめる。
「さあ、私に噛かみついてみろ、獣！　同胞を傷つけられた怒りはその程度か!?」
「いいえ」ブレイクは鼻先が触れるほどの距離で言う。「それは、これからよ」
　フォートリーの目の前で、黒剣がほどけた。それは見る間にリボンを結わえた鎖鎌になり、ブレイクはフォートリーの膝ひざと肩を蹴けって飛び越える。リボンがフォートリーの首に食い込んだ。
　リボンで首を絞められ、歯を食いしばったフォートリーの目の前に、ヤンが拳を振りかぶっていた。振りかぶったまま、ヤンは空中でウィンクをひとつ。
　次の瞬間、気合いと共に鉄拳が鳩みぞ尾おちにめり込み、フォートリーの息が詰まった。
　フォートリーは首を締めつけるリボンが許す限りしゃがみ込み、ギガロリキートの鉄杭を地面に打ち込んだ。地面が弾はじけて、周囲に土の礫つぶてが飛び散る。
　衝撃で首のリボンが緩むや否や、力まかせに背後のブレイクを振り回した。ブレイクはその勢いに逆らわず、フォートリーの背中から離れ

る。
　すぐさまフォートリーは、ギガロリキートをピックハンマーに変形させてブレイクに襲いかかった。リボンの厄介さを身に染みて理解したからだ。
「レイディバグテントウムシ！」
　ルビーの合図。薔ば薇らの花弁が視界をかすめたかと思うと、目にもとまらぬ速さでルビーがブレイクとフォートリーの間に現れる。ルビーの大鎌をハンマーがかろうじて止めた。ルビーは鎌の刃をハンマーに絡ませて引く──ハンマーが頭ヘツドを垂れた。
　ブレイクがルビーの後ろから飛び越えて、無防備になったフォートリーの顔面に飛び蹴げり。靴底が、フォートリーの顔面にめり込んだ。
　しかし、フォートリーは怯ひるまず、ギガロリキートの機能を発動。ピックハンマーのヘッド部分に仕込まれたダスト弾を使い、空中でいきなり加速させた。
　大鎌を引っかけていたルビーの体がハンマーに振り回されて、投げ出される。地面を転がったルビーは、頭をさすりながらクレセント・ローズを支えに立ち上がった。
　ルビーにトドメを刺そうと迫っていたフォートリーが振り上げたギガロリキートに、黒いリボンが巻きついた。その間に、地面を走る氷がフォートリーの両足を凍らせて、下半身の動きを封じ込める。ルビーが最後の合図を発する。
「アイスフラワー！」
　ワイスが魔法陣グリフを展開──それを踏んだルビーが、加速のセンブランスを発動させた。ブレイクがギガロリキートに巻きついていたリボンをほどいて巻き取る。ここからは、フォートリーが何をしようとも絶対にルビーの方が速い。
　ワイスの魔法陣グリフとルビーの力が噛かみ合い、ルビーを赤い弾丸

にしてフォートリー目がけて突っ込ませる。薔ば薇らの花弁を散らし、足もとの氷を砕きながらフォートリーの大柄な体を押し込んでいく。二人のセンブランスが合わされば、大型のグリムすら両断する威力となる。
「!?」
　フォートリーを押し込むルビーの突撃が、急に減速し、やがて止まった。ギガロリキートを狙ねらったクレセント・ローズの刃を、フォートリーはあろうことか指で止めている。
「……さっきからヒラヒラしている薔薇の花びらは、君のセンブランスか？」
　フォートリーが無造作にクレセント・ローズを押しやった。フォートリーの指が離れた瞬間、ルビーは再び斬きりかかったが、簡単に払いのけられてしまう。
　何かがおかしい。フォートリーの体術が優れているとか、そういった次元の話ではなかった。
　自分の体が自分のものではないような、異様な感覚。
「その力……泥に落として踏みにじりたくなる美しさだな！」
　オーディオ・ドローンの音楽に混じって、ごぼごぼと何かが沸わき立つような音がする。フォートリーが、ルビーにパイルバンカーを近づける──逃げられない、なんで？
「ルビー！　何やってんの！」
　横からヤンがパイルバンカーを殴りつけ、方向を逸そらす。ルビーを包んでいた謎なぞの力がゆるみ、その隙すきにルビーはフォートリーから距離を置いた。
　ヤンだけは攻撃を止めず、密着距離からの連打をくわえる。エンバー・セリカが打撃のたびに爆発を起こし、フォートリーを押しまくる。

しかし突然、ヤンは拳こぶしを止めて、ギョッとした様子で跳び下がった。大げさなほどに距離をとる。入れ違いに、ブレイクが攻撃の姿勢に入った。
「ブレイク、さがって！」
ヤンが叫んだ。ブレイクが前のめりになりながらも踏みとどまる。
「ヤン？」
「どうしましたの？　いったい……」
言いかけたワイスが、口を手で覆った。彼女の青い瞳ひとみは見開かれて、フォートリーの足下に向けられている。ヤンも、めずらしく緊張した表情でつぶやいた。
「あれが、あいつのセンブランス……」
フォートリーの足下の影は、光とフォートリーの位置を無視して円形に広がっている。影は沸わき立つように、ゴボゴボと音を立てて泡立っていた。
「どういう能力ですの？」
ワイスが頭を寄せて尋ねてくるが、ルビーは首を振った。
「わからない……急に、体が重くなって動きが鈍くなったの」
「あの影が効果範囲みたいね」ヤンが言う。
「影を踏んだときから体がおかしくなったから」
フォートリーはヤンに殴られた頬ほおを撫なでてから、血の混じった唾つばを吐いた。そして、再び命令。
「ＢＧＭ変更。フィニッシュだ」
『了解しました。ＣＥＯ』
ステレオ・ドローンの流す音楽が重苦しいものに変わった。威圧的な音楽を背景に、ピックハンマーに変形させたギガロリキートを肩に乗せて、フォートリーが無造作に向かってくる。
「どうした、ルビー・ローズ！　急に元気がなくなったな⁉」

フォートリーが移動すると、影も彼を中心として移動してきていた。うかつに近づけない。
「だったら！」ルビーが指示を出すまでもなく四人はダストを使った遠距離攻撃に切り替えた。
　様々な属性を持つ弾丸がいくつも発射される。その全てを、フォートリーは平然と避けた。素早く身を翻ひるがえしたり瞬間移動などはせずに、ただ歩いて、体を少し傾けるだけで。
「決まりのようですわね」ワイスが手を止めて言った。
「あの影の上ではすべてが遅くなるようですわ……ダストの攻撃でさえ」
「そのとおりだ、ミス・シュニー。君たちがなにを繰り出したところで」
　ギガロリキートが、飛んできた銃弾を弾はじいた。
「私に届く頃には、遅すぎて蠅はえが止まるほどの速度になる」
　ブレイクが鎖くさり鎌がまを投げつけた。フォートリーは軽くそれを受け止める。
「私のこのセンブランスが、何のための力かわかるか？」
「知りたくもないわ」
　フォートリーが掴つかむガムボール・シュラウドが弾丸を発射した。銃口の先にあるのはフォートリーの眉み間けん──この奇襲を、フォートリーは首をかしげるだけで回避してみせる。
「人間と獣の身体能力の差を埋める力……貴様ら獣を狩るための力だ」
　フォートリーはリボンを力任せに引っ張ってブレイクを影の上に引きずり出し、ギガロリキートで地面に押さえつける。泡立つ影がベタベタとブレイクにまとわりついた。ブレイクがもがいても、影が粘着質のようにくっついて離さない。
「影に近づけば近づくほど遅くなるぞ。影を踏んだ程度ならまだ逃げら

れる。体全体が密着すればもう手遅れだ……このように」
　動けなくなったブレイクを残し、フォートリーは残る三人に向かってくる。沸わき立つ黒沼を従えて、フォートリーが凄せい絶ぜつな笑顔を浮かべる。
「お前たちは、すでに私の檻おりの中」
「ブレイク！」駆け出そうとしたヤンの体がぴたりと止まる。フォートリーの足下から、一直線に伸びた影がヤンを捕らえていた。
「説明するつもりがなかったので黙っていたが、私の影は自由に形を変えられる」
　フォートリーはヤンに向かって飛びかかり、頭を掴つかんで地面に押しつける。影が濃さを増して、不定形の枷かせとなってその場に縛りつけた。
「あと二人」
「こんな物……！」
　触手のように伸びてくる影を、ワイスは氷の障壁で止めた。氷はワイスの周囲に張り巡らされて、次々に伸びてくる影からワイスを守っている。
　だが、その盾たてはギガロリキートを持ったフォートリーから身を守る役に立たなかった。
「前方注意、だ。ミス・シュニー」
　氷を踏み越えて、フォートリーがワイスの腕を掴む。反撃しようにも速さを失ったその体を、影に押しつけた。
「残り一人」
　ワイスを影で縛りつけて、フォートリーはルビーの姿を捜し──落胆のため息を吐ついた。
「私を失望で殺そうという作戦じゃないだろうな、ルビー・ローズ」
　ルビーは、影に縛られて動けないブレイクを助けようとしていた。鎌

で影を切ろうとしたり、単純に引っ張りだそうとしている。
「言っただろう。私の力は、獣をあるべき場所に押し込めるための力だ。ファウナス以上の力か速度でもない限り、抜け出すことはできない」
　フォートリーが手をかざす。ブレイクの体を伝って、粘ついた影がルビーの体も捕らえた。
「私の勝ちだ。ファンファーレを」
『お疲れ様でした、ＣＥＯ』
　管楽器の音色がオーディオ・ドローンから響き渡った。

　地図を頼りに、ジョーンたち三人は放棄された地下通路を通り、その場所に行き当たった。広い地下空間の底が水没して地底湖のようになっており、橋がかけられている。
「いた！　あそこ！」
　ノーラが指さす。中央の足場の上にピュラと、ピュラに迫る武装した男たちの姿があった。
「ヤバいぞあれ！　急いで――」
　そこで、初めてジョーンは、橋が足下から崩落していることに気づいた。周囲を見回しても、自分たちがいる場所からは、ピュラがいる橋の上に行く道も足場もない。
「レン！　どうすればあそこにいける⁉」
「地図によれば別の坑道からなら行けますが、かなり遠回りになります」
　今すぐピュラを助けに向かわなければならないのに、時間がない。
「ノーラ！　その武器で向こうまで飛んでいけないか？　前に、橋を壊

した反動を使って移動してただろ？　同じことをここでやれば……」
「天井が崩くずれるかもしれませんね」
　レンが目線を上にして言った。この坑道は使われなくなって整備もろくにされていないらしい。レンの指摘どおり、強い衝撃を与えれば崩れる可能性があった。
　焦じれる思いで、ジョーンは橋の上を見た。ピュラは武器を持っておらず、敵はじゅうぶんな装備をそろえているのだ。
　時間がない。ジョーンは、たとえ危険でも一番それらしい手段を選ぶしかなかった。
「……ノーラ。やってくれ」
「ジョーン、それでは天井が……」
「そうじゃない」
　ジョーンは腰にピュラの槍やりを差し、盾たてを胸の前に持ち上げる。
「俺をハンマーで殴って、あそこまで飛ばしてくれ。その程度の衝撃なら、この坑道が崩落したりはしないだろ」
　橋を背にして盾を構えたジョーンを見て、レンは言葉を失った。しかし、ノーラは笑顔になる。
「わかった！」
　ノーラはジョーンから少し離れて向かい合う。マンヒルドを、代打を控えたバッターのようにぶんぶん振り回し始めた。
「ノーラのパワーをわかって言ってますか」
「わかってる」
「正気とは思えません」
「正気だよ、レン。……いや、やっぱ違うかも」
「カウントダウンするよ！」
　ノーラが言い出して、どうやらもう手遅れらしいと悟ったレンは

ジョーンに言い聞かせる。
「腰を落として、力を抜いて、でも盾たては死んでも離さない。いいですね？」
「わ、わかった」
「５！」
「オーラを通わせて、胸と盾に集中させてください。本気で集中させてください。死ぬ気で集中させてください。させないと死にます」
「わ、わかった。オーラ、オーラね……たぶん、大丈夫かな」
「４！」
「な、なあ、レン。着地は？　着地はどうしたら……」
「入学してすぐの試験でやったでしょう。あれを思い出してください」
　ジョーンは泣きそうな顔になった。
「３！」
「レン、こんな直前になって悪いんだけど、頼みが──」
「２！　１！　ゼロ！」
　踏み込んできたノーラが、ジョーンの構える盾に横殴りの一撃をたたき込む。
　ジョーンの体が、ボールのように吹っ飛んでいった。

　ピュラは、持っていた小銃を磁力で浮かせた。銃ではなく、磁力で振り回す鈍器として使うためだ。こんな小技が、盾で防御を固める相手にどれだけ通じるのかは疑わしい。
　たとえ不利な勝負でも無力な少女を守るため、ピュラは戦う決意を固める。
　──そのときだった。

「……ぁぁぁああああああああ！」
　素すっ頓とん狂きような声が響いて、その場にいた全員がそちらを見た。
「ちょっと、そこどい──」
　何か言いかけたまま、宙を飛んできたジョーンがアンスロープに激突する。アンスロープは、「貴様」と「何な故ぜ」と「ぐぇ」を一度に言おうとしたような声を出して吹っ飛ばされた。
　方向が悪く、アンスロープは橋の欄らん干かんを越えて地底の水の中へと悲鳴と共に落ちていく。部下たちが、あわてて欄干に群がった。
　アンスロープとぶつかった橋の中央で、ジョーンはまだ倒れている。すっかり目を回していた。
「ジョーン！」
　ピュラが仲間の元に駆け寄ると、ジョーンは青い顔のまま、持っていた武器を差し出した。紅の槍やりと盾たて──ピュラの武器、ミロとアクオ。
　武器を受け取ったピュラは、最初は心底おどろいた顔をして──やがて、暖かい笑顔になる。
　まだ目をしばたたかせているジョーンの頬ほおを、やさしく撫なでた。
「ありがとう、ジョーン。信じてたけど、とてもうれしいわ」
「……本当ならペガサスにでも乗って駆けつけたかったんだけど」
　そんな二人を、イオナは呆ほうけたように見つめている。
「ジョーン・アークゥ！」
　声は、橋の下から聞こえてきた。橋の欄らん干かんに紐ひも状の何かが巻きついたかと思うと、それをたぐって全身びしょ濡ぬれのアンスロープが、這はい上がってくる。
「この卑ひ怯きよう者ものめ！　そこにいろ、全身の皮を剥はがして

カーペットにしてやる！」
　アンスロープの鬼気迫る視線を遮さえぎるように、槍と盾を手にしたピュラが立つ。ピュラは、ジョーンの方を振り向いた。
「イオナを守ってあげて。彼らの相手はわたしがするわ」
「そんな、いくらなんでも多すぎるって！　レンとノーラもこっちに向かってるから、ここは逃げよう！」
「大丈夫。ものすごく体が軽いから」ピュラは、無人の野をゆくように歩いていく。
「今なら、千人の敵にだって負ける気がしない」
　うっすら笑顔さえ浮かべて向かってくるピュラに気け圧おされ、プレッシャーに耐えかねた男が棍こん棒ぼうを振り回した。
　ピュラはその場でしゃがみ込み、男の足を槍で薙なぐ。バランスを崩くずしたところへ、盾ごと体当たりをかけた。押しやられた男がもたれかかったのは老朽化した手すり。男の体重に耐えられず、手すりはへし折れて男ごと濁り水の中へと落ちていった。
　棍棒と盾で挑みかかってくる敵の群れに向かって、ピュラは鋭い角度で盾を投とう擲てき──盾は最前列の黒盾をすり抜けて敵の顔面を打った。続けてピュラは槍を地面に突き刺して棒高跳びさながらに跳び上がり、空中で盾を掴つかむとそれを下にして落下──不幸な誰かが下敷きになる。
　立ち上がりざま、槍をライフルに変形。狙ねらいをつけて発砲すると同時に、反動を利用して逆方向に盾を構えて体当たり──二人、濁り水へ追加。
　ライフルを弾が切れるまで撃ち続けて敵を牽けん制せいし、弾切れを見計らい襲ってきた男に盾を投げつけ、その隙すきにライフルを槍に変形。
　投げた盾を磁力で掴んで引き戻し、返ってきた盾を受け取らずに直前

で避け、背後にいた別の男にぶつける。不意を打たれた男の頭を、旋回した槍の柄頭が強打した。
「すごい……」
　ジョーンは呆あつ気けにとられていた。倒れた男たちの中で残っているのは、早くも一人だけになっている。警備主任、ウスコー・アンスロープ。
　アンスロープは片手に、白い球が両端についた紐ひもを盾たての代わりにぶら下げている。それを、これ見よがしに旋回させ始めた。味方がいなくなっても、戦意は失っていないらしい。
「これはボーラという狩りの道具だ。わかっているだろうが、球は動物の骨を加工したもので、金属ではない……小細工は通じんぞ」
　ピュラは明るい翠みどりの瞳ひとみで相手の出方をうかがった。アンスロープの片手にはボーラ、もう一方の手にはナイフ。おそらくボーラでこちらの動きを封じ、ナイフでトドメを刺す戦法だろう。
　おもむろに間合いを詰めたピュラへ、アンスロープは突然ナイフを投げつけた。
　ピュラは困惑しながらも盾で防ぐ──いきなり武器を捨てた？
　そんなピュラの隣を、アンスロープは素早く通り過ぎていく。行く手にいるのは、イオナだ。
「馬ば鹿かめ！　俺のことをわかっていなかったようだな！」
　アンスロープはボーラをイオナに投げつけた。彼女を人質にするつもりだと気づいたピュラが後を追ったときには、遅かった。
　イオナに向かって飛んだ球が、純白の盾で防がれる。ジョーンが、そこに立ちはだかっていた。アンスロープが目をむく。
「お前、また……！」
「どっちが卑ひ怯きよう者ものだよ」
　前にはジョーン、後ろからはピュラ。進退窮きわまったアンスロープ

に二人が突進をしかける。
　白い盾と紅の盾に前後から挟まれて、アンスロープは「待て」と「やめて」と「ぐぇ」を一度に言おうとしたような声を出し──そのまま意識を失って倒れた。
　倒れ伏したアンスロープの体を挟んで、ジョーンとピュラが拳こぶしを合わせる。
「いい反応だったわ、リーダー」
「イオナを守れって言われたからな」
　そのイオナは、沈ちん鬱うつな表情でうつむき、だまりこんでいる。
「もう大丈夫だ、イオナ。終わったよ……イオナ？　怪け我がでも……してないよな」
　二人が心配そうにイオナのもとへ行き、ピュラも声をかける。
「どうしたの？　ジョーンのことなら気にしないでいいのよ？　少しくらいの悪口じゃ、気を悪くしたりしないわ」
「え？　悪口？　俺の？　えぇ……」
「弱い人だって、言いました」目を伏せたイオナが正直に言う。ジョーンが複雑な顔になる。
「弱いから、どうせ助けになんて来ないって。来ちゃいけないんだって」
「あ、ああ、そうなんだ……」
　ちょっと泣きそうな顔になったジョーンに、ピュラは言い添えた。
「ジョーンが、お兄さんみたいになるんじゃないかって心配していたのよ。工房で聞いたでしょう？　彼女のお兄さんがコインで負けて……」
「違うんです」イオナが首を振る。
「あのとき、コインの勝負に勝ったのはわたしじゃない。兄だったんです」
「……どういうこと？」

イオナの手にコインがある。指で弄もてあそぶことも、弾はじくこともなく、ただ手のひらにのせている。
「あのとき本当は、勝負に勝った兄が窓際の席に座るはずだったんです。でも、わたしが駄々をこねたんです。どうしても窓側がいいって」
　運命を分けたはずのコインを閉じ込めるように、イオナが手を握る。
「兄は、文句ひとつ言わずに窓側の席をゆずってくれました。わたしは窓の見える席に座れたのが嬉しくて、変なファウナスがやって来たのに気にもとめなかった。その男の様子がおかしいって気づいたのは兄だけでした。いつもはカンの鈍い人なのに、弱くて臆おく病びような人なのに、刃物を持った相手に飛びかかっていって……」
　コインを握った手を、口元にあてた。そのまま、震える声でつぶやく。
「本当は兄さんが座るはずだった席を、わたしがとったから」
　そのとき、ピュラにもようやくわかった。
　弱いジョーンが、危険に飛び込んでくるわけがないと否定し続けた理由。
「わたしが、兄をあの席に追いやったんです。本当だったら、刺されたのはわたしのはずだったのに。兄は助かったかもしれない、父だってフォートリーに付け入られるくらいに弱ることはなかったかもしれない。わたしのせいで、みんな……」
「だから、あなたは一人で戦ったのね。責任を感じて、フォートリーを止めようとした」
　イオナが弱々しくうなずく。
「全部、わたしの責任ですから」
　彼女が背負おうとしたものに対してその肩は、あまりに小さすぎた。
　どうすればその重荷を取り除いてやれるのか──ピュラは懸命に考える。

「どういうこと？　そんなのイオナの責任じゃないだろ」
　軽々しく、ジョーンが言った。
「ジョーン」簡単に言いすぎよ、とピュラは焦り、すぐに彼のフォローを考える。そんなピュラの気持ちにお構いなしに、ジョーンは続けた。
「自分がワガママを言って席を変えたせいで、お兄さんが死んだって？　そんなのおかしい。お兄さんは君をかばって刺されたんだろ？　じゃあ、場所なんて関係ないじゃないか」
　ジョーンは、イオナの目線に合わせて腰を折る。
「どこに座ってたとしても、お兄さんはイオナを守ろうとしたはずさ」
「……どうして、そんなことわかるんですか」
「姉妹が多いからな。ひとりっ子だと思った？　それにさ」
　ジョーンはイオナの手をとって開き、その中のコインを指して言った。
「実際、俺は助けにきただろ？　どんな危ない状況でも、コインの勝負を破ってでも。君のお兄さんも同じだったと思うぜ」
　ピュラはフッと微笑ほほえんだ。こういう場面で相応ふさわしい対応ができるのは、やはりジョーンだ。
　その笑いを別の意味にとったのか、ジョーンは顔を赤くした。
「い、今の、ちょっとクサかったかな？」
「いいえ、ジョーン。とても──」
　ピュラが言葉を失った。ジョーンも目を丸くしている。
　二人の前で、イオナがボロボロと大粒の涙をこぼしていた。
「イ、イオナ？　ごめん俺、変なこと……」
　最初、イオナは自分の涙に驚いているようだった。指先が頬ほおを伝う滴しずくに触れて、それが自分の瞳ひとみから流れていると気づいたとき──イオナは大声で泣き出した。
　ＳＩＣのエンジニアとしてでも、ロックショーの娘としてでもなく、

年相応の子供の泣き声で、わあわあと。
　ピュラが少女を優しく抱きしめる。地上からずっと離れたこの地下でも、ちゃんと泣き声を聞いている人間がいると示すために。
　イオナの涙はしばらく止まらず、彼女が泣き止むまでの間、二人はずっとそこにいた。

◇

「正直言って、君たちがここまでやるとは思っていなかった」
　地下に響くファンファーレの中、フォートリーは採掘場の天井を仰いで言った。
「私が見る限り、君たちのチームワークはあまり優れているとは言えなかったからな。センブランスを使うまでもないと思っていたのだが、さすがはオズピンの教え子だ」
　地面に倒れ、影で釘付けにされたルビーたちを、悲しそうな表情で見下ろし首を振った。
「だから残念だよ。君たちのように優れた人間が、我々の理想を受け入れないとは」
「それはこちらの台詞せりふですわ」白いドレスに張り付く影に逆らい、ワイスが言う。
「これほどの力を持っているあなたが、どうしてこんなくだらない使い方しかできないんですの」
「世の中にはファウナスが嫌いで嫌いでたまらない人間がいる。それは変えようのない事実だ。彼らのための居場所を用意してやることが、くだらないと？」
『いいえ。この上なく素晴らしい行いです』
「そうして、彼らとファウナスがわかり合う機会を永久に奪うつもりな

の？」
　ブレイクの言葉を聞いて、フォートリーが鼻で笑う。
「ミア。説明してやれ」
『はい。猫の耳の神経は人間よりも敏感で、可聴限界も人間をはるかに上回ります。嗅覚もまた同様ですので、ヒトには感じ取れない多くの刺激にも反応することが可能です。その反面、視力は人間の十分の一程度。色覚が人間とは異なるために赤色を認識することが苦手ですが、動体視力は人間よりも優れます』
「ブレイクはネコじゃない」
　ルビーの言葉に、フォートリーは「かもしれない」と肩をすくめる。
「しかし、我々人間が見ている世界と、動物が感じる世界はまったく別物だ。なら、ファウナスが我々と同じ世界を見ていると、どうして言える？　仲間とは、同じヴィジョンを持ち、同じ目標を共有できるものだ。違う世界を見ているのに、どうして仲間を名乗れる」
　フォートリーは、ミアのカメラ越しにじっとルビーを見つめる。
「相手のことを知ればわかり合えるというのは、都合のいい幻想だ。知るほどに生まれる断絶もある」
　ルビーは、いつの間にか強くクレセント・ローズを握りしめていた。
　今、フォートリーの思想に触れてはっきりとわかった。彼と自分は、決して相あい容いれない。
　それを非難してやりたいが、ルビーにはそれを言葉にまとめることができなかった。
「まったくもってお話になりませんわね」ルビーの代わりにワイスが言った。影を引きはがすように体を起こし、なんとか膝ひざを立てる。
「同じヴィジョン？　同じ世界？　そんなもの、わたくしとここにいるヤン・シャオロンですら共有できていませんわ。同じ人間同士でもね」
「ちょっとワイス。何よそれ」

「昨日までのわたくしたちの会話を思い出しても、まだ文句がおあり？」
「おありじゃないです。はい」
　ヤンを黙らせて、フォートリーに向き直る。
「見ている世界が違っても、種族が違っても、それは理解をあきらめる理由にはなりませんわ」
「だとしても歴史までは変えられない。そうだな、ミア」
『人類が彼らを囲い込み弾圧したことも、ファウナスが反撃に転じたことも事実です。ファウナスと人類との間にある争いと迫害の歴史は、両者が共有できる唯一のもの。この檻ケイジで行われていることは、その結果にすぎません』
「悪事の責任を歴史に転嫁して、自分を正当化しているつもりですの？　語るに落ちましたわね、ＣＥＯ」
「……ミア、私は話をしている。ＢＧＭを消せ」苛いら立だたしげにフォートリーが命じると、ファンファーレが鳴り止み、静寂が満ちる。その中で、ワイスに語りかけた。
「シュニー家の息女である君が、何な故ぜそいつらの肩を持つ？　獣たちが、どれほど残忍な行いをしてきたか知らないわけじゃないだろう？　私の部下の中には、その恐怖をぬぐえず組織に身を寄せたものが多くいる。君は、彼らにこそ共感するはずだし、するべきだ」
「わたくしも、その方々と同じように考えていたことがありましたわ。自分の不幸の責任を会ったこともない誰かに求めていた。でも、それが間違いだとわかりましたの」
　影に絡め取られてなお、凜りんとしてワイス・シュニーは言った。
「わたくしは誇り高きシュニーの名を継ぐ者。己の未熟さで間違いを犯すことはあっても、同じ過ちを繰り返す愚はいたしませんわ」
「ワイス……」ブレイクがつぶやく。

「……そうか。もういい」
　フォートリーはギガロリキートを手に、ワイスに近づいていく。
「シュニー家の協力を得られればと思っていたが、もはや必要ない。ＳＩＣだけで充分だ」
　ワイスが危ない、と焦ったルビーは影の中でもがくが、影からはまったく離れられない。加速のセンブランスを使おうにも、そのために充分な初速が得られない。
　はあ、とヤンが聞こえよがしなため息をついた。
「ちょっと聞きたいんだけどさ」
「何だ？　気が変わったのなら……」
「いや、あんたじゃなくて。あたしの仲間に聞いてるの」
　フォートリーが怒りを込めてにらんでいるが、ヤンはまるで気にした様子はない。
「あたしの髪、今どうなってる？」
　三人の間に、意味深な沈黙が下りた。フォートリーには理解できない静けさで、何かの符号かとさえ考えた。
　三人は顔を見合わせて、一斉にヤンの髪の状態について述べ始めた。
「相当ひどいよ、このベトベトの影が張り付いて固まってる」
「髪にとっては最悪のコンディションでしょうね。枝毛は避けられませんわ」
「だいぶストレスになってるんじゃないかしら。いつもよりくすんでる気がするわ」
　ブレイクの評価を聞いたあたりで、ヤンの金髪が熱を発した。それを見て三人は、さらに言いたい放題を始める。
「フワフワの金髪が台だい無なし！　後ろ姿だけ見るとヤンじゃないみたい！」
「いっそのこと、今すぐ短く刈ってしまうべきかもしれませんわね。丸

刈りの方が見栄えがよくなるかもしれませんわよ」
「さっき頭を掴つかまれたときに何本かひっこ抜けてたような気がするわね。いえ、間違いなく抜けていたわ。ご愁傷様」
　ヤンが弾はじけるように顔を上げた。瞳ひとみは真っ赤に染まり、金髪は炎を帯びて陽炎と共に揺らめいている。フォートリーはまだ、事態が飲み込めないでいた。
「……なんだこれは」
「よくも……」
「は？」
「よくもあたしの髪！」
　──髪？
　爆風と共に、ヤンが影を焼き切って飛び出した。今までのヤンのスピードを遙はるかに上回る速度で影を振り切り、フォートリーのセンブランスの減速効果が間に合わない。
　なんとかギガロリキートでガードしたものの、そのまま後ろに吹っ飛ばされる。
「……馬ば鹿かな」
「ヤン！」
　ブレイクが鎖くさり鎌がまをヤンの足下に転がした。ブレイクの意図を察したヤンが、リボンを思い切り引っ張る。その怪力のおかげで、ルビーを抱えたブレイクが影の呪縛から解放された。
「ワイス！」
　ルビーはすぐさまセンブランスを使い、全力で加速してワイスに突進──底なし沼から救い出すように、影からワイスを引き抜いた。
　困惑と共にそれを眺めていたフォートリーは、投げ出すようなため息をついた。
「誇りに思うといい。私の能力をこんな馬鹿げたやり方で破ったのは、

君たちが初めてだ」
「ああそう！　そんじゃ、あたしの髪に手ぇ出したこと、後悔してもらうから！」
　ヤンのセンブランスは、彼女が受けたダメージと怒りによって発現する力。敵からのダメージをそのまま攻撃力に変える能力で、その出力は彼女の怒りに比例する。
　敵から強力な一撃をもらうことでセンブランスが発現することもあるが、もっと確実なスイッチは彼女の髪だ。ルビーは、姉が大切にしている髪を傷つけられたり汚されたりしたことで怒りを爆発させ、相手を粉々にする瞬間を何度も見てきた。
　……とはいえ、ファウナスでも脱出できないと言われた拘束を、髪を汚された怒りで脱出するとは、妹のルビーにとっても予想外──ヤンの髪に関するイタズラは、金輪際やめよう。
「ワイス」自由になった仲間に、ブレイクが言う。
「あなたがさっき言っていたこと、わたしも同じよ。傷つけられるのが怖くて、わかり合うことをせずに逃げ出したこともあった。でも、もう逃げない」
　そんなブレイクの隣に、ヤンが立つ。目を赤く染めて、金髪を赤くゆらめかせたままで。
「友達がこう言ってるからさ、あたしも黙って見てるわけにはいかないよね」
　三人と並び立つように、ルビーは正面からフォートリーに向き合った。
　──リーダーの威厳とか資質とか、もうどうでもいい。
　マントを翻ひるがえせば薔ば薇らの花弁が舞う。クレセント・ローズの刃の上にも。
「わたしは、わたしの仲間と一緒に戦う。仲間がそれを望んでくれるな

ら、誰が相手だって！」
　フォートリーは自分に屈しない四人を一いち瞥べつし、面白くなさそうにつぶやく。
「ＢＧＭスタート」始まった音楽に合わせて、足下の影が踊り出した。
「ヤン・シャオロン……その能力、一時的なパワーアップだな。なら何度やっても同じだ。今度は怒ることすらできなくしてやる」
　踊り沸わき立つ影と共に踏み出して、フォートリーが四人に迫る。
「ヤン、ブレイク！」ルビーが二人に指示を出す。
「あいつを足止めお願い！　一分もたせて！」
「はいよ！」「わかったわ」
　反問ひとつ挟まず、二人はフォートリーを迎え撃つ。手数に秀でた二人がフォートリー相手に時間を稼いでいる間、ルビーはワイスに自分の意図を話した。
「……つまり、わたくしに用意できるすべてを出せ、ということですのね？」
「そう。できる？」
「まったく、人使いの荒いリーダーですこと」
　苦笑しながら、ワイスはミルテンアスターを抱くようにして、精神を統一させる。
「……できないの？」
「できますわよ！　静かにしていただけますかしら⁉」
　念を込めた魔法陣グリフを描いていく。地面にではなく、頭上に。何もないところに力場を生み出すワイスの能力は、連続して使いすぎると著しい疲労をともなう。でも、彼女がそれを理由に能力の使用をためらったことは、一度もない。
　このときも、疲労困こん憊ぱいになりながらワイスはそれをやり遂げた。

採掘場の空中に、魔法陣グリフがいくつも生み出される。
ヤンとブレイクに振り回されていたフォートリーも、足を止めた。そして気づく。二人の目的は、このための時間稼ぎだったのだと。
「いくよ、ワイス」
加速のセンブランスを高めて、ルビーが言う。ワイスは額に汗かきながら微笑ほほえんだ。
「ええ。ぶちかましておやりなさい」
薔薇の花弁を散らしながら、ルビーは頭上の魔法陣グリフに向かって突っ込んだ。
力場を蹴けって、そのたびに新たな速度を獲得していく。この空間で、最大限のスピードを得るための作戦だった。フォートリーのセンブランスを振り切れるほどの速度を。
「……面白い」
ルビーの意図を察したフォートリーは、ギガロリキートの柄頭で地面を打った。触手状の影がいっせいに広がり、採掘場の地面に巨大な黒い紋様を描く。さらには、壁や天井にまで。
「あいつ、こんなに広い範囲で……！」
そう言うヤンだけでなく、ワイスとブレイクの足下にも影がわだかまっていた。《遅滞》させられた空間とそうでない場所の間で空気の流れが生じ、嵐のような気流が採掘場に吹き荒れる。影の影響を受けたスピーカーが次々に異常を起こし、不協和音を発し始めていた。
「私の支配から抜け出せるというなら、やってみろルビー・ローズ！」
フォートリーの声は、魔法陣グリフの間を跳ね回るルビーの耳にも届いた。勝利を確信した声、ルビーの意図を察しつつも、逃げ隠れせず堂々と待ち構えている。
ワイスは力を使い果たした。時間稼ぎを引き受けてくれたヤンとブレイクはもう動けない。

仲間はリーダーを信じて仕事を果たした。今度は、自分が応える番。
「ここは私の檻おりの中だ！　どれだけ跳ね回ろうと、獲物が逃げられはしない！」
　フォートリーが嘲あざける。あんな雑音が聞こえなくなるくらい、もっと速く。もっともっと速く。
　速度を増すにつれて、地面や壁に引っ張られるよな、まとわりつく力を感じて引き戻された。
　フォートリーの能力センブランス──そんなものを振り切れるくらい、もっと速く！
　連続して、クレセント・ローズを後ろに向けて撃った。その反動を最大限センブランスに乗せて、さらなる速度を得る。
　自分が出せる限りの最高速度──そこに達した瞬間、ルビーは加速の向きを曲げた。
「──ぁぁああああああ！」
　大鎌と一体になった少女が、赤い落雷のようにフォートリーに向かって落ちる。オーラの保護がなければ、自らの体が潰つぶれかねないほどの速度と共に。
　だが、その時点でフォートリーの左目を覆うミアは、必要な演算を終えていた。空中を走り回る赤い残影から、ルビーの速度と攻撃軌道を読み切ったのだ。
　ミアのカメラがぎょろりと動いて、ルビーの突撃を完全に捉とらえる。
　たちまち、フォートリーの周囲の影が噴火のように吹き上がった。影はルビーを迎え入れるように包み込み、閉ざす。
　沸わき立つ影に飲まれて、ルビーの姿は完全に見えなくなった。
「ルビー！」仲間たちが叫ぶ。だが、その声も届かないだろう。
　フォートリーのありったけのオーラが込められた影の内側は、一切の

速度を許さない減速空間と化している。センブランスが生み出す、脱出不可能な檻だ。
　そこにルビーを閉じ込めたことで、フォートリーの顔に勝利の笑みが浮かぶ。
　……しかし、フォートリーの笑顔は、次第に引きつっていった。
「やめろ──」
　影の檻が、内側から貫かれる。
「私の──」
　大鎌が、影を斬きり裂いていく。
「檻おりを──！」
　風船のように、影は破裂した。
　破れた影の牢ろう獄ごくから、無数の薔ば薇らの花弁があふれだし、フォートリーに吹きつける。
　フォートリーは、赤い奔流に抗うようにギガロリキートを振り上げた。その顔はひどく歪ゆがみ、何かに怯おびえているよう。
「私の檻を！　破るんじゃない！」
「檻なんて必要ない！」薔薇の花弁を従えて、ルビーがクレセント・ローズと共に疾しつ駆くする。
「ファウナスにだって、わたしたちにだって！」
　大鎌とピックハンマーがぶつかり合い、甲高い金属音が、採掘場に響く。
　一瞬の交錯の後──。
　フォートリーの背後に、駆け抜けたルビーの姿があった。
　ギガロリキートが、断頭台にかけられた罪人のように頭ヘツドを落とす。
　互いに背を向け合ったまま、フォートリーが吐き捨てた。
「獣と人は絶対に相あい容いれない。君もいずれ思い知る」

「だとしても、わたしは誰かを檻に閉じ込めたりなんかしない」
　赤い花弁が降る中で、ルビーはクレセント・ローズを肩にかついで振り返る。
「その誰かと、一緒に走る方法を探すよ」
「……ふん」
　採掘場を覆っていた影が急に勢いを失い、糸を引くように消えていく。ヤンたちを縛っていた影も消えた。採掘場のスピーカーは聞くに耐えないノイズを吐き出し、やがて沈黙した。
「武器は壊れ、オーラも尽きた、か」
　フォートリーは頭を失くしたギガロリキートを捨て、ルビーの方を振り返る。
「私の負けのようだな。ルビー・ローズ」
　肩を落とし、フォートリーは観念しきった様子でつぶやく。――その場にいた誰もが、思いもしなかった言葉を。
「……ミア。逃げ出したファウナスどもはもういい。ありったけの戦力をここによこせ」
「なっ⁉」
　動揺するルビーに、フォートリーは空虚な笑みを向けた。
「何を驚いている？　単純な力比べで私を負かしたところで、君たちの置かれた状況が好転するとでも？　まだ終わりではない。ここからは、組織の長としての私の力をお見せしよう」
「往生際が悪すぎますわよ！　この期に及んで！」
「一度動き出したプロジェクトを止めることはできない。わかるだろう、ミス・シュニー。私も、シルバーバレットも、この地下から始まる王国も、決して止まらない！」
　フォートリーは苛いら立だたしげに繰り返す。
「ミア！　モタモタするな！　さっさと……」

『申し訳ない、ＣＥＯ。先ほどの注文はキャンセルさせてもらった』
　その声はミアのものではなかった。だが、その場にいた全員に聞き覚えのある声だった。
「ローマン・トーチウィック……！」

◇

　セキュリティ・ルームの監視カメラで一部始終を見ていたローマン・トーチウィックは、椅い子すにふんぞり返ってささやかな拍手を送った。
「なかなか手に汗握るショーだった。録画しておけばよかったな」
　モニターの映像の中で、フォートリーが怒りに顔を歪ゆがめている。
『貴様、いつの間にそこに……！』
「ずいぶん前からさ。そこの子猫ちゃんたちがほとんど消耗せず最深部にたどり着けたのはどうしてだと思う？　俺がここで、地下を走り回ってるあんたの部下たちに、デタラメな指示を出してやっていたおかげだよ」
　ローマンが腰掛けている椅子の後ろには、本来のスタッフたちが縛り上げられた上に猿ぐつわをかまされ、床に転がされている。
「そういえば戦力を送れとか言ったな？　もっといいものを送ろう。俺の、心からの気持ちだ」
　セキュリティ・ルームの金庫で見つけた太いアンテナと台座を持つスイッチグリップを取り出す。建設現場などでよく見られる代物だ。主に、発破の点火などで。
　重大な事態を指先ひとつで引き起こす感触。それをじっくり味わいつつ、ローマンはスイッチを押し込んだ。

◇

　轟ごう音おんと共に四人の視界が大きく揺れた。地面だけでなく壁や天井までもが揺れて亀裂が入り、大小様々な岩石が落ちてくる。
「な、何？　地震⁉」
　揺れは次第に小さくなっていく。しかし完全に治まる気配はなく、今度は坑道から大量の水が流れ込んできて、みるみる四人の足を濡ぬらしていく。
「これって……湖の水が流れ込んできてるんじゃない？」
　ヤンが言って、四人の間に緊張が走る。フォートリーは、崩くずれゆく採掘場を見上げ、
「トーチウィックめ……起爆装置を使ったな」
「なんですって？」
「いざというときのために用意していた手段だ、シュニー嬢。この地下施設を湖に沈め、何もかも無かったことにするための」
　そういえばイオナもそんなことを言ってたっけ、とルビーは思い出した。隣では、ブレイクが唇を噛かんでいる。
「あいつを自由にさせ過ぎた……シルバーバレットを、わたしたちごと始末するつもりだわ」
「ちょっと！」ヤンがフォートリーに詰め寄った。
「あんた、ここの責任者でしょ。どうにかできないの⁉」
「起爆スイッチが押されてしまっては止めようがない。生きて出るには、非常用の脱出手段を使うしか……」四人が一斉に刃をフォートリーに向ける。フォートリーは肩をすくめた。
「今度は私が囚われの身ということか」
「地上行きの馬車を手配していただけますかしら、ＣＥＯ。もちろん四人分で」

「……わかったよ、全面降伏だ。私も、命は惜しい」
　歩き出したフォートリーのすぐ後ろをブレイクがついて歩く。何かあればすぐにフォートリーを制することができる近さだ。
　水はどんどん採掘場に流れ込んできていて、もはや水に浸っていない場所の方が少ない。
　濁流は渦を巻いて採掘場の大部分を飲み込み、ルビーたちのいる場所のすぐ近くまで寄せてきていた。濁流の飛沫が少女たちの膝ひざまで飛び、足下の地面はボロボロ崩くずれていく。
　足下にばかり注意を向けていたルビーは、天井から大きめの土塊が落ちてくるのに気づくのが遅れた。
「危ない！」
　ヤンが妹の頭を押し下げて、降ってきた土塊を殴り、砕く。ルビーは細かい土を払いつつ、
「ありがとう、お姉ちゃ──」
　前方のブレイクと目が合う。ブレイクはこちらを振り返っていた。そして、フォートリーも。無防備な背中をさらすブレイクに、フォートリーは何かを振りおろそうとしている。
　気づいたときには、ルビーの体は勝手に動いていた。加速のセンブランスを使い、ブレイクを突き飛ばしてフォートリーの腕に飛びかかる。その手からナイフが落ちた。
「ルビー！」
　切迫した声でブレイクが叫ぶ。泥水に削られた地面が思いのほか脆もろくなっていたのは、ルビーだけでなくフォートリーにとっても予想外だったはずだ。二人の衝突で地面が崩れた。
　足下の地面が濁流に沈み、ルビーとフォートリーが共に足をさらわれて流される。水の流れが二人を押しやり、その姿はあっという間に濁流の下に消えた。

ブレイクが息を呑のんだ。濁流はすでに採掘場のほとんどを沈めている。
　ワイスもまた、両手を口に当てて固まってしまっていた。
「ルビーッ！」ヤンが力の限り叫ぶ。自棄になっているのではなく、必ず答えがあると信じて。
「返事しろ！　ルビー・ローズ！」
　そのとき、濁流の中からクレセント・ローズが掲げられるのが見えた。暗い水流の中に、赤と黒の大鎌が高々と。
　その光景が、絶望しかけていたブレイクを立ち直らせた。すかさず鎖くさり鎌がまを投げる。クレセント・ローズの柄にリボンが巻きつき、ブレイクの体がリボンに引っ張られる。
「ヤン！　ワイス！」
　ヤンが、そしてワイスもリボンを掴つかんだ。ルビーを押し流そうとする濁流に逆らい、三人は一気にリボンを引く。
　まるで引っこ抜けるようにして、クレセント・ローズにしがみつくルビーが濁流から飛び出す。さらにヤンが力任せに引っ張って、飛び込んできたルビーを三人が抱き止めた。
「ルビー！　大丈夫？」
　ヤンの腕の中でルビーが咳せき込み、泥水を吐いた。薄目を開けて、ヤンに尋ねる。
「……フォートリーは？」
　ヤンが首を振る。真っ暗な水の流れに、影で体を覆い隠した男の姿は溶け込んで、どこにも見えなくなっていた。
　ルビーは、自分の右手を眺めた。そこには、フォートリーの左目を覆っていた機械──ミアがある。ルビーは、沈痛な面持ちでつぶやく。
「……手を掴んだと思ったのに」
　ヤンは、泥だらけの妹を抱きしめる。

「無事でよかった。本当に」
「……うん」
　二人の下敷きになっていたワイスをブレイクが助け出し、四人はあらためて周囲を見回す。そこら中が泥水に沈み、四人が立つ場所は孤島のような有り様になっている。
「さて、誰か良いアイデアが浮かんだ人いる？」ヤンが言った。
「せめて、乗り物か何かがあればいいのですけれど」
「……待って。何か聞こえる」
　ブレイクが言う。ルビーの耳にも聞こえ始めた。地下に反響する誰かの甲高い悲鳴。
「──ぁぁあああ！」
　採掘場の上部に空いた穴の一つから、水流に乗って５人の人間が一度に吐き出され、ルビーたちがいるすぐそばのぬかるみに着地した。
「やったー！　外だー！」
「違いますよ、ノーラ。まだ地下です」
「ごぼぼぼぼぼ……」
「ノーラ、大変。ジョーンがあなたのお尻しりの下で溺おぼれてる」
　見覚えのある顔ばかりだと知って、ルビーは歓喜の声を上げた。
「ジョーン、ピュラ！　みんなも！」
「ご無事でしたのね！」
　ルビーとワイスが、びしょ濡ぬれになりながら坑道と水流から離れた四人に駆け寄る。
　その目の前に、今度は小柄な人間が水流に乗って飛び出した。青緑色のツナギを着た少女──イオナは水除けのゴーグルを額に押し上げる。なぜか、目の周りが赤く腫はれていた。
「あれ？　他ほかのビーコンの人たち。なんでここに？」
「フォートリーを捕らえるため……だったのですけれど」

それを聞いて、ノーラがわっと両手を挙げた。
「よかった！　あたしたちと一緒だ！　みんなでやれば早く終わって、早く帰れるよ！」
「崩落で地上への通路が使えなくなったんだ」ジョーンが顔の泥をぬぐいながら言う。
「でもイオナが、フォートリーの権限があれば何とかなるかもって。そのために必要なＰＣも調達できたし、後はフォートリーを確保すれば……」
　ルビーたちが互いに顔を見合わせ始めたので、ジョーンは不安そうに尋ねる。
「もしかして、フォートリーがどこにいるか知ってる？」
　四人はいっせいに泥の濁流を指さした。天井から落ちた岩が、水に巻かれて沈んでいく。
「……どうしよう」
　ジョーンが言う。ルビーも同じ気持ちだ。さらに壁がひび割れ、そこから水が注ぎ込む。
「天井に穴を開ければいいよ！」ノーラが言う。
「水で押し流されますよ」とレンがたしなめる。しかしヤンは、
「でもやってみる価値はあるんじゃない？　ワイス、魔法でなんとかして」
「そう簡単にできれば苦労はしませんわ」
「そろそろまずいわ。水位の上昇が早くなってきてる」ブレイクが言うとおり、残された陸地はもはや少ない。
「イオナ、フォートリーの権限があれば、ここから出られるって言ってたわよね」
　ピュラがイオナに尋ねる。
「他に、何か思いつく手はないかしら」

「……フォートリーのデバイスがどこかに残ってるかもしれません。フォートリー自身がいない今、どこまでできるかはわかりませんけど、それがあれば……」
「デバイスだな、みんなで捜そう！」ジョーンが言い、ワイスもイオナに尋ねる。
「それは、どんな形ですの？」
「フォートリーが左目につけていたものです。ミアと呼んでいた……」
「あ」と、ワイス、ブレイク、ヤンの声が唱和した。ルビーは、仲間たちの視線が自分の右手に集まっていることに気づいて、遅れてようやく「あ」と漏らした。
「これかな」
「それです！」
　差し出した機械──ミアに、イオナが飛びついた。
　ルビーの手から奪い取って裏返し、持っていたＰＣと有線で接続する。
「急いでくれ」ジョーンは完全に崩壊する寸前の天井を見上げて急せかす。
「もう時間が……！」
　壁に次々と穴が空き、水が噴き出す。もはや天井を支えていられず、今までとは比べものにならない規模の崩壊が始まった。
「ジョーン・アーク！」
　イオナが叫び、ジョーンの胸ぐらを掴つかんで引きずり下ろす。
「何？　何？」と混乱するジョーンの顔に、イオナはミアを押し当てた。

◇

檻ケイジと呼ばれていたその島は、半分以上が湖の中へと崩くずれ没していた。
　もともと、地下が掘削によって穴だらけにされていた島である。適切な場所に仕掛けられた爆弾が同時に起爆すれば、水圧がすべてをめちゃくちゃにかき回してしまう。
　つい一時間前まで地面があったその場所は、今は土色に濁った水しかなくなっていた。
　その水面にバルーンと機械を組み合わせた、奇妙な物体が浮かび上がる。
　パンパンに張りつめたバルーンには水かきのついた四本の手足がついていて、水面まで浮上すると、特殊繊維で作られたバルーンがオープンカーのルーフのように開いていく。
「外だー！」
　ノーラが両手を伸ばして外の空気を胸一杯に吸い込んだ。ルビーとジョーンも隣で同じことをしている。ついさっきまで泥水の渦にもみくちゃにされていたのだから、生き返った気分だ。
　地上はいつの間にか日が昇っていて、見上げれば空は朝焼けになっていた。
「どうなることかと思ったけど、みんな無傷で生還なんてたいしたもんじゃん」
　ヤンは、四本の足が生えた浮き船と化したドローンの縁をぺしぺし叩たたいた。このヒキガエル型ドローンは内側にルビーたちを呑のみ込むことで崩落や急流から守り、無事に水面まで泳ぎ着いてくれたのだ。
「性能は認めますけれど、この見た目はいただけませんわね……」
　そう言うワイスは居心地が悪そうで、どうやらこのヒキガエル型ドローンの不格好さが気にくわないらしい。確かに、丸く大きい図体からぴょこんと飛び出した手足のアンバランスさは、少しみっともなくはあ

る。
「全ドローンに対する人命救助の指示……うまく動いてくれたみたいですね」
　イオナはドローンから顔を出し、ホッとした様子で言った。周囲の水面には犬、亀、豹ひよう、そしてヒキガエルと、様々な種類のドローンたちが背中や口の中に人を乗せている。ボーラで縛り上げられたアンスロープも、亀の背中に横たわり、目をきょろきょろさせていた。
　しかし、ドローンと共に水面に浮かんでいるのは逃げ遅れたＳＩＣの人間がほとんどで、ファウナスの姿は見られない。ブレイクが難しい顔で水上を見渡し、それにルビーも気がついた。
「そうだ、捕まっていたファウナスたちは⁉」
『ご安心ください、ＣＥＯではない方』言ったのは、ジョーンの左目を覆うミアだ。
『ファウナスたちはホワイトファングの手を借りて採掘場を脱出し、現在は湖岸にいることが現地のドローンにより確認されています』
　ブレイクは眉まゆをひそめる。
「またドローンがファウナスを襲うんじゃないの？」
『その心配は無用です、ファウナスの方。戦闘プログラムが適用されなくなったため、危害をくわえることはありません。現在、彼らの周辺にグリムの姿も確認されていないため、彼らの安全は少なくとも以降三時間は完全に保証されます』
「急に友好的になったわね」
『ＣＥＯがいない今、わたしはわたしの所有者と、その友人に協力すべきだという結論に至ったのです、黒いリボンがとてもお似合いですね、ファウナスの方』
「…………」ブレイクが嫌悪を込めた目を向ける。他ほかの仲間もそれぞれ感想を述べた。

「うさんくさい」「信用できませんわね」「バカにしてんの？」
「俺に向かって言うのはやめてくれよ！」
「わたしは似合ってると思うわよ、ジョーン」
　ピュラがジョーンに慰めの言葉をかける横で、レンはイオナに尋ねた。
「あの機械、本当に大丈夫なんですか？」
「ええ。ちゃんと正しいプロセスで命令をくだせば、どんな指示にでも従います。機械ですから」イオナは、崩くずれていく檻ケイジの島を見つめて言った。
「だから、あのフォートリーが世界で唯一信用していたものだったんですけどね」

　ドローンは短い足をせっせと動かして、岸に近づいていく。ノーラとレンは、湖岸のファウナスたちに手を振っている。
　その隣では、イオナがノートＰＣを操作してブツブツつぶやいていた。
「ああ、アンスロープさん。誕生日をパスワードにしちゃダメだって知らなかったんですか？　そんなことだから、悪事の全部が詰まったファイルを警察に送りつけられちゃうんですよ」
「うまくいった？」
　ピュラが尋ねると、イオナはＰＣを閉じてうなずいた。
「これでＳＩＣの正体は何もかも白日の下です。じきに助けが来るでしょう」
「サパン島にはまだＳＩＣのスタッフが残ってるでしょう？　彼らは暴れたりしないかしら」
「フォートリーが島の王様でしたから、彼が不在になればたいしたことはできないはずです。ミアはわたしたちが押さえましたから、証拠隠い

ん滅めつにはもう手遅れです」
「そういえば、イオナ」ミアを顔から引きはがしたジョーンが彼女に言った。
「君はこれからどうするんだ？」
「わたしもＳＩＣの人間として出頭するつもりですよ。今のメールの送信者として、そうする義務があると思いますから。それからは……どうしましょうかね」
　イオナは手元のコインを見つめた。
「二つに一つで未来を決めるなら楽だったんですけど」
「一人で抱え込む必要はないわ」ピュラが言う。
「難しい選択のときは、誰かを頼るべきよ。コインなんかじゃなくて」
　ジョーンも訳知り顔で頷うなずいた。
「そうそう。俺を頼ってくれてもいいし、なんだったらもう一度、コインの勝負でも……」
　言い終えないうちに、イオナが立ち上がる。
「……イオナ？」
　首を傾げるジョーンに構わず、ぎゅっとコインを握りしめると。
　思いきり湖に放ほうり投げた。
　自分を縛り続けてきたものを、振り切るように。
「──ああ、スッキリした！」
　あどけない、晴れ晴れとした笑顔で、イオナは言った。
「そ、そりゃ良かった」
　肩すかしを食ったジョーンは気恥ずかしそうに湖に目をそらす。水面がきれいだ。
　ピュラはジョーンの隣に立ち、彼の顔をのぞき込む。
「わたしはあなたを頼りにしてるわよ？　ジョーン」
「むしろ、俺がピュラを頼る方が多いじゃないか」

「いいえ」と、イオナが言った。
「あなたは、もっとピュラさんを頼っていいと思います」
　言って、イオナは「ねえ？」と意味ありげにピュラを見上げた。ピュラは口ごもって目をそらし、ジョーンは訳がわからず二人を交互に見る。
「ん？　どういうこと？」
「水面がきれいね、ジョーン」

　ジョーンたちが話し合っている間、チームＲＷＢＹの四人は肩を並べてドローンの進む方角を眺めていた。
「ずいぶん物騒なバカンスだったねー」
　ヤンが朝焼けを横目に言う。
「まったくですわ。少しも休暇という気がしませんでしたもの」
　そう言うワイスにルビーは、
「そもそもワイス、休暇のつもりなんてなかったじゃない。トレーニングだとか言って」
「実戦とトレーニングはまったく別物ですわ。もちろん、実戦を経ることでわたくしたちは成長しているでしょうけれど、トレーニングでは実戦で見過ごされがちな弱点を改善することができますもの。そういう意味では、わたくしたちのチームワークはまだ発展の余地が……」
　言って、ワイスは胸の前で両手を合わせた。
「ええ、そうですわ。やはり、わたくしたちにはもっと鍛錬が必要ではないかと思いますの。残りの休暇を、わたくしたちは己を磨くことに費やすべきではなくて？」
「まーた始まったよ。あたしは絶対パス」
「なんですって！」
　すげなく言うヤンにワイスが詰め寄る。島に来る途中でも見た光景

だ。ルビーはうんざりして、
「二人とも、もう充分だってば」
「いいえ。足りませんわ。よく考えてみれば、『ワイスの日』に付き合ってくれたのはブレイクだけですもの。ルビー、あなたとヤンはまだ、わたくしのわがままを聞いていただいてませんわよ」
「そういえば、あたしもだ。ブレイクとワイスはまだ『ヤンの日』の義務を果たしてないじゃん」
「わたくしたちは消化されていない権利を得るべきですわ。ブレイクもそう思いませんこと？」
　ワイスに続いてヤンも言う。
「そうそう。あたしたちだけ中途半端に終わるのはフェアじゃないよね。今度こそ、ブレイクはあたしと同じチームに入ってもらうよ」
　ドローンの行く手に目を向けたままブレイクは短く「イヤよ」と答えた。
　ブレイクがはっきり拒絶したことに二人だけでなくルビーまで目を丸くしていると、ブレイクは風に髪をなびかせて仲間たちに言う。
「だって、まだ『ブレイクの日』は終わってないもの」
　ワイスとヤンがポカンとしている横で、ルビーがけらけら笑い出した。
　それに釣られて、ブレイクも声を立てずに笑い出す。
　ワイスとヤンは、仕方なく苦笑を浮かべるしかなかった。
「そういうことでしたら、仕方ありませんわね」
「まあね。ブレイクの日なんだし」
　四人の笑顔を先頭に、ドローンは湖を泳いでいた。

Epilogue　At our own speed

ヴェイル王国、ビーコン・アカデミー。
アカデミー校舎の校長室を、ルビー・ローズが訪れている。
巨大な歯車に囲まれた奇妙なこの部屋で、ビーコンの校長オズピンは、いつものように片手にカップを、もう一方の手で杖をつき、ルビーを待っていた。
「よく来てくれた。疲れてはいないかね」
「大丈夫です。あ、わたしだけじゃなくて、他ほかのみんなも元気です」
その答えを聞いて、黒めがねの奥の瞳ひとみが微笑ほほえんだ。
「サパン島での事件のことについて、根掘り葉掘り聞こうというつもりはないから安心してほしい。そういったことは警察で充分すぎるほど話しただろうし、私も警察の知人から詳しいことは聞いている。たいへんだったね」
ルビーをねぎらう声も立ち振る舞いも神秘的な賢人めいた雰囲気を持つオズピンだが、彼は教育者であると同時にハンターだ。彼の英雄的な経歴の数々は、ルビーもよく知っているし、憧あこがれでもあった。
「まず、君たちが知っておくべきことを伝えておこう。サパン島で、ファウナスを不当に監禁し労働を強制していたＳＩＣの一部社員、および【無む垢くなる兄弟たちの銀の銃弾】のメンバーとみられる者たちは、ほとんど全員が逮捕された。イオナ・ロックショーのように捜査に協力的な者も多くいるから、ＳＩＣという企業の堕落はとことん追求されるだろう。しかし、すべてを計画したオード・フォートリーの行方はまだわかっていない。生死すら不明だ」
ルビーは、自分も一度飲み込まれかけた濁流を思い出していた。あそこから生還できるとは到底思えないが、それを確認することは難しいだろう。
「ホワイトファングとトーチウィックもまた行方不明。彼らが救出した

ファウナスたちは、無事に保護された。地下労働で衰弱しきったファウナスもいたそうだが、大事はないそうだ。ただ、無事に街にもどった後に姿を消した者が何名か確認されている。警察は彼らがホワイトファングと合流し、行動を共にしていると見ている。残念だが、彼らが味わった苦痛を思えば理解できない行動ではないだろう」

フォートリーが生んだ、新たな軋あつ轢れき──それを突きつけられてルビーは、さびしげな顔をした。オズピンは言葉を切り、カップからココアを一口すする。

「さて、事件の顛てん末まつはここまで。私が君を呼び出したのは、それとは別に少し話したいことがあったからだ。……君たちは直接オード・フォートリーと会い、戦ったそうだね」

「は、はい。あの、オズピン教授」

「なんだね」

「オズピン教授は、あいつを知ってるんですか？」

「どうしてそう思う？」

「フォートリーが、オズピン教授のことを知ってるみたいなことを言ってたから……」

オズピンは少し目を閉じる。昔を思い出しているように、ルビーには見えた。

「……ああ、知っている。彼は、学生としてこの学園にいたことがあるからな」

「それって、つまり……」

「ビーコンの卒業生ではない。彼は、その前に学園から姿を消していたからだ」

ルビーはなんとなく、そんな予感を覚えていた。あの男の言葉にはちっとも共感できなかったけど、彼がオズピンの名を口にしたとき、親しみというか、憧あこがれのような響きがあったからだ。

「彼は、私のことを何と言っていた？」
「最高の指導者で……理想的なリーダー、とか」
「確かに、彼は在学中から私を目標にしていたようだ。私のようなハンターになりたいと常々言っていたとも聞いたことがある」
　淡々と告げるオズピンは、表情にも声にも、わずかな感情さえ漏らさなかった。しかし、ルビーにはオズピンが、この話題を耳にすることも口にすることも避けたがっている気がした。
「彼の生い立ちは知っているかね？」
「義理のお父さんがファウナスで……暴力を受けていたって聞きました」
「そう。彼がビーコンにやって来る頃には、すでに左目の視力を大幅に失っていた。そのときの憎しみが、彼の人格と人生に大きすぎる歪ゆがみを与えることになったようだ。……学園では非常に優秀な生徒だったよ。ファウナスの生徒とも、うまくやっていた──表面的にはね」
　何かを避けるように、オズピンは席を立った。カップを片手に、窓に向かう。
「私が彼の歪みに気づいた最初のきっかけは、練習試合に対する彼の態度だった。機会があればすすんで参加し、試合相手には常にファウナスの生徒を選ぶ……そんな彼の姿に違和感を覚えた。ファウナスを前にしたときの集中力には、練習試合にあるべきでない殺気があった」
　ファウナスへの執念──その頃から、すでにそうだったのか。
「一度、彼をこの部屋に呼び出して、尋ねたことがある。どうしてファウナスばかりを試合相手に選ぶのか……彼は、実験だと答えた。彼が求めていたのは、互いの実力を高め合う練習ではなく、ファウナスの身体能力を攻略するためのテストをする機会だったらしい」
　窓に向かったまま、オズピンは続ける。
「ハンターの最大の使命はグリムから人々を守ること。そのためには、

人間もファウナスも協力し合わなければならない──私はそれを伝えたが、彼はこう答えた。『協力よりも、支配の方がずっと有効だ』……オード・フォートリーが学園から姿を消したのは、それからすぐのことだ。やがて間を置かず、彼の義父が殺害されたと聞いた」
　オズピンは、重荷をおろしたような息を吐いた。
「彼は私を目標としていたようだが、彼が見ていたのは私のハンターとしての力と地位だけだったように思える。私の教えを断じて受け入れようとしなかった。……さて、ルビー・ローズ」
　オズピンは窓から振り返った。師としての穏やかな、生徒に言い聞かせるときの表情のまま、杖をついて歩いてくる。
「君とヤン・シャオロンは……こう言ってはなんだが、あまり似ていない姉妹だね。性格もだ」
　知っている。ヤンは、ルビーよりずっと外向きの性格だ。
「ワイス・シュニー、彼女の境遇を完全に理解してやれる者は少ないだろう」
　世界的大企業を統べる一族の娘に産まれた気持ちなんて、ルビーには想像しにくい。
「そして、ブレイク・ベラドンナも」
　ファウナス全体のために戦っていた元闘士。性格も超クール。
「君たちの個性はまったくバラバラだ。性格もスタイルも、まるで統一されていない。にもかかわらず、君たちは危機に際しては自然と結束し、立ち向かうことができる。リーダーシップとは、支配する力だけを指すのではない。何もかもが異なる人々の結束、その中心に立ち続けることができるのもまた、リーダーの才能だ」
　オズピンはルビーの目の前までやってきて、彼女の銀色の瞳ひとみを見下ろして言った。
「危険なのはぶつかり合うことではない。傷つくことを恐れて自分の内

に閉じこもることだ。互いを理解するためならば、何度でもぶつかりなさい」
「……はい」
「話は以上だ」
　くるりと背を向けて、デスクに引き返す。
「島で君が体験したことは、あまり人に話さないように。事件の性質を考えれば、それが賢明だろう。トーチウィックの件も、警察と軍にまかせたまえ」
　椅い子すに深く腰掛けて、教師らしい厳格な口調で言い渡す。
「下がってよろしい。それと、ジョーン・アークに、部屋に入るよう伝えてくれ」

　廊下に出ると、ジョーンがピュラと共に待っていた。
「ど、どうだった？」さっそく、ジョーンがルビーに尋ねてくる。
「怒られたりした？　何かペナルティは？　反省文は何枚だって？」
「話をしただけ。次はジョーンの番だって」
　安あん堵どのため息を吐ついてジョーンは校長室に向かう。ノックの前に、ピュラが呼び止めた。。
「ジョーン。ノーラたちと一緒に待ってるわ」
「ああ。終わったらすぐに行くよ」
　廊下に残されたルビーは、隣のピュラに尋ねる。
「どこかに行くの？」
「ええ。みんなでプールに行く約束をしてたから」
「プール⁉　楽しそう！」
　すぐに部屋にもどってみんなに提案してみよう、とルビーは考えた。

だって、せっかくのバカンスの思い出が変な島のグリムとドローンだけだなんてあんまりだ。
「ねえ、ルビー」ピュラが、改まって言った。
「これからも、ジョーンの友達でいてあげてね」
「……？」
「ごめんなさい、急に変なことを言って」少し顔を赤らめて、ピュラは弁解する。
「わたしはチームＪＮＰＲの仲間としてジョーンを支えてあげることはできるけど、チームのリーダーにはリーダーにしかわからない悩みや問題があるはず。そういうとき、ジョーンのそばにあなたがいてくれればいいと思ったから」
「ジョーンとはずっと友達だよ。ピュラもね」ルビーは心から言った。今回の件といい、やはりＪＮＰＲとは妙な縁がある。この先もそうなのだろう。自分たち８人は、きっと。
　ピュラは穏やかに微笑ほほえんだ。
「そうね。ありがとう、ルビー」

　自室に向かう途中の廊下で、ブレイクが壁に背を預けて待っていた。
「ルビー。オズピン学長はなんて？」
「フォートリーのこととか、わたしたちのチームのこととか、色々」
「……そう」
　肩を並べて歩くブレイクの横顔から、ルビーはブレイクが本当に聞きたかったことを察した。
「ホワイトファングとトーチウィックは行方不明だって。それと、助けられたファウナスの人の中に、ホワイトファングについていった人が何

人かいるみたい」
　ブレイクは、無表情のまま沈黙している。何も言わなくても、隣にいるルビーにはブレイクの中で様々な思いが渦巻いているのがわかった。
「……いずれ、彼らを追わなくてはいけないでしょうね」
　ようやく言ったのは、それだけ。
　ほんの一言なのに、ルビーにはひどく重い台詞せりふに聞こえた。

「よくぞ、今のわたくしの技を避けましたわね！　ですが、幸運がそう何度も味方するわけではありませんわよ！　今度こそ、跡形も無く消し飛ばしてさしあげますわ！」
「今のが幸運だと思っているようじゃあ、勝負は見えてるね！　降参するなら今のうちだよ！　二度とあたしの前に立てないくらい、ギタギタにされたいなら話は別だけど！」
「……二人とも何やってるの」
　ルビーとブレイクが自室にもどってきたとき、ワイスとヤンはお互いに枕を構えてにらみ合っていた。
　二人はルビーとブレイクの存在に気づくと、
「あら、もうオズピン教授のお話は終わりましたの？」
「おかえりー。ちょっと待ってて。今この生意気なお嬢様を片付けるから」
「聞き間違いかしら。ずいぶんと分不相応な言葉が聞こえた気がしましたけれど」
　再びにらみ合う二人を見て、ブレイクは「枕投げピローファイトかしら」とつぶやいた。
　要するに、また二人が角を突き合わせ始めたらしい。サパン島から続く二人のこの悪習に、ルビーは肩を落としかけ──思い直すことにした。
　ルビーは余っていた枕を二つ取り上げて、一つをブレイクに渡す。

「ブレイク、わたしたちもやろう！」
「……え？」
「オズピン教授が言ってた！　わたしたちは、ぶつかり合うべきなんだって！」
「たぶん、そういうことじゃないと思うけど」
　ルビーは椅い子すの上に跳び上がり、二人に宣言する。
「わたしを置いて勝者を決めようなんて笑止千万！　チームＲＷＢＹのチャンピオンはいつだってこのわたし、ルビー・ローズなんだから！　さあ、かかってきなさい！」
「ちょっと！　あなたは関係ないでしょう、ルビー！　おとなしく引っ込んでいなさい！」
「あたしは受けて立つよ！　かかってきな、ルビー！　あとブレイクも！」
「いや、わたしは別に……」
「じゃあ行くよ！　チームＲＷＢＹによる【第一回・枕投げチャンピオン決定戦】！」
　ルビーが枕を掲げて叫ぶ。ワイスとヤンは進んでそれにならい、ブレイクも仕方なさげに枕を持ち上げた。
「試合開始！」
　ヤンがベッドを蹴けって跳び上がり、ワイスは平然と魔法陣グリフを展開した。ブレイクは幻影を生み出して、さっさと部屋の隅に避難している。
　みんな、それぞれが勝手なことをして――きっとＲＷＢＹはこういうチームなのだ。
　ルビーも枕を振りかざして飛び込んでいく。
　仲間と一緒に走るために、自分なりのスピードで。

あとがき

　はじめまして、『ＲＷＢＹ the Session』著者の伊い崎ざき喬きよう助すけと申します。以前からご存じの方はお久しぶりです。この作品はアメリカで生まれて世界に発信されたアニメ、『ＲＷＢＹ』のノベライズとなっております。
　本作の執筆が決まった当初は「あのＲＷＢＹのノベライズが書ける！　ヤッホゥ！」と喜んでいたものの、執筆を始めてみればプレッシャーに頭を抱えること数度。ＤＶＤを何度も見返しながらの試行錯誤でありました。
　こうしてあとがきを書いている今から執筆を振り返ってみれば、私が頭を抱えるたびにキャラクターたちがひとりでに動き出すことで助けてくれたような印象です。〆切に間に合わせてくれてありがとう、チームＲＷＢＹとＪＮＰＲのみんな。あと学長とトーチウィックも。

　そんな個性豊かなキャラとアクションが楽しめるアニメ『ＲＷＢＹ』を知らないまま今この文章を読んでいるという方。もったいないのでぜひアニメの方にも触れてみてください。ジャパニメーションのような親しみやすい雰囲気や、他に類を見ない超高密度なアクションシーンなど、さまざまな楽しい要素の融合を発見できるはず。
　知ってる人にも知らない人にも、『ＲＷＢＹ』という作品の魅力を感じ取っていただけることができたなら幸いです。

謝辞

　執筆にあたり、様々な方の助けがありました。
　担当編集の岩いわ浅あさ様。編集者としてだけでなく、いち『ＲＷＢ

Ｙ』ファンとしての目線でも、脱稿までの長い道程を支えていただきました。

　ヤスダスズヒト様。この人の描く『ＲＷＢＹ』の四人をぜひ見てみたいという期待を、遙かに上回る会心のイラストを届けてくださいました。

　設定やキャラクターの造形などに関して、多分に助けていただいたワーナージャパン様、REALCOFFEE様。

　すばらしい作品と魅力的なキャラクターたちを世に送り出してくれたMonty Oum氏、Rooster Teethのスタッフの皆さん。

　この本を手にとってくれた読者と、『ＲＷＢＹ』を愛するすべてのファン。

　心からの感謝を捧げます。ありがとうございました。

伊崎喬助

伊崎喬助

Kyosuke Izaki

第８回小学館ライトノベル大賞優秀賞を受賞。２０１４年『スチームヘヴン・フリークス』でデビュー。初めて『ＲＷＢＹ』という作品に触れたのは、作家になる前のことでした。

小学館ｅＢｏｏｋｓ
ＲＷＢＹ the Session

２０１７年７月28日　電子書籍版発行

者　伊崎喬助

作　Monty Oum Rooster Teeth Productions

人　立川義剛

人　野村敦司

集　岩浅健太郎

所　株式会社　小学館

〒１０１-８００１

東京都千代田区一ツ橋２-３-１

s-ebook@shogakukan.co.jp

本　２０１７年７月24日　初版第１刷発行

　ISBN978-4-09-451690-6

※製品版の巻末についている『ガ報』の情報は底本発行日時点のものです。

GAGAGA BUNKO
JULY
2017
ガ報
GAHO
No.123
ガガガがやらなきゃ誰がやる!!!!!!!!!!
10th Anniversary GAGAGA
ガガガ文庫
7月刊
絶賛発売中
!!!
10周年の夏はアツい!
期待の新星、話題のきら星!
夜空を彩る
ガガガの星!
定価:本体667円+税
著者コメント
本編では描かれなかった、「彼女たち」の夏休みのお話です。何かと縁のあるお隣チームや葉巻好きなアイツも出ます。
全世界で大人気の美少女3DCGアニメーション『RWBY』、初の公式ノベライズが登場! Volume1と2をつなぐ完全オリジナルストーリー。すべてのファンに捧ぐ、誰も見たことのない『RWBY』がここにある!
『RWBY』初の公式ノベライズ!
[RWBY the Session]
著:伊崎喬助 イラスト:ヤスダスズヒト
原作:Monty Oum & Rooster Teeth Productions

家族がいれば、
それでよかった。
トランスジェンダーの姉、
引き籠りの妹、
フリーターの父という
独特な面々を家族に持つ平浦一慶。
ある日、気まぐれに働いた善行が仇となり
児童暴行未遂の嫌疑をかけられてしまう……。
審査員・広江礼威氏が絶賛した珠玉の青春小説。
定価:本体667円+税
著者コメント
色んな主義主張が溢れる世間。悩みだって人それぞれです。この作品の登場人物もそう。そんな彼らの人間模様を楽しんで頂ければ。
ガガガ大賞受賞作!!!
［平浦ファミリズム］
著:遍 柳一 イラスト:さかもと侑

マフィアの構成員
ブルクハルトに
与えられた任務。それは、
ある少女を
痛めつけること――。
次世代型発魔炉の
開発プロジェクトをめぐる
受難と救済の物語。
審査員・広江礼威氏の
琴線に触れた
珠玉の一篇。
魔導と科学が
共存する世界で――。
定価: 本体630円 +税
著 白樺みひゃえる
イラスト 須田彩加
世界の終わりに問う賛歌
GAGAGA
審査員
特別賞
受賞作!!!
著者コメント
拷問、戦争、テロ。人生は苦痛に彩られている。始まりから狂ったこの世界で、生きる価値はどこにある?
[世界の終わりに問う賛歌]
著:白樺みひゃえる イラスト:須田彩加

ついにコーポ勇者の秘密が明らかに!?
定価:本体574円+税
勇者と勇者と勇者と勇者
5
川岸殴魚
すまき俊悟
GAGAGA
著者コメント
シリーズ完結。読んでくれた皆様、ありがとうございました! そうではない皆様、まだ間に合います!
再びルディたちの前に現れたソニア。
コーポ勇者の地下に拡がるダンジョンを調べ出すが、そんなロリ賢者を狙う刺客たちが現れ……?
コーポ勇者に隠された秘密がついに明らかに!?
せちがら系勇者列伝、第5巻登場!
[勇者と勇者と勇者と勇者5]
著:川岸殴魚 イラスト:すまき俊悟

はぐれ者には福がある？
ガガガブックス第3弾！
定価：本体1,200円＋税
冒険者が集う街・迷宮都市レイロア。
司祭のノエルは、あまりにも遅い
成長速度のせいで固定パーティを組めず、
便利屋稼業を続けていた。しかし、
徐々に彼のまわりには個性豊かな
仲間が集まり始めてきて――。
［レイロアの司祭さま ～はぐれ司祭のコツコツ冒険譚～］
著：朧丸 イラスト：野崎つばた
著者コメント
初めまして。朧丸と申します。冒険者が集う街で、少年司祭と奇妙な相棒たちが織り成す冒険劇。どうぞお楽しみください。

新人作家さんが渾身のアピール!?
第11回小学館ライトノベル大賞作家デビュー記念
10th GAGAGA
ガガガヒロイン大賞を獲るのはうちの娘だ!
ヒロイン
今年デビューを果たした5人の作家さんたち。
とはいえ、この生き馬の目を抜く業界において、
自分の作品の魅力をアピールすることはもはや必須事項!
今回は新人作家さんによる「うちの娘アピール」を
書いてもらったぞ! これを読んで作品への期待を高めよう!
No.1
平浦 岬
身　長:141cm
体　重:34kg
血液型:A
誕生日:4月10日
『平浦ファミリズム』
ガガガ大賞 7/19日発売!!
(著:遍 柳一 イラスト:さかもと侑)
勇気
ひきこもり
健気
ぴょんぴょん
体力
こだわりワンポイント
一挙手一投足すべて。幼いながらも、彼女なりに色々考えて行動しています。あと、ぴょんぴょん跳ねます。
こんな人にオススメ!
悩みを抱える人すべてです。自らの弱さを受け入れ、自分なりに世の中と向き合おうとする彼女の姿に共感頂ければ幸いです。
No.2
灯坂遙奈
身　長:147cm
体　重:秘密です。
血液型:AB
誕生日:3月7日
『ひきこもり姫を歌わせたいっ!』
ガガガ賞 7/19発売!!
(著:水坂不適合 イラスト:有坂あこ)
学力
運動
歌唱力
コミュ力
容姿
こだわりワンポイント
気楽に楽しく読めるお話にしたくて、見てて微笑ましい面白い子にすることを意識しました。
こんな人にオススメ!
頼りなげな女の子を助けたくなる兄体質の人におすすめです。歌はすごいのに人が怖い彼女。ライブで歌うことはできるのか! ご期待下さい。
No.3
白鳥真冬
身　長:167cm
体　重:50kg
血液型:A
誕生日:9月2日
『ジャナ研の憂鬱な事件簿』
優秀賞 5/18発売!!
(著:酒井田寛太郎 イラスト:白身魚)
戦闘力
推理力
グルメリポーター適正
黒髪のキューティクル
直感力
こだわりワンポイント
ラノベにしては珍しい、眼鏡属性の真面目系ヒロインです。私服がわりと派手目というギャップがポイント。
こんな人にオススメ!
ミステリは嫌いじゃなけど、やっぱり可愛い女の子も捨てがたい…… というそこのアナタ。ジャナ研はその二つがてんこ盛りです!
No.4
花枝連理
身　長:168cm
体　重:58kg
血液型:B
誕生日:10月10日
『スクールジャック=ガンスモーク』
優秀賞 6/20発売!!
(著:坂下 e イラスト:巖本英利)
射撃技術
格闘技術
操縦技術
ちょろさ
おっぱい
こだわりワンポイント
乳袋onパイロットスーツ。ロボットと言えばパイスー、パイスーと言えば浮き出るボディライン。つまり乳。
こんな人にオススメ!
「金髪巨乳」「ちょろヤンキー」「戦うヒロイン」がお好きな方。学校を襲うテロリストに、主人公と一緒に立ち向かいます。
No.5
ヘレナ・ヘレーゼ
身　長:157cm
体　重:47kg
血液型:A
誕生日:7月29日
『世界の終わりに問う賛歌』
審査員特別賞 7/19発売!!
(著:白樺みひゃえる イラスト:須田彩加)
清純派
不幸属性
笑顔
他人想い
運動神経
こだわりワンポイント
悲劇の少女フェチ集まれ! うちの娘が一番かわいそう!
こんな人にオススメ!
難病持ちの娘って、なんかアレですよね。儚げで。不謹慎極まりないですけど、それを突き詰めていったヒロインって……(ヘンタイ向け)

GAGAGA headline

ガガガ文庫作品は「本」を飛び出し原作とは異なる魅力を発信中! このコーナーはガガガのメディアミックスニュースを毎月ご紹介!

小学館ガガガ文庫創刊10周年記念イベント チケット発売情報

創刊10周年を記念したイベントが開催決定!!

10月スタートのアニメキャストを中心にした**ステージイベント**や、ガガガ文庫の10周年**記念グッズの販売**、10周年を彩る**展示**など、盛りだくさんの内容! しかも、午前の部には『妹さえいればいい。』の限定グッズ、午後の部には『されど罪人は竜と踊る』の**限定グッズがお土産で付いてくる**からお得!! 7月22日の販売開始をお忘れなく!!

詳細はGAGAGA WIREをチェック!!

登壇者情報

[総合MC]江口拓也、田中あいみ

[午前の部]●TVアニメ『妹さえいればいい。』から、羽島伊月役・小林裕介、羽島千尋役・山本希望、可児那由多役・金元寿子

●TVアニメ『やはり俺の青春ラブコメはまちがっている。続』から、比企谷八幡役・江口拓也、雪ノ下雪乃役・早見沙織、由比ヶ浜結衣役・東山奈央

●映画『二度めの夏、二度と会えない君』から、森山 燐役・吉田円佳(たんこぶちん)

[午後の部]●TVアニメ『されど罪人は竜と踊る』から、ガユス役・島﨑信長、ギギナ役・細谷佳正

●TVアニメ『やはり俺の青春ラブコメはまちがっている。続』から、比企谷八幡役・江口拓也、雪ノ下雪乃役・早見沙織、由比ヶ浜結衣役・東山奈央

●映画『二度めの夏、二度と会えない君』から、森山 燐役・吉田円佳(たんこぶちん)

※登壇者は当日変更になる場合がございますが、ご了承ください。

開催概要

[開催日]9/23(土)(午前・午後2部制)　[場所]アキバスクエア

[チケット種類]3,800円(販売物優先購入券およびお土産の限定グッズ付き特別前売券)

7/22(土)10:00から先着発売開始 ※受付期間:7/22(土)10:00~完売次第終了

Lコード:39666

●全国のローソン・ミニストップ設置のLoppi

●インターネット予約▶http://l-tike.com/event/gagagabunko/
(要ローソンチケット無料会員登録)

●電話予約▶自動音声予約:0570-084-003(要Lコード)

▶ローソンチケットオペレーター予約・問合:0570-000-777(10:00~20:00)

実写映画　コミカライズ　その他　二度めの夏、二度と会えない君

続々メディアミックス!

9/1に実写映画公開を控えた「ニドナツ」に先駆けて、メディアミックスが続々と登場! 8/8には新装版が小学館文庫から発売! そして、10日ごろにはジュニア文庫より映画ノベライズと森山 燐役を演じた吉田円佳の写真集も発売決定!

8/10に待望のコミック❶巻発売!

「ゲッサン」にて好評連載中のコミカライズの単行本❶巻の発売日が決定! 映画公開目前にあらゆる「ニドナツ」を堪能しよう!

原作:赤城大空　キャラクター原案:ぶーた　作画:源 素水

TVアニメ　妹さえいればいい。

キャスト&スタッフ発表!

2017年秋TVアニメ放送の「妹さえいればいい。」から特報! ドラマCDから引き続き豪華キャスト陣による熱演に期待! 続報はアニメ公式サイト・ガガガ文庫特設サイトなどをチェック!

イラスト:カントク

CAST
羽島伊月:小林裕介　羽島千尋:山本希望
可児那由多:金元寿子　白川 京:加隈亜衣
不破春斗:日野 聡

STAFF
原作:平坂 読(小学館「ガガガ文庫」刊)
キャラクター原案:カントク　監督:大沼 心
シリーズ構成・脚本:平坂 読
アニメーション制作:SILVER LINK.

TVアニメ　されど罪人は竜と踊る

TBS、BS-TBSにて10月放送予定の「され竜」キャスト&スタッフ発表!!

2017年秋TVアニメ放送の「され竜」から新情報! ガユスとギギナの名コンビを演じるのは人気実力を兼ね備えたこの二人! 続報は特設サイトなどをチェック!

イラスト:ざいん

CAST
ガユス:島﨑信長　ギギナ:細谷佳正

STAFF
原作:浅井ラボ(小学館「ガガガ文庫」刊)
キャラクター原案:宮城/ざいん
総監督:錦織 博　監督:花井宏和
シリーズ構成:伊神貴世

TVアニメ　RWBY

大人気シリーズ好評放送中!!

今月、初の公式ノベライズが発売となった「RWBY」のTVアニメがTOKYO MXにて絶賛放送中! ノベライズはVolume1と2をつなぐ完全オリジナルストーリー! アニメと小説で「RWBY」の世界を堪能しよう!

CAST
ルビー・ローズ:早見沙織　ワイス・シュニー:日笠陽子　ブレイク・ベラドンナ:嶋村 侑
ヤン・シャオロン:小清水亜美　ジョーン・アーク:下野 紘　ピュラ・ニコス:豊口めぐみ
ノーラ・ヴァルキリー:洲崎 綾　ライ・レン:斉藤壮馬

放送情報
TOKYO MX:毎週金曜日25:05〜　サンテレビ:毎週火曜日24:30〜
AbemaTV:毎週月曜日23:00〜　※放送日時は変更になる場合があります。
RWBY Volume 4 10月7日(土)より2週間限定上映決定!

GAGAGA BUNKO & GAGAGA BOOKS LINE UP!

8月刊 8月18日ごろ発売!!

[異世界修学旅行6]
著:岡本タクヤ イラスト:しらび
ついに魔王城に到着したはずが、そこは学校!? 現在と過去が交錯する幻の中で、浩介は生徒会長と再会する!

[俺、ツインテールになります。13]
著:水沢 夢 イラスト:春日 歩
ヴァルキリアギルディの"死して尚変態"で甦ったドラグギルディたち再生怪人軍団! ツインテイルズ最大の戦いの幕が上がる!

[青春絶対つぶすマンな俺に救いはいらない。2]
著:境田吉孝 イラスト:U35
藤崎の新たな救済対象――おバカギャル、仲里杏奈。関わりたくない狭山だが、仲里とは意外な接点があって……?

[筐底のエルピス5 ―迷い子たちの一歩―]
著:オキシタケヒコ イラスト:toi8
存亡の危機を免れた《門部》。未来を書き換えた代償を背負い、傷だらけの迷い子たちが踏み出す、新たな一歩とは。

[忘却のアイズオルガン(仮)]
著:宮野美嘉 イラスト:薫る石
悪魔が隣人として振る舞っていた時代。魔術師のダヤンと屍人形のアリアは、それぞれの目的を叶えるために悪魔退治の旅を続けていた。

[友人キャラは大変ですか?3]
著伊達 康 イラスト:紅緒
蒼ヶ崎怜、結婚!? まさかの事態に一郎たちは事情調査に乗り出すが……。笑撃の友人ラブコメ、サブストーリー編!

ガガガブックス [真・異界残侠伝 ひときり包丁]
著:鈴木 参 イラスト:みく郎
異世界カントレイアへ迷い込んだ九条尽。ただ、己の矜持のため、数多の命奪いし異形の巣に挑む――!!

9月刊 9月20日ごろ発売!!

[妹さえいればいい。8]――著:平坂 読 イラスト:カントク

[されど罪人は竜と踊る⑳]――著:浅井ラボ イラスト:ざいん

[七星のスバル6]――著:田尾典丈 イラスト:ぶーた

[マイダスタッチ3 ～内閣府超常経済犯罪対策課～]―著:ますもとたくや イラスト:人米

[やがて恋するヴィヴィ・レイン4]―著:犬村小六 イラスト:岩崎美奈子

ガガガブックス [最下位職から最強まで成り上がる2 ～地道な努力はチートでした～]――著:上谷 圭 イラスト:桑島黎音

発売タイトル及び刊行予定は変更になることがあります。

ガガガの夏はラブコメの夏♥

1巻発売即重版!

ダメ人間AS（オール スター）ラブコメ第2弾登場!!

この8月に読みたい
ガガガの青春ラブコメ1冊目は、
負けに負け続けてきた
青春の敗者たちがおくる
“痛”青春で決まり!!

イラスト:U35
※イラストは既刊のものです。

必笑友人ラブコメ第3弾登場!!

ネットで話題沸騰!

この8月に読みたいガガガの
青春ラブコメ2冊目は、
主人公キャラでも恋人キャラでもない
理想の友人キャラを追究する
名助演コメディで決まり!!

イラスト:紅緒　※イラストは既刊のものです。

夏コミケ グッズ情報!

コミックマーケット92

ガガガの夏がやってきた! 会場限定新作グッズ目白押し!

小学館(西1階企業ブース1412)ブースに、ガガガ文庫ファン全員集合だヨ!

東京ビックサイトにて8月11・12・13日の3日間開催される「コミックマーケット92」に今年もガガガ文庫が参戦! 販売予定の新作グッズラインアップを一挙公開!

やはり俺の青春ラブコメはまちがっている。

- プリマグラフィ 描き下ろし! 価格:25,000円
- クリアファイル 価格:350円
- Tシャツ 価格:2,500円
- 扇子 価格:2,000円

妹さえいればいい。

- クリアファイル 価格:350円
- ビールジョッキ 価格:1,500円

されど罪人は竜と踊る

- トートバッグ 価格:1,200円
- 缶バッジセットA(5種) 価格:1,000円
- 缶バッジセットB(5種) 価格:1,000円

弱キャラ友崎くん

- クリアファイル 描き下ろし! 価格:350円

青春絶対つぶすマンな俺に救いはいらない。

- クリアファイル 価格:350円

物理的に孤立している俺の高校生活

- クリアファイル 描き下ろし! 価格:350円

友人キャラは大変ですか?

- クリアファイル 価格:350円

無料配布!

- おためしガガガ2017 夏

※価格・商品の詳細はすべて現状のものです。

ここガ知りたい! ガガガ特捜部

七夕の短冊は、もともとは和歌を下げていたことから転じたとかなんとか。困った時の神頼み、ではありませんが、こういうものに頼りたくなってしまうのが人間の性分。そんなわけで今回の質問はこちら。

質問 毎年家族で七夕のときに短冊に願い事を書いています。先生方の今すぐ叶えて欲しいお願い事を教えてください。 (神奈川県・アレガデネブ・24歳)

●新人作家さんたちの願い事……遍 柳一先生☞「もっとやさしくなりたい」です。人とか、地球とか、その辺のノラネコとかに。

酒井田寛太郎先生☞僕の書いたラノベのヒロインみたいに、可愛くて気立てが良くてスタイル抜群の女の子と結婚したいです。

坂下 㐧先生☞自宅の近くに落っこちた雷のせいで吹っ飛んだPCデータの復元。神様マジでほんとお願いします。

白樺みひゃえる先生☞世界が平和になって俺だけがモテモテになりますように。

水坂不適合先生☞授賞式で同期の方の連絡先を聞きそびれるという痛恨のミスを犯しました。連絡先が知りたいです。

質問募集! 郵便ハガキ、Twitterで先生方に訊いてみたいことを書いて送って下さい。あなたの質問を特捜部が徹底調査致します。

その他の先生方からの回答は、編集部ログ(GAGAGAWIRE)で見られます。

今月の書店員さん

ガガガの夏到来! そんな夏にぴったりでフレッシュな1冊を、今回もガガガサポーターショッププレミアムの書店員さんに推してもらっているヨ!

GAGAGA SUPPORTER SHOP

AKIHABARAゲーマーズ本店 岡崎有紗さん

住所:東京都千代田区外神田1-14-7 宝田ビル　電話番号:03-5298-8720
営業時間:9:00~22:00　定休日:なし　URL:https://www.gamers.co.jp/

アニメ・コミック・ライトノベルと言ったらゲーマーズ! お取り寄せも随時受け付けております!

岡崎さんのオススメ本

ジャナ研の憂鬱な事件簿

事件のトリックはもちろん、事件に関わる登場人物たちの切ない心理描写にぐいぐいひきこまれました。

▶手描きイラストPOPがとっても素敵だネ! 書店員さんの「好き」という気持ちが伝わってくるヨ!

・不要なものが多くストレスだったのでメルカリに出そうとするも、メルカリの梱包用の段ボールが溜まってきてさらにストレスが……。(野)
・最近腰痛復活の予感。風邪じゃないけど早めの処置したほうがいいの?(☆)
・12kg減量して学生時代の体重に戻りました! これまでの3倍のスピードで動きます。(濱)
・旅に出たい。(岩)
・人気すぎて、いきつけのお店に入れない問題が深刻……。(飯)
・最近バッティングセンターに行くのが好き。(小)
・四半世紀プラス一歳になりました。最近の口癖は「赤ちゃんになりてぇよ」です。よろしくお願いします。(田)

作家・イラストレーターへのファンレター、感想などは以下の宛先に、作者名を明記のうえ、お送りください。

〒101-8001 東京都千代田区一ツ橋2-3-1 小学館ガガガ文庫編集部○○○(作者名)宛

ガガガ10周年電子特典　カバーイラスト

10
th Anniversary
GAGAGA
ガガガが
やらなきゃ
誰が
やる!!!!!!!!!!!!